

茨城県教育財団文化財調査報告第155集

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

中原遺跡 1
(下 卷)

平成12年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第155集

中根・金田台特定土地地区画整理 事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

なかはら
中原遺跡 1
(下 卷)

平成12年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

目 次

— 下 卷 —

3 奈良・平安時代の遺構と遺物	
(2) 掘立柱建物跡	285
(3) 堀	342
(4) 土坑	353
(5) 遺構に伴わない遺物	380
4 その他の遺構と遺物	382
(1) 掘立柱建物跡	382
(2) 土坑	386
(3) 溝	412
(4) 遺構に伴わない遺物	413
第4節 まとめ	415
中原遺跡遺構一覧	425
付章 中原遺跡の自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
1 ローム層の層序確立のための火山ガラス比分析および重鉍物分析	
2 中原遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定	
茨城県中原遺跡出土の漆膜について	吉田生物研究所
写真図版	

挿 図 目 次

第192図 第1号掘立柱建物跡実測図	286	第206図 第9号掘立柱建物跡出土遺物実測図	307
第193図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図	287	第207図 第12号掘立柱建物跡実測図	309
第194図 第2号掘立柱建物跡実測図	289	第208図 第13号掘立柱建物跡実測図	311
第195図 第3号掘立柱建物跡実測図	291	第209図 第14号掘立柱建物跡実測図	312
第196図 第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図	292	第210図 第14号掘立柱建物跡出土遺物実測図	314
第197図 第4A号掘立柱建物跡実測図	294	第211図 第15号掘立柱建物跡実測図	315
第198図 第4B号掘立柱建物跡実測図	296	第212図 第16号掘立柱建物跡実測図	316
第199図 第5号掘立柱建物跡実測図	298	第213図 第17号掘立柱建物跡実測図	318
第200図 第6号掘立柱建物跡実測図(1)	300	第214図 第17号掘立柱建物跡出土遺物実測図	319
第201図 第6号掘立柱建物跡実測図(2)	301	第215図 第18号掘立柱建物跡実測図	320
第202図 第6号掘立柱建物跡出土遺物実測図	302	第216図 第19号掘立柱建物跡実測図	322
第203図 第7号掘立柱建物跡実測図	303	第217図 第19号掘立柱建物跡出土遺物実測図	323
第204図 第8号掘立柱建物跡実測図	305	第218図 第22号掘立柱建物跡実測図	325
第205図 第9号掘立柱建物跡実測図	306	第219図 第23号掘立柱建物跡実測図	327

第220図	第24号掘立柱建物跡実測図	329	第257図	第295号土坑実測図	376
第221図	第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図	330	第258図	第298号土坑実測図	376
第222図	第25号掘立柱建物跡実測図	331	第259図	第309号土坑・出土遺物実測図	377
第223図	第25号掘立柱建物跡出土遺物実測図	332	第260図	第328号土坑・出土遺物実測図	377
第224図	第26号掘立柱建物跡実測図	334	第261図	第353号土坑実測図	378
第225図	第27号掘立柱建物跡実測図	336	第262図	第378号土坑・出土遺物実測図	378
第226図	第28号掘立柱建物跡実測図	337	第263図	第382号土坑・出土遺物実測図	379
第227図	第29号掘立柱建物跡実測図	338	第264図	第386号土坑・出土遺物実測図	379
第228図	第29号掘立柱建物跡出土遺物実測図	339	第265図	第394号土坑・出土遺物実測図	380
第229図	第30号掘立柱建物跡実測図	341	第266図	遺構外出土遺物実測図(奈良・平安時代)	381
第230図	第30号掘立柱建物跡出土遺物実測図	342	第267図	第10号掘立柱建物跡実測図	382
第231図	第1号堀出土遺物実測図(1)	345	第268図	第20号掘立柱建物跡実測図	384
第232図	第1号堀出土遺物実測図(2)	346	第269図	第20号掘立柱建物跡出土遺物実測図	384
第233図	第1号堀出土遺物実測図(3)	347	第270図	第21号掘立柱建物跡実測図	385
第234図	第1号堀出土遺物実測図(4)	348	第271図	第21号掘立柱建物跡出土遺物実測図	386
第235図	第1号堀出土遺物実測図(5)	349	第272図	方形土坑実測図(1)	387
第236図	A群(第186~190・216号土坑)実測図	354	第273図	方形土坑・出土遺物実測図(2)	389
第237図	B群(第191・192・194号土坑)実測図	356	第274図	方形土坑・出土遺物実測図(3)	390
第238図	C群(第193・195・196号土坑)実測図	357	第275図	方形土坑・出土遺物実測図(4)	391
第239図	D群(第199・200A・256A・325号土坑)・ E群(第200B・256B・323・324号土坑)実測図	358	第276図	その他の土坑実測図(1)	392
第240図	F群(第217・218・220号土坑)実測図	361	第277図	その他の土坑実測図(2)	394
第241図	G群(第223・238・239号土坑)実測図	363	第278図	その他の土坑実測図(3)	396
第242図	H群(第225・228・229・231・232号土坑)実測図	364	第279図	その他の土坑実測図(4)	398
第243図	第234号土坑・出土遺物実測図	365	第280図	その他の土坑実測図(5)	400
第244図	第252A・252B号土坑・出土遺物実測図	366	第281図	その他の土坑実測図(6)	402
第245図	第384号土坑・出土遺物実測図	367	第282図	その他の土坑実測図(7)	404
第246図	柱穴のような土坑実測図	368	第283図	その他の土坑実測図(8)	406
第247図	第2号土坑実測図	370	第284図	その他の土坑実測図(9)	408
第248図	第11号土坑・出土遺物実測図	370	第285図	その他の土坑実測図(10)	409
第249図	第90号土坑・出土遺物実測図	371	第286図	その他の土坑・出土遺物実測図(11)	410
第250図	第138号土坑・出土遺物実測図	372	第287図	第1・7・8号溝断面図	413
第251図	第139号土坑・出土遺物実測図	373	第288図	遺構外出土遺物実測図(中・近世)	414
第252図	第156号土坑・出土遺物実測図	373	第289図	中原遺跡(I・II A区)の集落変遷(1)	422
第253図	第163号土坑・出土遺物実測図	374	第290図	中原遺跡(I・II A区)の集落変遷(2)	423
第254図	第170号土坑実測図	374	第291図	中原遺跡(I・II A区)の集落変遷(3)	424
第255図	第275号土坑・出土遺物実測図	375	付図1	中原遺跡(I・II A区)全体図	
第256図	第294号土坑実測図	376	付図2	第1号堀, 第407~409号土坑実測図	

表 目 次

表 8 旧石器時代の出土遺物	416	表14 陥し穴一覧表	428
表 9 住居跡一覧表	425	表15 柱穴のような土坑一覧表	428
表10 掘立柱建物跡一覧表	427	表16 奈良・平安時代の土坑一覧表	430
表11 堀一覧表	428	表17 方形土坑一覧表	430
表12 堀に伴う土坑一覧表	428	表18 その他の土坑一覧表	431
表13 溝一覧表	428		

写 真 図 版 目 次

P L 1 中原遺跡全景, 調査 I 区遺構確認状況	P L 27 第16号住居跡・出土遺物
P L 2 旧石器第 2 調査区, 旧石器時代出土遺物(1)	P L 28 第16号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 3 旧石器時代出土遺物(2)	P L 29 第16号住居跡出土遺物
P L 4 旧石器時代出土遺物(3)	P L 30 第17号住居跡・出土遺物
P L 5 第 2・3号陥し穴, 縄文時代出土遺物(石器)	P L 31 第19号住居跡・出土遺物
P L 6 縄文時代出土遺物(縄文土器)	P L 32 第20号住居跡・出土遺物
P L 7 第 1号住居跡・出土遺物	P L 33 第21号住居跡・出土遺物
P L 8 第 2号住居跡・出土遺物	P L 34 第21号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 9 第 3・4号住居跡・出土遺物	P L 35 第22号住居跡・出土遺物
P L 10 第 5号住居跡・遺物出土状況	P L 36 第22号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 11 第 5号住居跡掘り方・出土遺物	P L 37 第23号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 12 第 5号住居跡出土遺物	P L 38 第23号住居跡出土遺物
P L 13 第 6号住居跡・出土遺物	P L 39 第24号住居跡・出土遺物
P L 14 第 6号住居跡遺物出土状況・出土遺物	P L 40 第27号住居跡・出土遺物
P L 15 第 7号住居跡・出土遺物	P L 41 第28・29号住居跡
P L 16 第 7号住居跡遺物出土状況・出土遺物	P L 42 第29号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 17 第 8号住居跡・出土遺物	P L 43 第30号住居跡・出土遺物
P L 18 第 8号住居跡遺物出土状況・出土遺物	P L 44 第31号住居跡・出土遺物
P L 19 第 8号住居跡出土遺物	P L 45 第32号住居跡・出土遺物
P L 20 第 9・11号住居跡, 第 9号住居跡出土遺物	P L 46 第32号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 21 第 9号住居跡遺物出土状況・出土遺物	P L 47 第32・35号住居跡出土遺物
P L 22 第11号住居跡出土遺物	P L 48 第36号住居跡・出土遺物
P L 23 第13号住居跡・出土遺物	P L 49 第36号住居跡遺物出土状況・出土遺物
P L 24 第14号住居跡・出土遺物	P L 50 第38号住居跡・出土遺物
P L 25 第14号住居跡遺物出土状況, 第15号住居跡	P L 51 第38号住居跡出土遺物, 第39A号住居跡
P L 26 第15号住居跡出土遺物	P L 52 第39A号住居跡出土遺物
	P L 53 第39A号住居跡遺物出土状況・出土遺物

- P L 54 第39A号住居跡出土遺物, 第41号住居跡・
出土遺物
- P L 55 第41号住居跡出土遺物
- P L 56 第44号住居跡・出土遺物
- P L 57 第45・46号住居跡・出土遺物
- P L 58 第47号住居跡・出土遺物
- P L 59 第48号住居跡・出土遺物
- P L 60 第48・49号住居跡出土遺物
- P L 61 第50号住居跡・出土遺物, 第51号住居跡
出土遺物
- P L 62 第53号住居跡・出土遺物
- P L 63 第53号住居跡遺物出土状況,
第54号住居跡
- P L 64 第54号住居跡遺物出土状況・出土遺物
- P L 65 第56号住居跡・出土遺物
- P L 66 第56号住居跡出土遺物
- P L 67 第56号住居跡出土遺物, 第58号住居跡・
出土遺物
- P L 68 第58号住居跡出土遺物
- P L 69 第63号住居跡・出土遺物
- P L 70 第63号住居跡出土遺物, 第64号住居跡・
出土遺物
- P L 71 第65号住居跡・出土遺物
- P L 72 第66号住居跡・出土遺物
- P L 73 第67号住居跡・出土遺物
- P L 74 第67号住居跡出土遺物, 第68号住居跡・
出土遺物
- P L 75 第70号住居跡・出土遺物
- P L 76 第71号住居跡・出土遺物
- P L 77 第72号住居跡・出土遺物
- P L 78 第73・74号住居跡
- P L 79 第74号住居跡出土遺物
- P L 80 第75・76号住居跡
- P L 81 第75・76号住居跡出土遺物
- P L 82 第79号住居跡・出土遺物
- P L 83 第79号住居跡出土遺物, 第80号住居跡
- P L 84 第81号住居跡・出土遺物
- P L 85 第82号住居跡・出土遺物
- P L 86 第84A号住居跡出土遺物, 第85号住居跡・
出土遺物
- P L 87 第86号住居跡出土遺物, 第87号住居跡・
出土遺物
- P L 88 第90号住居跡・出土遺物
- P L 89 第1～3・5～7・9号掘立柱建物跡, 第4
A・4 B・8号掘立柱建物跡柱痕確認状況
- P L 90 第12・13・15・17～19・22～27・29号
掘立柱建物跡
- P L 91 掘立柱建物跡出土遺物
- P L 92 第1号堀・遺物出土状況・土層断面
- P L 93 第1号堀出土遺物(1)
- P L 94 第1号堀出土遺物(2)
- P L 95 第186・190～198・217～220号土坑,
土坑出土遺物(1)
- P L 96 土坑出土遺物(2)
- P L 97 遺構外出土遺物(1)
- P L 98 遺構外出土遺物(2), その他の遺物

(2) 掘立柱建物跡

当遺跡からは、掘立柱建物跡30棟が検出された。これらの建物跡は出土遺物が極端に少なく、時期を限定することは困難であったが、他の遺構との重複関係や配置から、奈良・平安時代の掘立柱建物跡27棟、時期不明の掘立柱建物跡3棟に分けることができる。ここでは、奈良・平安時代の掘立柱建物跡について、考えてみたい。

奈良・平安時代の掘立柱建物跡の配置は、調査Ⅰ区の中央部に東西に広がる群、中央部から南に広がる群、南西部から調査ⅡA区東部にかけて広がる群の、おおよそ3群に分けることができる。特に、一番北に近く、東西一直線に並んでいる掘立柱建物跡群の北端は、調査Ⅰ区東部に位置する奈良時代（8世紀）の堀の北端とほぼ同緯度であり、その北側には掘立柱建物跡は配置されていない。よって、この堀の内側に配置された掘立柱建物跡群は、集落の中で計画的・機能的に配置されたと考えられる。以下、各掘立柱建物跡についてその特徴を記載する。

第1号掘立柱建物跡（第192図）

位置 調査Ⅰ区中央部、C5j0区。

重複関係 本跡は、第30号竪穴住居跡と重複している。第30号竪穴住居跡が本跡のP6～P8を掘り込んでいることから、本跡が古い。

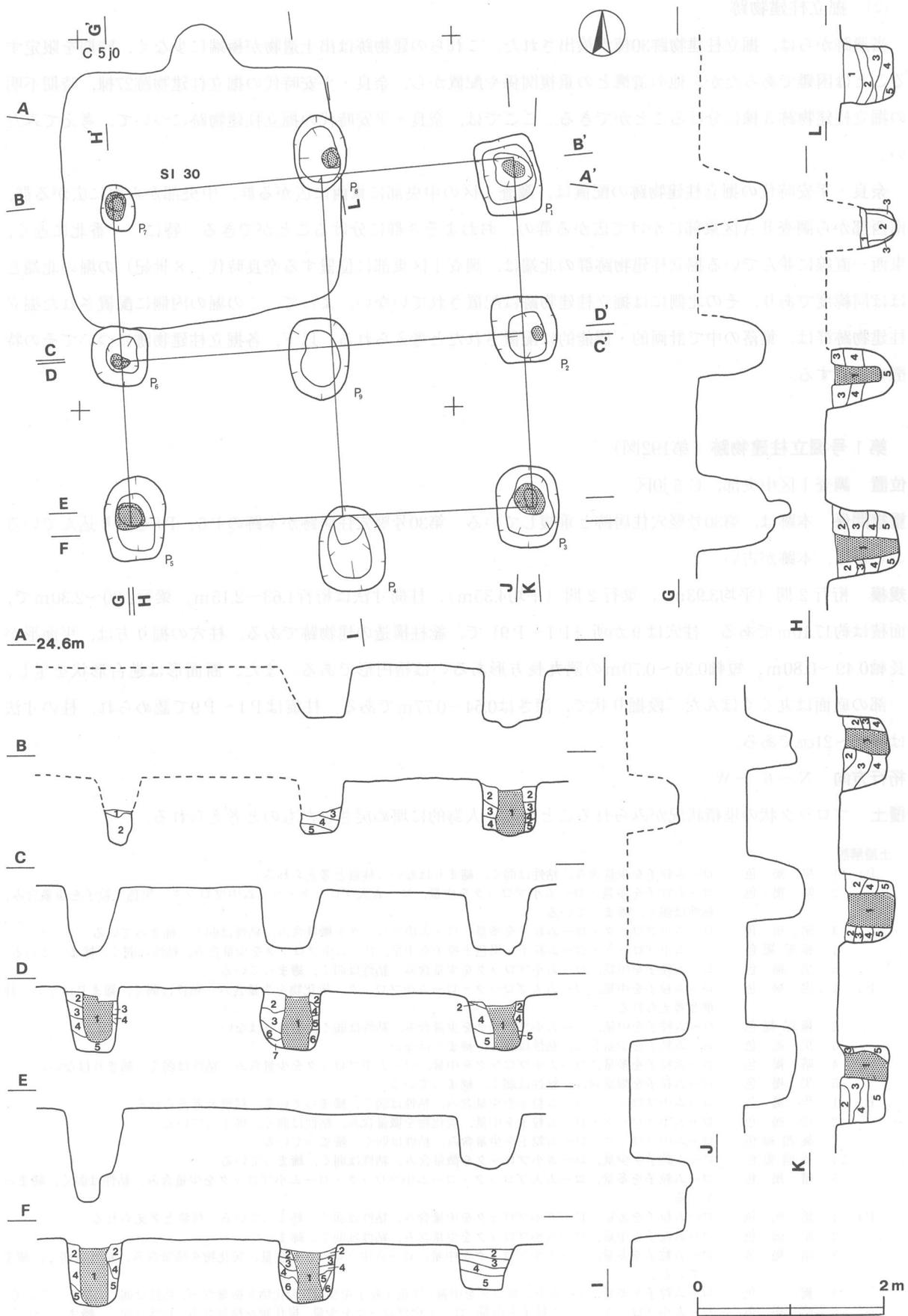
規模 桁行2間（平均3.93m）、梁行2間（平均4.35m）、柱間寸法は桁行1.63～2.15m、梁行2.00～2.30mで、面積は約17.10㎡である。柱穴は9か所（P1～P9）で、総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長軸0.49～0.80m、短軸0.36～0.70mの隅丸長方形あるいは楕円形である。また、断面形は逆台形状を呈し、一部の底面は丸くくぼんだ二段掘り状で、深さは0.54～0.77mである。柱痕はP1～P9で認められ、柱の寸法は径10～21cmである。

桁行方向 N-6°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・黒色土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	5	黒褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	1	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、黒色土粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

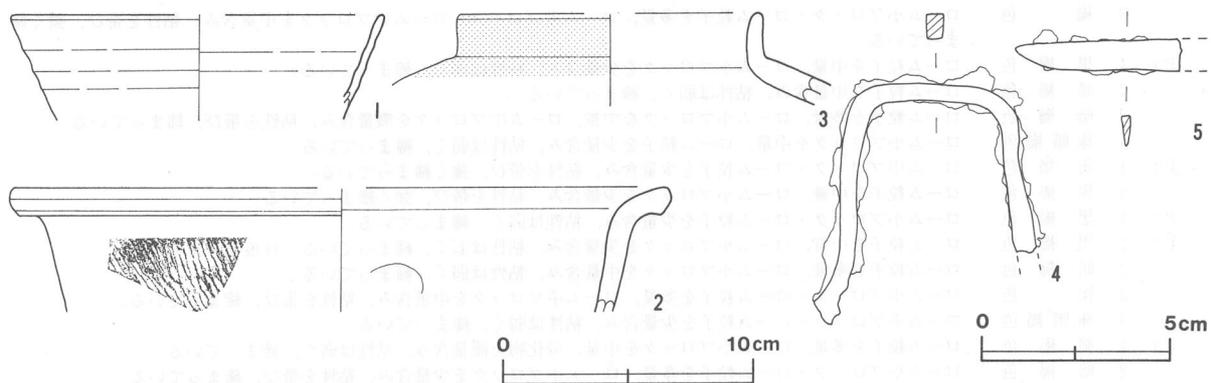


第192図 第1号掘立柱建物跡実測図

P5	1	黒褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	5	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P7	1	暗褐色	SI30貼床
	2	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。
P8	1	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、黒色土粒子を少量含み、粘性はなく、締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子・黒色土粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P9	5	褐色	ローム粒子を多量含み、粘性を帯び、締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。
7	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。	

遺物 土師器片10点、須恵器片18点、鉄製品2点（門、刀子）が出土している。第193図1の須恵器坏、4の門と5の刀子がP5の覆土中から、2の須恵器鉢がP2の覆土中から、3の須恵器短頸壺がP6の覆土中からそれぞれ出土している。2の須恵器鉢は混入したものと考えられる。

所見 I区中央部の平坦地に位置している。柱穴は、深さ、断面形ともにほぼ規則性が認められる。柱間寸法についてもほぼ規則性が認められるが、P4とP8は桁行方向に対して外側へ若干膨らんでいる。また、隣接する第2・3号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ一致し、第1号堀と直交することから、同時期に一連の施設として機能していた可能性がある。時期は、重複関係と出土遺物から、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。



第193図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第193図 1	坏 須恵器	A [14.9] B (4.2)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	雲母 砂粒 灰白色 普通	20% P518 P5覆土中

第193図	鉢 須恵器	A [26.2] B (5.0)	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面アテ具痕有り。	砂粒 灰黄色 普通	10% P519 P2覆土中
3	短頸壺 須恵器	A [12.0] B (3.7)	体部から口縁部の破片。体部から頸部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は直立する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	長石 砂粒 内面 灰黄色 外面 黄灰色 釉 淡黄色 良好	10% P520 外面一部自然釉 P6覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	門	6.5	0.6	0.5	(23.00)	P5覆土中	M59
5	刀子	(4.4)	0.9	0.2	(2.64)	P5覆土中	M73

第2号掘立柱建物跡 (第194図)

位置 調査I区中央部, C6j2区。

規模 桁行4間(平均8.29m), 梁行2間(平均4.66m), 柱間寸法は桁行1.75~4.12m, 梁行2.34~4.45mで, 面積は約38.63m²である。柱穴は10か所(P1~P10)で, 側柱構造の建物跡である。P1とP10の間, P7とP8の間の柱穴は確認できなかった。柱穴の掘り方は, 平面形が長径0.39~0.72m, 短径0.37~0.69mの楕円形または円形である。また, 断面形は逆台形状またはU字状を呈し, 一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で, 深さは0.06~0.40mである。柱痕はP1・P3・P8・P10で認められ, 柱の寸法は径15~17cmである。

桁行方向 N-87°-E

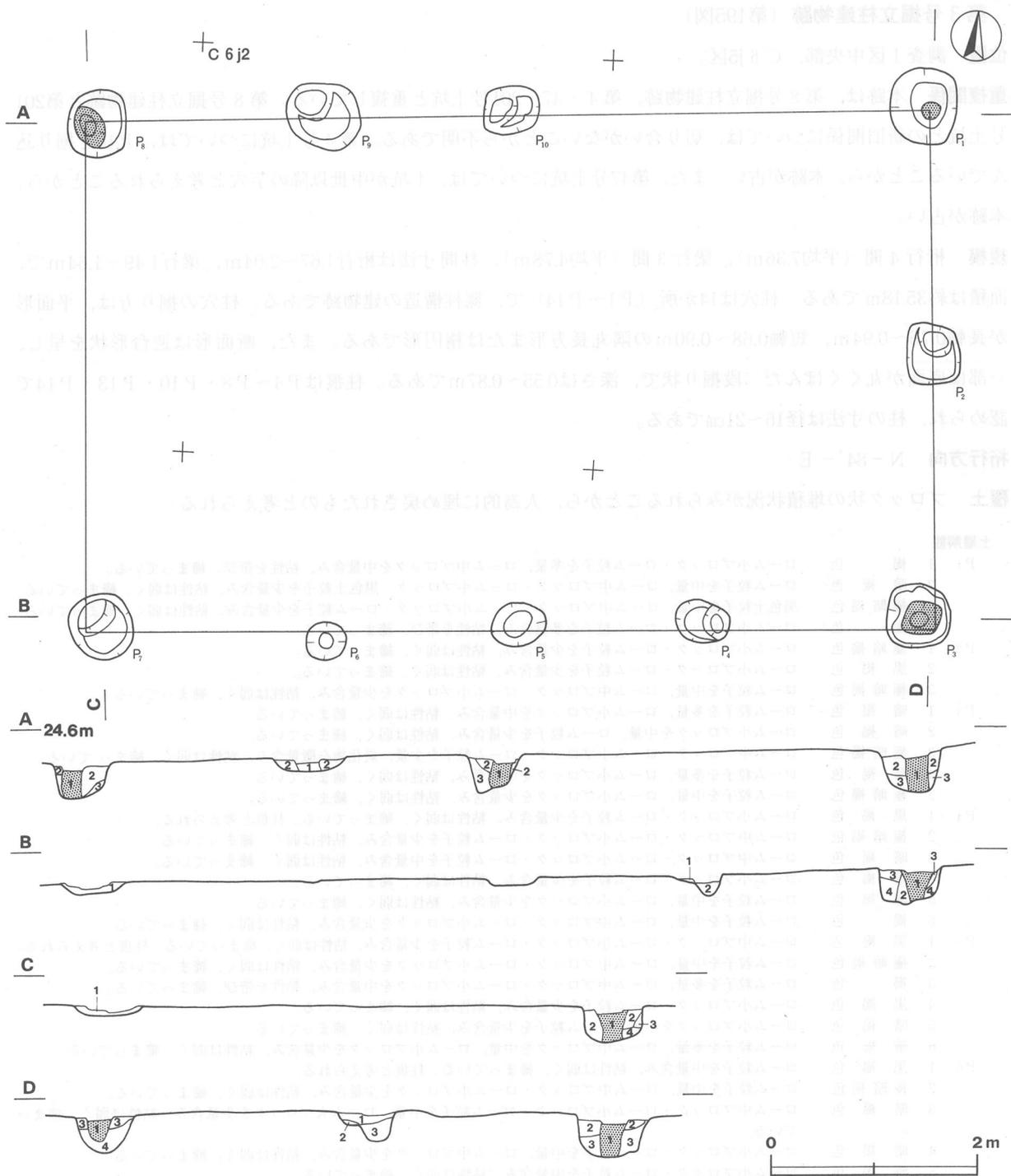
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから, 人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロック・黒色土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	極暗褐色	ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P2	1	褐色	ローム粒子を多量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム大ブロック・ローム中ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム中ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロックを中量, ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P4	1	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性を帯び, 強く締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 強く締まっている。
P7	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム中ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P9	1	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, 炭化物を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P10	1	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロック・黒色土粒子・炭化物を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 遺物は出土していない。

所見 I区中央部の平坦地に構築されている。柱穴は, 断面形, 深さともに不ぞろいで, 柱間寸法については規則性に乏しく, その性格は不明である。桁行方向では, 隣接する第3号掘立柱建物跡と同軸上に並び, 第1



第194図 第2号掘立柱建物跡実測図

号掘立柱建物跡の桁行と同じ方向である。よって、その関連は不明であるが、一連の施設として機能していた可能性が高い。時期は、出土遺物がなく特定できないものの、第1・3号掘立柱建物跡と同時期で、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第195図）

位置 調査I区中央部，C6j5区。

重複関係 本跡は，第8号掘立柱建物跡，第4・47・201号土坑と重複している。第8号掘立柱建物跡と第201号土坑との新旧関係については，切り合いがないことから不明である。第4号土坑については，P10を掘り込んでいることから，本跡が古い。また，第47号土坑については，土坑が中世以降の芋穴と考えられることから，本跡が古い。

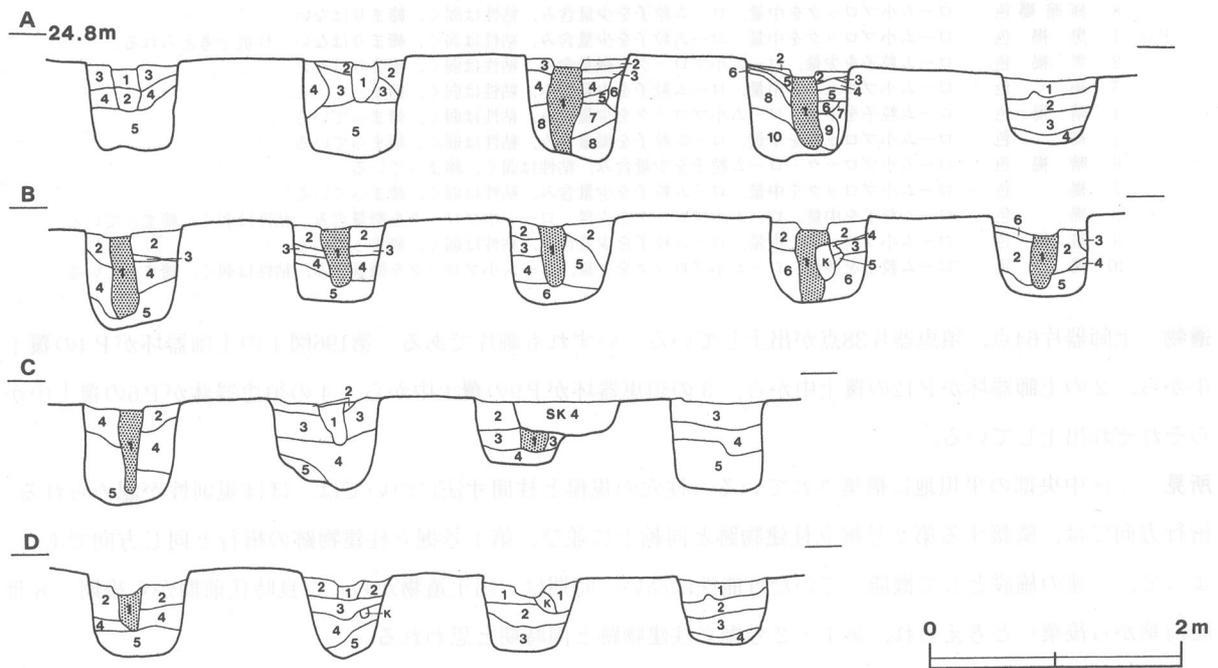
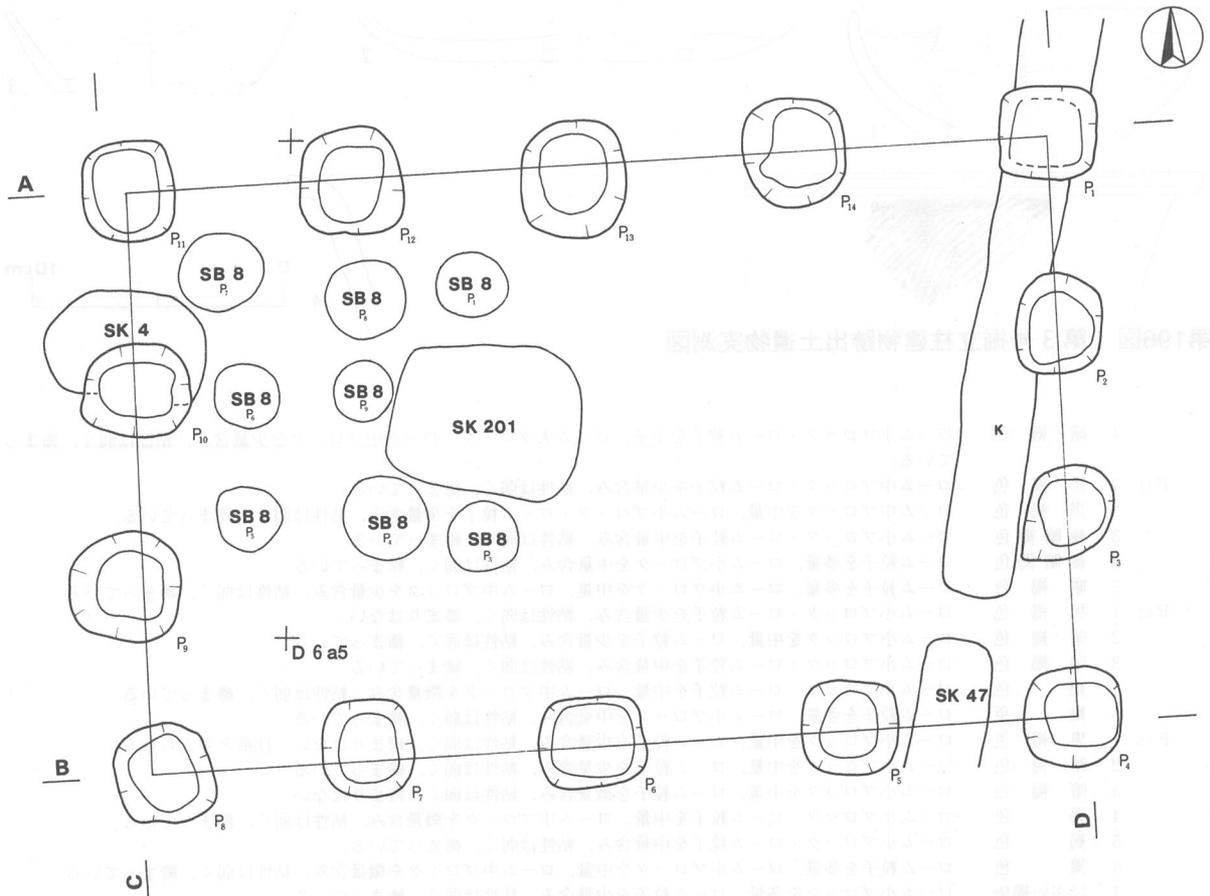
規模 桁行4間（平均7.36m），梁行3間（平均4.78m），柱間寸法は桁行1.67～2.04m，梁行1.49～1.64mで，面積は約35.18㎡である。柱穴は14か所（P1～P14）で，側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長軸0.76～0.94m，短軸0.68～0.90mの隅丸長方形または楕円形である。また，断面形は逆台形状を呈し，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.55～0.87mである。柱痕はP4～P8・P10・P13・P14で認められ，柱の寸法は径16～21cmである。

桁行方向 N-84°-E

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

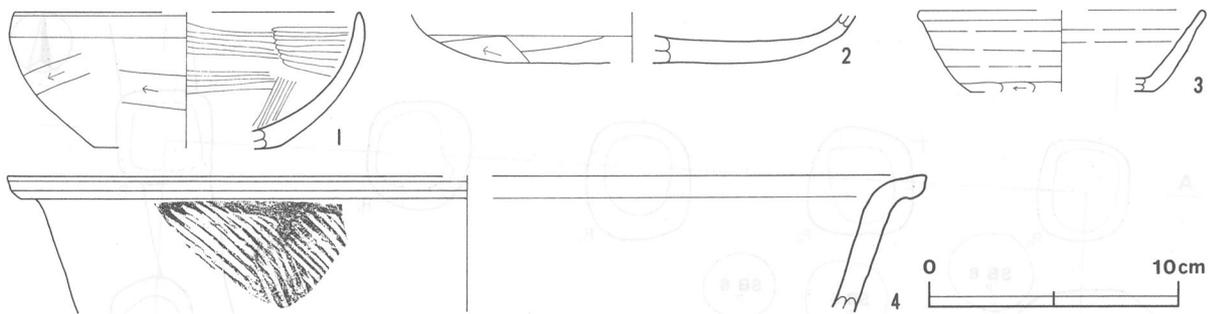
土層解説

P1	1	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	黒色土粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，粘性を帯び，締まっている。
P2	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム中ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化物を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P7	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	3	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性を帯び，締まっている。
	4	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，ローム大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。



第195図 第3号掘立柱建物跡実測図

- | | | |
|-----|------|--|
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 4 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P10 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |



第196図 第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図

	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P11	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム中ブロックを中量，ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P12	4	極暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P13	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	7	にぶい褐色	ローム小ブロックを多量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	8	極暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P14	1	黒褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	7	褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	8	褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	9	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	10	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片64点，須恵器片38点が出土している。いずれも細片である。第196図1の土師器坏がP4の覆土中から，2の土師器坏がP12の覆土中から，3の須恵器坏がP9の覆土中から，4の須恵器鉢がP6の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 I区中央部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については，ほぼ規則性が認められる。桁行方向では，隣接する第2号掘立柱建物跡と同軸上に並び，第1号掘立柱建物跡の桁行と同じ方向である。よって，一連の施設として機能していた可能性は高い。時期は，出土遺物から，奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられ，第1・2号掘立柱建物跡と同時期と思われる。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第196図 1	土師器 坏	A [14.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，口縁部から底部にかけて内面へラ磨き。外面下位へラ削り。	雲母 砂粒 橙色 普通	20% P521 P4覆土中
		B 5.4				
		C [7.5]				

第196図 2	坏 土 師 器	B (1.9) C [12.0]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。外面下位から底部外面にかけヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい黄橙色 普通	30% P 522 底部内面油煙付着 P 12覆土中
3	坏 須 恵 器	A [11.4] B 3.3 C [7.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	10% P 523 P 9覆土中
4	鉢 須 恵 器	A [37.0] B (5.5)	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	10% P 524 P 6覆土中

第 4 A 号掘立柱建物跡 (第197図)

位置 調査 I 区南部, D 6 c2区。

重複関係 本跡は、第46号住居跡、第 4 B号掘立柱建物跡と重複している。第46号住居跡が本跡の P6を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、本跡が第 4 B号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

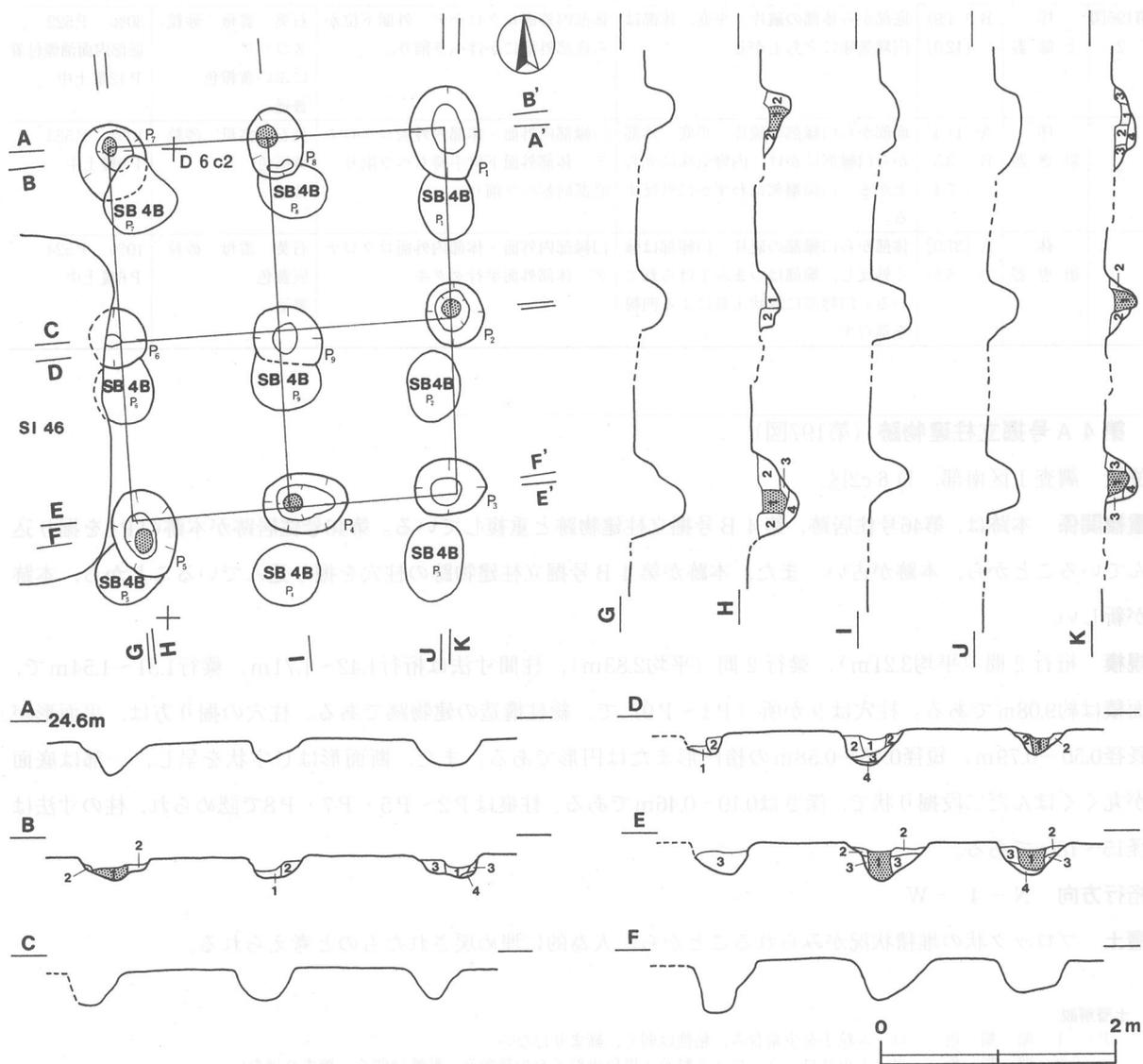
規模 桁行 2 間 (平均3.21m), 梁行 2 間 (平均2.83m), 柱間寸法は桁行1.42~1.71m, 梁行1.31~1.54mで、面積は約9.08㎡である。柱穴は 9 か所 (P1~P9) で、総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.50~0.79m, 短径0.46~0.58mの楕円形または円形である。また、断面形はU字状を呈し、一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で、深さは0.19~0.46mである。柱痕は P2~P5・P7・P8で認められ、柱の寸法は径15~18cmである。

桁行方向 N - 4° - W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	暗 褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗 褐 色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒 褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗 褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	1	暗 褐 色	ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	褐 色	ローム小ブロックを少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	1	黒 褐 色	ローム小ブロックを少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗 褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	褐 色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	黒 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗 褐 色	ローム小ブロックを少量、ローム中ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗 褐 色	ローム中ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	褐 色	ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	1	黒 褐 色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P7	1	黒 褐 色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P8	1	褐 色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	にぶい褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P9	1	黒 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒 褐 色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	にぶい褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。



第197図 第4 A号掘立柱建物跡実測図

遺物 須恵器片3点が出土している。

所見 I区南部の平坦部に構築されている。柱穴は、深さが不ぞろいであるが、断面形と柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明であるが、第1・5・6号掘立柱建物跡などと構造や柱間について共通する点が多いことから、同時期に構築され、意図的に配置された一連の施設である。また、重複している第4 B号掘立柱建物跡については、本跡と同規模で構造も変わらないことから、本跡は前者を建て替えたものと考えられる。よって、時期は、重複する第46号住居跡が平安時代の9世紀前葉、第1・5・6号掘立柱建物跡が8世紀前葉から後葉と考えられることから、奈良時代の前期に構築された第4 B号掘立柱建物跡を建て替え、後期（8世紀後葉）まで構築されていたと思われる。

第4B号掘立柱建物跡（第198図）

位置 調査I区南部，D6c2区。

重複関係 本跡は，第46号住居跡，第4A号掘立柱建物跡と重複している。第46号住居跡が本跡のP6を掘り込んでいることから，本跡が古い。また，第4A号掘立柱建物跡が本跡の柱穴を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模 桁行2間（平均2.69m），梁行2間（平均3.24m），柱間寸法は桁行1.50～1.80m，梁行1.26～1.40mで，面積は約8.59㎡である。柱穴は9か所（P1～P9）で，総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.50～0.66m，短径0.46～0.60mの楕円形または円形である。また，断面形はU字状を呈し，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.23～0.35mである。柱痕はP1・P3～P6・P8・P9で認められ，柱の寸法は径12～21cmである。

桁行方向 N-0°

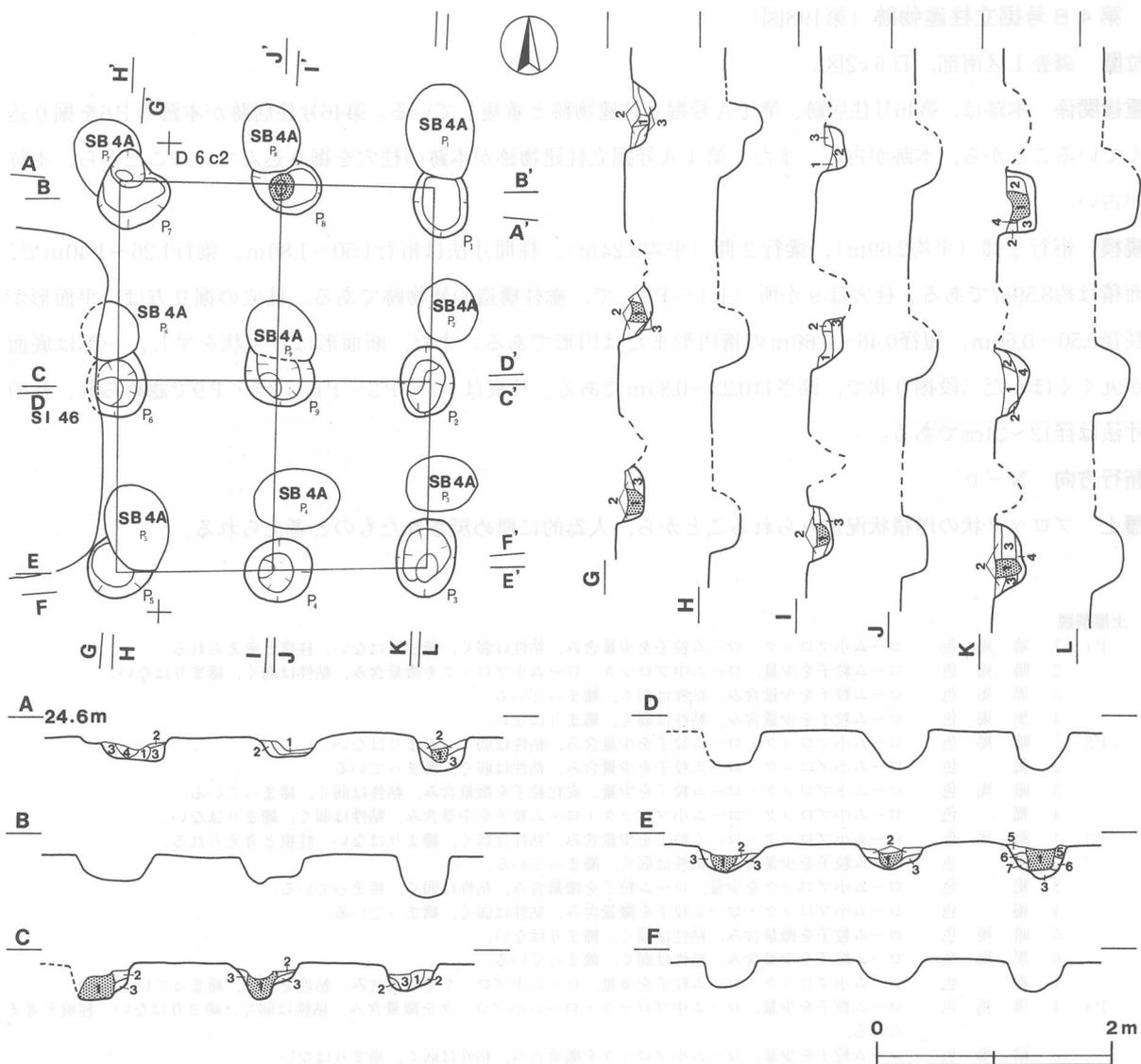
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P2	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P3	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロックを少量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	6	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	7	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P7	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P8	1	暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロックを中量，ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P9	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 遺物は出土していない。

所見 I区南部の平坦部に構築されている。柱穴は，深さが不ぞろいであるが，断面形と柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明であるが，第1・5・6号掘立柱建物跡などと構造や柱間について共通する点が多いことから，同時期に構築され，意図的に配置された一連の施設である。また，重複してい



第198図 第4 B号掘立柱建物跡実測図

る第4 A号掘立柱建物跡については、本跡と同規模で構造も変わらないことから、本跡を建て替えたものと考えられる。時期は、重複する第46号住居跡が平安時代の9世紀前葉、第1・5・6号掘立柱建物跡が8世紀前葉から後葉と考えられることから、本跡は奈良時代前期（8世紀前葉）に構築され、後に建て替えられたと思われる。

第5号掘立柱建物跡（第199図）

位置 調査I区南部，D 5 e0区。

規模 桁行2間（平均3.58m），梁行2間（平均3.28m），柱間寸法は桁行1.74～1.87m，梁行1.40～1.99mで，面積は約11.74㎡である。柱穴は11か所（P1～P9C）で，総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.75～0.89m，短径0.60～0.72mの楕円形または円形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈し，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.39～0.62mである。柱痕はP1・P3・P7～P9（A，B，C）で認められ，柱の寸法は径約18cmである。

桁行方向 N-7°-W

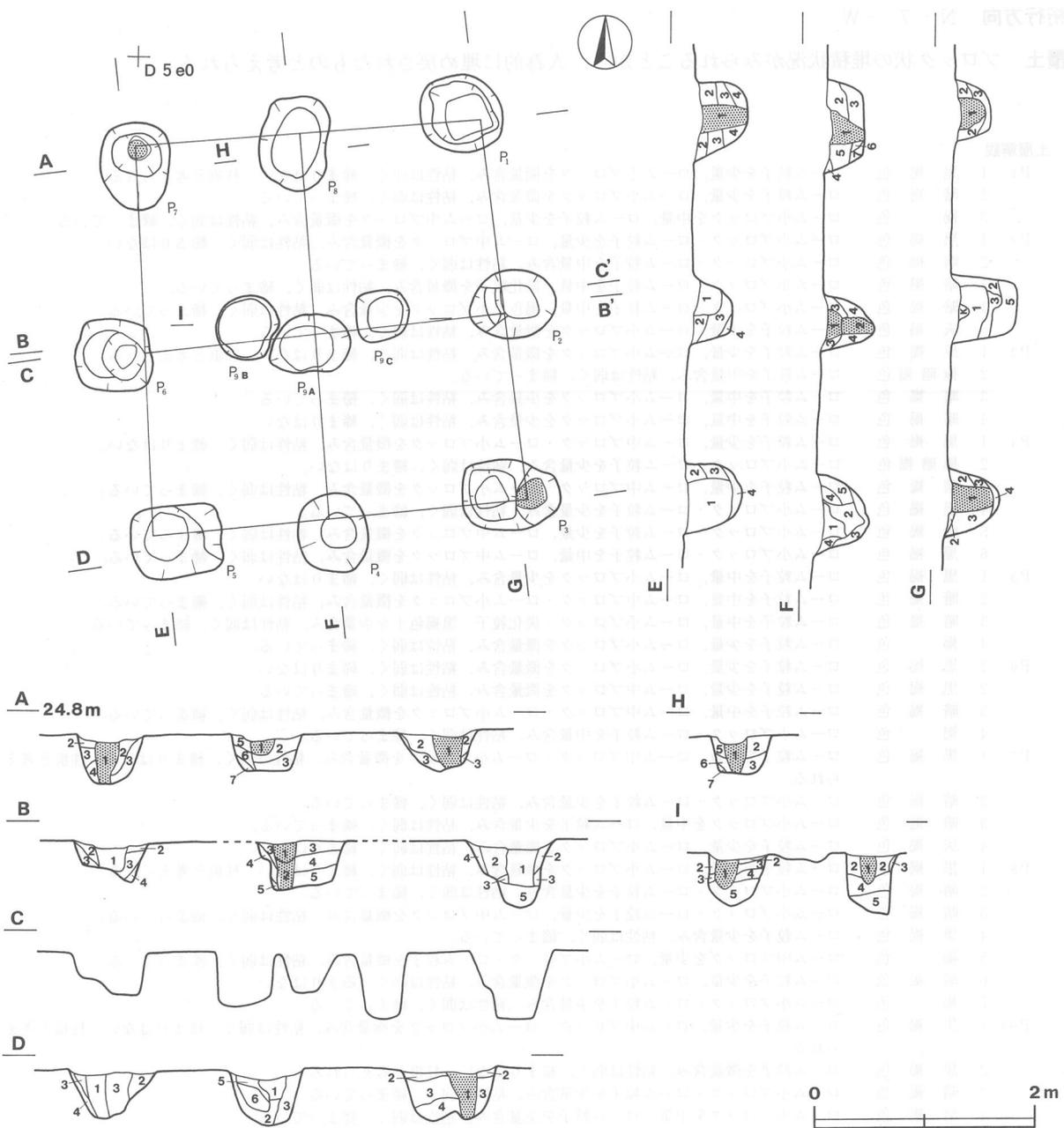
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，褐色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	灰褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P4	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子・黒褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P7	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	灰褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム中ブロックを少量，ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	7	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9A	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9B	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	黒褐色土を中量，ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9C	1	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロック・黒褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片1点，須恵器片2点が出土している。細片のため，図示できなかった。

所見 I区南部の平坦部に構築されている。柱穴は，深さが不ぞろいであるが，断面形と柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。P9B・P9Cは，しっかりした掘り方で，補助穴として機能していたものと思われる。他の遺構との関連は不明であるが，第1・4A・4B号掘立柱建物跡などと構造や柱間について共通する点が多い。



第199図 第5号掘立柱建物跡実測図

また、桁行方向は近接する第17・18・22号掘立柱建物跡などとはほぼ同方向（ $\pm 1^\circ$ ）であることから、これらと同時期に構築され、意図的に配置された一連の施設である。時期は、第1・4 A・4 B号掘立柱建物跡などが8世紀前葉から後葉と考えられることから、本跡も奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）に構築されていたと思われる。

第6号掘立柱建物跡（第200・201図）

位置 調査I区南部，D6c4区。

重複関係 本跡は，第49号住居跡，第327号土坑と重複している。第49号住居跡が本跡のP6A・P14・P15を，第327号土坑がP1を掘り込んでいることから，本跡が古い。

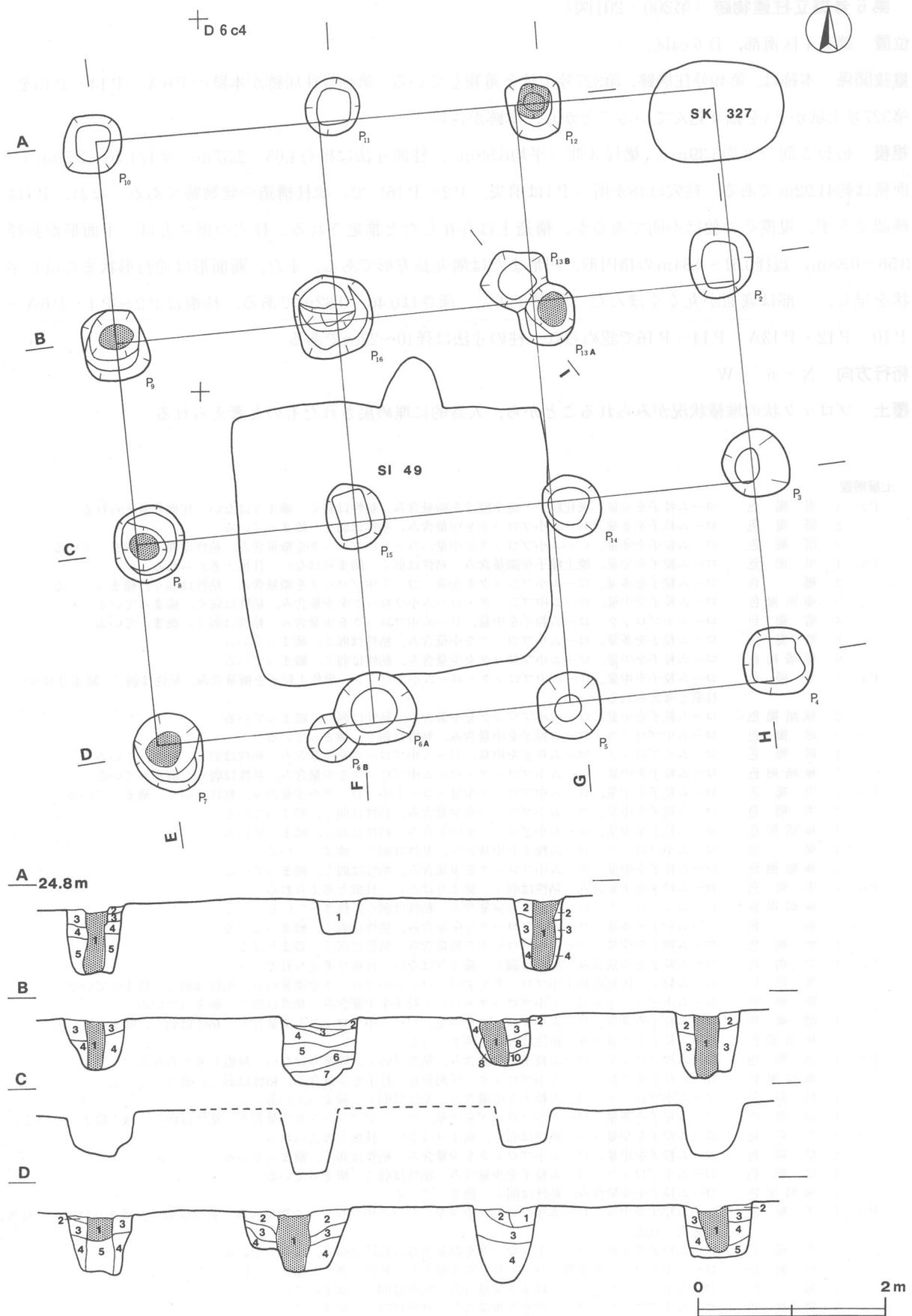
規模 桁行3間（平均6.39m），梁行3間（平均6.56m），柱間寸法は桁行1.65～2.37m，梁行1.76～2.59mで，面積は約41.92㎡である。柱穴は18か所（P1は消失，P2～P16）で，総柱構造の建物跡である。なお，P1は確認できず，規模その他は不明であるが，構造上は存在したと推定される。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.56～0.88m，短径0.51～0.84mの楕円形，円形または隅丸長方形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈し，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.40～0.82mである。柱痕はP2～P4・P6A～P10・P12・P13A・P14～P16で認められ，柱の寸法は径10～23cmである。

桁行方向 N-6°-W

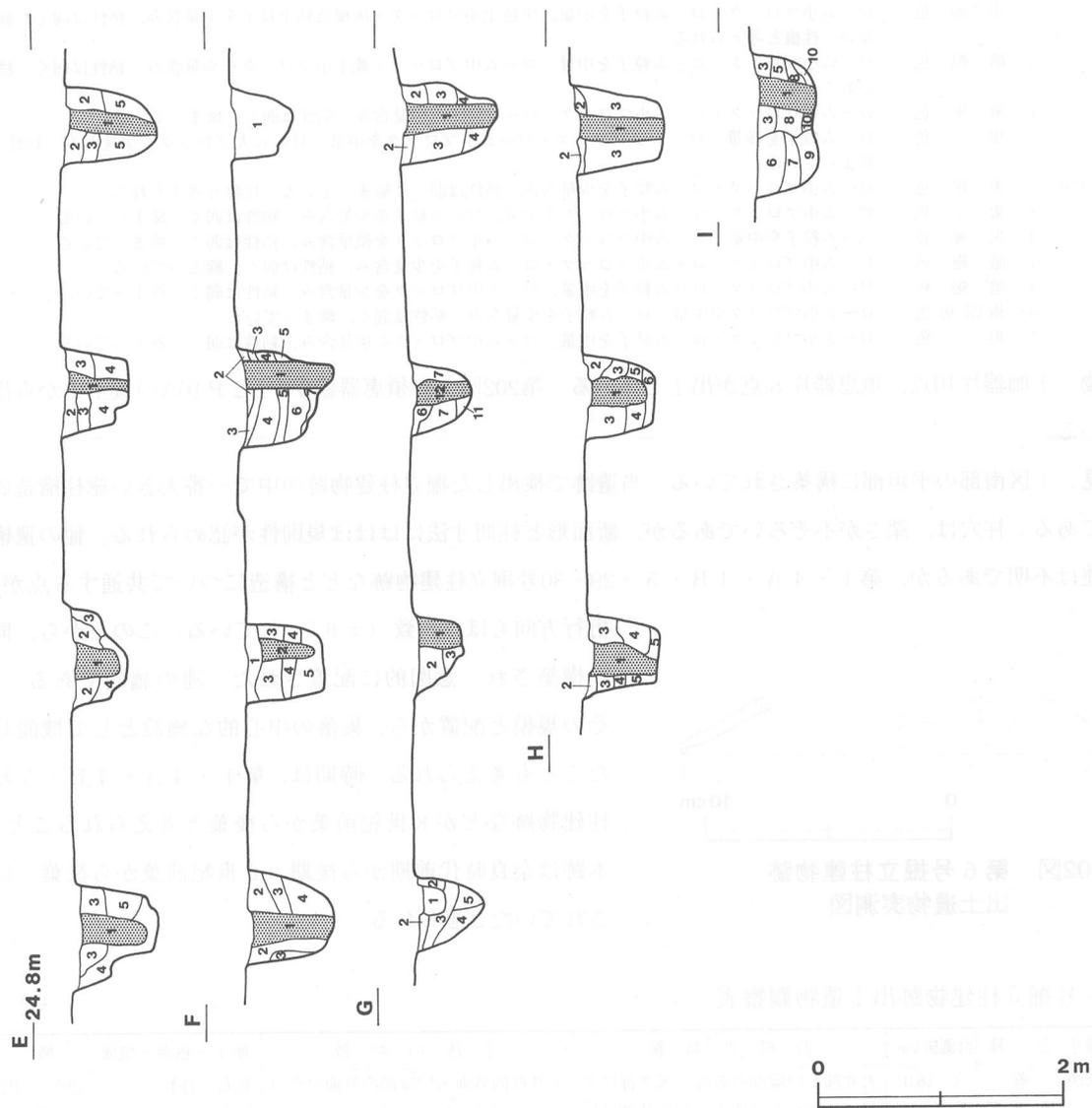
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P2	1	黒褐色	ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P4	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P5	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック少量・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P6	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P7	4	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P8	5	極暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9	4	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P10	4	極暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P11	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。



第200図 第6号掘立柱建物跡実測図(1)



第201図 第6号掘立柱建物跡実測図(2)

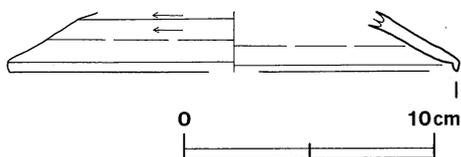
- | | | | |
|-----|-------|------|--|
| P12 | 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 4 | 褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| P13 | (A・B) | | |
| | 1 | 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 明褐色 | ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 4 | 明褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 6 | 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 7 | 暗褐色 | ローム中ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 8 | 暗褐色 | ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 9 | 黒褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 10 | 褐色 | ローム小ブロックを少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 11 | 褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| | 12 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| P14 | 1 | 黒褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| P15 | 1 | 極暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・黒色土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。第49号住居跡の貼床。 |

- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量, 黒色土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロック・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 5 褐色 ローム粒子を多量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量, ローム大ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
- P16 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
- 2 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量, ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 黒褐色 ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 6 極暗褐色 ローム小ブロックを中量, ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片10点, 須恵器片8点が出土している。第202図1の須恵器蓋がP6とP16Aの覆土中から出土している。

所見 I区南部の平坦部に構築されている。当遺跡で検出した掘立柱建物跡の中で一番大きい総柱構造の建物跡である。柱穴は, 深さが不ぞろいであるが, 断面形と柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明であるが, 第1・4A・4B・5・29・30号掘立柱建物跡などと構造について共通する点が多く,

桁行方向もほぼ一致(±6°)している。このことから, 同時期に構築され, 意図的に配置された一連の施設である。また, その規模と配置から, 集落の中心的な施設として機能していたことも考えられる。時期は, 第1・4A・4B・5号掘立柱建物跡などが8世紀前葉から後葉と考えられることから, 本跡は奈良時代前期から後期(8世紀前葉から後葉)に構築されていたと思われる。



第202図 第6号掘立柱建物跡
出土遺物実測図

第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第202図 1	蓋 須恵器	A [18.0] B (2.4)	天井部と口縁部の破片。天井部は平坦で, 緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 灰色 普通	20% P525 P6覆土中 P16A覆土中

第7号掘立柱建物跡(第203図)

位置 調査I区南部, D6e4区。

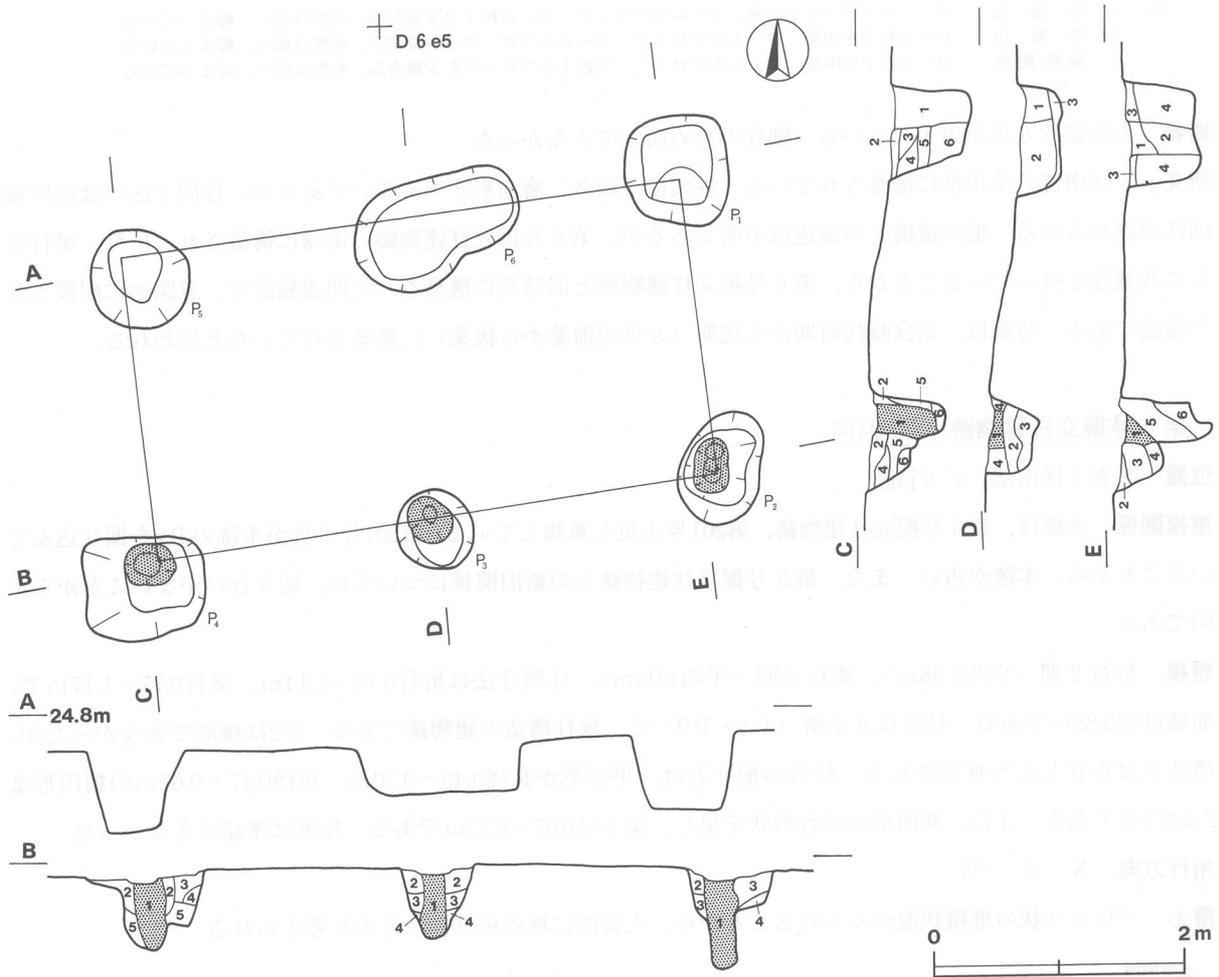
規模 桁行2間(平均4.64m), 梁行1間(平均2.32m), 柱間寸法は桁行2.22~2.39m, 梁行2.25~2.40mで, 面積は約10.95㎡である。柱穴は6か所(P1~P6)で, 側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径0.57~0.94m, 短径0.57~0.83mの楕円形または円形である。また, 断面形は逆台形状またはU字状を呈し, 一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で, 深さは0.36~0.80mである。柱痕はP2~P4で認められ, 柱の寸法は径14~21cmである。

桁行方向 N-78°-E

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから, 人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

- P1 1 黒褐色 ローム粒子を少量, 炭化物を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量, 炭化物を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム中ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。



第203図 第7号掘立柱建物跡実測図

P2	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・黒色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック少量・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P3	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色土小ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロック・黒色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含み、強い粘性を帯び、硬く締まっている。
P5	4	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子・黒色土大ブロックを少量含み、強い粘性を帯び、硬く締まっている。
	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	黒色土中ブロックを中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

- | | | | |
|----|---|------|--|
| P6 | 1 | 暗褐色 | ローム中ブロックを中量, ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロック・黒色土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |

遺物 土師器片6点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 I区南部の平坦部に構築されている。柱穴は、深さ、断面形が不ぞろいであるが、柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。他の遺構との関連は不明であるが、第6号掘立柱建物跡の南側に構築され、桁行・梁行とも共通性を持っていることから、第6号掘立柱建物跡と同時期に構築された関連施設で、意図的に配置された施設である。時期は、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）に構築されていたと思われる。

第8号掘立柱建物跡（第204図）

位置 調査I区南部, C6j5区。

重複関係 本跡は、第3号掘立柱建物跡, 第201号土坑と重複している。第201号土坑が本跡のP2を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、第3号掘立柱建物跡との新旧関係については、切り合いがないことから不明である。

規模 桁行2間（平均1.98m）、梁行2間（平均1.96m）、柱間寸法は桁行0.76～1.14m、梁行0.77～1.17mで、面積は約3.88㎡である。柱穴は8か所（P1～P9）で、総柱構造の建物跡である。P2は確認できなかったが、構造上は存在したと推定される。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.49～0.70m、短径0.47～0.67mの楕円形または円形である。また、断面形は逆台形状を呈し、深さは0.07～0.23mである。柱痕は確認できなかった。

桁行方向 N-9°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

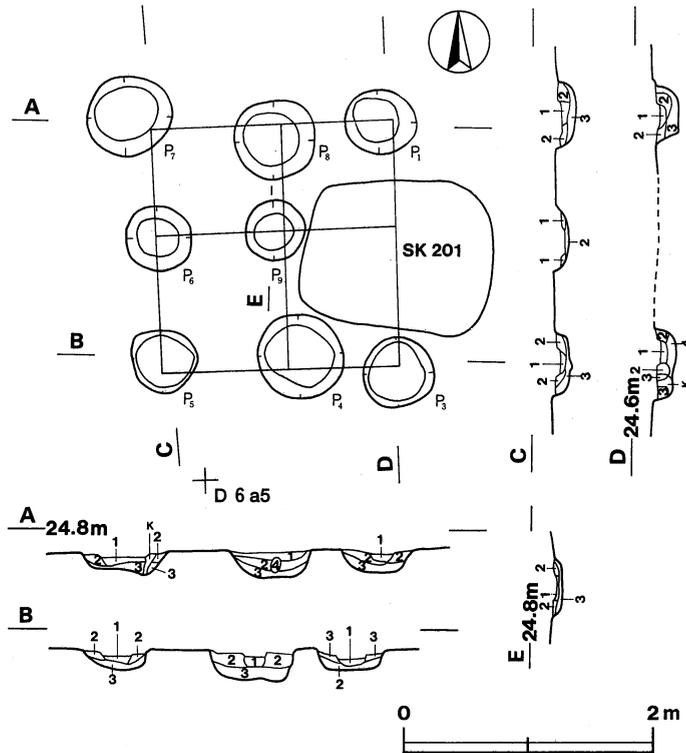
土層解説

- | | | | |
|----|---|-----|--|
| P1 | 1 | 褐色 | ローム粒子を中量, 暗褐色土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 褐色 | ローム粒子を少量, 暗褐色土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P3 | 1 | 褐色 | ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 褐色 | ローム粒子を中量, 灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| | 4 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P4 | 1 | 黒褐色 | ローム粒子を少量, 黒褐色土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・炭化粒子・暗褐色土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量, 灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P5 | 1 | 褐色 | ローム粒子を少量, 暗褐色土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 2 | 褐色 | ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P6 | 1 | 褐色 | ローム粒子を中量, 暗褐色土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P7 | 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P8 | 1 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 4 | 褐色 | ローム大ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P9 | 1 | 褐色 | ローム粒子を少量, 暗褐色土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |

遺物 遺物は出土していない。

所見 I区中央部の平坦部に構築されている。柱穴は、深さが不ぞろいであるが、断面形と柱間寸法にはほぼ規則性が認められる。他の総柱構造の掘立柱建物跡と比べ、柱穴の配列は菱形のようにずれており、面積も極

端に小さい。しかし、配置をみると他の遺構との関連がないとは言いきれず、第1・4A・4B・5・6号掘立柱建物跡などと同時期に構築された一連の施設である可能性が考えられる。時期は、奈良時代（8世紀）と考えられる。



第204図 第8号掘立柱建物跡実測図

第9号掘立柱建物跡（第205図）

位置 調査I区東南部，D7f1区。

重複関係 本跡は，第58・64号住居跡と重複している。第58号住居跡が本跡のP6とP7を，第64号住居跡が本跡のP5を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。

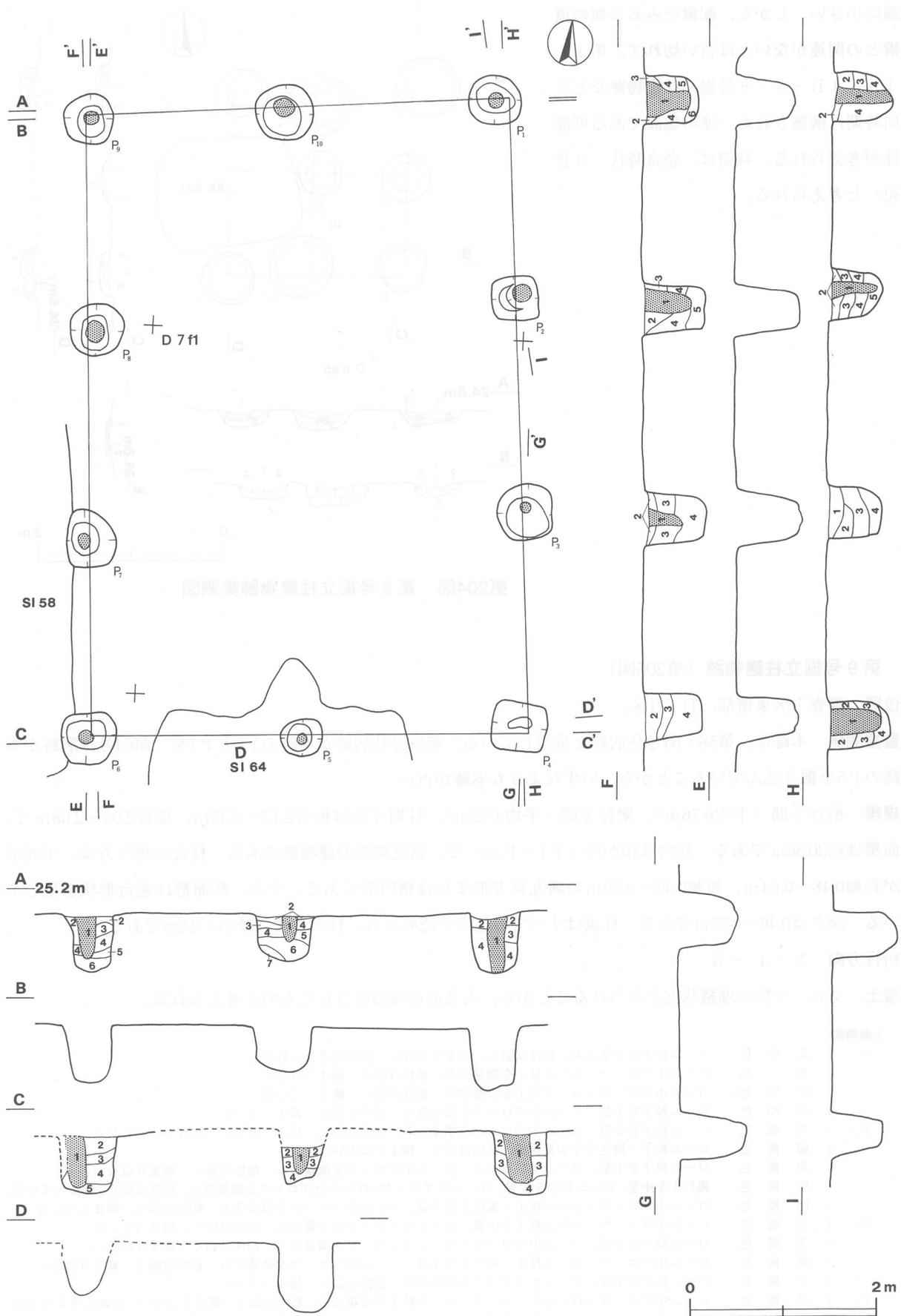
規模 桁行3間（平均6.76m），梁行2間（平均4.52m），柱間寸法は桁行2.12～2.33m，梁行2.06～2.08mで，面積は約30.56㎡である。柱穴は10か所（P1～P10）で，側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長軸0.48～0.64m，短軸0.41～0.59mの隅丸長方形または楕円形である。また，断面形は逆台形状を呈している。深さは0.46～0.73mである。柱痕はすべての柱穴で認められ，柱の寸法は径13～24cmである。

桁行方向 N-4°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子・褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	暗褐色	褐色土を中量，ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・褐色土を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。



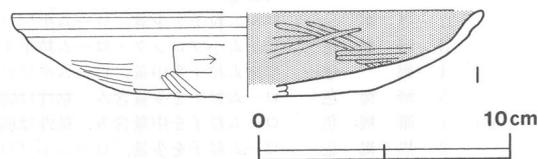
第205図 第9号掘立柱建物跡実測図

	3	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P7	1	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量, 焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム中ブロックを中量, ローム小ブロック・焼土小ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを少量, 焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を少量, 炭化物・焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P9	1	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロック・炭化物を少量, 焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	6	褐色	ローム粒子を多量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P10	1	極暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, 炭化物・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量, ローム大ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム中ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	6	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	7	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム大ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。

遺物 土師器片45点, 須恵器片10点が出土している。第206図1の土師器坏がP4の覆土中から出土している。

所見 I区南東部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については, ほぼ規則性が認められる。同じ構造を持つ第26号掘立柱建物跡などと同規模であり, 桁行方向は, 第1・4A・6・12・18・23・26・27・

29・30号掘立柱建物跡とほぼ同方向(±2°)であり, これらの関連は不明であるが, 同時期と思われる。また, 第1・2・3号掘立柱建物跡などと直交して, 第1号掘と並行して意識的に構築されていることから, 一連の施設として機能していた可能性は高い。時期は, 重複している住居跡が8世紀後葉と9世紀中葉であることから, 奈良時代前期から中期(8世紀前葉から中葉)と考えられる。



第206図 第9号掘立柱建物跡
出土遺物実測図

第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第206図 1	坏 土師器	A [18.8] B 3.4	底部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ヘラ磨き。外面一部手持ちヘラ削り。	雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 におい橙色 普通	20% P526 内面黒色処理 P4覆土中

第12号掘立柱建物跡 (第207図)

位置 調査I区西部, D5 a4区。

重複関係 本跡は、第13号掘立柱建物跡、第199・200A・200B・256B・323・324・325号土坑と重複している。本跡が第13号掘立柱建物跡のP1を掘り込んでいることから、本跡が新しい。また、第256B号土坑が本跡のP5を掘り込んでいることから、本跡が古い。その他の土坑との新旧関係は、切り合いがないことから不明である。

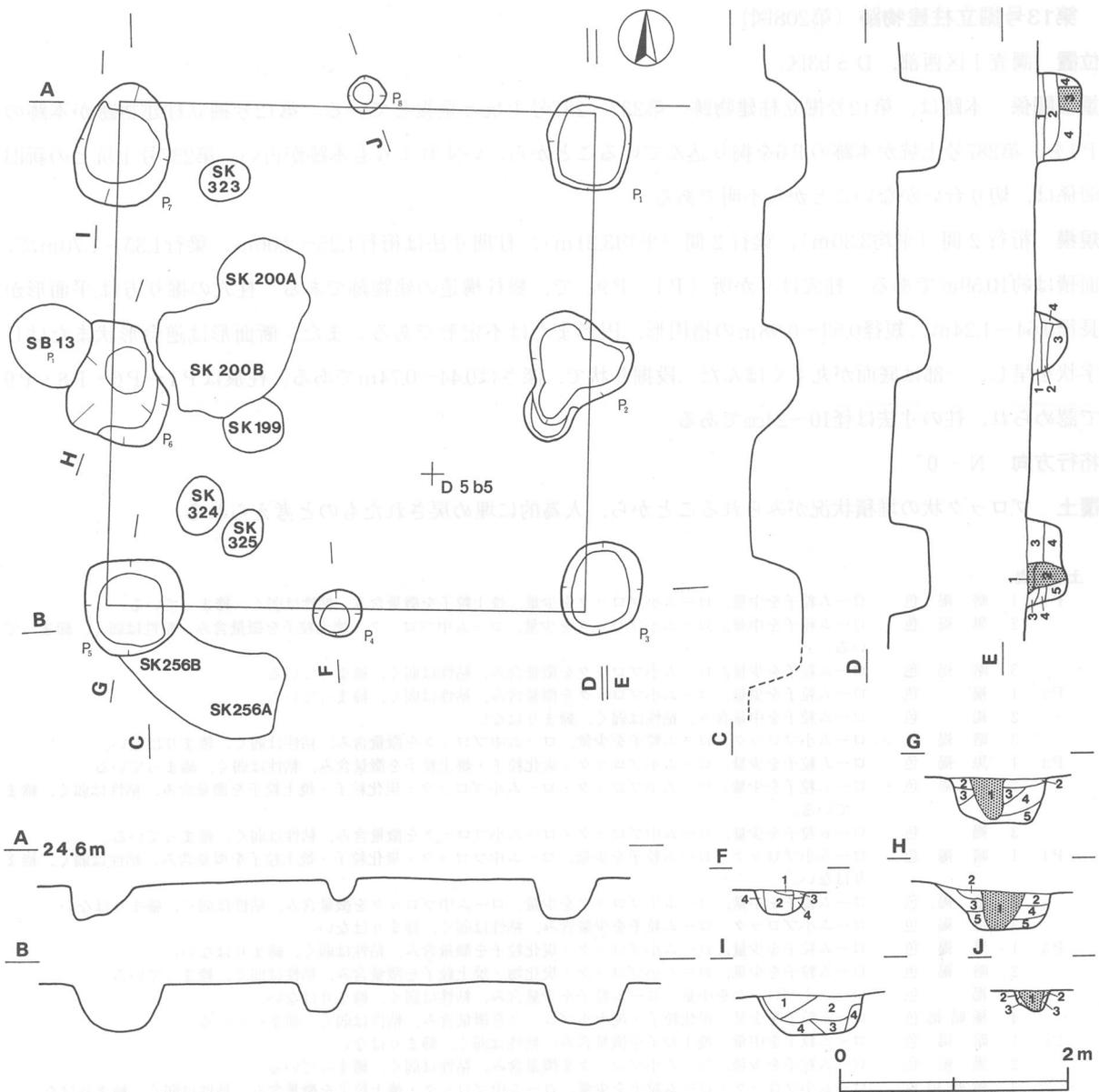
規模 桁行2間(平均4.08m)、梁行2間(平均4.10m)、柱間寸法は桁行1.95~2.15m、梁行1.77~2.30mで、面積は約16.73m²である。柱穴は8か所(P1~P8)で、側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.34~1.09m、短径0.30~0.89mの楕円形、円形または不定形である。また、断面形は逆台形状またはU字状を呈し、深さは0.18~0.44mである。柱痕はP1・P3・P5・P6・P8で認められ、柱の寸法は径14~21cmである。桁側の中に位置するP4とP8は、他の柱穴よりも小さく、浅くなっている。

桁行方向 N-3°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P3	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P4	1	暗褐色	ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
	3	褐色	ローム中ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P7	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム中ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。



第207図 第12号掘立柱建物跡実測図

- | | | | |
|----|---|-----|--|
| P8 | 1 | 暗褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性はなく、締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片1点、須恵器片4点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 I区西部の平坦地に位置している。P1~P3とP5~P7については、深さ、断面形ともにほぼ規則性が認められる。柱間寸法については、ほぼ規則性が認められる。桁行2間、梁行2間の側柱構造を持つ掘立柱建物跡は他に検出されなかったが、第4A・4B・9・21・23・26・27・29・30号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ一致(±3°)している。このことから詳細は不明であるが、他の建物跡と同時期で、一連の施設として機能していた可能性が高い。時期は、奈良時代前期から後期(8世紀前葉から後葉)と考えられる。

第13号掘立柱建物跡（第208図）

位置 調査Ⅰ区西部，D5b3区。

重複関係 本跡は，第12号掘立柱建物跡，第237・287号土坑と重複している。第12号掘立柱建物跡が本跡のP1を，第287号土坑が本跡のP6を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。第237号土坑との新旧関係は，切り合いがないことから不明である。

規模 桁行2間（平均3.30m），梁行2間（平均3.21m），柱間寸法は桁行1.25～2.06m，梁行1.35～1.70mで，面積は約10.59㎡である。柱穴は9か所（P1～P9）で，総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.64～1.24m，短径0.53～0.98mの楕円形，円形または不定形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈し，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.44～0.74mである。柱痕はP1～P6・P8・P9で認められ，柱の寸法は径10～24cmである。

桁行方向 N-0°

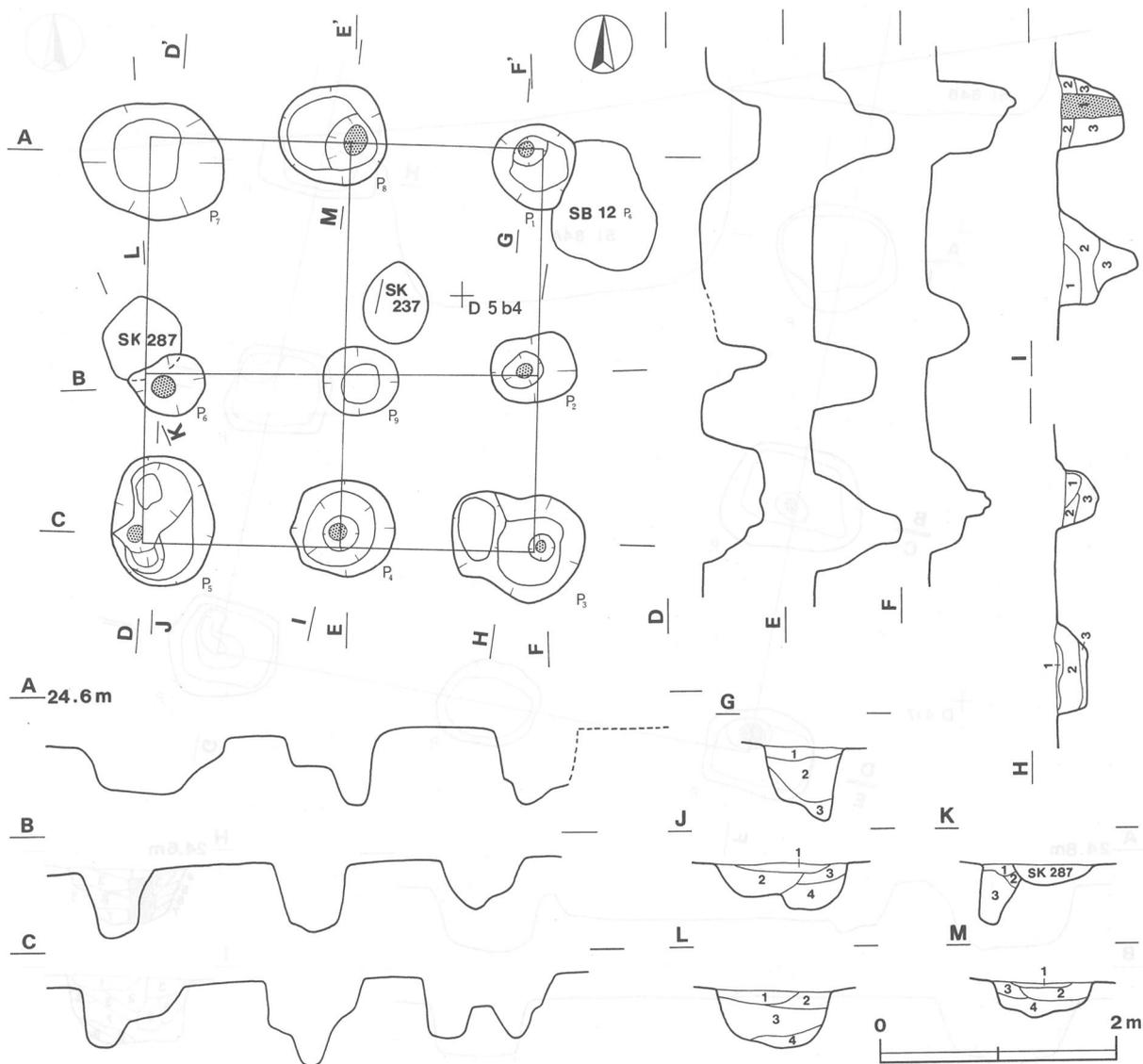
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P2	1	褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	褐色	ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P3	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P4	3	褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P5	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	極暗褐色	ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P6	1	暗褐色	ローム粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P7	1	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を中量，炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	黒褐色	焼土粒子を中量，焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	焼土粒子を少量，焼土中ブロック・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P8	1	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性はなく，締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	極暗褐色	ローム粒子を中量，焼土小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片11点，須恵器片10点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 Ⅰ区西部の平坦地に位置している。柱穴は，深さ，断面形ともにほぼ規則性が認められる。柱間寸法については，中央の桁行列が南側の桁行列に若干寄り気味であるが，ほぼ規則性が認められる。第1・4A・4B・16・29・30号掘立柱建物跡などの，桁行2間，梁行2間の総柱構造を持つ建物跡と桁行方向がほぼ一致（±6°）し，規模も同じぐらいであることから，これらは同時期の施設として機能していた可能性が高い。時期は，重



第208図 第13号掘立柱建物跡実測図

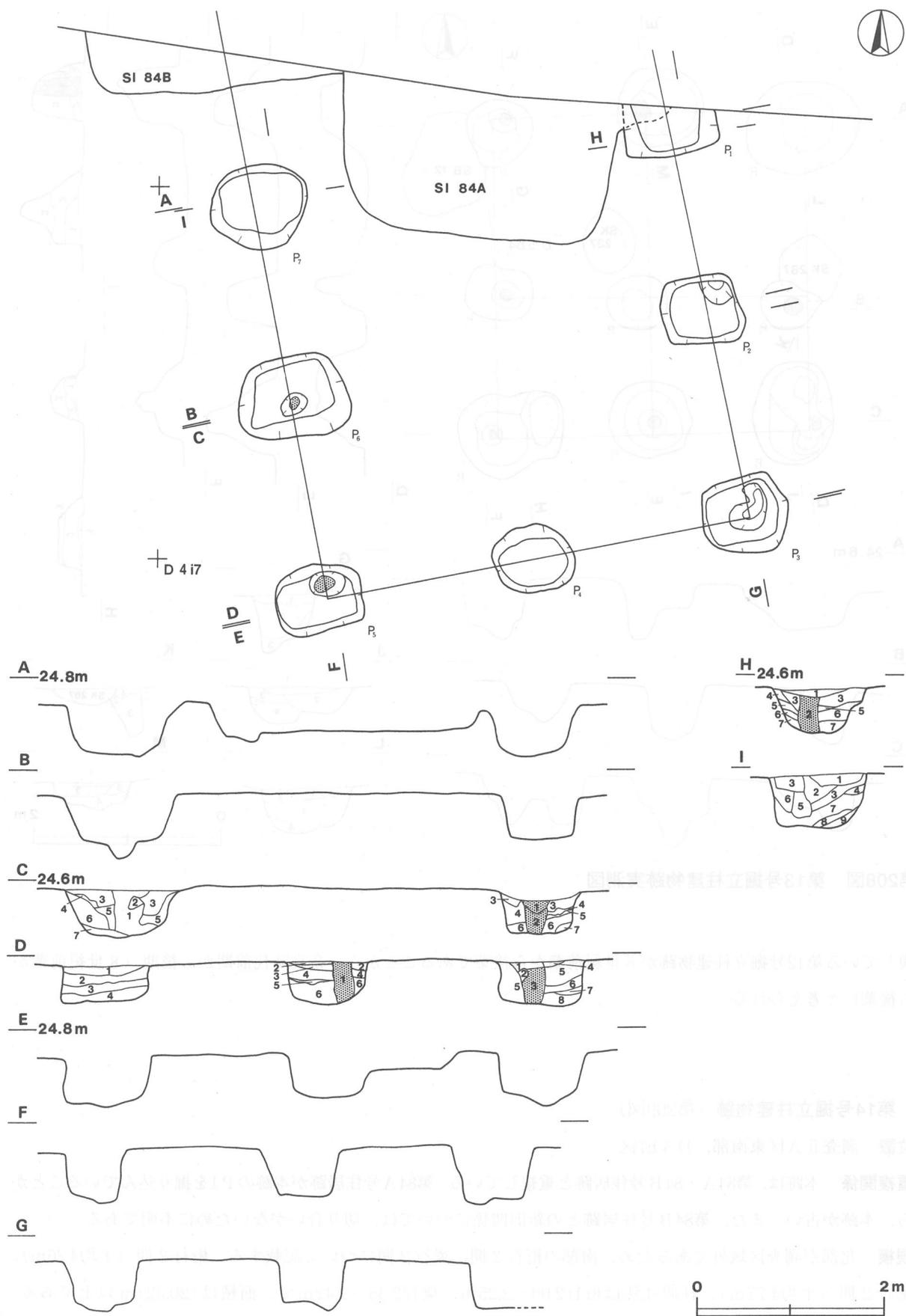
複している第12号掘立柱建物跡が8世紀前葉から後葉であることから、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

第14号掘立柱建物跡（第209図）

位置 調査ⅡA区東南部，D4h7区。

重複関係 本跡は，第84A・84B号住居跡と重複している。第84A号住居跡が本跡のP1を掘り込んでいることから，本跡が古い。また，第84B号住居跡との新旧関係については，切り合いがないために不明である。

規模 北部が調査区域外であるため，南部の桁行2間，梁行2間について記載する。桁行2間（平均4.26m），梁行2間（平均4.77m），柱間寸法は桁行2.00～2.25m，梁行2.35～2.42mで，面積は(20.32)㎡以上である。柱穴は7か所（P1～P7）で，側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長軸0.90～1.21m，短軸0.51～0.91mの隅丸長方形または楕円形である。また，断面形は逆台形状を呈しており，一部は底面が丸くく



第209图 第14号掘立柱建物跡実測图

ぼんだ二段掘り状で、深さは0.47~0.65mである。柱痕はP1~P6で認められ、柱の寸法は径14~20cmである。

桁行方向 N-9°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	褐色	ローム粒子・黒褐色土を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	7	褐色	ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量・ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	褐色	ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	7	褐色	黒褐色土を中量、ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	1	暗褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	4	暗褐色	ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	褐色	ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	7	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	8	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	1	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	褐色	ローム粒子・暗褐色土を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子・黒褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・黒褐色土小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	黒褐色土小ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、ローム大ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土小ブロックを中量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	6	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	7	灰褐色	ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P7	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子・黒褐色土小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子・黒褐色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	7	褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	8	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量、ローム大ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	9	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片12点、須恵器片7点が出土している。第210図1の土師器鉢がP6の覆土中から出土している。

所見 II A区東部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については、ほぼ規則性が認められる。

桁行3間、梁行2間の側柱構造を持つ他の建物跡とは、桁行方向の違いが若干認められる(±9°)が、隣接している第15号掘立柱建物跡とはほぼ同方向(±2°)である。その関連は不明であるが、一連の施設として



機能していた可能性は高い。時期は、出土遺物と重複している住居跡が9世紀前葉と考えられることから、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と思われる。

第210図 第14号掘立柱建物跡
出土遺物実測図

第14号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考（台帳番号、出土位置、色調など）
第210図 1	鉢 土師器	体部	外面平行タタキ。内面ナデ、一部ヘラナデ。	T P 33 内面黒色処理 P 6覆土中 内面 黒色、外面 灰色

第15号掘立柱建物跡（第211図）

位置 調査ⅡA区東南部，D 4 g5区。

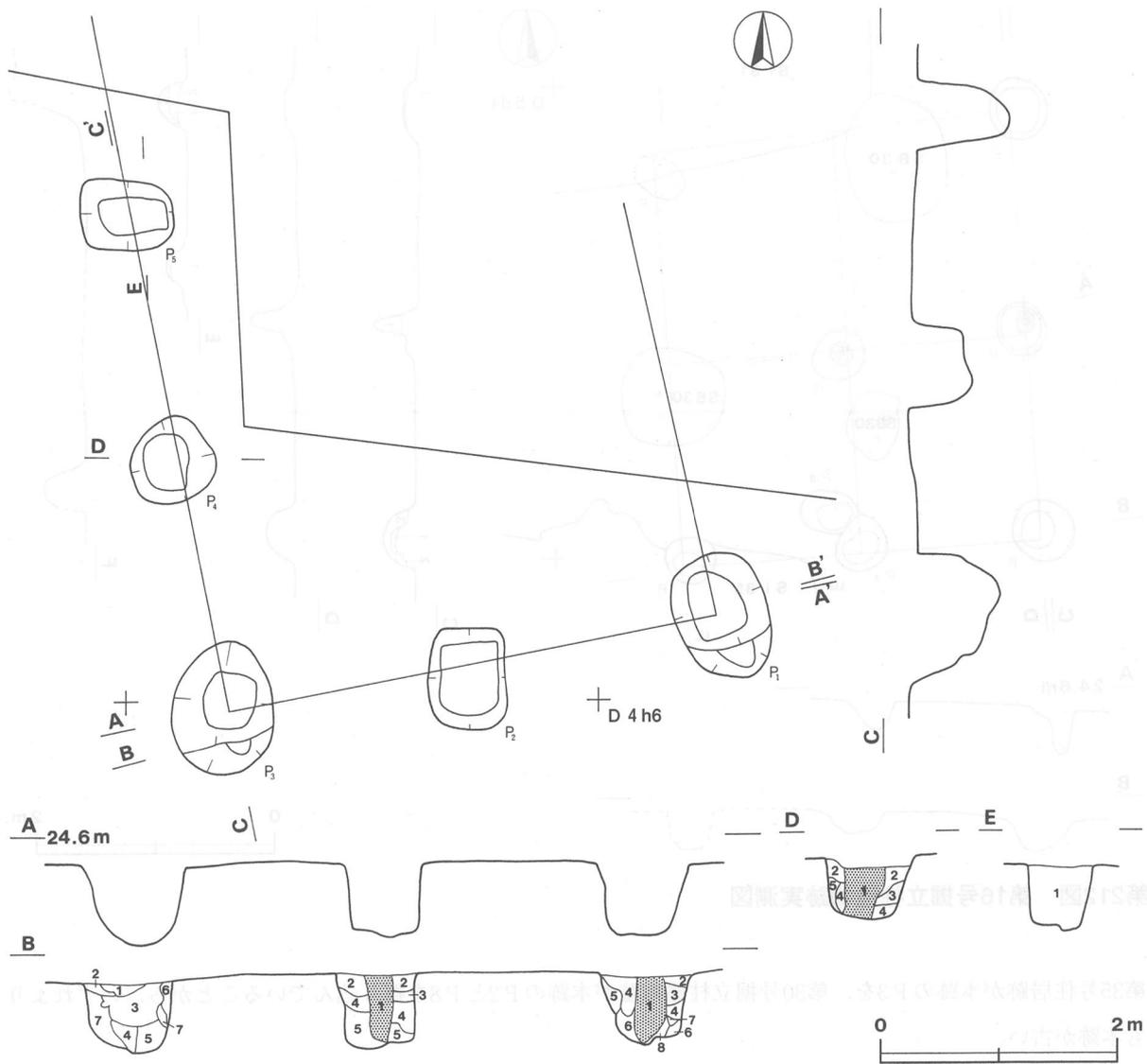
規模 北部が調査区域外であるため、南部の桁行2間，梁行2間について記載する。桁行2間（平均4.26m），梁行2間（平均4.26m），柱間寸法は桁行2.11～2.15m，梁行2.04～2.22mで，面積は（18.15）㎡以上である。柱穴は5か所（P1～P5）で，側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長軸0.74～1.18m，短軸0.58～0.87mの隅丸長方形または楕円形である。また，断面形は逆台形状を呈しており，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.57～0.66mである。柱痕はP1・P2・P4で認められ，柱の寸法は径16～24cmである。

桁行方向 N - 7° - W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量，ローム大ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，暗褐色土を少量含み，粘性を帯び，締まっている。版築のような人為的に固められた層。
	5	褐色	暗褐色土を中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。版築のような人為的に固められた層。
	6	褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	7	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	8	灰褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P2	1	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・黒褐色土を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	5	褐色	暗褐色土を中量，ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を中量，ローム中ブロックを少量，ローム大ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	5	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	6	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	7	褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。



第211図 第15号掘立柱建物跡実測図

P5 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・褐色土を中量，ローム中ブロックを少量，ローム大ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

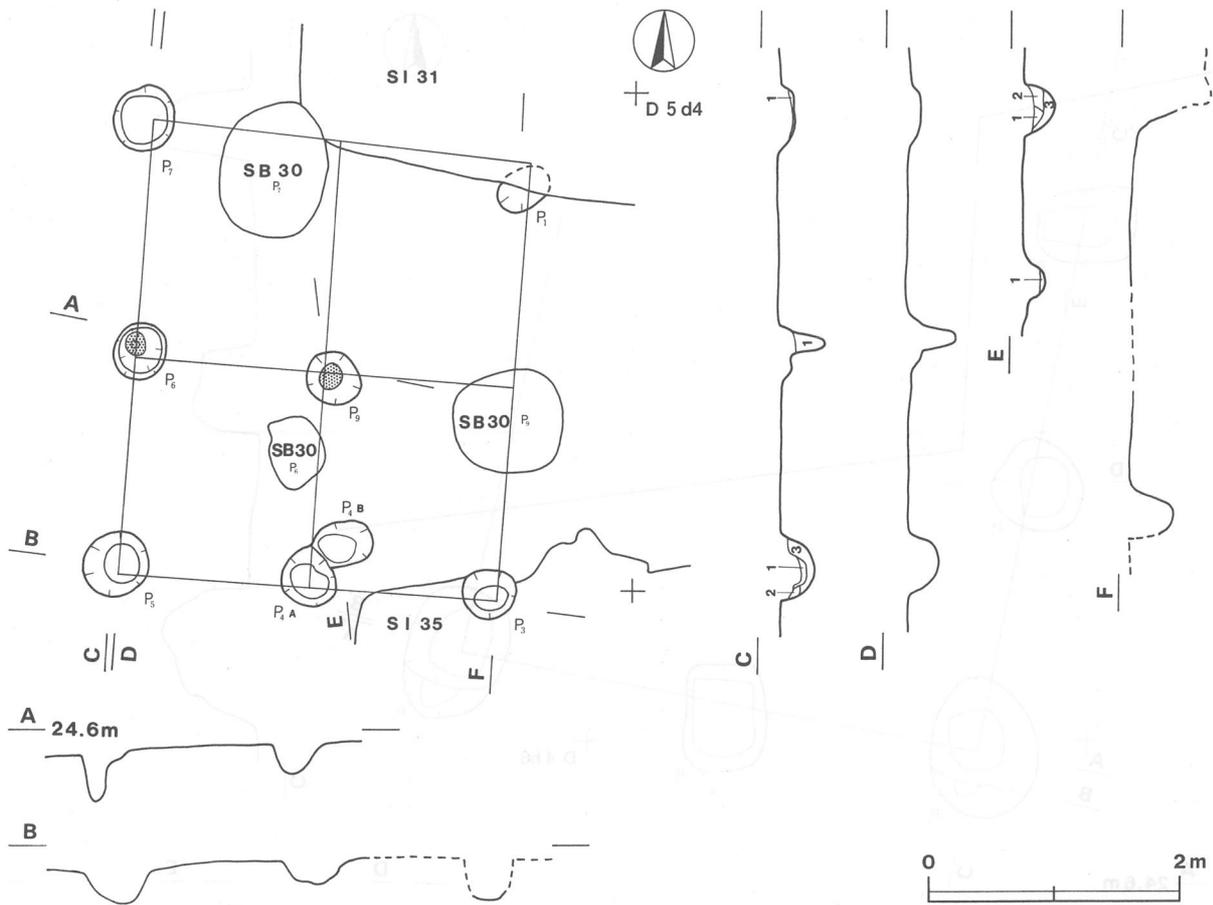
遺物 土師器片 3点，須恵器片 2点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 II A区東部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については，ほぼ規則性が認められる。桁行3間，梁行2間の側柱構造を持つ他の掘立柱建物跡とは，桁行方向の違いが若干認められる（ $\pm 9^\circ$ ）が，隣接している第14号掘立柱建物跡についてはほぼ同方向（ $\pm 2^\circ$ ）で，掘り方も類似している。その関連は不明であるが，一連の施設として機能していた可能性は高い。時期は，出土遺物から，奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

第16号掘立柱建物跡（第212図）

位置 調査I区西部，D 5 d3区。

重複関係 本跡は，第31・35号住居跡，第30号掘立柱建物跡と重複している。第31号住居跡が本跡のP1を，



第212図 第16号掘立柱建物跡実測図

第35号住居跡が本跡のP3を、第30号掘立柱建物跡が本跡のP2とP8を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が古い。

規模 桁行2間（平均3.48m）、梁行2間（平均3.03m）、柱間寸法は桁行1.70～1.80m、梁行1.45～1.55mで、面積は約10.54m²である。柱穴は8か所（P1～P9）で、総柱構造の建物跡である。P2とP8は確認できなかったが、構造上は存在したと推定される。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.42～0.53m、短径0.36～0.52mの楕円形または円形である。また、断面形はU字状を呈し、一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で、深さは0.12～0.37mである。柱痕はP6とP9で認められ、柱の寸法は径約20cmである。

桁行方向 N - 4° - E

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P4B	1	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P5	1	暗褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P7	1	暗褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P9	1	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片1点, 須恵器片2点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 I区西部の平坦地に位置している。柱穴は, 深さ, 断面形, 柱間寸法ともにほぼ規則性が認められる。他の同構造の掘立柱建物跡と桁行方向が一致していないことから, その関連については不明である。しかし, 第30号掘立柱建物跡との切り合い, 立地場所などを考えると, 第12・13・27・29・30号掘立柱建物跡などと共に, 一連の施設として機能していた可能性がある。時期は, 重複している住居が8世紀後葉であることから, 奈良時代前期から中期(8世紀前葉から中葉)と考えられる。

第17号掘立柱建物跡(第213図)

位置 調査I区南西部, D5d7区。

重複関係 本跡は, 第18・19号掘立柱建物跡と重複している。第19号掘立柱建物跡が本跡のP5とP7を掘り込んでいることから, 本跡が古い。第18号掘立柱建物跡との新旧関係は, 切り合いがないことから不明である。

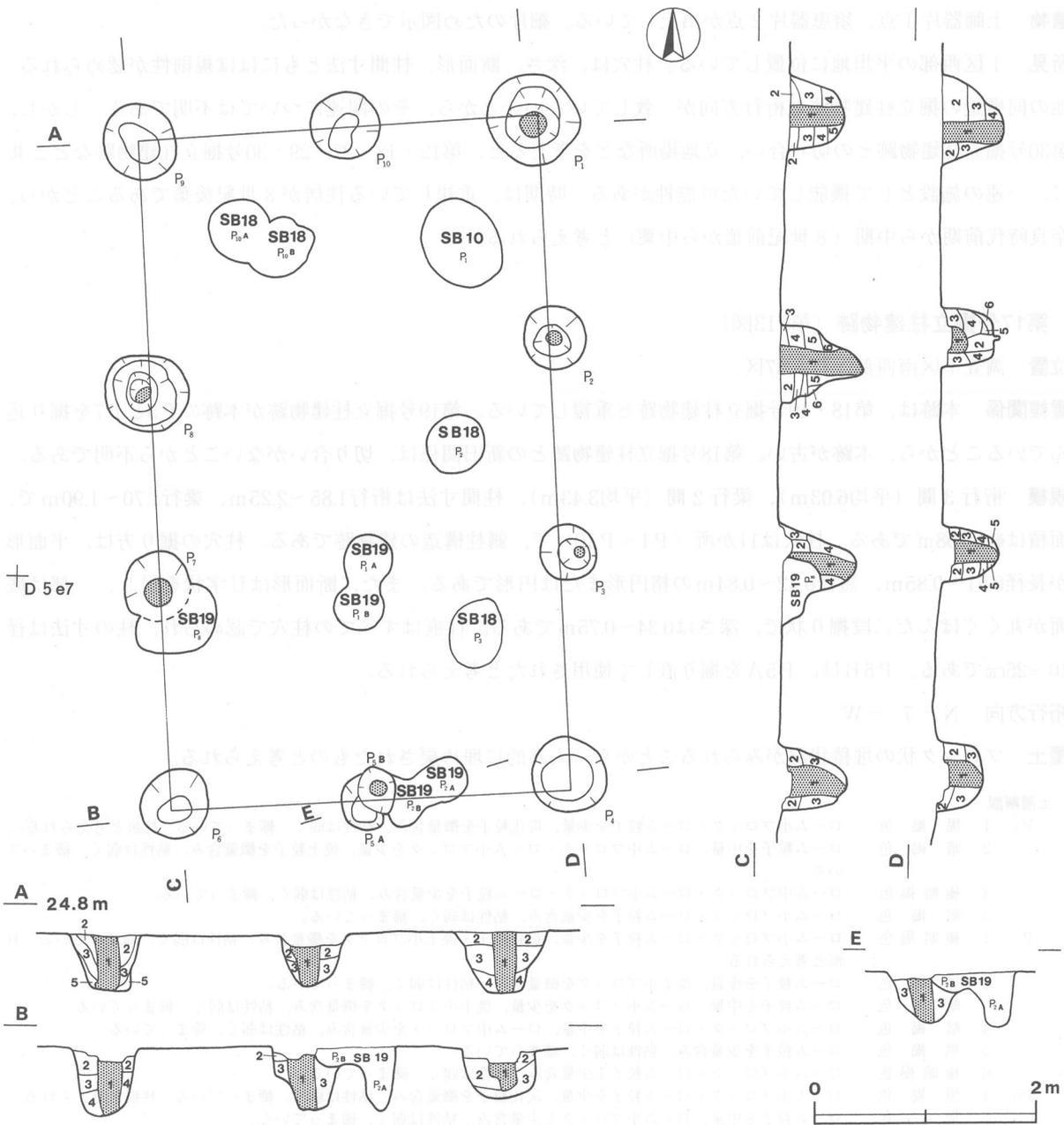
規模 桁行3間(平均6.03m), 梁行2間(平均3.43m), 柱間寸法は桁行1.85~2.25m, 梁行1.70~1.90mで, 面積は約20.68㎡である。柱穴は11か所(P1~P10)で, 側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径0.51~0.85m, 短径0.42~0.84mの楕円形または円形である。また, 断面形はU字状を呈し, 一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で, 深さは0.34~0.75mである。柱痕はすべての柱穴で認められ, 柱の寸法は径10~25cmである。P5Bは, P5Aを掘り直して使用されたと考えられる。

桁行方向 N-7°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから, 人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P2	3	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P3	3	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	6	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	褐褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P4	3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム中ブロックを中量, ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
P5	3	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	(A・B)		
	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
P6	2	極暗褐色	ローム粒子を中量, 炭化粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, 焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
P7	2	極暗褐色	ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P7	2	極暗褐色	ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	3	褐褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

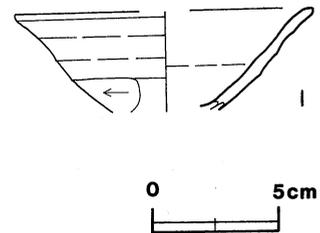


第213図 第17号掘立柱建物跡実測図

- | | | |
|-----|--------|---|
| P8 | 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 極暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 4 黒褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 5 極暗褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 6 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| P9 | 1 黒褐色 | 焼土小ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 極暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 4 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 5 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| P10 | 1 極暗褐色 | 炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 3 極暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片33点, 須恵器片37点が出土している。第214図1の須恵器坏がP7の覆土中から出土している。

所見 I区南西部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と断面形はほぼ一致しているが、深さは一定ではない。柱間寸法についてはほぼ規則性が認められる。桁行方向は、同じ構造の第9・18・23・26・27号掘立柱建物跡とほぼ同方向(±5°)であるが、これらとの関連は不明である。重複している第18号掘立柱建物跡とは構造も似ていることから、同じ機能を持った施設の可能性が高い。時期は、出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。



第214図 第17号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第214図 1	坏 須恵器	A [12.0] B (4.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持つ。内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	10% P528 P7覆土中

第18号掘立柱建物跡 (第215図)

位置 調査I区南西部, D5d7区。

重複関係 本跡は、第17・19号掘立柱建物跡と重複している。ともに切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

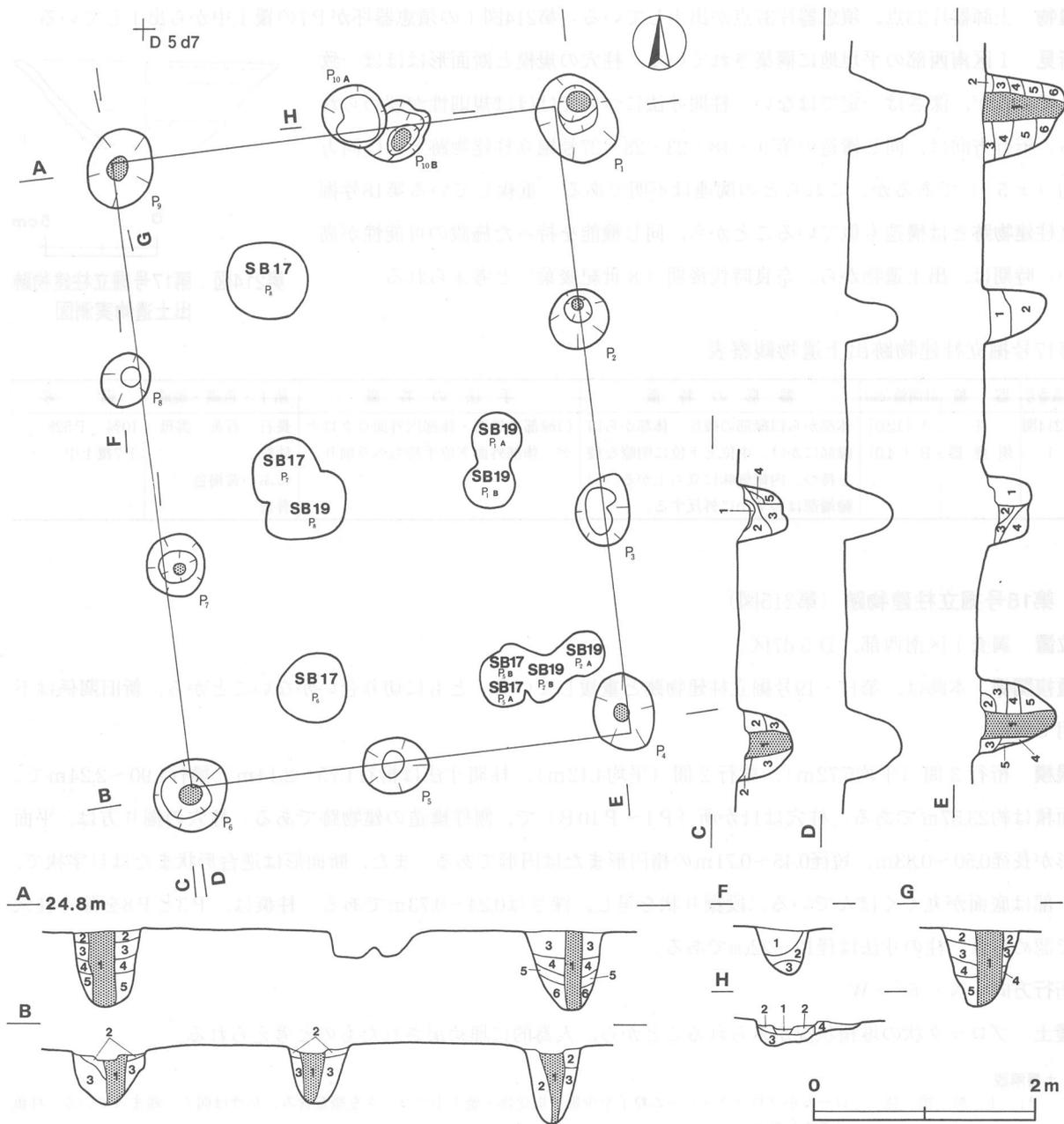
規模 桁行3間(平均5.72m), 梁行2間(平均4.12m), 柱間寸法は桁行1.75~2.14m, 梁行1.90~2.24mで、面積は約23.57㎡である。柱穴は11か所(P1~P10B)で、側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.50~0.83m, 短径0.45~0.71mの楕円形または円形である。また、断面形は逆台形状またはU字状で、一部は底面が丸くくぼんでいる二段掘り状を呈し、深さは0.24~0.73mである。柱痕は、P3とP8を除く柱穴で認められ、柱の寸法は径12~22cmである。

桁行方向 N-6°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化物・焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	黒褐色	ローム粒子を少量, 炭化物・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	6	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P2	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P3	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。
P5	1	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。



第215図 第18号掘立柱建物跡実測図

- | | | |
|----|--------|--|
| P6 | 1 極暗褐色 | ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒子を中量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| P7 | 1 極暗褐色 | ローム粒子を少量, 炭化物・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 極暗褐色 | ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。 |
| P8 | 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化物・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 極暗褐色 | ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 黒褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P9 | 1 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量, 炭化物・焼土小ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| | 3 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |

	4	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	5	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P10B	1	極暗褐色	ローム粒子を中量含み、粘性を帯び、締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性を帯び、締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
	4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片30点、須恵器片30点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 I区南西部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と断面形は、P10AとP10Bを除いて、ほぼ一致しているが、深さは一定ではない。柱間寸法については、ほぼ規則性が認められる。桁行方向は、同じ構造の第9・17・23・26・27号掘立柱建物跡とほぼ同方向(±4°)であるが、これらとの関連は不明である。重複している第17号掘立柱建物跡とは、構造も似ていることから、同じ機能を持った施設の可能性が高い。時期は、出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。

第19号掘立柱建物跡(第216図)

位置 調査I区南部、D5e7区。

重複関係 本跡は、第17・18号掘立柱建物跡と重複している。本跡が第17号掘立柱建物跡のP5BとP7を掘り込んでいることから、本跡が新しい。また、第18号掘立柱建物跡との新旧関係については、切り合いがないことから不明である。

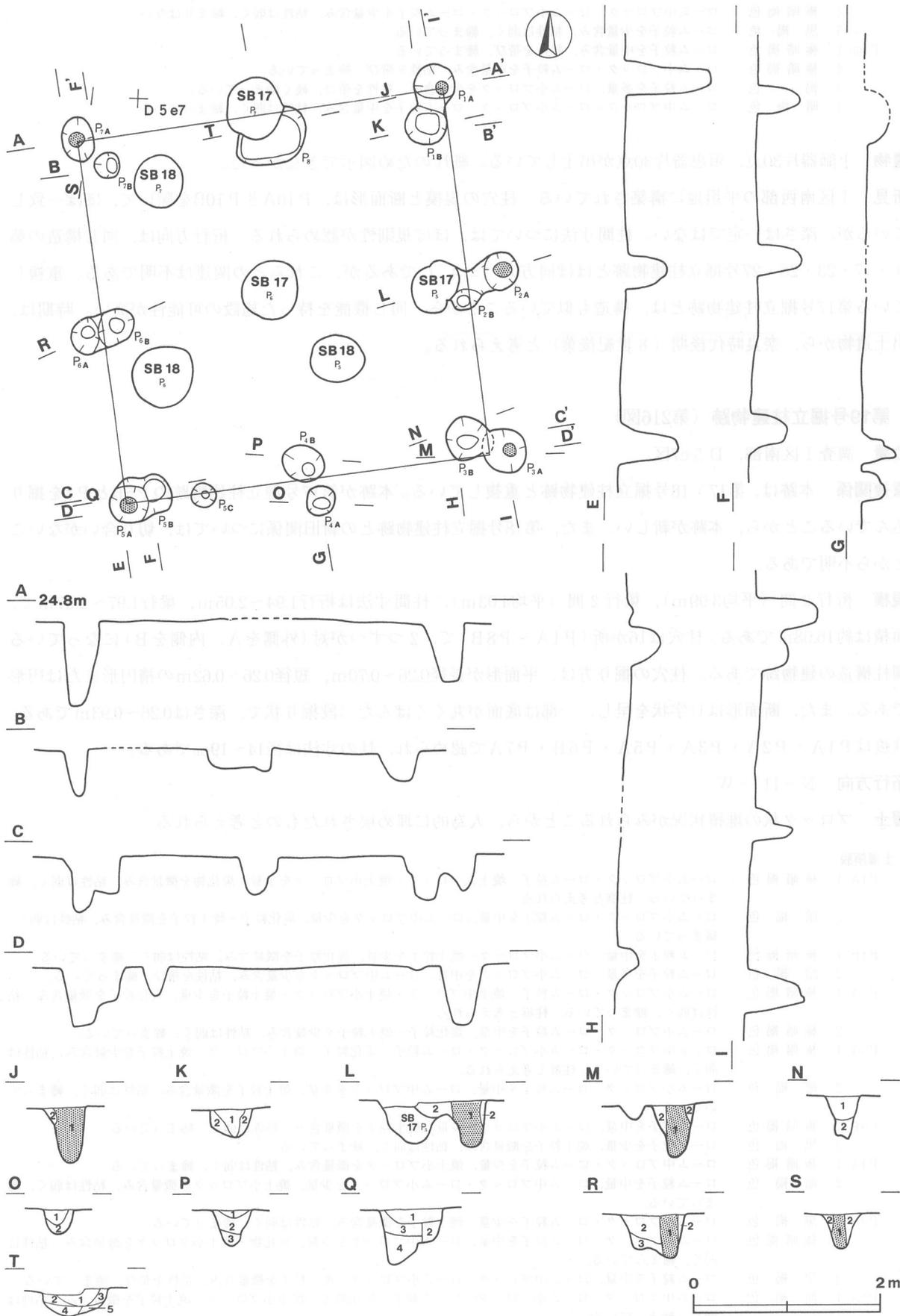
規模 桁行2間(平均3.99m)、梁行2間(平均4.03m)、柱間寸法は桁行1.94~2.05m、梁行1.97~2.07mで、面積は約16.08㎡である。柱穴は16か所(P1A~P8B)で、2つずつが対(外側をA、内側をB)になっている側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.26~0.70m、短径0.26~0.62mの楕円形または円形である。また、断面形はU字状を呈し、一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で、深さは0.26~0.93mである。柱痕はP1A・P2A・P3A・P5A・P6B・P7Aで認められ、柱の寸法は径14~19cmである。

桁行方向 N-11°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1A	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック・焼土小ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P1B	1	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
P2A	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3A	1	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3B	1	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4A	1	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4B	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量、炭化物・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
P5A	1	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。



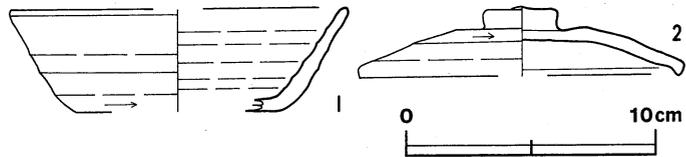
第216図 第19号掘立柱建物跡実測図

4	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P6A 1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
2	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
3	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P7A 1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
2	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P8 1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
2	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
5	褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。

遺物 土師器片15点, 須恵器片23点が出土している。第217図1の須恵器坏がP2Aの覆土中から, 2の須恵器蓋がP1Bの覆土中からそれぞれ出土している。

所見 I区南西部の平坦部に構築されている。柱穴の規模と平面形には, P8を除いてほぼ規則性がみられる。深さは不ぞろいであるが, 隅の柱穴について

では, 外側の柱穴が内側の柱穴よりも深くなっている。また, 柱間寸法はほぼ規則性が認められる。柱穴の配列については, 覆土の堆積状況から内側の柱穴よりも外側の柱穴の方が新しいと考えられるので, 初め



第217図 第19号掘立柱建物跡出土遺物実測図

内側の柱穴を使用したのち, 建て替えをしたものと思われる。同構造のものは検出されておらず, 他の遺構との関連は不明である。重複している第17・18号掘立柱建物跡とは時期差があまりなく, 立地状況も似ていることから, 同じ機能を持った施設の可能性が高い。時期は, 出土遺物と重複している第17号掘立柱建物跡が8世紀後葉であることから, 平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。

第19号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第217図 1	坏 須恵器	A [13.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 中位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 灰黄色 普通	10% P529 P2A覆土中
		B 4.1				
		C [8.2]				
2	蓋 須恵器	A [13.0]	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で, 中位に明瞭な稜を持ち, 緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	雲母 砂粒 黄灰色 普通	40% P530 P1B覆土中
		B 2.8				
		F 3.1				
		G 0.9				

第22号掘立柱建物跡（第218図）

位置 調査I区南部，D6f2区。

重複関係 本跡は，第23号掘立柱建物跡，第320・337A・337B・339号土坑と重複している。第337A・337B号土坑が本跡のP6を，第339号土坑が本跡のP7を掘り込んでいることから，本跡が古い。第23号掘立柱建物跡，第320号土坑との新旧関係については，切り合いがないことから不明である。

規模 桁行4間（平均7.74m），梁行2間（平均4.73m），柱間寸法は桁行1.80～2.07m，梁行2.27～2.50mで，面積は約36.61㎡である。柱穴は12か所（P1～P12）で，側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.47～1.06m，短径0.37～0.65mの楕円形または円形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈しており，深さは0.43～0.70mである。柱痕はP1・P10・P11で認められ，柱の寸法は径13～18cmである。

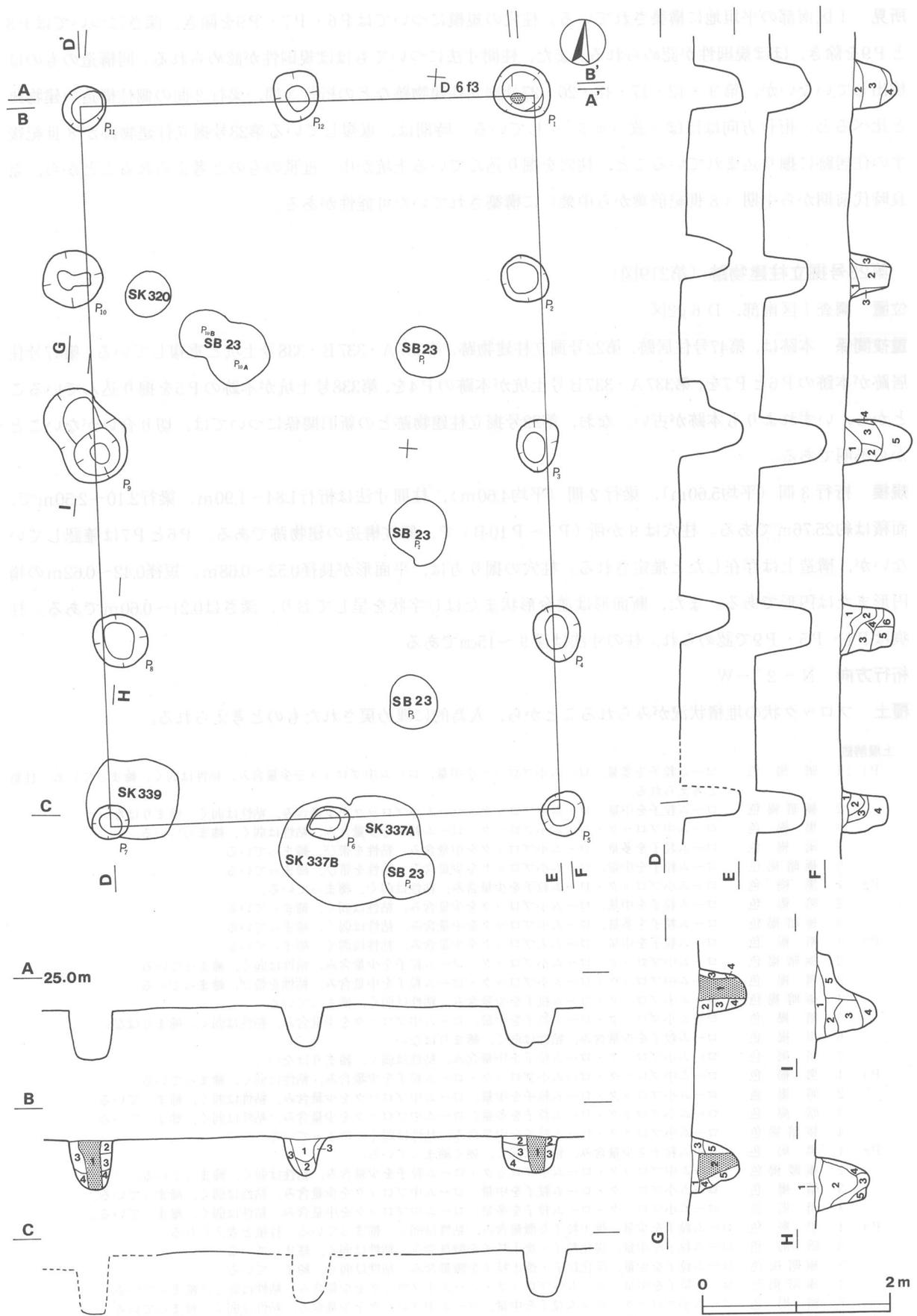
桁行方向 N-8°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，粘性を帯び，締まっている。
P2	1	極暗褐色	ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性を帯び，締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P5	1	黒褐色	ロームを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P8	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P9	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P10	1	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
P11	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
P12	1	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物 土師器片2点が出土している。細片のため図示できなかった。



第218図 第22号掘立柱建物跡実測図

所見 I区南部の平坦地に構築されている。柱穴の規模についてはP6・P7・P9を除き、深さについてはP3とP9を除き、ほぼ規則性が認められる。また、柱間寸法についてもほぼ規則性が認められる。同構造のものは検出していないが、第9・12・17・18・26・27号掘立柱建物跡などの桁行3間、梁行2間の側柱構造の建物跡と比べると、桁行方向はほぼ一致(±5°)している。時期は、重複している第23号掘立柱建物跡が8世紀後半の住居跡に掘り込まれていること、柱穴を掘り込んでいる土坑が中・近世のものと考えられることから、奈良時代前期から中期(8世紀前葉から中葉)に構築されていた可能性がある。

第23号掘立柱建物跡(第219図)

位置 調査I区南部, D6g2区。

重複関係 本跡は、第47号住居跡、第22号掘立柱建物跡、第337A・337B・338号土坑と重複している。第47号住居跡が本跡のP6とP7を、第337A・337B号土坑が本跡のP4を、第338号土坑が本跡のP5を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が古い。なお、第22号掘立柱建物跡との新旧関係については、切り合いがないことから不明である。

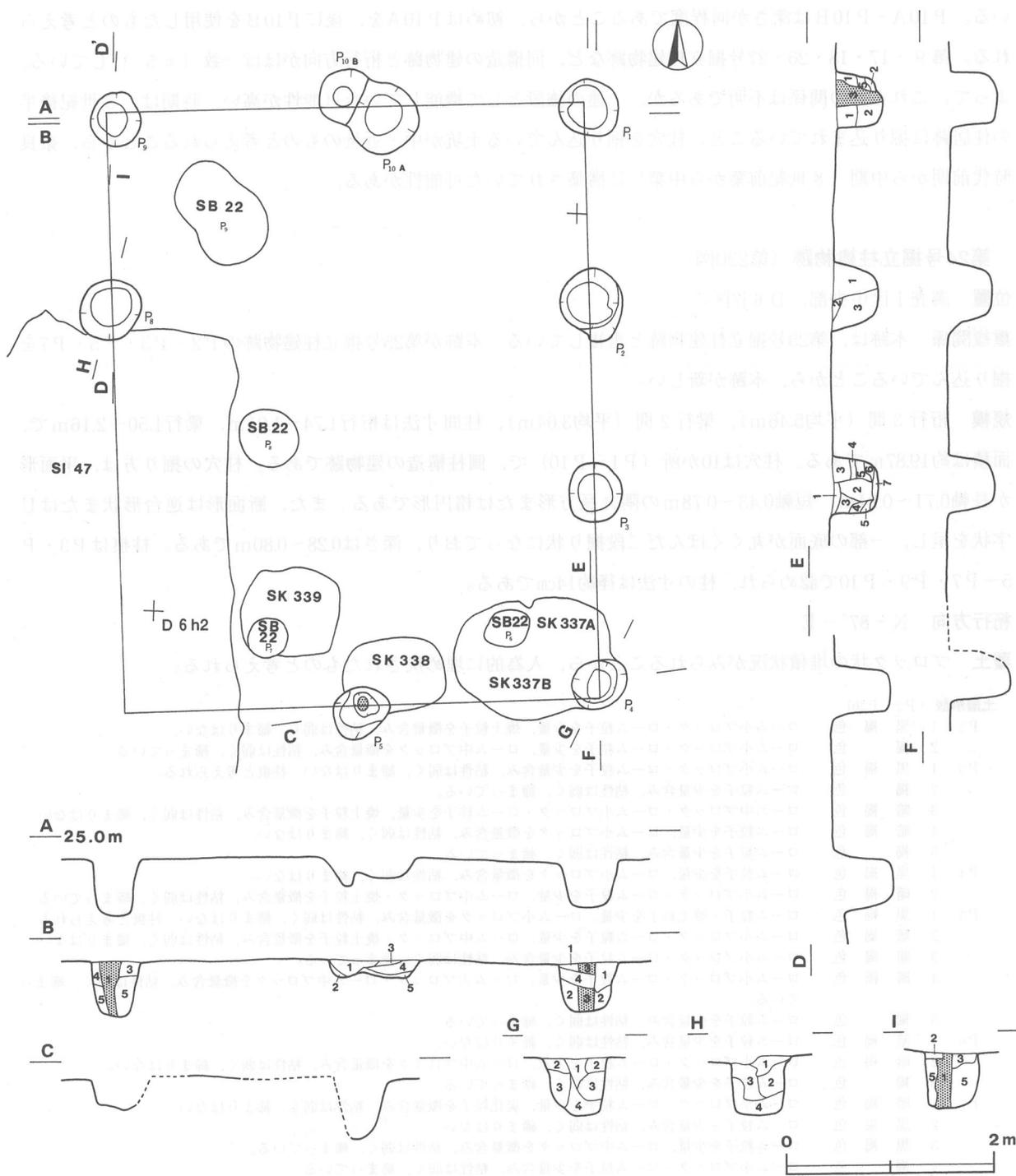
規模 桁行3間(平均5.60m)、梁行2間(平均4.60m)、柱間寸法は桁行1.84~1.90m、梁行2.10~2.50mで、面積は約25.76㎡である。柱穴は9か所(P1~P10B)で、側柱構造の建物跡である。P6とP7は確認していないが、構造上は存在したと推定される。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.52~0.68m、短径0.42~0.62mの楕円形または円形である。また、断面形は逆台形状またはU字状を呈しており、深さは0.21~0.60mである。柱痕はP1・P5・P9で認められ、柱の寸法は径9~15cmである。

桁行方向 N-2°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。
P2	5	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	3	極暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	6	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	7	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
	2	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。
P9	1	黒褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P10	1	黒褐色	ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。



第219図 第23号掘立柱建物跡実測図

- 3 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 極暗褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。

遺物 土師器片2点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 I区南部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については、ほぼ規則性が認められる。深さについては一定していない。梁行の中間に位置しているP5とP10A・P10Bが他の柱穴に比べて浅くなって

いる。P10A・P10Bは深さが同程度であることから、初めはP10Aを、後にP10Bを使用したものと考えられる。第9・17・18・26・27号掘立柱建物跡など、同構造の建物跡と桁行方向がほぼ一致(±5°)している。よって、これらとの関係は不明であるが、一連の施設として機能していた可能性が高い。時期は、8世紀後半の住居跡に掘り込まれていること、柱穴を掘り込んでいる土坑が中・近世のものと考えられることから、奈良時代前期から中期(8世紀前葉から中葉)に構築されていた可能性がある。

第24号掘立柱建物跡(第220図)

位置 調査I区中央部, D6j7区。

重複関係 本跡は、第25号掘立柱建物跡と重複している。本跡が第25号掘立柱建物跡のP2・P3・P5・P7を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

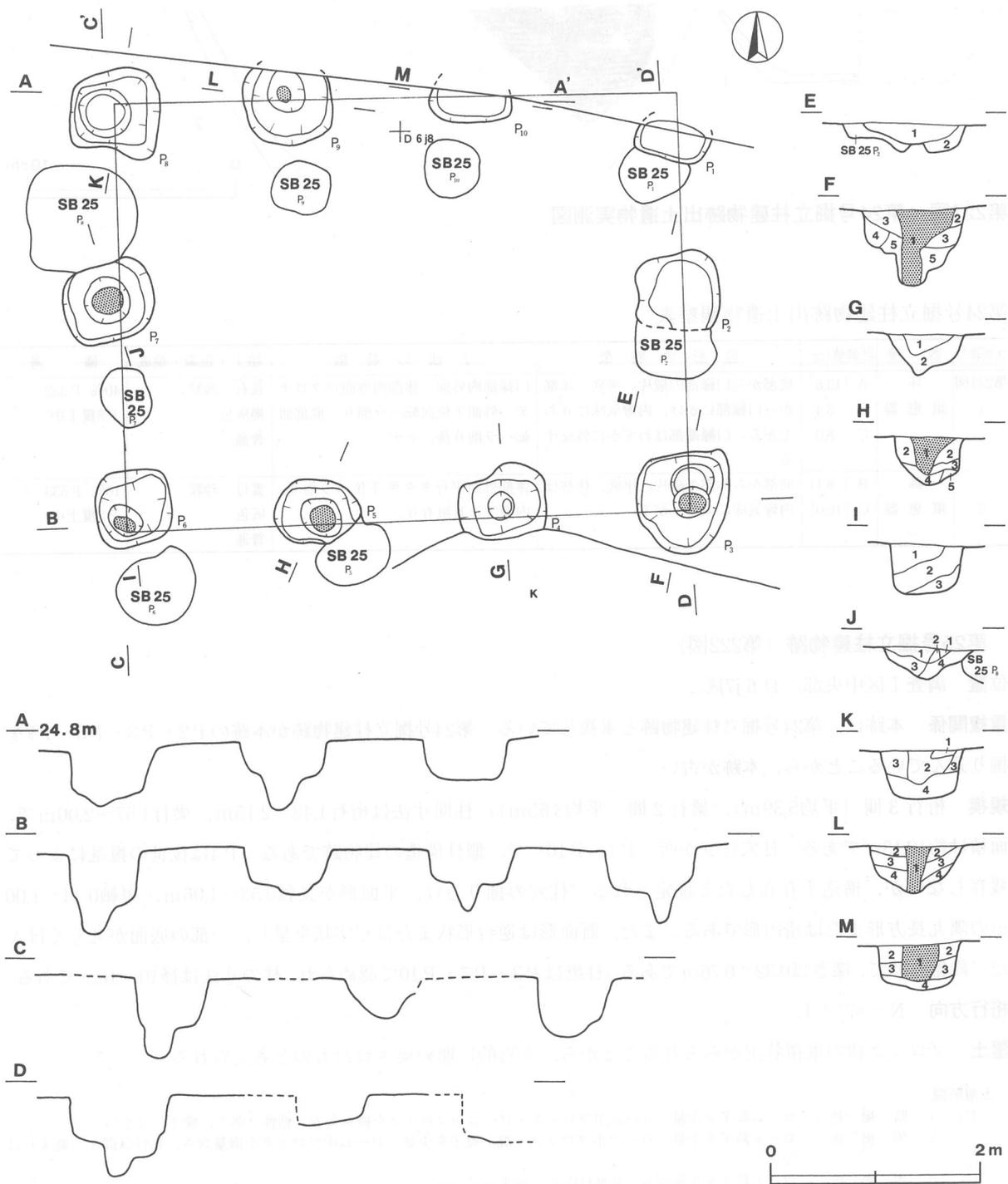
規模 桁行3間(平均5.46m)、梁行2間(平均3.64m)、柱間寸法は桁行1.74~1.91m、梁行1.50~2.16mで、面積は約19.87m²である。柱穴は10か所(P1~P10)で、側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長軸0.71~0.91m、短軸0.43~0.78mの隅丸長方形または楕円形である。また、断面形は逆台形状またはU字状を呈し、一部の底面が丸くくぼんだ二段掘り状になっており、深さは0.28~0.80mである。柱痕はP3・P5~P7・P9・P10で認められ、柱の寸法は径約14cmである。

桁行方向 N-87°-E

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説(P2~P10)

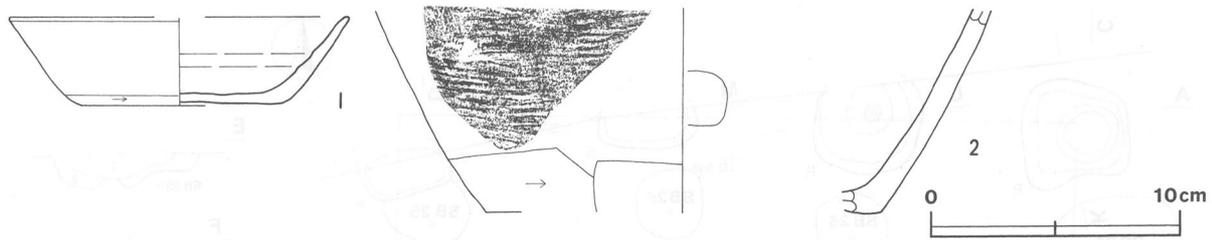
P2	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	3	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	5	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P6	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P7	3	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P8	4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	褐色	ロームを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P9	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P10	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロック・黒褐色土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	極暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。



第220図 第24号掘立柱建物跡実測図

遺物 土師器片41点、須恵器片42点、礫4点が出土している。第221図1の須恵器環がP8の覆土中から、2の須恵器鉢がP3の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 I区中央部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については、ほぼ規則性が認められる。深さについては一定していない。他の掘立柱建物跡との桁行方向をしてみると、隣接する第2・3号掘立柱建物跡とはほぼ同方向に並んでいる。よって、その関連は不明であるが、一連の施設として機能していた可能性は高く、第1・2・3号掘立柱建物跡と同時期に構築されていたと思われる。時期は、出土遺物から奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。また、本跡は第25号掘立柱建物跡の建て替えと考えられる。



第221図 第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第24号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第221図 1	須恵器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 砂粒 褐灰色 普通	40% P532 P8覆土中
		B 3.4				
		C 8.0				
2	鉢 須恵器	B (8.1)	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。内面アテ具痕有り。	雲母 砂粒 灰色 普通	10% P533 P3覆土中
		C [16.0]				

第25号掘立柱建物跡 (第222図)

位置 調査I区中央部, D6j7区。

重複関係 本跡は、第24号掘立柱建物跡と重複している。第24号掘立柱建物跡が本跡のP2・P3・P5・P7を掘り込んでいることから、本跡が古い。

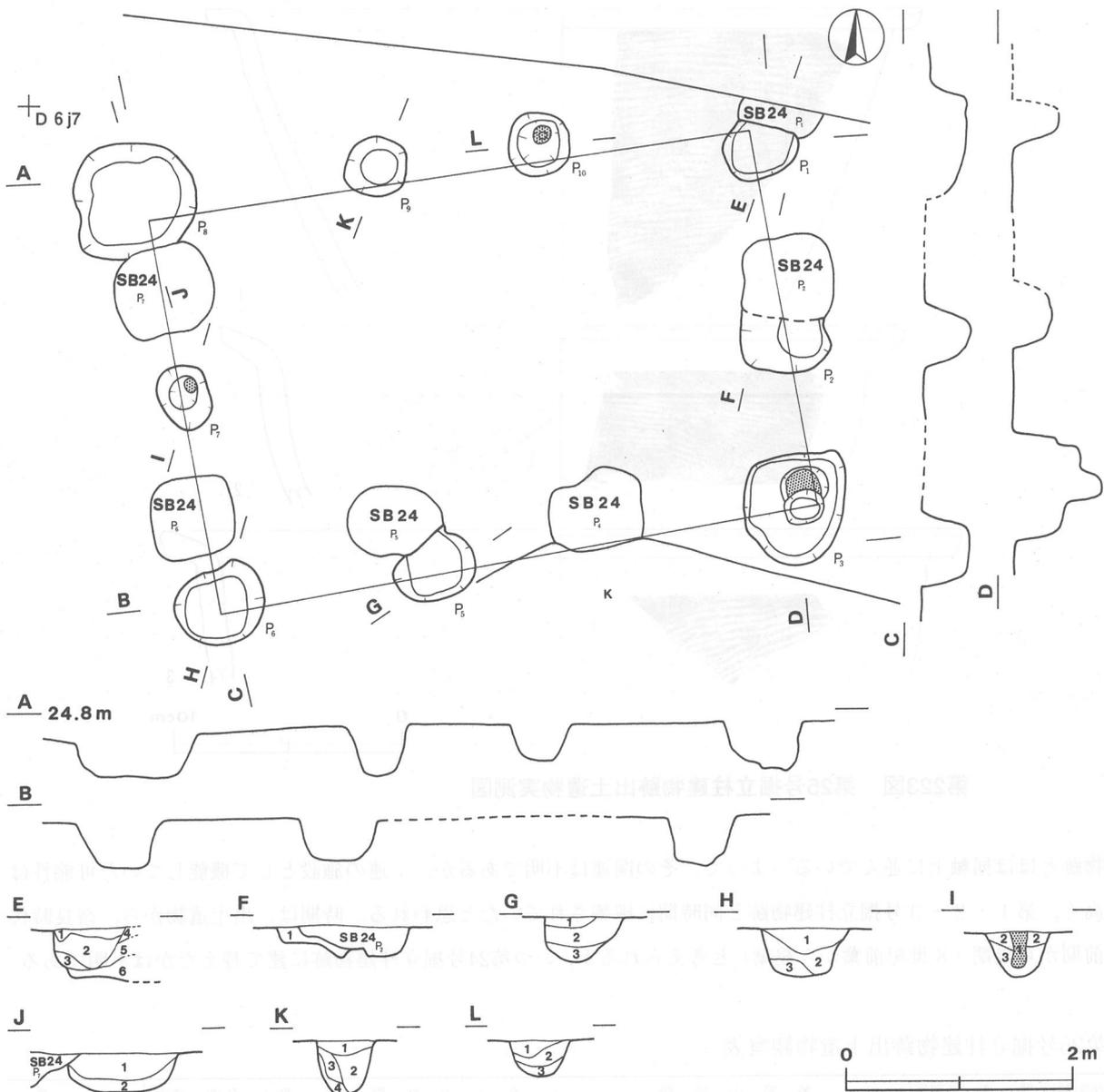
規模 桁行3間(平均5.39m)、梁行2間(平均3.55m)、柱間寸法は桁行1.43~2.15m、梁行1.57~2.00mで、面積は約19.13㎡である。柱穴は9か所(P1~P10)で、側柱構造の建物跡である。P4は後世の攪乱によって残存しないが、構造上存在したと推定される。柱穴の掘り方は、平面形が長軸0.53~1.06m、短軸0.44~1.00mの隅丸長方形または楕円形である。また、断面形は逆台形状またはU字状を呈し、一部の底面が丸くくぼんだ二段掘り状で、深さは0.32~0.76mである。柱痕はP3・P7・P10で認められ、柱の寸法は径10~16cmである。

桁行方向 N-87°-E

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。
	5	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	褐色	ローム粒子・褐色土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	3	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	1	褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P7	3	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

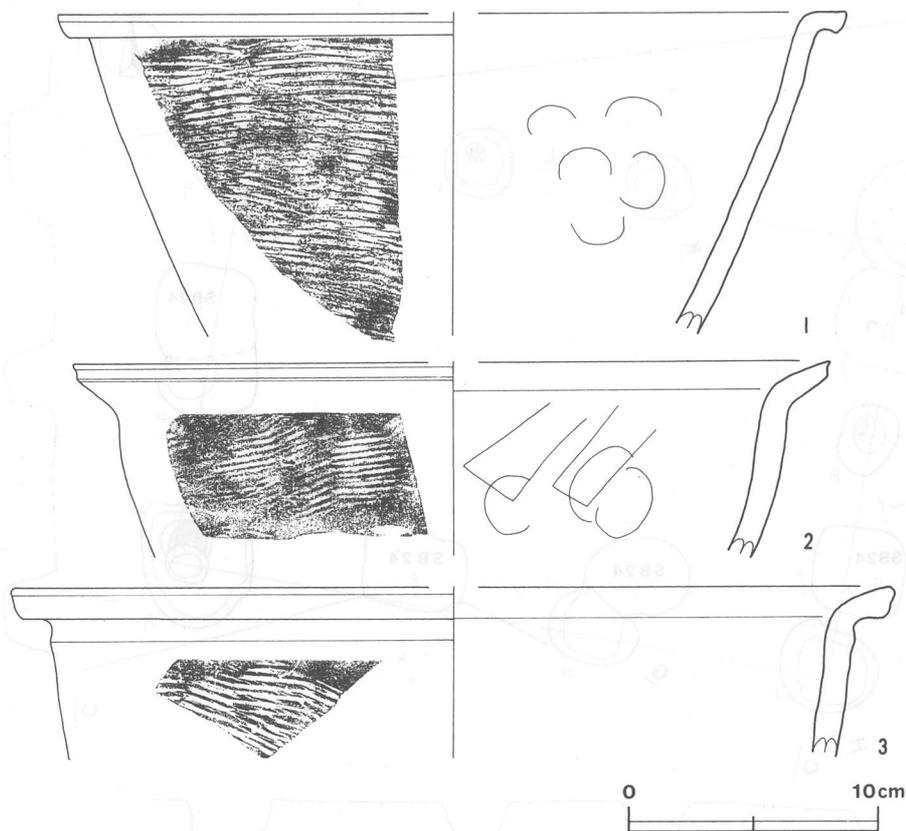


第222図 第25号掘立柱建物跡実測図

P8	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量, ローム大ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P9	1	黒褐色	ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P10	1	暗褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	灰褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片77点, 須恵器片43点, 炭化物が出土している。第223図1の須恵器鉢がP8の覆土中から, 2の須恵器鉢がP8の覆土中から, 3の須恵器甕がP1の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 I区中央部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については, ほぼ規則性が認められる。深さについては一定していない。他の掘立柱建物跡との桁行方向をみると, 隣接する第2・3号掘立柱建



第223図 第25号掘立柱建物跡出土遺物実測図

物跡とほぼ同軸上に並んでいる。よって、その関連は不明であるが、一連の施設として機能していた可能性は高く、第1・2・3号掘立柱建物跡と同時期に構築されていたと思われる。時期は、出土遺物から、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられるが、いつ第24号掘立柱建物跡に建て替えたかは不明である。

第25号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 1	鉢 須恵器	A [31.6] B (13.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	20% P534 P8覆土中
2	鉢 須恵器	A [30.4] B (7.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面ヘラナデ、アテ具痕有り。	雲母 砂粒 灰白色 普通	10% P535 P8覆土中
3	甌 須恵器	A [35.6] B (6.9)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	砂粒 黄灰色 普通	10% P536 P1覆土中

第26号掘立柱建物跡（第224図）

位置 調査Ⅰ区中央部，D 6 c6区。

重複関係 本跡は，第50号住居跡，第138・344～347・352・353号土坑と重複している。第50号住居跡が本跡のP2を，第138号土坑が本跡のP3を，第353号土坑が本跡のP1を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。なお，第344～347・352号土坑との新旧関係については，切り合いがないことから不明である。

規模 桁行3間（平均6.35m），梁行2間（平均4.61m），柱間寸法は桁行1.75～2.50m，梁行2.15～2.57mで，面積は約29.27㎡である。柱穴は9か所（P2・P4～P10）で，側柱構造の建物跡である。P1とP3は住居跡と土坑によって掘り込まれており，確認できなかったが，構造上は存在したと推定される。柱穴の掘り方は，平面形が長軸0.37～0.88m，短軸0.34～0.80mの隅丸長方形または楕円形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈しており，深さは0.33～0.88mである。柱痕はP2・P6・P8・P9で認められ，柱の寸法は径11～18cmである。

桁行方向 N-4°-W

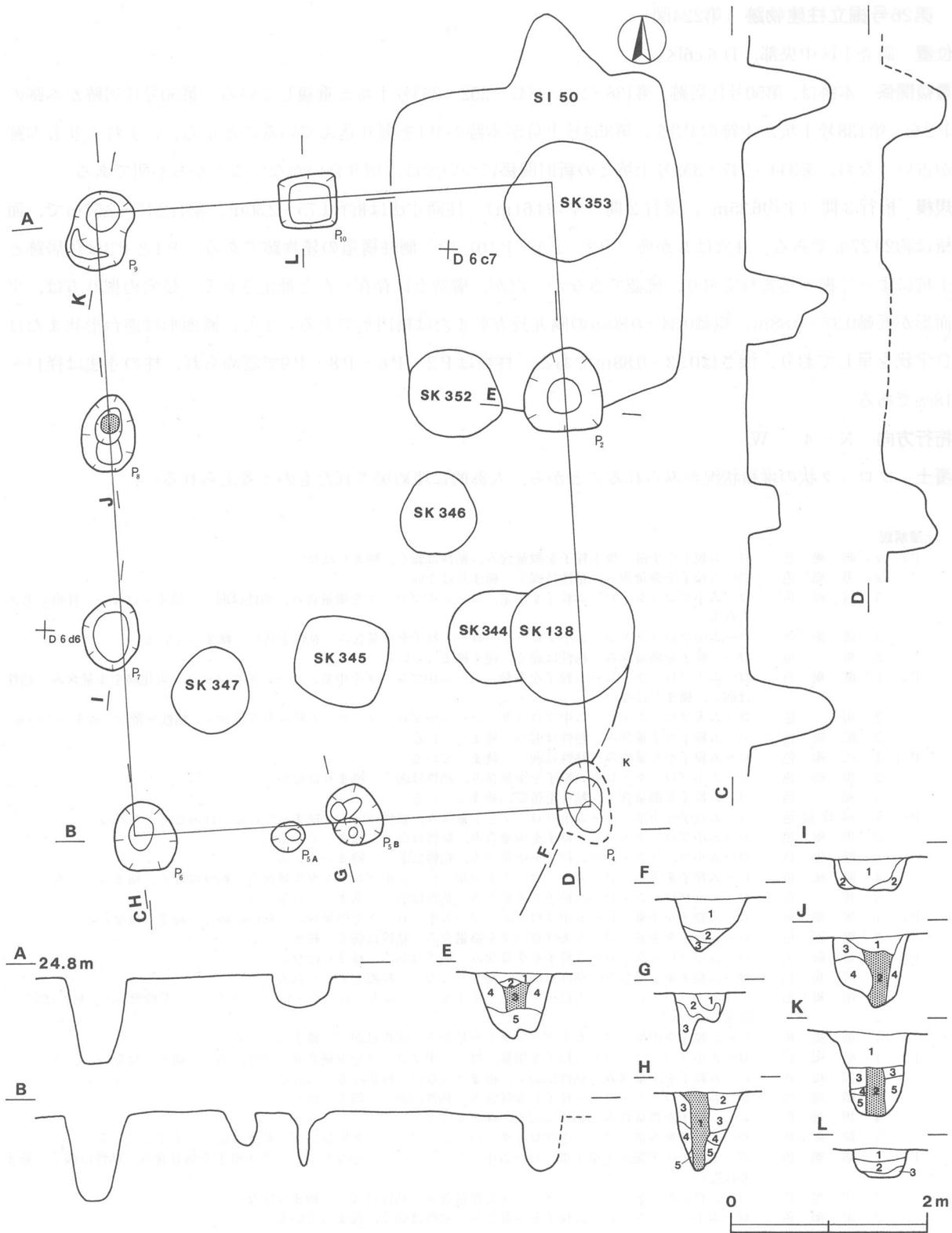
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P2	1	暗褐色	ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。	
	5	褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
P4	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，ローム大ブロック・炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，粘性を帯び，締まっている。
P5B	1	灰褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P6	1	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P7	1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム大ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
P8	1	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・褐色土を少量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P9	1	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P10	1	暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物 土師器片2点，須恵器片7点が出土している。いずれも細片のため，図示できなかった。

所見 Ⅰ区中央部の平坦地に構築されている。柱穴の規模と柱間寸法については，P2を除き，規則性が認められる。深さについては一定していないが，四隅に位置する柱穴は深くなる傾向がある。梁行の中間に位置しているP5AとP5Bは深さが同程度であることから，P5Bの補助穴としてP5Aを使用したと考えられる。第9・17・18・23・27号掘立柱建物跡など，同構造の建物跡と桁行方向はほぼ一致（±5°）している。また，隣接



第224図 第26号掘立柱建物跡実測図

する第6号掘立柱建物跡とも桁行方向に近いことから、一連の施設として機能していた可能性も考えられる。時期は、重複している第50号住居跡が9世紀前葉、第138・353号土坑が9世紀中葉のものと考えられることから、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）に構築されていたと思われる。

第27号掘立柱建物跡（第225図）

位置 調査I区南西部，D 5 f4区。

重複関係 本跡は，第35・36号住居跡，第29号掘立柱建物跡，第248・252B号土坑と重複している。第35号住居跡が本跡のP9とP10を，第36号住居跡が本跡のP1を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。なお，第29号掘立柱建物跡と第248・252B号土坑との新旧関係については，切り合いがないことから不明である。

規模 桁行3間（平均6.53m），梁行2間（平均4.14m），柱間寸法は桁行2.03～2.35m，梁行1.89～2.27mで，面積は約27.03m²である。柱穴は10か所（P1～P10）で，側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.58～0.89m，短径0.55～0.79mの楕円形または円形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈しており，一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.32～0.48mである。柱痕はP2・P4・P6～P8で認められ，柱の寸法は径約17cmである。

桁行方向 N-4°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

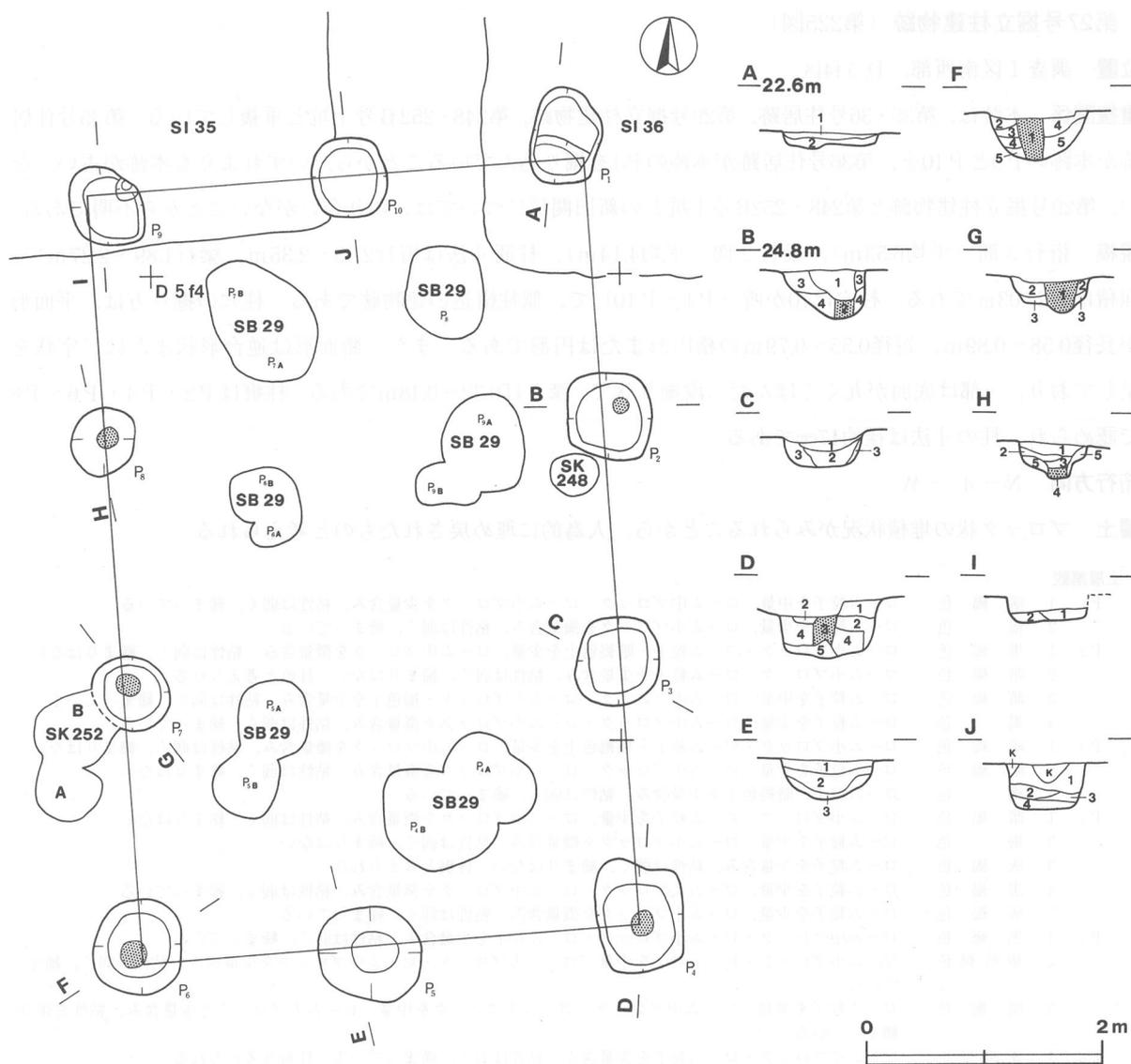
土層解説

P1	1	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
P3	3	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
P4	3	暗褐色	ローム粒子・暗褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2	褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	灰褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
	4	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P5	5	灰褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量，ローム大ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
P6	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	5	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
P7	2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。
	1	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
P9	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性を帯び，締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。
	5	褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P10	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3	極暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロックを少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。	

遺物 土師器片9点，須恵器片5点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 I区南西部の平坦地に構築されている。柱穴の規模，柱間寸法，深さについては，規則性が認められる。

第9・17・18・23・26号掘立柱建物跡など，同構造の建物跡と桁行方向はほぼ一致（±5°）している。また，



第225図 第27号掘立柱建物跡実測図

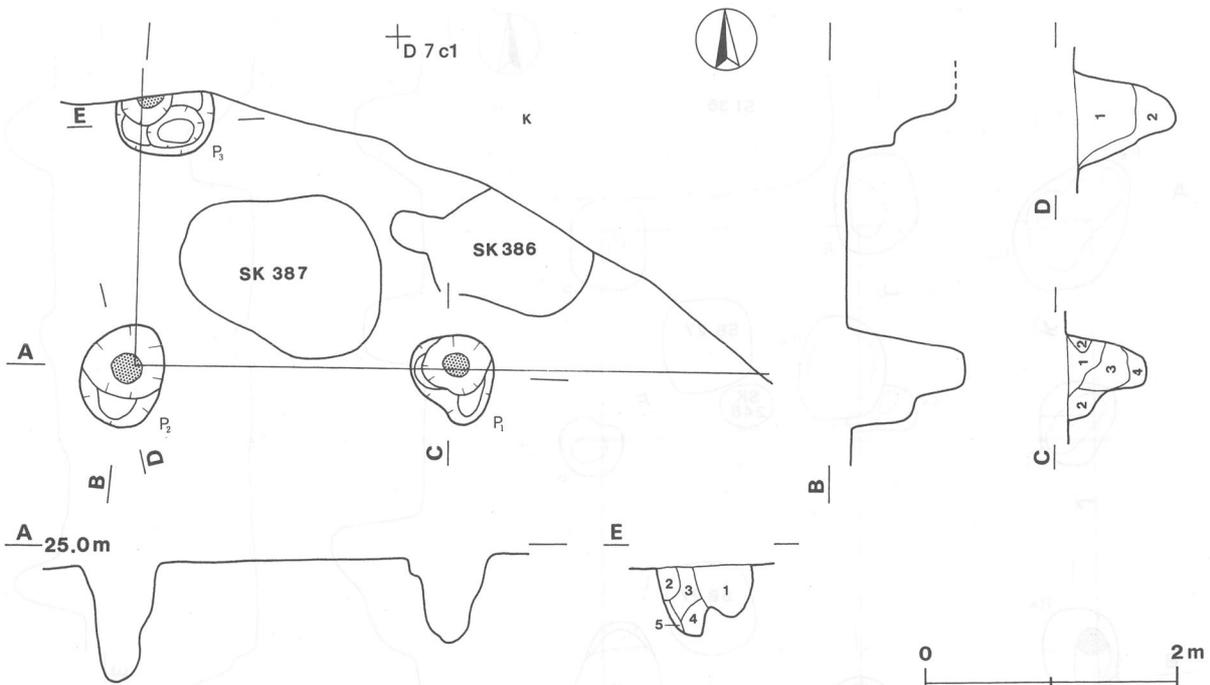
重複する第29号掘立柱建物跡，隣接する第30号掘立柱建物跡とも桁行方向に近いことから，関係は不明であるが，一連の施設として機能していた可能性も考えられる。時期は，重複している第35・36号住居跡が8世紀後葉と考えられることから，奈良時代前期から中期（8世紀前葉から中葉）に構築されていたと思われる。

第28号掘立柱建物跡（第226図）

位置 調査I区東部，D 6 c0区。

重複関係 本跡は，第386・387A・387B号土坑と重複しているが，切り合いがないことから新旧関係は不明である。

規模 北部・東部で攪乱を受けていることから，全体の規模は不明である。残存している部分は，桁行1間（2.20m），梁行1間（2.60m）である。柱穴は3か所（P1～P3）で，側柱構造の建物跡と推定される。柱穴の掘り方は，平面形が長径0.70～0.82m，短径0.55～0.64mの楕円形または円形である。また，断面形はU字状を呈し，一部の底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.60～0.94mである。柱痕はすべての柱穴で認められ，柱の寸法は径21～24cmである。



第226図 第28号掘立柱建物跡実測図

桁行方向 不明

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

P1	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	極暗褐色	ローム中ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片29点、須恵器片14点が出土している。細片のため図示できなかった。

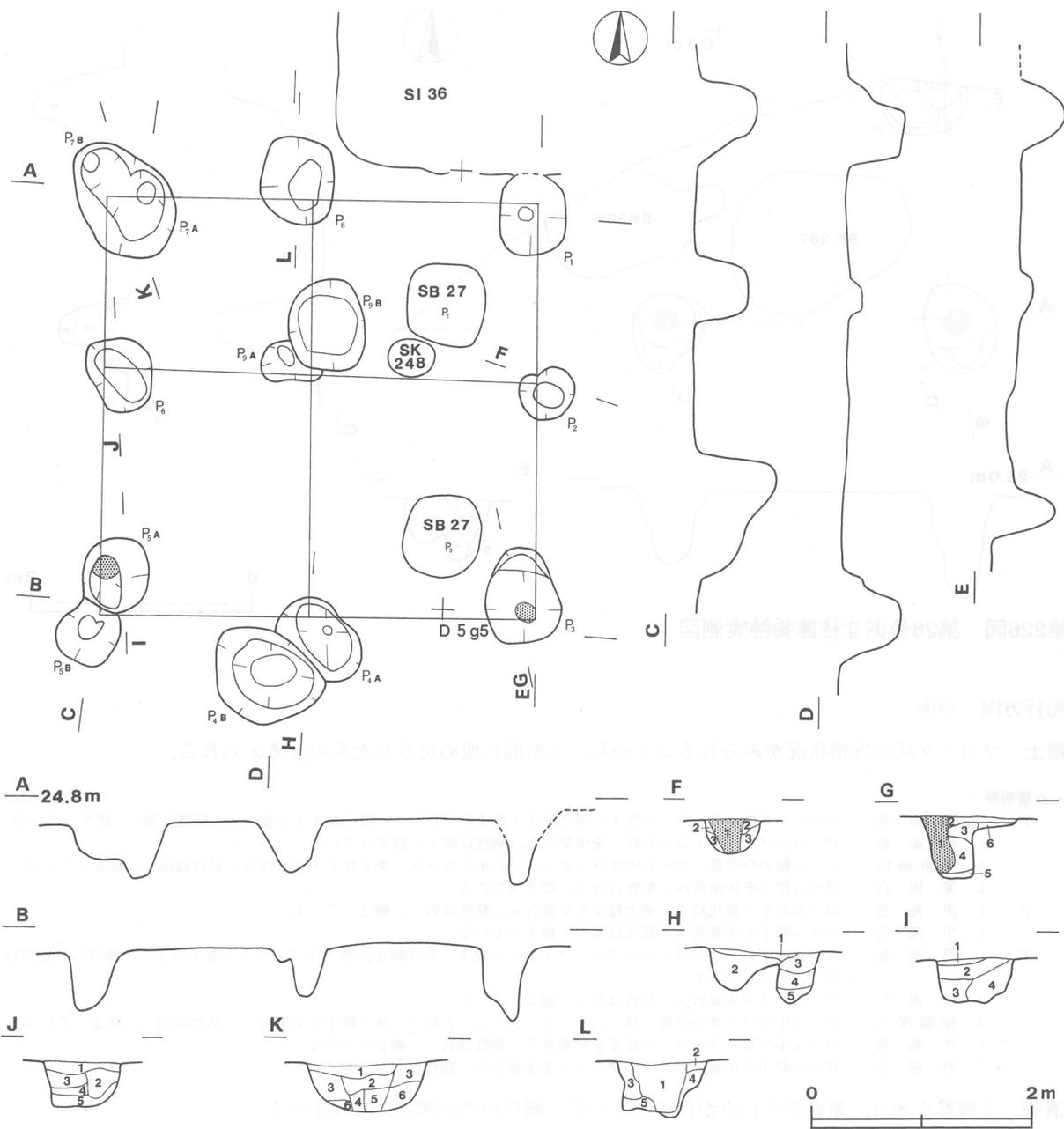
所見 I区東部の平坦地に構築されている。ほとんどが攪乱を受けているため、正確な構造や規模は不明である。底面の掘り方がしっかりと、柱痕と思われるくぼみが確認されたことから、掘立柱建物跡と判断した。時期は、出土遺物から、奈良時代中期（8世紀中葉）と考えられ、他の掘立柱建物跡との関係は不明であるが、第1・2・3・9・24・25号掘立柱建物跡と同時期に構築され、一連の施設として機能していた可能性は高い。

第29号掘立柱建物跡（第227図）

位置 調査I区南西部，D5f4区。

重複関係 本跡は、第36号住居跡，第27号掘立柱建物跡，第248号土坑と重複している。第36号住居跡が本跡のP1を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、第27号掘立柱建物跡，第248号土坑との新旧関係は、切り合いがないことから不明である。

規模 桁行2間（平均3.75m），梁行2間（平均3.78m），柱間寸法は桁行1.50～2.50m，梁行1.65～2.02mで、



第227図 第29号掘立柱建物跡実測図

面積は約14.18㎡である。柱穴は13か所（P1～P9B）で、総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.50～1.15m，短径0.45～0.81mの楕円形，円形または不定形である。また，断面形は逆台形状またはU字状を呈し，一部底面が丸くくぼんだ二段掘り状で，深さは0.16～0.73mである。柱痕はP2・P3・P5Aで認められ，柱の寸法は径14～21cmである。

桁行方向 N - 3° - W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

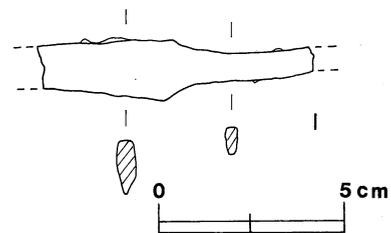
土層解説

- | | | |
|----|--------|---|
| P2 | 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

	3	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	6	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。
P4 (A・B)			
	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロック・炭化物を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P5A	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量, 炭化粒子・焼土中ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
P6	1	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量, 炭化物・焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	極暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム中ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P7 (A・B)			
	1	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。

遺物 土師器片22点, 須恵器片26点, 鉄製品1点(刀子)が出土している。第228図1の刀子がP1の覆土中から出土している。

所見 I区南西部の平坦地に位置している。柱穴の規模は, 中央の桁列は小さい傾向があるが, 深さ, 断面形ともにP2・P9A・P9Bを除いてほぼ規則性が認められる。柱間寸法については, 中央の桁列が北側の桁列に寄り気味で, 特にP9A・P9Bは極端に寄っている。第1・4A・4B・5・13・30号掘立柱建物跡など, 桁行2間, 梁行2間の総柱構造の建物跡と桁行方向はほぼ一致(±4°)している。また, 別構造の第12・27号掘立柱建物跡などの隣接している建物跡ともほぼ一致(±1°)している。よって, これらの掘立柱建物跡と同時期に, 一連の施設として機能していた可能性が高い。時期は, 出土遺物と重複している住居跡が8世紀後葉と考えられることから, 奈良時代前期から中期(8世紀前葉から中葉)と思われる。



第228図 第29号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第29号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第228図1	刀 子	(7.4)	1.6	0.5	(12)	P1覆土中	M60

第30号掘立柱建物跡 (第229図)

位置 調査I区西部, D 5 d3区。

重複関係 本跡は, 第31・35号住居跡, 第16号掘立柱建物跡, 第230・234号土坑と重複している。第31号住居跡が本跡のP1・P7・P8を, 第35号住居跡が本跡のP3・P4・P5を掘り込んでいることから, いずれよりも本跡が古い。また, 本跡が第16号掘立柱建物跡のP2とP8を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。第230・234号土坑との新旧関係は, 切り合いがないことから不明である。

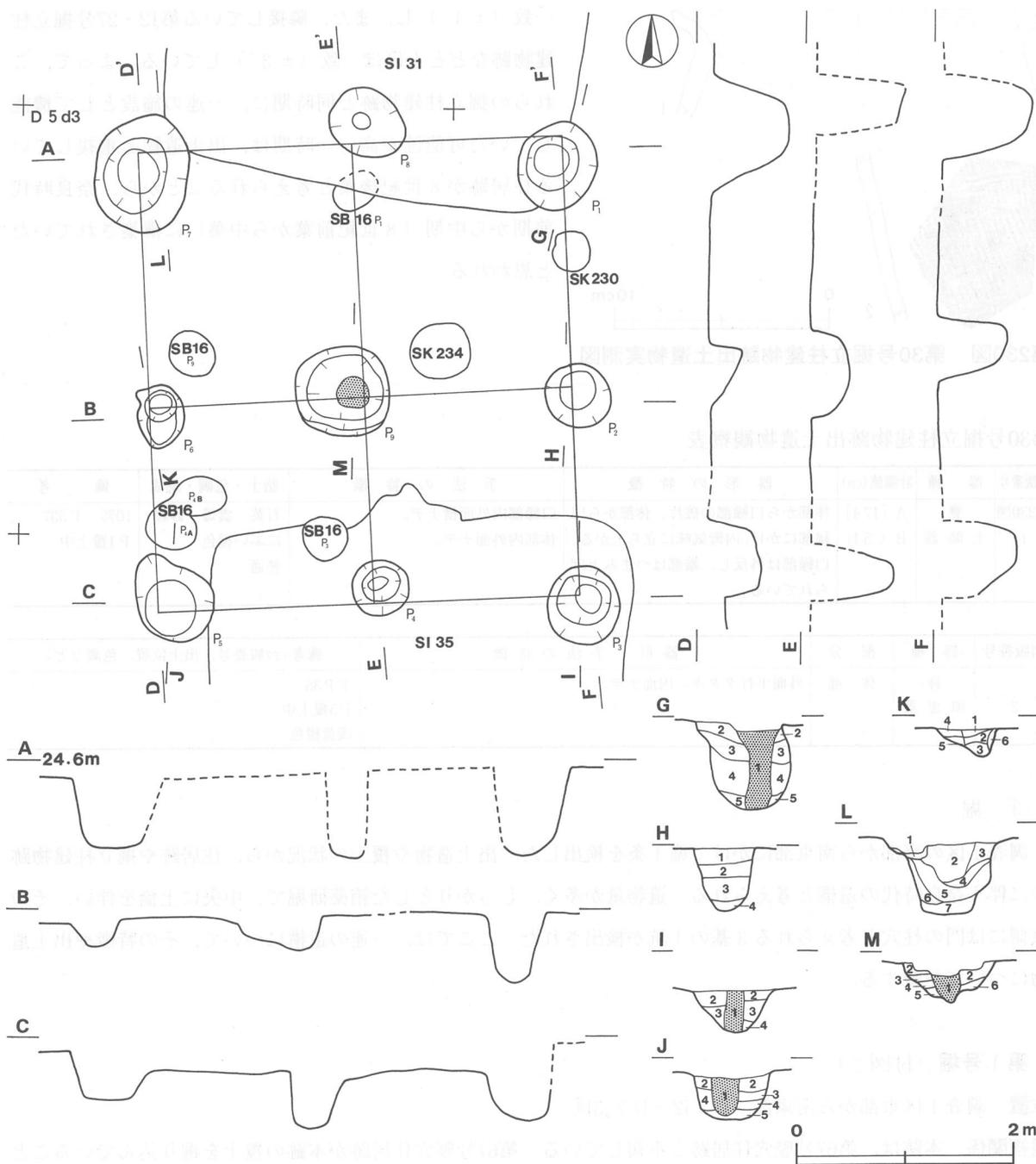
規模 桁行2間(平均4.18m), 梁行2間(平均3.90m), 柱間寸法は桁行1.80~2.50m, 梁行1.75~2.15mで, 面積は約16.30m²である。柱穴は9か所(P1~P9)で, 総柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径0.52~1.10m, 短径0.44~0.86mの楕円形または円形である。また, 断面形は逆台形状またはU字状を呈し, 一部は底面が丸くくぼんだ二段掘り状で, 深さは0.27~0.87mである。柱痕はP1・P3~P5・P9で認められ, 柱の寸法は径16~30cmである。

桁行方向 N-3°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから, 人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----|---|------|---|
| P1 | 1 | 黒褐色 | ローム粒子を少量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| | 5 | 灰褐色 | ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P2 | 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロック・炭化粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 極暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 4 | 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| P3 | 1 | 黒褐色 | ローム粒子を少量, ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム粒子を少量, ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 4 | 暗褐色 | ローム粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P5 | 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 4 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| P6 | 1 | 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 3 | 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| | 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 5 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 6 | 褐色 | ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| P7 | 1 | 暗褐色 | ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム中ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム粒子・砂を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| | 4 | 灰褐色 | ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 5 | 灰褐色 | ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・暗褐色土を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 6 | 褐色 | ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| | 7 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| P9 | 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子・褐色土を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |

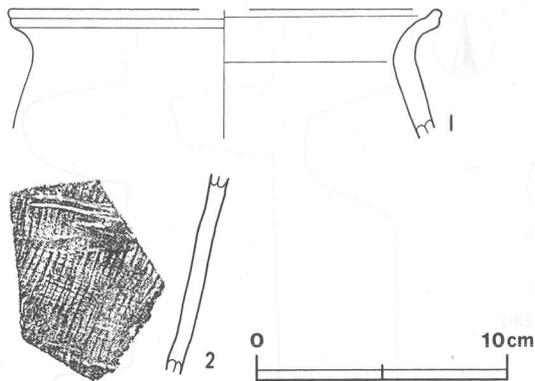


第229図 第30号掘立柱建物跡実測図

- | | | |
|---|-----|---|
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片15点、須恵器片9点が出土している。第230図1の土師器甕がP1の覆土中から、2の須恵器鉢がP5の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 I区西部の平坦地に位置している。柱穴の規模は、深さ、断面形ともにP6を除いてほぼ規則性が認められる。柱間寸法については、中央の桁列が南側の桁列に若干寄り気味であるが、ほぼ規則性が認められる。第1・4A・4B・5・13・29号掘立柱建物跡など、桁行2間、梁行2間の総柱構造の建物跡と桁行方向はほぼ



第230図 第30号掘立柱建物跡出土遺物実測図

一致 ($\pm 4^\circ$) し、また、隣接している第12・27号掘立柱建物跡などともほぼ一致 ($\pm 3^\circ$) している。よって、これらの掘立柱建物跡と同時期に、一連の施設として機能していた可能性が高い。時期は、出土遺物と重複している住居跡が8世紀後葉と考えられることから、奈良時代前期から中期 (8世紀前葉から中葉) に構築されていたと思われる。

第30号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第230図 1	甕 土師器	A [17.4] B (5.1)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。 体部内外面ナデ。	石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	10% P537 P1覆土中

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
2	鉢 須恵器	体部	外面平行タタキ。内面ナデ。	T P35 P5覆土中 浅黄橙色

(3) 堀

調査I区の東部から南東部にかけて堀1条を検出した。出土遺物や覆土の状況から、住居跡や掘立柱建物跡等に伴う奈良時代の遺構と考えられる。遺物量が多く、しっかりとした箱葉研掘で、中央に土橋を伴い、その東側には門の柱穴と考えられる3基の土坑が検出された。ここでは、一連の遺構について、その特徴や出土遺物について記載する。

第1号堀 (付図2)

位置 調査I区東部から南東部, C7i2~D7j3区。

重複関係 本跡は、第67号竪穴住居跡と重複している。第67号竪穴住居跡が本跡の覆土を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は、調査I区東部から南に向かって直線的に延びている。一部攪乱を受けていること、また、南東部で区域外に至ることから、全体の規模は不明である。確認された長さは44.80mで、上幅1.24~1.80m、下幅0.75~1.25m、深さ0.67~0.78m、土橋部分は長さ3.30mである。断面形は箱葉研を呈する。

方向 N-5°-W

覆土 A断面は12層, C断面は13層, D断面は5層, F断面7層に分層され、ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

A断面	1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	2	灰褐色	ローム粒子を少量, ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。

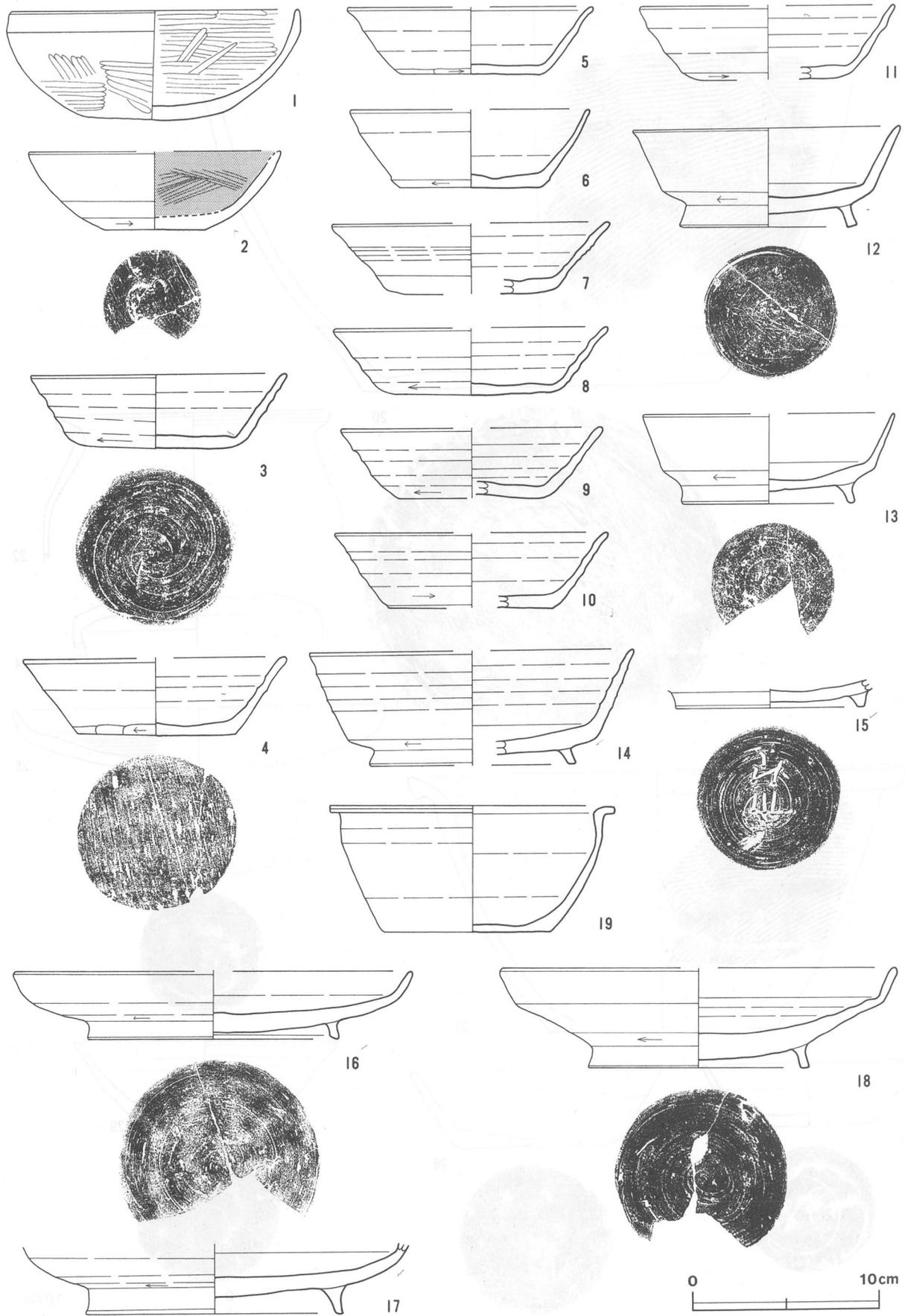
	4	灰褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・砂を少量, ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	7	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・砂・黒褐色土を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	8	褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック少量を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	9	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	10	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロック・炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	11	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	12	暗褐色	ローム粒子を少量, 砂を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
C断面	1	暗褐色	ローム粒子を中量, 焼土粒子を少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	2	極暗褐色	ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	3	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	4	褐色	ローム粒子・灰褐色土を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	5	黒褐色	ローム粒子を少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	6	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	7	極暗褐色	黒褐色土を少量, ローム粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	8	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	9	暗褐色	ローム粒子・褐色土を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	10	灰褐色	ローム粒子を少量, ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	11	灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	12	褐色	ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
	13	灰褐色	ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
D断面	1	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量, 炭化物・炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	極暗褐色	ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・焼土中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム中ブロックを少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
	5	褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
F断面	1	黒褐色	焼土粒子を中量, ローム粒子・焼土小ブロックを少量, ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量, ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	6	褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
	7	褐色	ローム粒子を中量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片1538点, 須恵器片1561点, 土製品1点(不明土製品), 石器1点(砥石), 瓦1点, 椀状滓2点, 礫12点, 自然遺物2点(山モモの種子)が出土している。遺物は, 土橋を挟んで堀の北側(A区)と南側(B区)から多量に出土しているが, その割合はA区から43.4%(土師器片592点, 須恵器片761点, 礫11点, 椀状滓2点), B区から56.6%(土師器片946点, 須恵器片800点, 土製品1点, 瓦1点, 砥石1点, 礫1点, 山桃の種子2点)である。それぞれの区の北部に遺物が集中している。また, 遺物の出土層位は, 覆土上層から出土したものが56.3%, 覆土中層から出土したものが23.6%, 覆土下層または底面直上から出土したものが13.8%, その他が6.3%で, ほとんど覆土上層から覆土中層にかけて出土している。これらの遺物は, 堀が廃絶され, 人為的に埋め戻された時に投棄されたものと思われる。A区から出土しているものは, 第231図1の土師器坏が南部の底面直上から, 3・4の須恵器坏, 12の須恵器高台付坏, 19の須恵器小形鉢, 第232図24の須恵器長頸瓶が北部の覆土中層から, 第231図8の須恵器坏が南部の覆土下層から, 13・15の須恵器高台付坏(15は底部外面に刻書「山川」), 第235図44・45の椀状滓が北部の覆土上層からそれぞれ出土している。また, B区から出土しているものは, 第232図26の須恵器坏が南部の覆土中層から, 27の須恵器坏が北部の覆土上層から覆土中層にかけて, 28の須恵器坏, 第235図46の軒丸瓦が北部の覆土上層から, 第233図34の須恵器高盤が南部の覆土上層から, 35の土師器椀が北部の覆土下層から, 第234図43の須恵器甑が北部から中央部の覆土上層から覆土中層にかけてそれぞれ出土している。また, 山モモの種子2点はB区の覆土上層から出土している。

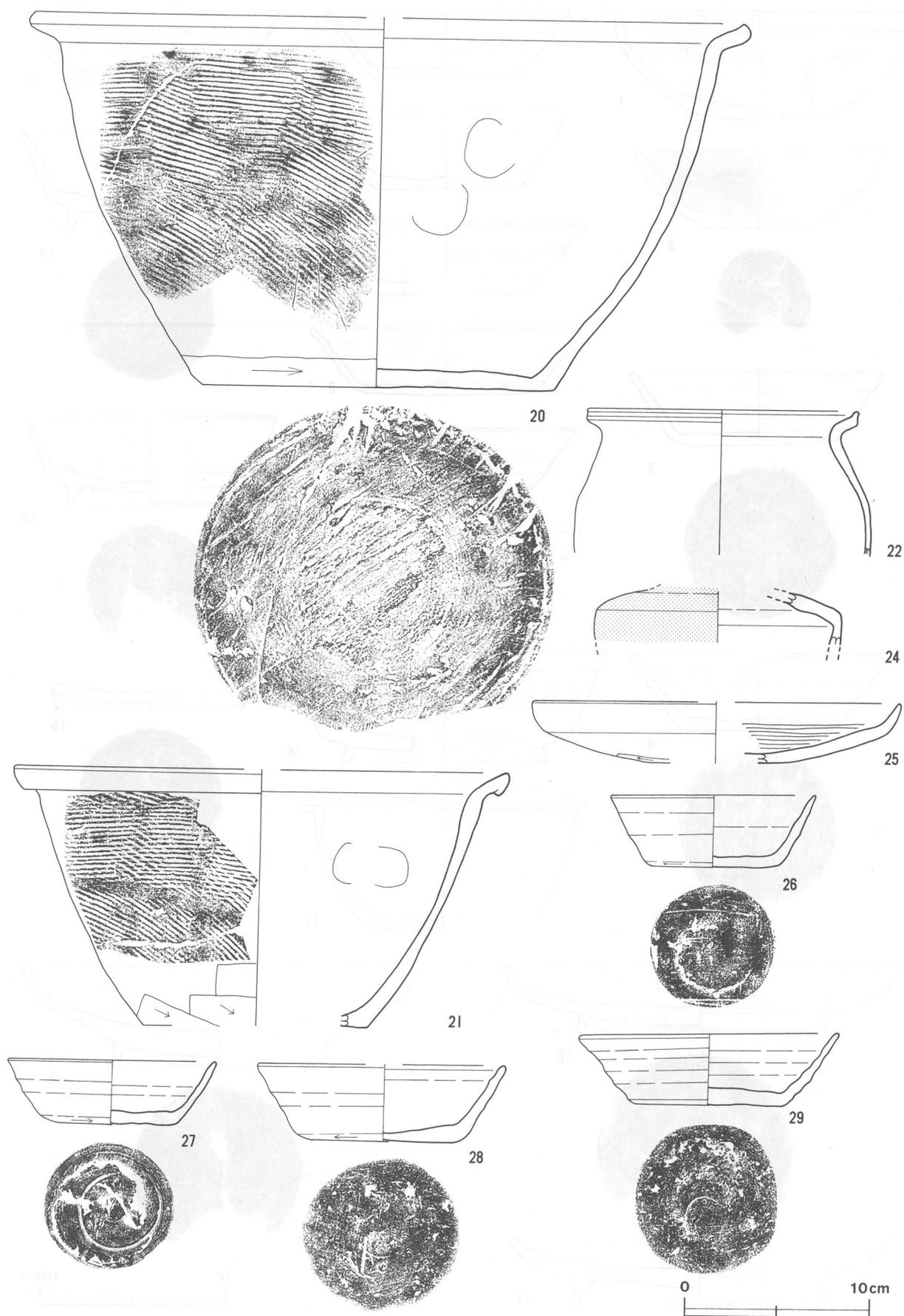
所見 本跡は調査Ⅰ区の東部から南東部に延び、その西側に第1・2・3・8・24・25号掘立柱建物跡がー列に並んでいる。そして、それらの桁行方向は堀と直交している。また、堀の北端から北側には奈良時代の掘立柱建物跡は構築されていない。よって、堀は集落施設を区画するために機能していたと思われる。時期は、重複している第67号住居跡が9世紀後葉と考えられることや出土遺物、遺構の配置状況から、奈良時代前期（8世紀前葉）に構築され、後期（8世紀後葉）に廃絶されたと考えられる。

第1号掘出土遺物観察表

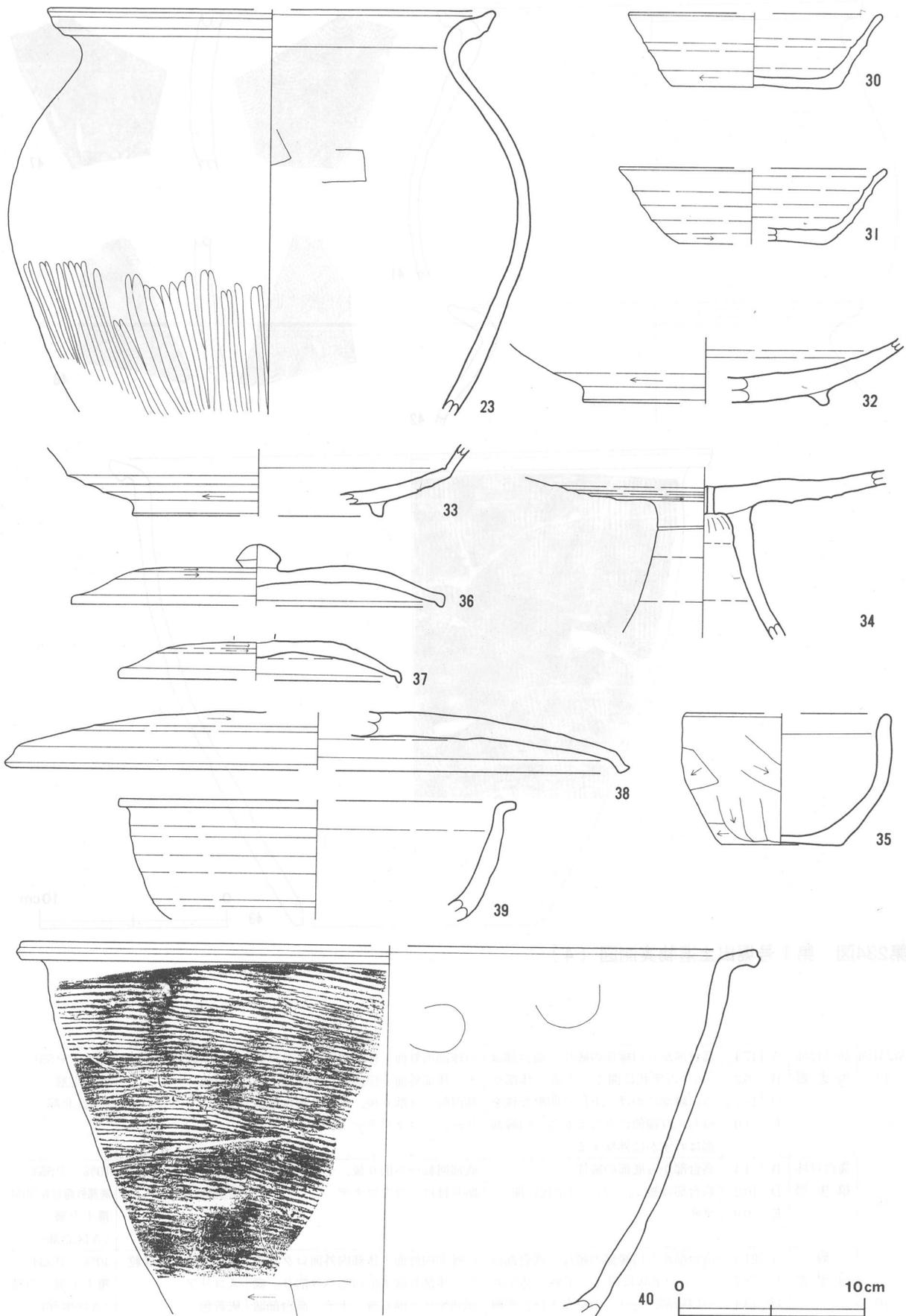
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 1	坏土師器	A 15.5 B 6.2 C 7.6	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は直立する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ後、底部にかけヘラ磨き。	石英 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	90% P503 底面直上 (A区南部)
2	坏土師器	A [13.6] B 4.3 C 5.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、一方向の手持ちヘラ削り。	雲母 スコリア 砂粒 内面 黒色 外面 明褐色 普通	30% P538 内面黒色処理 底部外面黒斑 内面一部剥離 覆土上層(A区北部)
3	坏須恵器	A 13.7 B 4.1 C 8.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P539 覆土中層 (A区北部)
4	坏須恵器	A [14.3] B 4.1 C 8.5	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、一方向の手持ちヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P540 覆土中層 (A区北部)
5	坏須恵器	A [13.2] B 3.7 C 7.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒 灰色 普通	40% P541 覆土上層 (A区北部)
6	坏須恵器	A [13.0] B 4.2 C 7.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	40% P542 覆土中層 (A区南部)
7	坏須恵器	A [14.8] B 3.8 C [9.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰色 普通	30% P543 覆土中層 (A区北部)
8	坏須恵器	A [14.6] B 3.6 C 8.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P544 覆土下層 (A区南部)
9	坏須恵器	A [14.0] B 3.8 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	砂粒 黄色 普通	40% P545 覆土中層
10	坏須恵器	A [14.6] B 4.1 C 8.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	20% P546 覆土上層 (A区北部)
11	坏須恵器	A [13.6] B 4.0 C [7.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	20% P547 覆土下層 (A区北部)
12	高台付坏須恵器	A 14.5 B 5.5 D 9.6 E 1.2	高台部・体部・口縁部の一部欠損。高台部は長く「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 内面 黄灰色 外面 黒色 普通	80% P549 覆土中層 (A区北部)
13	高台付坏須恵器	A [13.6] B 4.9 D 9.4 E 1.1	底部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P550 覆土上層 (A区北部)



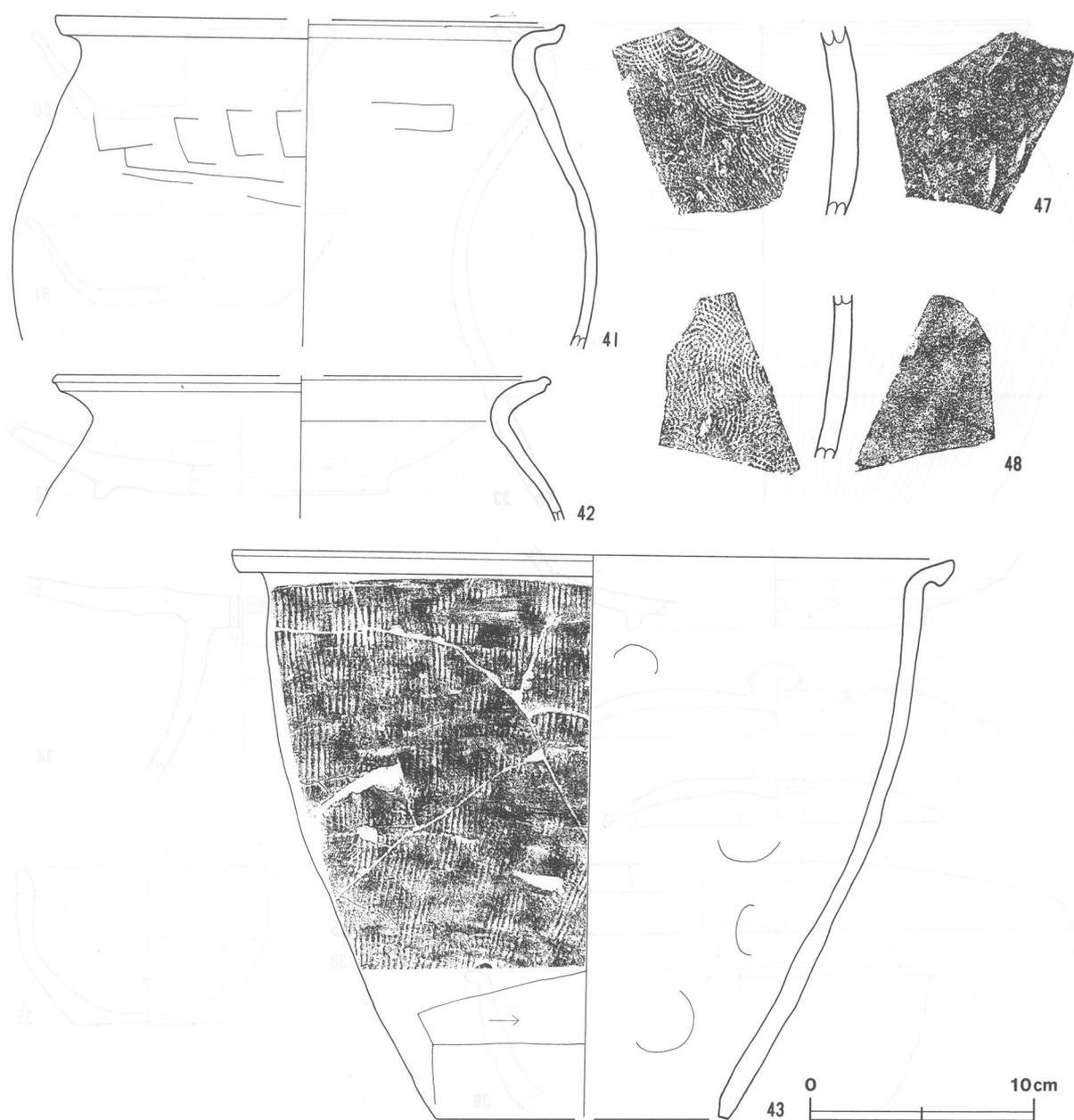
第231图 第1号掘出土遗物实测图(1)



第232图 第1号掘出土遺物実測図(2)

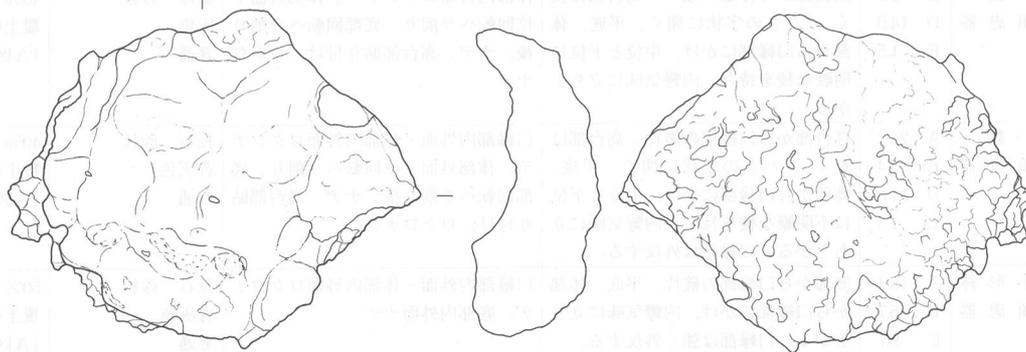


第233图 第1号堀出土遺物実測図(3)

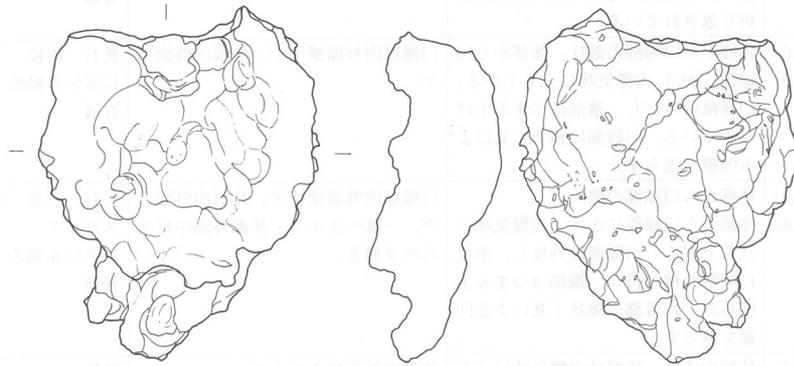
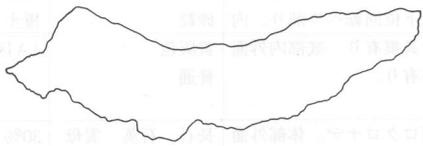


第234図 第1号堀出土遺物実測図(4)

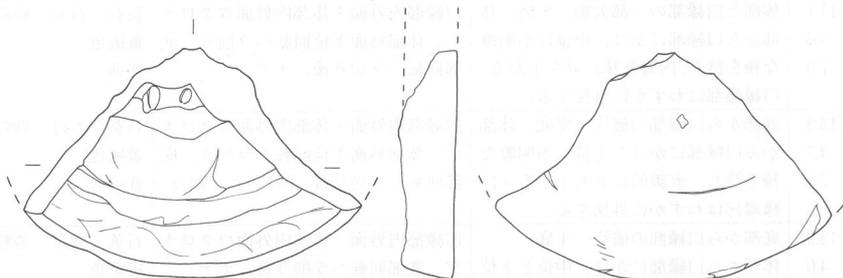
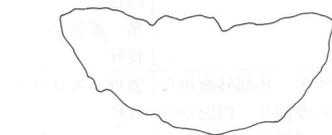
第231図 14	高台付坏 須惠器	A [17.4] B 6.2 D [11.2] E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	30% P551 覆土上層 (A区北部)
15	高台付坏 須惠器	B (1.4) D 10.2 E 0.9	高台部から底部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。	底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	10% P553 底部外面刻書「山川」 覆土上層 (A区北部)
16	盤 須惠器	A [21.4] B 3.7 D 13.4 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 灰黄色 普通	40% P554 覆土上層～中層 (A区南部)



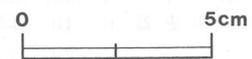
44



45



46



第235図 第1号堀出土遺物実測図(5)

第231図	盤 須恵器	B (3.7) D 14.0 E 1.5	高台部から体部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 灰色 普通	40% P 555 覆土中層 (A区北部)
18	盤 須恵器	A [21.2] B 5.4 D 11.8 E 1.3	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	40% P 556 覆土中層 (A区北部)
19	小形鉢 須恵器	A 15.4 B 6.7 C 9.7	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部内外面ナデ。	長石 砂粒 青灰色 普通	50% P 560 覆土中層 (A区北部)
第232図	鉢 須恵器	A [38.6] B 20.1 C 19.3	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、下位回転ヘラ削り。内面ナデ、アテ具痕有り。底部内外面ナデ、モミ痕有り。	長石 スコリア 砂粒 黄灰色 普通	40% P 561 覆土上層～中層 (A区北部)
21	鉢 須恵器	A [26.8] B 14.0 C [12.2]	底部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられた後、折り返されている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。内面ナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P 562 覆土上層～中層 (A区北部)
22	小形甕 土師器	A 14.6 B (7.9)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P 563 覆土上層～中層 (A区北部)
第233図	甕 土師器	A [24.0] B (21.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ、一部ヘラナデ。体部外面中位からヘラ磨き。	長石 石英 砂粒 スコリア にぶい赤褐色 普通	30% P 564 二次焼成 覆土中層 (A区北部)
第232図	長頸瓶 須恵器	B (2.8)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、上位で最大径を有する。	体部内外面ロクロナデ。	砂粒 灰色 釉 黄色 良好	10% P 559 外面一部自然釉 覆土中層 (A区北部)
25	坏 土師器	A [19.9] B (3.3)	底部から口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面から底部外面にかけてヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。	雲母 スコリア 砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P 565 覆土中層～下層 (B区中央部)
26	坏 須恵器	A 11.2 B 4.0 C 6.9	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 暗黄灰色 普通	90% P 566 覆土中層 (B区南部)
27	坏 須恵器	A 11.1 B 3.6 C 7.0	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 黄灰色 普通	80% P 567 覆土上層～中層 (B区北部)
28	坏 須恵器	A [13.3] B 4.7 C 7.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	60% P 568 覆土上層 (B区北部)
29	坏 須恵器	A 13.9 B 4.0 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	50% P 569 覆土中層 (B区南部)
第233図	坏 須恵器	A [13.4] B 4.0 C 9.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	40% P 570 覆土上層 (B区北部)

第233図	坏 須恵器	A [14.2] B 4.1 C [7.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P 571 覆土上層 (B区北部)
32	盤 須恵器	B (3.6) D [13.2] E 0.9	高台部から体部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	30% P 572 覆土上層～中層 (B区南部)
33	盤 須恵器	B (3.9) D [13.3] E 0.8	高台部から口縁部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 灰黄色 普通	30% P 573 覆土上層～中層 (B区北部)
34	高 須恵器	B (9.2) E (7.2)	脚部から体部の破片。脚部はラップ状に広がる。底部は平底で、中心に小孔を有する。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ、外面下位回転ヘラ削り。脚部貼り付け、内外面ロクロナデ。内面一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P 574 覆土上層 (B区南部)
35	碗 土師器	A [10.9] B 7.1 C 6.6	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、下位ヘラ削り。内面ナデ。底部外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	70% P 575 覆土下層 (B区北部)
36	蓋 須恵器	A [20.1] B 3.3 F 2.4 G 1.2	つまみから口縁部の破片。宝珠状のつまみが付く。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	30% P 576 覆土上層 (B区)
37	蓋 須恵器	A [15.2] B (2.1)	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、内彎気味に開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	40% P 577 覆土上層 (B区北部)
38	蓋 須恵器	A [33.6] B (3.2)	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して外反する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	30% P 578 覆土上層 (B区北部)
39	小形鉢 須恵器	A [21.3] B (6.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	30% P 580 覆土上層～中層 (B区北部)
40	鉢 須恵器	A [39.6] B (19.9)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。内面ナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	20% P 579 覆土中層 (B区北部)
第234図	甕 土師器	A [22.8] B (14.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ、一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	20% P 581 二次焼成 覆土中層 (B区北部)
42	甕 土師器	A [22.0] B (6.4)	体部から口縁部の破片。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P 582 覆土上層～中層 (B区北部)
43	甕 須恵器	A 32.6 B 25.4 C [13.3]	底部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部は折り返されている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面上位平行タタキ、下位ヘラ削り。内面ナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰褐色 普通	50% P 583 覆土上層～中層 (B区北部 ～中央部)

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第235図44	碗 状 滓	8.9	10.9	3.0	385	覆土上層 (A区北部)	M61A
45	碗 状 滓	7.5	7.4	3.5	284	覆土上層 (A区北部)	M61B

図版番号	器種	計測値				器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第235図 46	軒丸瓦					瓦当面剥離。底面ヘラナデ。	T12 覆土上層(B区北部) 灰色
		(6.1)	(9.0)	(1.5)	(69)		

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
第234図 47	甕 須恵器	体部	外面同心円状のタタキ。内面ナデ, アテ具痕有り。	TP36 覆土下層(A区) 内面 灰色, 外面 暗青灰色
48	甕 須恵器	体部	外面同心円状のタタキ。内面ナデ, アテ具痕有り。	TP37 覆土中層(A区) 灰黄色

第407号土坑 (付図2)

位置 調査I区南東部, D7e3区。

規模と形状 平面形は, 径0.27mほどの円形で, 深さ26cmである。底面は皿状で, 円形を呈している。壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 出土していない。

所見 第1号堀の東側, 土橋の幅とほぼ同じ間隔で, 第408号土坑と対称的に配置されている。時期は, 第1号堀と同時期と考えられることから, 奈良時代前期から後期(8世紀前葉から後葉)と思われる。

第408号土坑 (付図2)

位置 調査I区南東部, D7f3区。

規模と形状 平面形は, 径0.26mほどの円形で, 深さ21cmである。底面は丸くくぼんだ二段掘り状で, 楕円形を呈している。壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなり, ローム粒子が多く堆積していることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 出土していない。

所見 第1号堀の東側, 土橋の幅とほぼ同じ間隔で, 第407号土坑と対称的に配置されている。時期は, 第1号堀と同時期と考えられることから, 奈良時代前期から後期(8世紀前葉から後葉)と思われる。

第409号土坑 (付図2)

位置 調査I区南東部, D7f3区。

規模と形状 平面形は, 長径0.48m, 短径0.43mの楕円形で, 深さ26cmである。底面は皿状で, 円形を呈している。壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 2層からなり、ローム粒子が多く堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。

出土遺物 出土していない。

所見 第1号堀の東側、第408号土坑の脇に配置されている。時期は、第1号堀と同時期と考えられることから、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と思われる。

(4) 土坑

当遺跡からは、土坑341基を検出した。性格や時期の違いについて検討した結果、次のように分類した。

- ア 柱穴（柵列）のような土坑…51基
- イ 奈良・平安時代の土坑…19基
- ウ 第1号堀に伴う門の柱穴である可能性が高い土坑…3基（第1号堀と一連の遺構として扱う。）
- エ 箱掘りのような方形土坑（長方形または方形で、中・近世の可能性が高い土坑）…39基
- オ その他の土坑…229基

以下に、奈良・平安時代と考えられるアとイについて、主なものは文章で掲載し、その他のものは一覧表で記載することとする。ウについては「(3)堀」で、エとオについては「4 その他の遺構と遺物」で掲載した。

ア 柱穴（柵列）のような土坑…51基（第236図～第246図）

ここでは、掘り方と覆土の堆積状況から柱痕が確認された土坑、遺構の位置や配列などから柵列の可能性が高い土坑を取り上げる。特に、柵列の可能性が高い土坑は3基または4基を1組とし、住居跡や掘立柱建物跡と並列するように構築されている。このことから、これらの中には、住居跡・掘立柱建物跡との関連性が強いと推定されるものが数多くあり、その時期は奈良・平安時代の可能性が高いと思われる。ここでは遺物を伴う土坑、柵列の可能性のある土坑（A群～H群）について記述する。

A群（第186～190・216号土坑）（第236図）

第186号土坑

位置 調査I区西部、C5j5区。

規模と形状 平面形は、径1.01mほどの円形で、深さ42cmである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

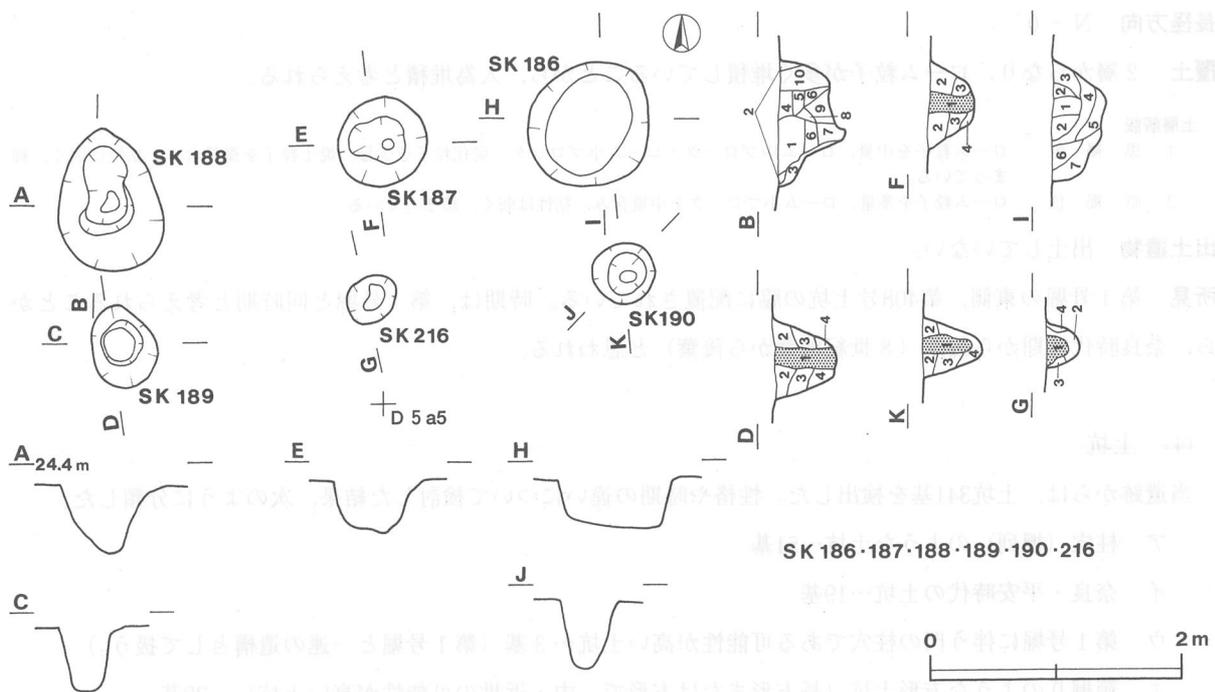
長径方向 N-20°-E

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 黒褐色 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 6 褐色 ローム粒子を中量、暗褐色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロック・暗褐色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 出土していない。



第236図 A群（第186～190・216号土坑）実測図

第187号土坑

位置 調査I区西部，C 5 j4区。

規模と形状 平面形は，径0.71mほどの円形で，深さ41cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向 N - 0°

覆土 4層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|------|--|
| 1 | 極暗褐色 | ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 3 | 黒褐色 | ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子を多量，黒褐色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

遺物 出土していない。

第188号土坑

位置 調査I区西部，C 5 j4区。

規模と形状 平面形は，長径1.14m，短径0.84mの楕円形で，深さ57cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N - 10° - W

覆土 10層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子を多量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

- | | | |
|----|-------|--|
| 5 | 暗 褐 色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 | 黒 褐 色 | ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 7 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 8 | 黒 褐 色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 9 | 褐 色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 10 | 極暗褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片1点が出土している。

第189号土坑

位置 調査I区西部，C5j4区。

規模と形状 平面形は，長径0.66m，短径0.54mの楕円形で，深さ52cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-22°-W

覆土 4層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 黒 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 暗 褐 色 | ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。 |
| 3 | 褐 色 | ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 4 | 黒 褐 色 | ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

遺物 土師器片1点が出土している。

第190号土坑

位置 調査I区西部，C5j5区。

規模と形状 平面形は，径0.50mの円形で，深さ57cmである。底面は皿状で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土 4層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 極暗褐色 | ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 褐 色 | ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 3 | 暗 褐 色 | ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 4 | 暗 褐 色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

遺物 出土していない。

第216号土坑

位置 調査I区西部，C5j4区。

規模と形状 平面形は，長径0.42m，短径0.38mの楕円形で，深さ28cmである。底面は皿状で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向 N-27°-E

覆土 4層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 黒 褐 色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 暗 褐 色 | ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 3 | 褐 色 | ローム大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 4 | 褐 色 | ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

遺物 出土していない。

A群所見 北側に大きな第186～188号土坑，南側に小さな第189・190・216号土坑が，それぞれ対になって確認された。土坑間の距離は，東西間2.03m，南北間1.26mで，深さは，後列中間の第216号土坑を除いて，40cm以上ある。第187～189・216号土坑で柱痕が確認されていることから，6基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。調査I区の中央部において，本群北側列から第1～3・24・25号掘立柱建物跡，第1号堀の北端までの範囲をみてみると，南側には遺構が多く配置されているが，北側20m位は極端に遺構が少なくなっている。よって，ここが集落の境界に当たる部分であると思われ，本群は特別な役割を持った，柵列である可能性が高い。時期は，掘立柱建物跡群，堀と同時期であると判断できるため，奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

B群（第191・192・194号土坑）（第237図）

第191号土坑

位置 調査I区西部，C5j5区。

規模と形状 平面形は，長径0.64m，短径0.46mの楕円形で，深さ47cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-37°-W

覆土 3層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 3 暗褐色 ローム粒を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物 出土していない。

第192号土坑

位置 調査I区西部，D5a5区。

規模と形状 平面形は，径0.42mほどの円形で，深さ30cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 4層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

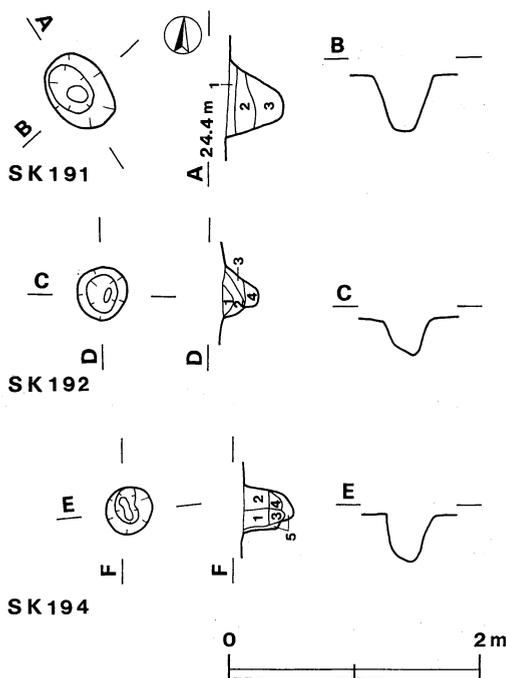
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を多量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 出土していない。

第194号土坑

位置 調査I区西部，D5a5区。

規模と形状 平面形は，径0.38mの円形で，深さ40cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。



第237図
B群（第191・192・194号土坑）実測図

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 極暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 5 褐色 ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 須恵器片3点が出土している。

B群所見 A群の東側脇に南北に連なっている。土坑間の距離は約1.7mで、深さは一定ではないが、30cm以上である。柱痕は確認されなかったが、A群の第186・190号土坑の脇から南に一直線に並んでおり、A群との関連性も考えられる。時期は、位置と配列からA群と同時期で、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と思われる。

C群（第193・195・196号土坑）（第238図）

第193号土坑

位置 調査I区西部，D5a5区。

規模と形状 平面形は、長径0.42m，短径0.36mの楕円形で、深さ45cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-15°-W

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
- 2 暗褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 極暗褐色 ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 出土していない。

第195号土坑

位置 調査I区西部，D5a5区。

規模と形状 平面形は、長径0.46m，短径0.40mの楕円形で、深さ52cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

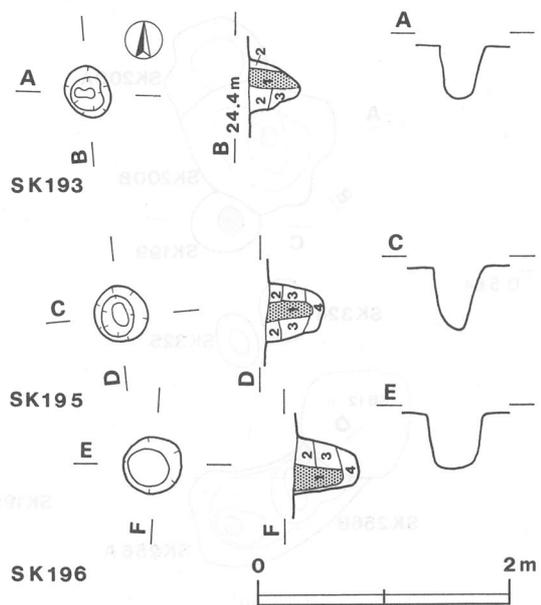
長径方向 N-15°-W

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 極暗褐色 ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 出土していない。



第238図

C群（第193・195・196号土坑）実測図

第196号土坑

位置 調査I区西部, D 5 a5区。

規模と形状 平面形は、径0.46mの円形で、深さ47cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | 褐色 | ローム小ブロックを少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 出土していない。

C群所見 A群の第190号土坑の南側から、南北に一列で連なっている。土坑間の距離は約1.5mで、深さは45cm以上である。第193・195・196号土坑で柱痕が確認されていることから、3基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。時期は、位置と配列からA群との関連性が高いと思われ、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

D群（第199・200A・256A・325号土坑）（第239図）

第199号土坑

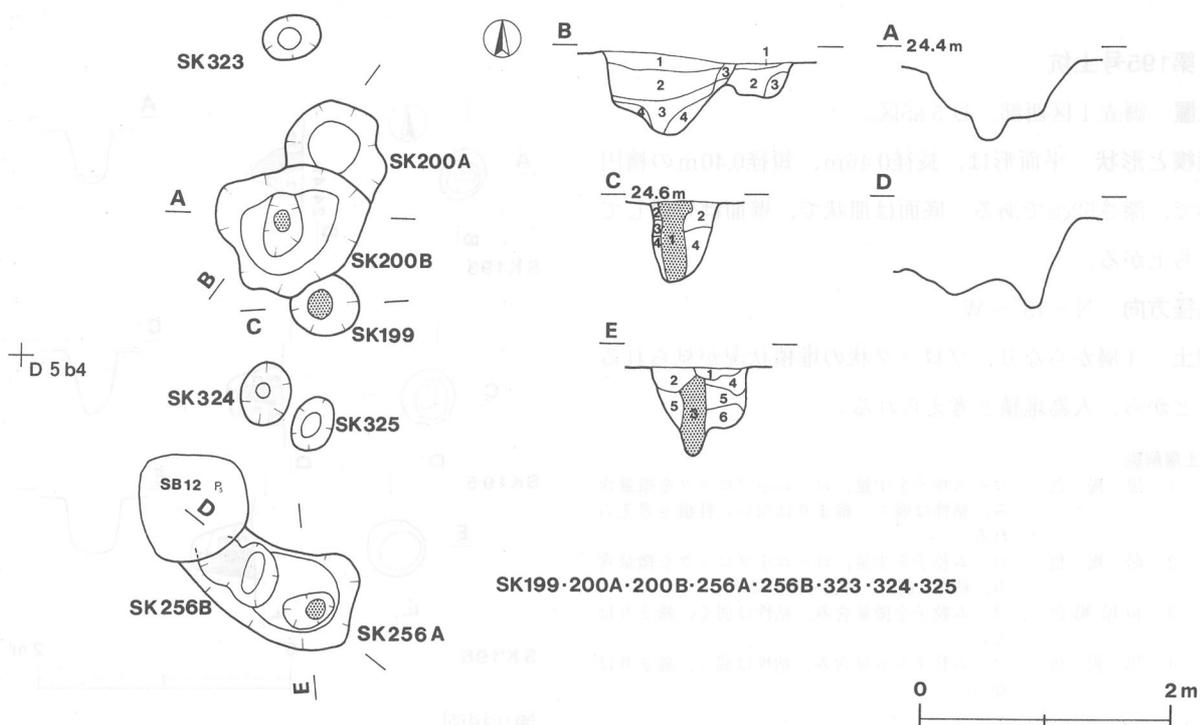
位置 調査I区西部, D 5 a4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡, 第200B号土坑と重複している。切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は、径0.50mほどの円形で、深さ64cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。



第239図 D群（第199・200A・256A・325号土坑）・E群（第200B・256B・323・324号土坑）実測図

土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
- 2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
- 3 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 4 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 出土していない。

第200A号土坑

位置 調査I区西部，D5a4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡，第200B号土坑と重複している。第200B号土坑が本跡を掘り込んでいることから，本跡が古い。第12号掘立柱建物跡との新旧関係は，切り合いがないことから不明である。

規模と形状 平面形は，長径0.85m，短径(0.54)mの不整楕円形と推定され，深さ28cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-50°-W

覆土 3層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 褐色 ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。

遺物 土師器片8点，須恵器片10点が出土している（第200B号土坑との合計）。細片のため図示できなかった。

第256A号土坑

位置 調査I区西部，D5b4区。

重複関係 本跡は第256B号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は，長軸0.85m，短軸(0.32)mの不整形で，深さ72cmである。底面は皿状で，二段掘り状になっている。壁面は外傾して立ち上がる。

長軸方向 N-29°-E

覆土 6層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 黒褐色 ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。
- 4 極暗褐色 ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片5点，須恵器片14点が出土している（第256B号土坑との合計）。細片のため図示できなかった。

第325号土坑

位置 調査I区西部，D5b4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡と重複している。切り合いがないことから，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は，長径0.43m，短径0.33mの楕円形で，深さ20cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-25°-E

覆土 不明である。

遺物 須恵器片1点が出土している。細片のため図示できなかった。

D群所見 A群の第189号土坑の南側から、E群と並び、南北に一直列に連なっている。約5m東側にはB・C・F群が平行して存在している。土坑間の距離は約1.22mで、深さは一定ではない。第199・256A号土坑で柱痕が確認されていることから、4基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。時期は、位置と配置からA群との関連性が高いと思われ、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

E群（第200B・256B・323・324号土坑）（第239図）

第200B号土坑

位置 調査I区西部，D5a4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡，第199，200A号土坑と重複している。本跡が第200A号土坑を掘り込んでいることから，本跡が新しい。第12号掘立柱建物跡，第199号土坑との新旧関係は，切り合いがないことから不明である。

規模と形状 平面形は，径1.14mの不定形で，深さ65cmである。底面は皿状で，二段掘り状になっている。壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 4層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 黒褐色 ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片8点，須恵器片10点が出土している（第200A号土坑との合計）。細片のため図示できなかった。

第256B号土坑

位置 調査I区西部，D5b4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡，第256A号土坑と重複している。第12号掘立柱建物跡が本跡を掘り込んでいることから，本跡が古い。第256A号土坑との新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は，長径(0.64)m，短径0.61mの不定形で，深さ62cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-10°-E

覆土 不明である。

遺物 土師器片5点，須恵器片14点が出土している（第256A号土坑との合計）。細片のため図示できなかった。

第323号土坑

位置 調査I区西部，D5a4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡と重複している。切り合いがないことから，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は，長径0.48m，短径0.35mの楕円形で，深さ20cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-70°-E

覆土 不明である。

遺物 土師器片2点，須恵器片7点が出土している。細片のため図示できなかった。

第324号土坑

位置 調査I区西部, D5b4区。

重複関係 本跡は第12号掘立柱建物跡と重複している。切り合いがないことから, 新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は, 長径0.52m, 短径0.40mの楕円形で, 深さ40cmである。底面は皿状で, 壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-17°-E

覆土 不明である。

遺物 出土していない。

E群所見 A群の第189号土坑の南側から, D群と並び, 南北に一直列に連なっている。約5m東側にはB・C・F群が平行して並んでいる。土坑間の距離は約1.41mで, 深さは一定ではない。第200B号土坑で柱痕が確認されていることから, 4基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。時期は, 位置と配列からA群との関連性が高いと思われ, 奈良時代前期から後期(8世紀前葉から後葉)と考えられる。

F群(第217・218・220号土坑)(第240図)

第217号土坑

位置 調査I区西部, D5b5区。

規模と形状 平面形は, 長径0.54m, 短径0.40mの楕円形で, 深さ16cmである。底面は皿状で, 壁面は緩やかに外傾して, 立ち上がる。

長径方向 N-6°-W

覆土 2層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。

遺物 出土していない。

第218号土坑

位置 調査I区西部, D5b5区。

規模と形状 平面形は, 長径0.38m, 短径0.30mの楕円形で, 深さ27cmである。底面は皿状で, 二段掘り状になっている。壁面は外傾して立ち上がる。

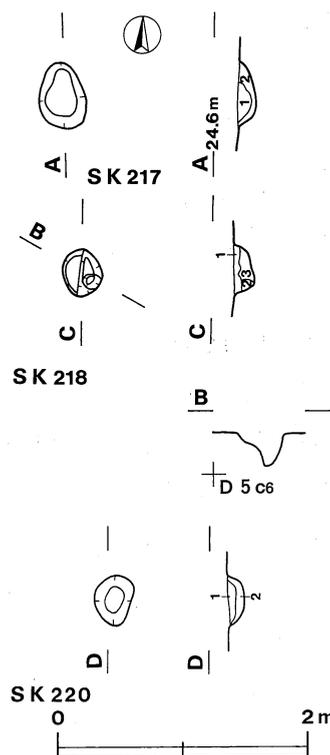
長径方向 N-4°-E

覆土 3層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 暗褐色 暗褐色土を少量, ローム粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 極暗褐色 ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 出土していない。



第240図

F群(第217・218・220号土坑)
実測図

第220号土坑

位置 調査I区西部，D5c5区。

規模と形状 平面形は，長径0.40m，短径0.28mの楕円形で，深さ15cmである。底面は皿状で，壁面は緩やかに外傾して，立ち上がる。

長径方向 N-14°-E

覆土 2層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 出土していない。

F群所見 C群の第196号土坑の南側から，南北に一直線で連なっている。第217号土坑と第218号土坑の距離は約1.4m，第218号土坑と第220号土坑の距離は約2.6mである。深さは27cm以下で，全体的に浅い。柱痕は確認されていないが，C群とほぼ一直線に連なっていることから，3基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。時期は，位置と配列からC群との関連性が高いと思われ，奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

G群（第223・238・239号土坑）（第241図）

第223号土坑

位置 調査I区西部，D5c3区。

規模と形状 平面形は，長径0.56m，短径0.50mの楕円形で，深さ33cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 3層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物 出土していない。

第238号土坑

位置 調査I区西部，D5b2区。

規模と形状 平面形は，長径0.66m，短径0.52mの楕円形で，深さ30cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-30°-E

覆土 2層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物 出土していない。

第239号土坑

位置 調査I区西部, D 5 b2区。

規模と形状 平面形は, 長径0.55m, 短径0.41mの楕円形で, 深さ20cmである。底面は平坦で, 壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-15°-W

覆土 3層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

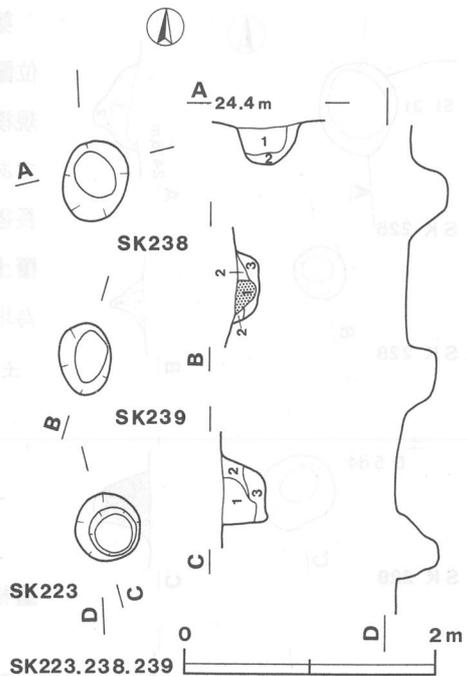
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。
- 2 暗褐色 ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子・褐色土を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 出土していない。

G群所見 第13号掘立柱建物跡の西側から, 南北に一直線で連なっている。土坑間の距離は約1.43mである。深さは33cm以下で, 全体的に浅い。第239号土坑で柱痕が確認されている。第13号掘立柱建物跡を挟んでD・E群と東西に平行して位置していることから,

3基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。時期は, 位置と配置からD・E群との関連性が高いと思われ, 奈良時代前期から後期(8世紀前葉から後葉)と考えられる。



第241図

G群(第223・238・239号土坑)実測図

H群(第225・228・229・231・232号土坑)(第242図)

第225号土坑

位置 調査I区西部, D 5 c4区。

重複関係 本跡は第31号住居跡と重複している。第31号住居跡が本跡を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と形状 平面形は, 長径0.74m, 短径0.62mの楕円形で, 深さ26cmである。底面は皿状で, 二段掘り状になっている。壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 2層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まりはない。

遺物 土師器片1点, 須恵器片1点が出土している。細片のため図示できなかった。

第228号土坑

位置 調査I区西部, D 5 c4区。

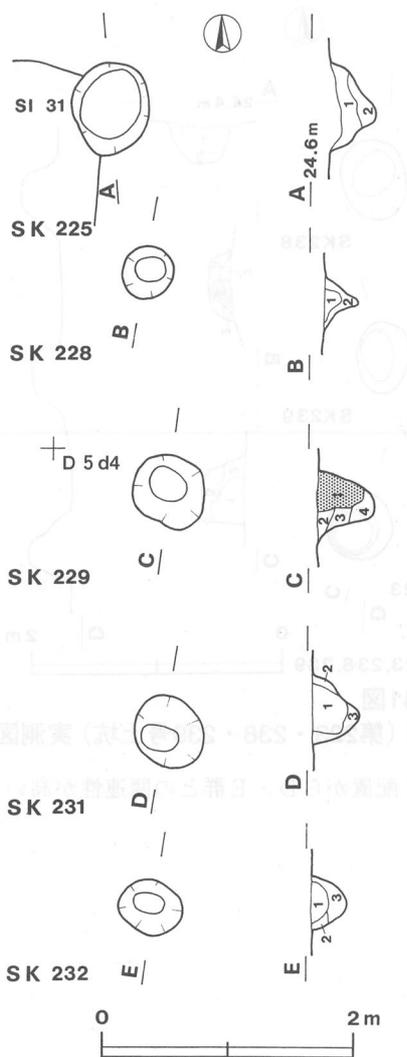
規模と形状 平面形は, 径0.42mの円形で, 深さ33cmである。底面は皿状で, 壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, 炭化粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 出土していない。



第229号土坑

位置 調査I区西部, D 5 d4区。

規模と形状 平面形は, 長径0.64m, 短径0.56mの楕円形で, 深さ54cmである。底面は皿状で, 壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-41°-W

覆土 4層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|---|
| 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子を中量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |

遺物 出土していない。

第231号土坑

位置 調査I区西部, D 5 d4区。

規模と形状 平面形は, 長径0.60m, 短径0.53mの楕円形で, 深さ36cmである。底面は皿状で, 二段掘り状になっている。壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-30°-E

覆土 3層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|---|
| 1 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロック・炭化粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |

第242図

H群(第225・228・229・231・232号土坑)実測図

遺物 出土していない。

第232号土坑

位置 調査I区西部, D 5 d4区。

規模と形状 平面形は, 長径0.50m, 短径0.41mの楕円形で, 深さ32cmである。底面は皿状で, 壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-60°-W

覆土 3層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |

遺物 出土していない。

H群所見 第16・30号掘立柱建物跡の東側を, 南北に一直線で連なっている。土坑間の距離は約1.60mである。

深さは、第229号土坑を除いて26~36cmで、全体的に浅い。第229号土坑で柱痕が確認されている。D・E群とほぼ同じ方向で並んでいることから、5基の土坑は柵列のような一連の施設と考えられる。時期は、位置と配列からD・E群との関連性が高いと思われ、奈良時代前期から後期（8世紀前葉から後葉）と考えられる。

第234号土坑（第243図）

位置 調査I区西部，D 5 d4区。

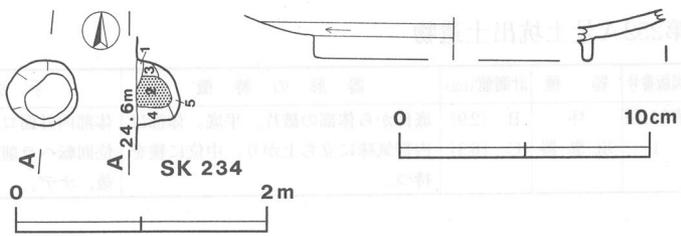
重複関係 本跡は第30号掘立柱建物跡と重複している。切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は、径0.56mの円形で、深さ34cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 3 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 4 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 5 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |



第243図 第234号土坑・出土遺物実測図

遺物 須恵器片2点が出土している。第243図1の須恵器碗が覆土中から出土している。

所見 第30号掘立柱建物跡のP9の脇に構築されている。時期は、出土遺物から、奈良時代前期から中期（8世紀前葉から中葉）と思われる。第30号掘立柱建物跡と同時期であり、何らかの関係があった可能性が高い。

第234号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第243図 1	碗 須恵器	B (2.1)	高台部から体部の破片。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	長石 雲母 砂粒	5% P594 覆土中
		D [11.0]	高台部は「ハ」の字状に開く。平底。	高台部貼り付け，ロクロナデ。	灰オリープ色	
		E 1.0	体部は内彎気味に立ち上がる。		普通	

第252A号土坑（第244図）

位置 調査I区南西部，D 5 g3区。

重複関係 本跡は第252B号土坑と重複している。切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は、長径0.57m，短径0.48mの楕円形で、深さ27cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がる。

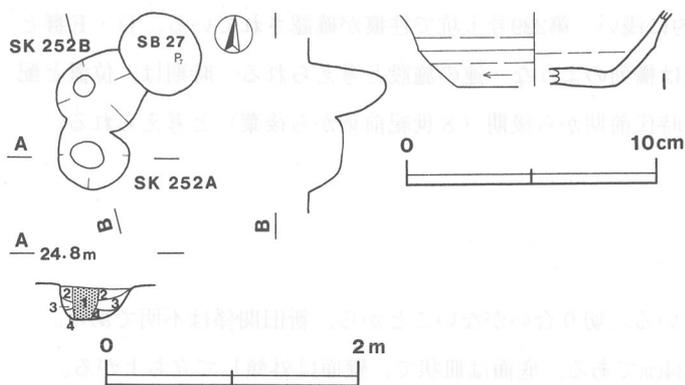
長径方向 N-57°-W

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。 |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |
| 3 | 極暗褐色 | ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。 |

遺物 土師器片3点，須恵器片3点が出土している。第244図1の須恵器坏が覆土中から出土している。



第244図 第252A・252B号土坑・出土遺物実測図

所見 第27号掘立柱建物跡との関係は不明であるが、周辺に掘立柱建物跡群があること、柱痕が確認されたことから、掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。ただし、遺構の西側が調査区域外のため確認できなかった。時期は、出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第252A号土坑出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第244図 1	坏 須恵器	B (2.9) C [6.3]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に稜を持つ。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	長石 雲母 砂粒 褐灰色 普通	10% P595 覆土中

第252B号土坑（第244図）

位置 調査I区南西部，D5f3区。

重複関係 本跡は第27号掘立柱建物跡，第252A号土坑と重複している。いずれとも切り合いがないことから，新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は，径0.64mほどの円形で，深さ62cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-55°-E

覆土 不明である。

遺物 土師器片3点，須恵器片8点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 第27号掘立柱建物跡との関係は不明であるが，周辺に掘立柱建物跡群があること，柱穴のようなしっかりとした掘り方であることから，掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。ただし，遺構の西側が調査区域外のため確認できなかった。時期は，重複関係と出土遺物から，奈良時代（8世紀）と考えられる。

第384号土坑（第245図）

位置 調査I区東部，D7d1区。

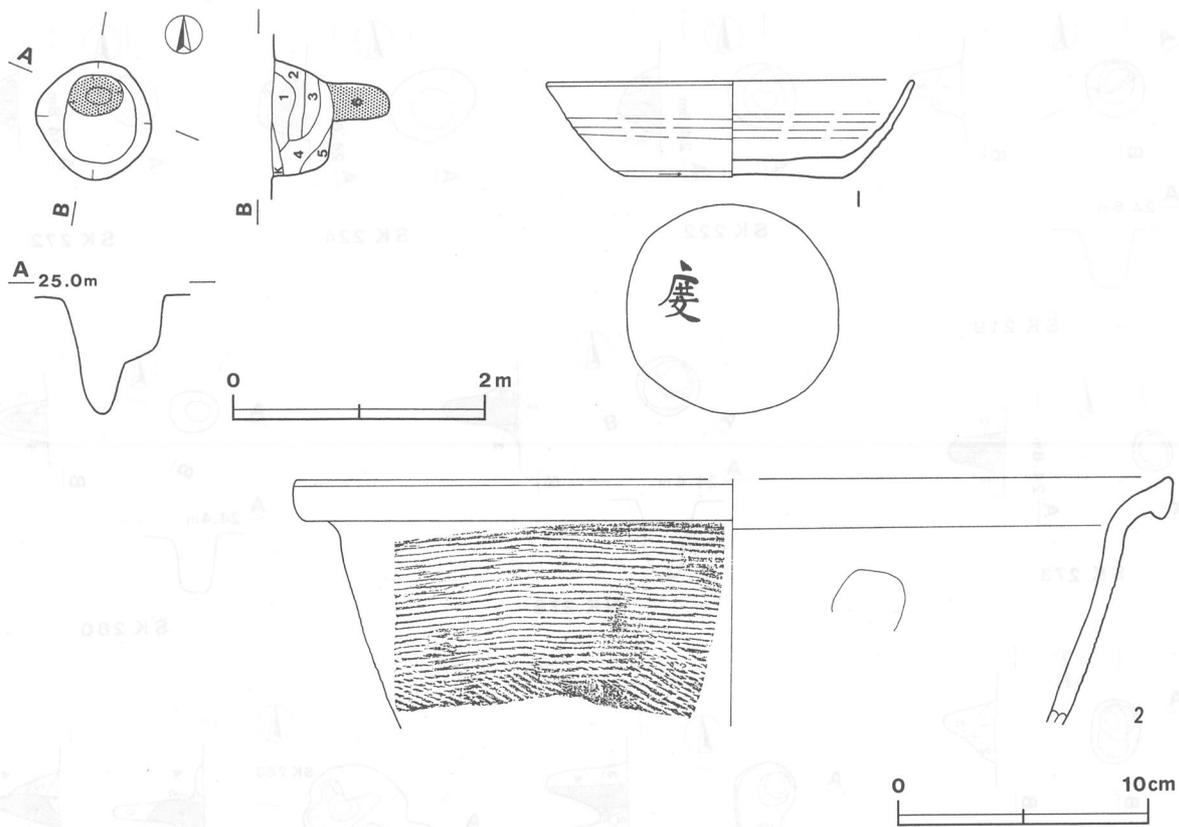
規模と形状 平面形は，径0.95mの円形で，深さ93cmである。底面は皿状で，二段掘り状になっている。壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 6層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロック・炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 6 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。柱痕と考えられる。

遺物 土師器片18点，須恵器片14点が出土している。第245図1の須恵器坏（墨書「度」），2の須恵器鉢が覆土中層からそれぞれ出土している。

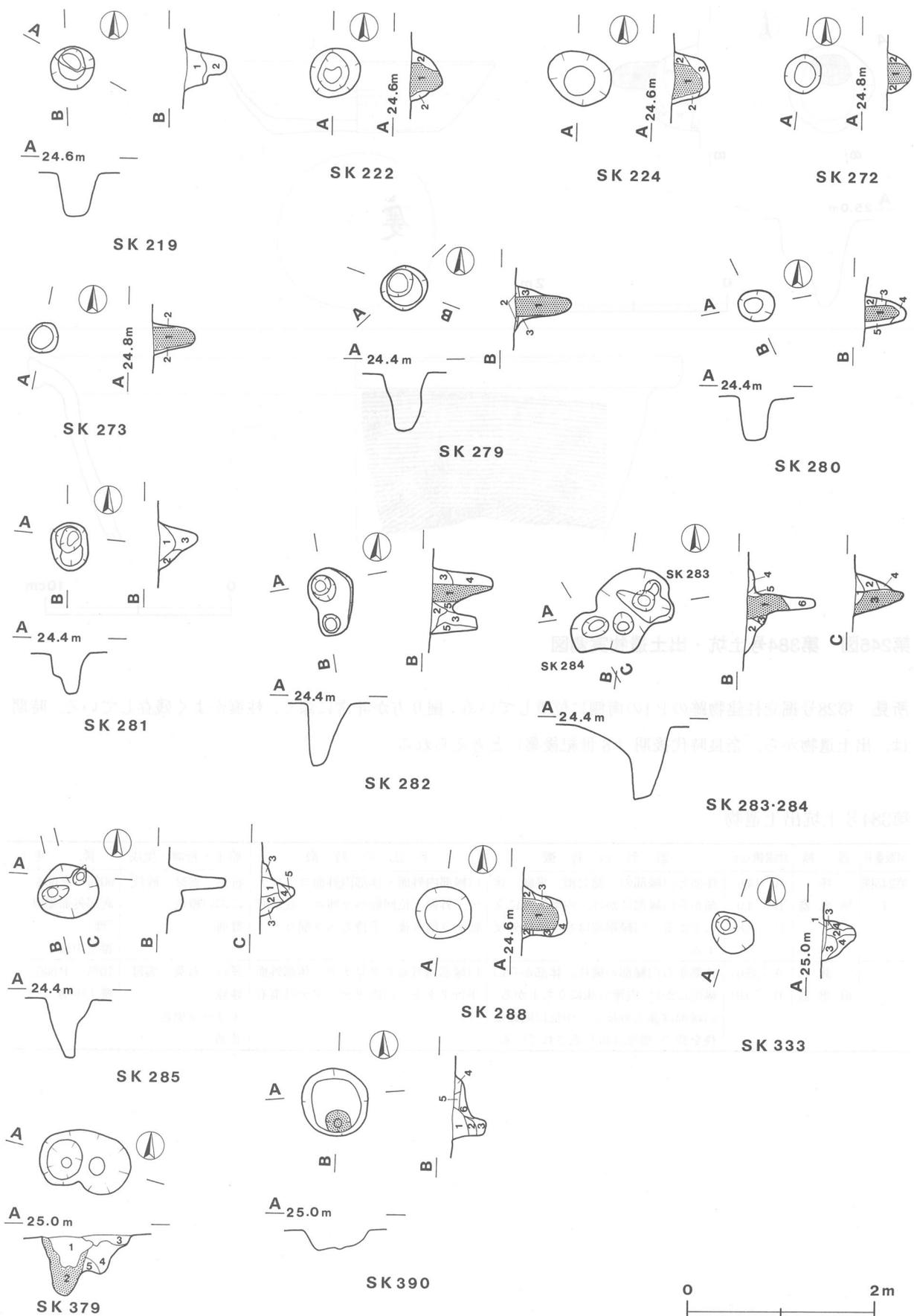


第245図 第384号土坑・出土遺物実測図

所見 第28号掘立柱建物跡のP1の南側に位置している。掘り方が非常に深く、柱痕がよく残存している。時期は、出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第384号土坑出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第245図 1	坏 須恵器	A 14.6 B 4.0 C 8.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	90% P604 底部外面墨書「度」 覆土中層
2	鉢 須恵器	A [35.0] B (9.9)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部は折り返されている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面ナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 オリーフ黒色 普通	10% P605 覆土中層



第246図 柱穴のような土坑実測図

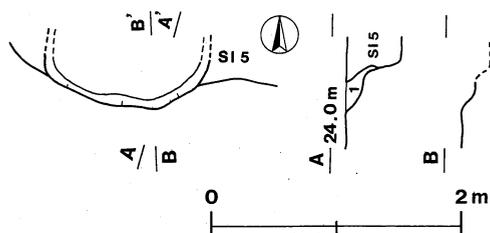
イ 奈良・平安時代の土坑…19基 (第247図～第265図)

ここでは、出土遺物や重複関係から、時期が奈良・平安時代と考えられる土坑について記述する。

第2号土坑 (第247図)

位置 調査I区北西部, B 4 j0区。

重複関係 本跡は第5号住居跡と重複している。第5号住居跡が本跡の底面を掘り込んでいることから、本跡が古い。



第247図 第2号土坑実測図

規模と形状 平面形は、長径(1.20)m, 短径(0.26)mで、楕円形と推定される。深さ(26)cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がる。

長径方向 N-88°-W

覆土 単一層で、自然堆積である。

土層解説

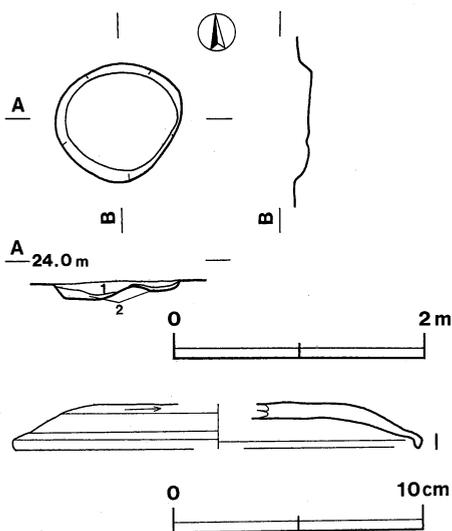
- 1 極暗褐色 ローム粒子を中量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 出土していない。

所見 時期は、重複している第5号住居跡が9世紀中葉と考えられるので、平安時代前期(9世紀前葉)以前と考えられる。

第11号土坑 (第248図)

位置 調査I区北西部, B 4 i7区。



第248図 第11号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 平面形は、長径1.02m, 短径0.90mの楕円形で、深さ10cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がる。

長径方向 N-45°-E

覆土 2層からなり、ロームブロックを多量に含むことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, 炭化粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
2 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量, 炭化粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 須恵器片1点が出土している。第248図1の須恵器蓋が底面直上から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、奈良時代中期(8世紀中葉)と考えられる。

第11号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第248図 1	蓋 須恵器	A [16.2] B (1.8)	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	20% P585 底面直上

第90号土坑（第249図）

位置 調査Ⅰ区北部，B 5 i4区。

規模と形状 平面形は，長径1.34m，短径0.90mの不整楕円形で，深さ15cmである。底面は平坦で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-10°-E

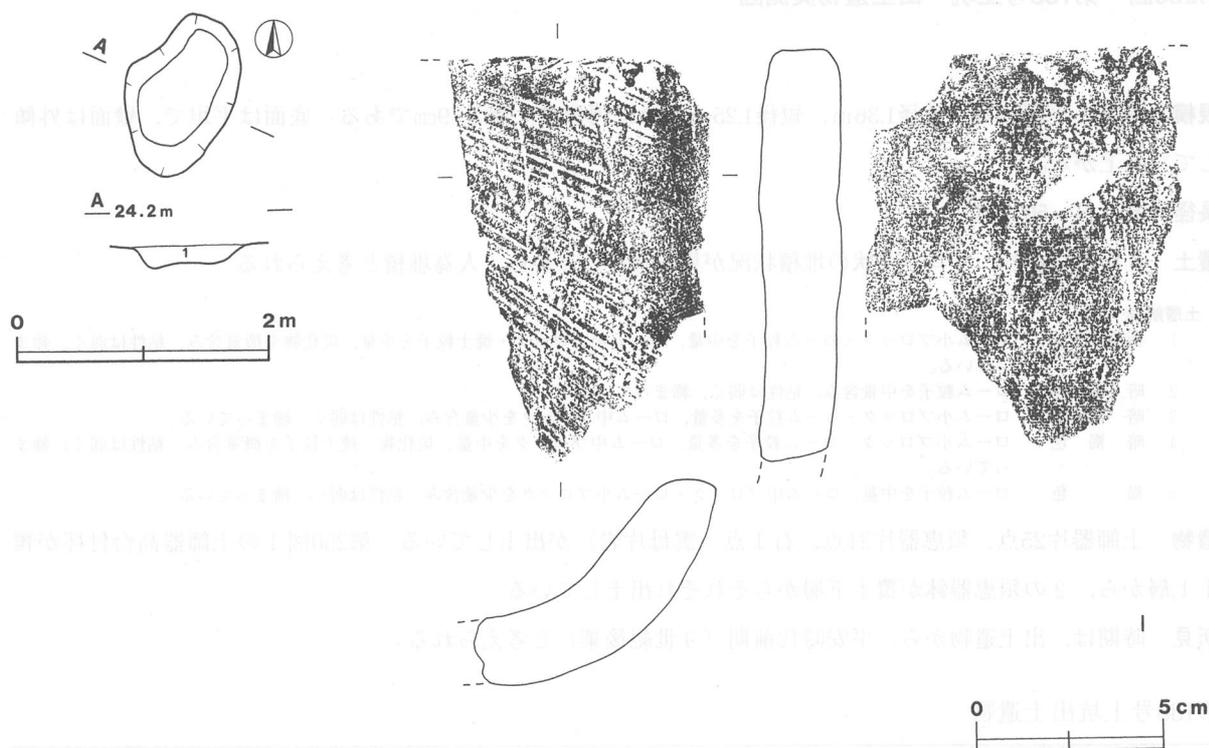
覆土 単一層で，自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物 須恵器片2点，平瓦1点が出土している。第249図1の平瓦が底面直上から出土している。

所見 時期は，出土遺物から，奈良・平安時代（8・9世紀）と考えられる。



第249図 第90号土坑・出土遺物実測図

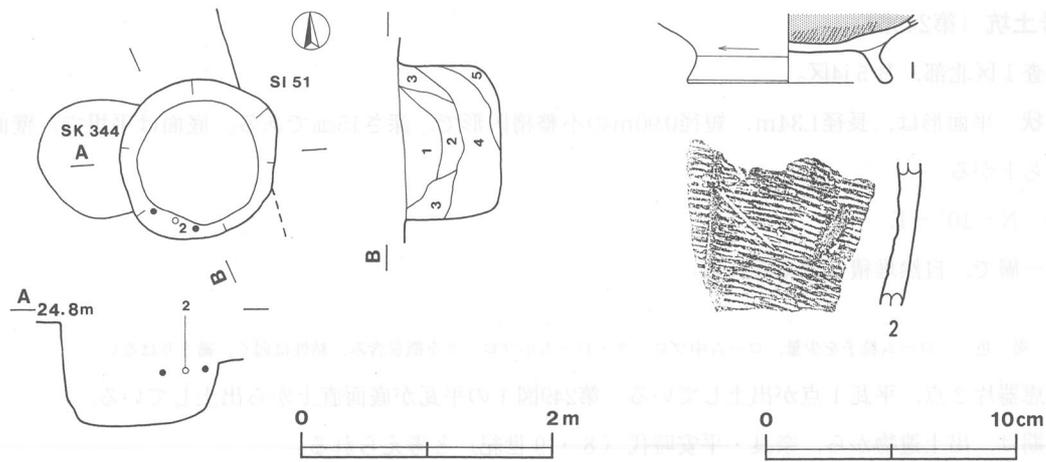
第90号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				器形・手法の特徴	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第249図 1	平瓦	(11.0)	7.0	2.2	(221)	緩やかに彎曲している。凸面へら削り。凹面布目痕。	T13 底面直上 明黄橙色

第138号土坑（第250図）

位置 調査Ⅰ区中央部，D 6 d7区。

重複関係 本跡は第51号住居跡，第26号掘立柱建物跡，第344号土坑と重複している。本跡が第51号住居跡の床面を，第26号掘立柱建物跡のP3を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が新しい。第344号土坑との新旧関係は不明である。



第250図 第138号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 平面形は、長径1.36m、短径1.25mのほぼ円形で、深さ79cmである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-50°-E

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロック・焼土粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、炭化物・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 褐色 ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片25点、須恵器片31点、石1点（雲母片岩）が出土している。第250図1の土師器高台付坏が覆土上層から、2の須恵器鉢が覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から、平安時代前期（9世紀後葉）と考えられる。

第138号土坑出土遺物

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第250図 1	高台付坏 土師器	B (2.8) D 8.2 E 1.4	高台部から体部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 内面 黒色 外面 暗灰黄色 普通	40% P587 内面黒色処理 覆土上層

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
2	鉢 須恵器	体部	体部外面平行タタキ。	TP39 覆土下層 赤橙色

第139号土坑（第251図）

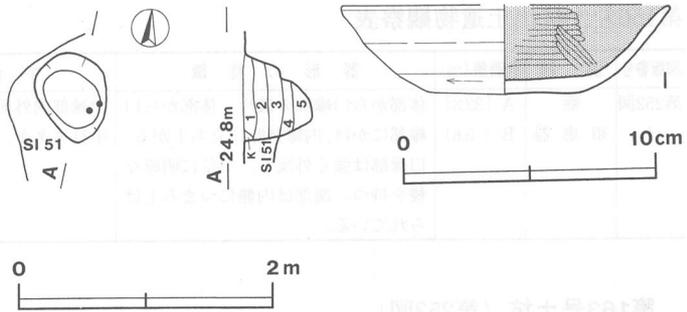
位置 調査I区中央部、D6c7区。

重複関係 本跡は第51号住居跡と重複している。本跡が第51号住居跡の床面を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と形状 平面形は、長径0.65m、短径0.52mの楕円形で、深さ54cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-40°-W

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。



第251図 第139号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片9点、須恵器片6点が出土している。第251図1の土師器坏が覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、平安時代前期（9世紀中葉）と考えられる。

第139号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第251図 1	坏 土師器	A [13.0] B 3.5 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 におい・橙色 普通	20% P589 内面黒色処理 覆土中

第156号土坑（第252図）

位置 調査I区北西部，C5c4区。

規模と形状 平面形は、径0.95mほどの円形で、深さ29cmである。底面は凹凸で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

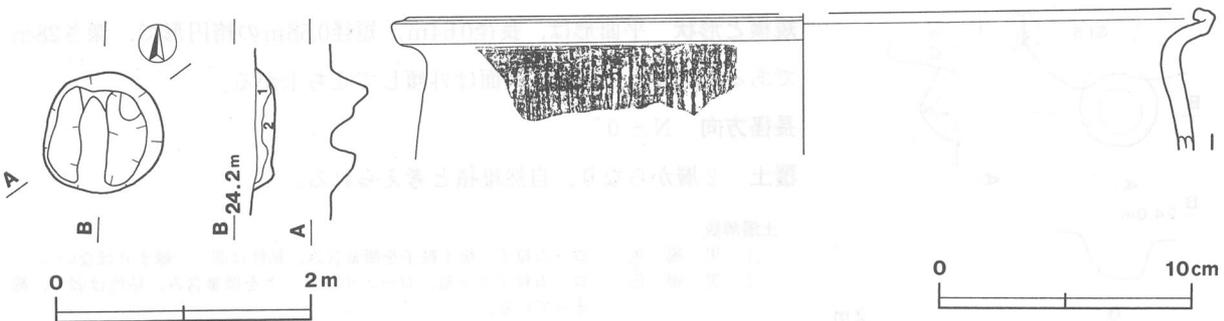
覆土 2層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 褐色土中ブロックを少量、ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粒子・褐色土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 須恵器片4点が出土している。第252図1の須恵器甌が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、平安時代前期（9世紀）と考えられる。



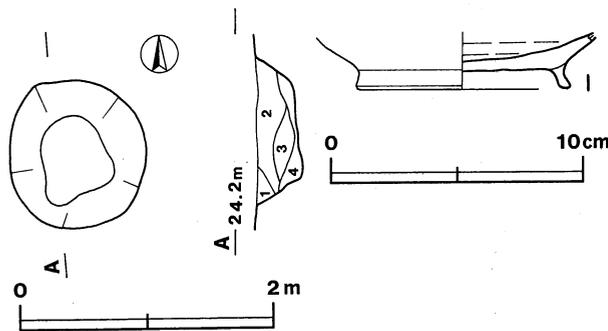
第252図 第156号土坑・出土遺物実測図

第156号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第252図 1	甌 須恵器	A [32.8] B (5.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部は内側につまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	10% P592 覆土中

第163号土坑 (第253図)

位置 調査I区北西部, C 5 d5区。



規模と形状 平面形は、長径1.18m、短径1.06mの楕円形で、深さ34cmである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 黒褐色 ローム粒子・褐色土を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 暗褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

第253図 第163号土坑・出土遺物実測図

遺物 土師器片4点、須恵器片6点が出土している。第253図1の須恵器高台付坏が覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。

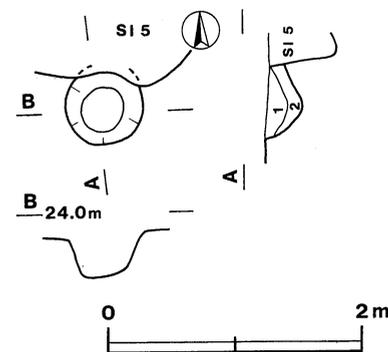
第163号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第253図 1	高台付坏 須恵器	B (2.3) D 8.4 E 1.0	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 にぶい黄色 普通	30% P593 覆土中層

第170号土坑 (第254図)

位置 調査I区北西部, B 5 j1区。

重複関係 本跡は第5号住居跡と重複している。第5号住居跡が本跡の底面を掘り込んでいることから、本跡が古い。



規模と形状 平面形は、長径0.64m、短径0.58mの楕円形で、深さ28cmである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 黒褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片8点が出土している。細片のため図示できなかった。

第254図
第170号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、重複している第5号住居跡が9世紀中葉と考えられることから、平安時代前期（9世紀前葉）以前と思われる。

第275号土坑（第255図）

位置 調査I区中央部，D5c8区。

規模と形状 平面形は，長径1.44m，短径1.02mの楕円形で，深さ18cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

長径方向 N-14°-W

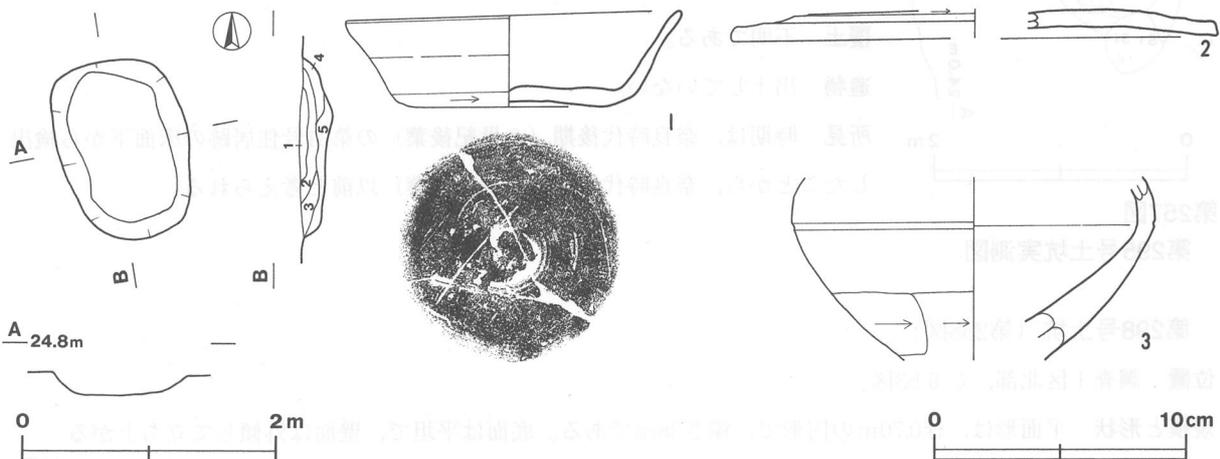
覆土 5層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。 |
| 2 | 黒褐色 | 焼土粒子を中量，ローム粒子・暗褐色土小ブロックを少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子・褐色土小ブロックを少量，ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。 |

遺物 土師器片44点，須恵器片22点が出土している。第255図1の須恵器坏，2の須恵器蓋，3の須恵器平瓶が覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土遺物から，奈良時代中期（8世紀中葉）と考えられる。



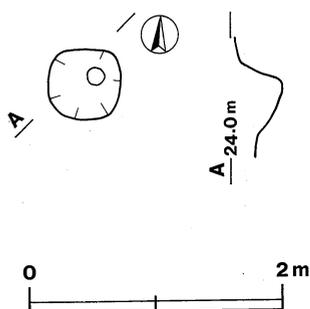
第255図 第275号土坑・出土遺物実測図

第275号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第255図 1	坏 須恵器	A 13.3 B 3.8 C 7.7	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて，下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 橙色 普通	50% P596 覆土中
2	蓋 須恵器	A [19.4] B (1.1)	天井部から口縁部の破片。天井部から口縁部にかけて平坦に開く。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	40% P598 覆土中
3	平瓶 須恵器	B (8.3)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 黄褐色 普通	20% P597 覆土中

第294号土坑 (第256図)

位置 調査I区南西部, D 5 c3区。



第256図
第294号土坑実測図

重複関係 本跡は第31号住居跡と重複している。第31号住居跡が本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と形状 平面形は、径0.64mの円形で、深さ37cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 不明である。

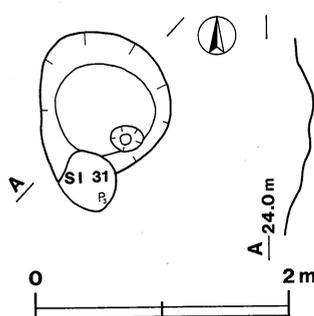
遺物 出土していない。

所見 時期は、奈良時代後期（8世紀後葉）の第31号住居跡の床面下から検出したことから、奈良時代中期（8世紀中葉）以前と考えられる。

第295号土坑 (第257図)

位置 調査I区南西部, D 5 c3区。

重複関係 本跡は第31号住居跡と重複している。第31号住居跡が本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。



第257図
第295号土坑実測図

規模と形状 平面形は、長径1.14m、短径1.08mの楕円形で、深さ20cmである。底面は凹凸で、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がる。

長径方向 N-34°-W

覆土 不明である。

遺物 出土していない。

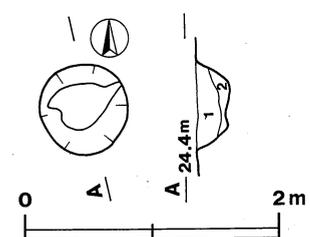
所見 時期は、奈良時代後期（8世紀後葉）の第31号住居跡の床面下から検出したことから、奈良時代中期（8世紀中葉）以前と考えられる。

第298号土坑 (第258図)

位置 調査I区北部, C 6 b3区。

規模と形状 平面形は、径0.70mの円形で、深さ38cmである。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。



第258図
第298号土坑実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 黒褐色 ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器片8点、須恵器片3点、灰釉陶器（皿）1点が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。灰釉陶器皿は猿投窯産井ヶ谷78号窯式のものである。

所見 時期は、出土遺物から、平安時代前期（9世紀前葉から中葉）と考えられる。

第309号土坑 (第259図)

位置 調査I区中央部, C 6 e5区。

規模と形状 平面形は、径0.92mほどの円形で、深さ23cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して、

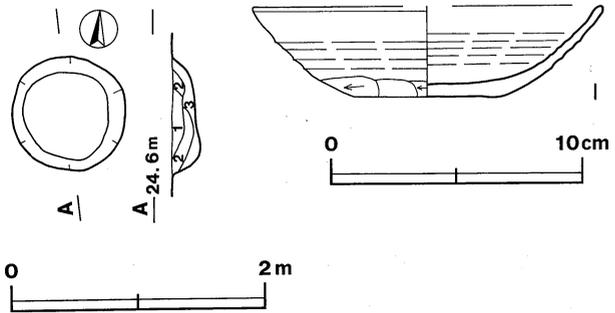
立ち上がる。

長径方向 N-55°-W

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子を中量, 焼土小ブロックを少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 暗赤褐色 焼土粒子を中量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子を少量, ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。



第259図 第309号土坑・出土遺物実測図

遺物 土師器片14点, 須恵器片36点が出土している。第259図1の須恵器坏が覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土遺物から, 平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。

第309号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259図 1	坏 須恵器	A [13.8] B 3.6 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ, 下位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後, ナデ。	長石 スコリア 砂粒 にぶい黄橙色 普通	30% P600 覆土中

第328号土坑(第260図)

位置 調査I区中央部, D6c5区。

規模と形状 平面形は, 径1.25mほどの円形で, 深さ75cmである。底面は平坦で, 壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-0°

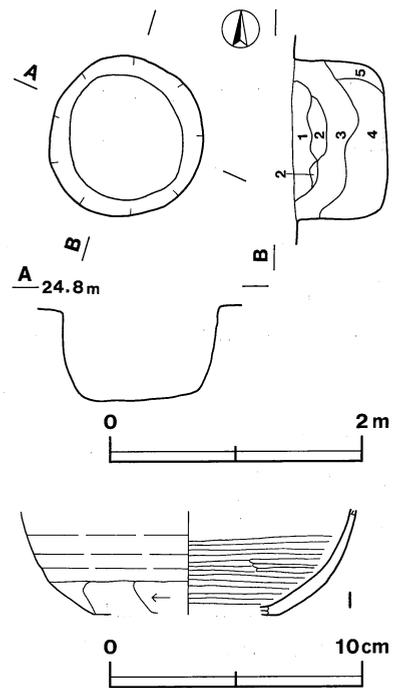
覆土 5層からなり, ブロック状の堆積状況が見られることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量, 炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 4 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片68点, 須恵器片49点が出土している。第260図1の土師器碗が覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土遺物から, 平安時代前期(9世紀中葉から後葉)と考えられる。



第260図 第328号土坑・出土遺物実測図

第328号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第260図 1	碗 土師器	B (4.1) C [7.5]	底部から体部の破片。平底。体部は中位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り, 内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	20% P601 覆土中

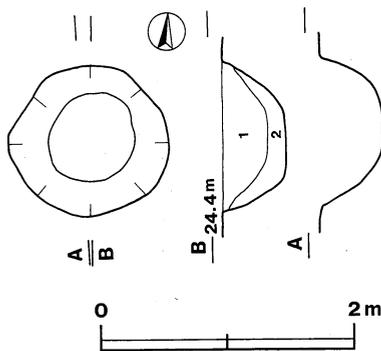
第353号土坑（第261図）

位置 調査I区中央部，D 6 b7区。

重複関係 本跡は第50号住居跡，第26号掘立柱建物跡と重複している。第50号住居跡が本跡の覆土上層を掘り込んでいることから，本跡が古い。また，本跡が第26号掘立柱建物跡のP1を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と形状 平面形は，径1.23mほどの円形で，深さ53cmである。底面は平坦で，壁面は緩やかに外傾して，立ち上がる。

長径方向 N-0°



第261図 第353号土坑実測図

覆土 2層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片8点，須恵器片17点が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 時期は，重複している第50号住居跡が9世紀前葉，第26号掘立柱建物跡が8世紀前葉から後葉と考えられることから，平安時代前期（9世紀前葉）と思われる。

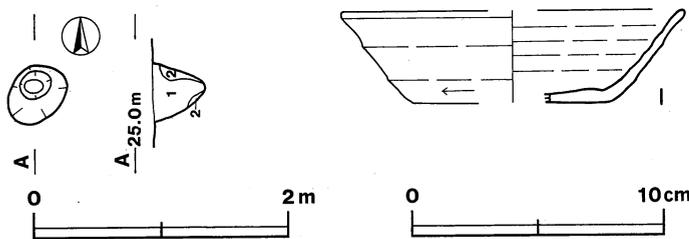
第378号土坑（第262図）

位置 調査I区東部，C 7 ii区。

規模と形状 平面形は，長径0.49m，短径0.40mの楕円形で，深さ48cmである。底面は皿状で，壁面は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-40°-E

覆土 2層からなり，ブロック状の堆積状況が見られることから，人為堆積と考えられる。



第262図 第378号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片3点，須恵器片8点が出土している。第262図1の須恵器坏が覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土遺物から，奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第378号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第262図 1	須恵器 坏	A [13.8] B 3.7 C [8.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	10% P602 覆土下層

第382号土坑 (第263図)

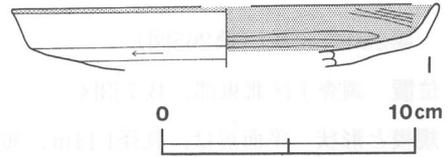
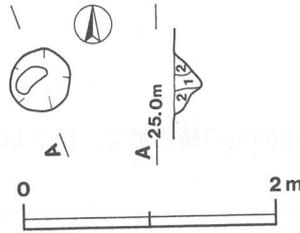
位置 調査I区東部, C 6 i0区。

規模と形状 平面形は、径0.49mの円形で、深さ24cmである。底面は皿状で、壁面は外傾して立ち上がる。

覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。



第263図 第382号土坑・出土遺物実測図

遺物 土師器片4点が出土している。

第263図1の土師器坏が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、奈良時代前期(8世紀前葉)と考えられる。

第382号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第263図 1	坏 土師器	A [17.6] B (2.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて, 上位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面回転ヘラ削り, 内面ヘラ磨き。	雲母 スコリア 砂粒 内面 黒色 外面 橙色 普通	5% P603 内外面黒色処理 覆土中

第386号土坑 (第264図)

位置 調査I区東部, D 7 c1区。

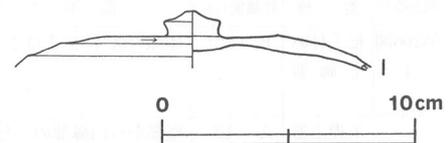
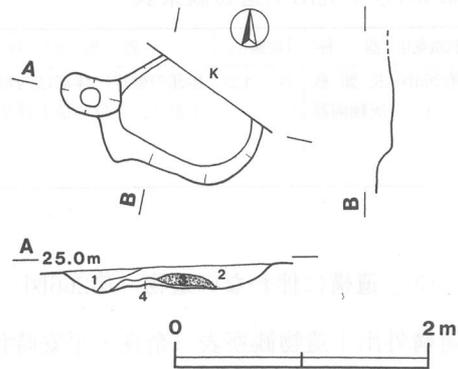
規模と形状 北部に攪乱を受けていることから、平面形は、長径1.30m, 短径(0.77)mの不整楕円形と推定される。深さは20cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がる。

長径方向 N-51°-W

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を多量, 焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を中量, ローム粒子・炭化粒子を少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。竈材や焼土を投棄した層と考えられる。
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム中ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。



第264図 第386号土坑・出土遺物実測図

遺物 土師器片16点, 須恵器片21点が出土している。第264図1の須恵器蓋が覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、奈良時代中期(8世紀中葉)と考えられる。

第386号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第264図 1	蓋 須恵器	B (2.3) F 2.2 G 1.0	つまみから口縁部の破片。扁平な宝珠鷲状のつまみが付く。天井部は平坦で、緩やかに開く。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 灰黄色 普通	20% P606 覆土下層

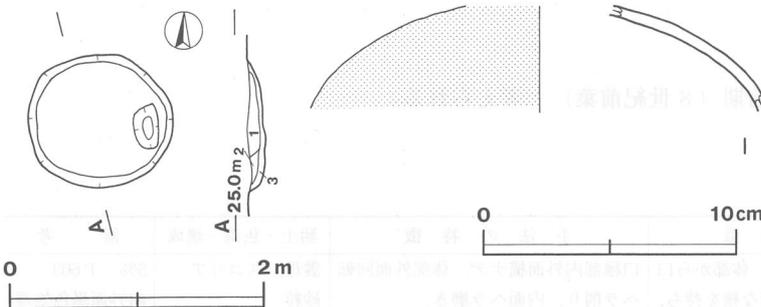
第394号土坑 (第265図)

位置 調査I区北東部, B7j3区。

規模と形状 平面形は、長径1.14m, 短径1.03mの楕円形で、深さ13cmである。底面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して、立ち上がる。

長径方向 N-90°

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と考えられる。



土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量, ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 灰褐色 ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 灰釉陶器1点が出土している。

第265図 第394号土坑・出土遺物実測図

第265図1の灰釉陶器長頸瓶が覆土下

層から出土している。猿投窯産黒笹14号窯式と考えられる。

所見 時期は、出土遺物から、平安時代前期(9世紀中葉)と思われる。

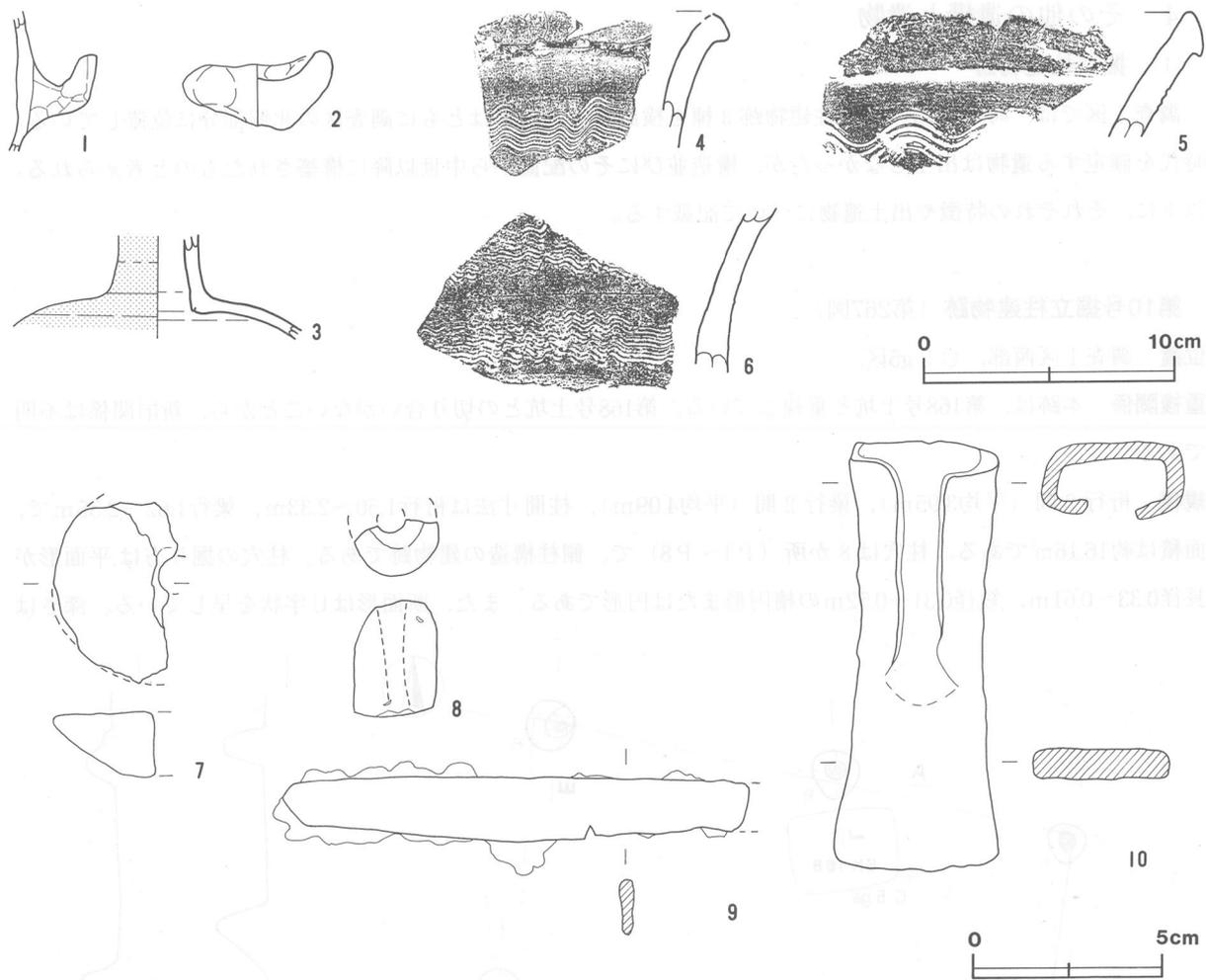
第394号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第265図 1	長頸瓶 灰釉陶器	B (4.2)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり, 上位で最大径を有する。	体部内外面ロクロナデ。釉刷毛塗り。	長石 砂粒 内面 暗灰黄色 外面 灰オリーブ色 良好	10% P609 覆土下層 猿投窯産 (黒笹14号窯式)

(5) 遺構に伴わない遺物 (第266図)

遺構外出土遺物観察表 (奈良・平安時代)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第266図 1	把手付甌 土師器	B (5.6)	体部の破片。把手は上方に直立する。	体部内外面ナデ。	長石 石英 砂粒 にぶい黄褐色 普通	5% P615 I区表土
2	手捏土器 土師器	A 4.3 B 3.1	底部から口縁部の一部欠損。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内外面・体部内外面指ナデ。	雲母 スコリア 砂粒 橙色 普通	80% P620 I区表土
3	長頸瓶 灰釉陶器	B (4.1)	体部から頸部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり, 頸部は直立する。	頸部内外面・体部内外面ロクロナデ。釉刷毛塗り。	砂粒 内面 暗灰黄色 外面 灰オリーブ色 良好	10% P622 I区表土 猿投窯産 (黒笹14号窯式)



第266図 遺構外出土遺物実測図 (奈良・平安時代)

第266図 4	甕 須恵器	口縁部	口縁端部はつまみ上げられている。外面に10本櫛歯による横走波状文が施されている。	TP41 I区表土 灰色・黒褐色(釉)
5	甕 須恵器	口縁部	口縁端部は折り返されている。内外面ロクロナデ。外面に5本櫛歯による横走波状文が施されている。	TP42 I区表採 内面 黄灰色, 外面 灰黄色
6	甕 須恵器	頸部	外面に10本単位の櫛歯による横走波状文が施されている。	TP43 I区表採 灰色

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	紡錘車	(4.9)	(3.2)	1.9	(0.4)	(21)	I区表土	DP11
8	土錘	3.2	2.3	-	(0.7)	(8)	I区表土	DP12

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	刀子	(12.7)	1.8	0.3	(27)	I区表土	M65
10	鉄斧	11.6	4.3	2.1	183	I区表土	M74

4 その他の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

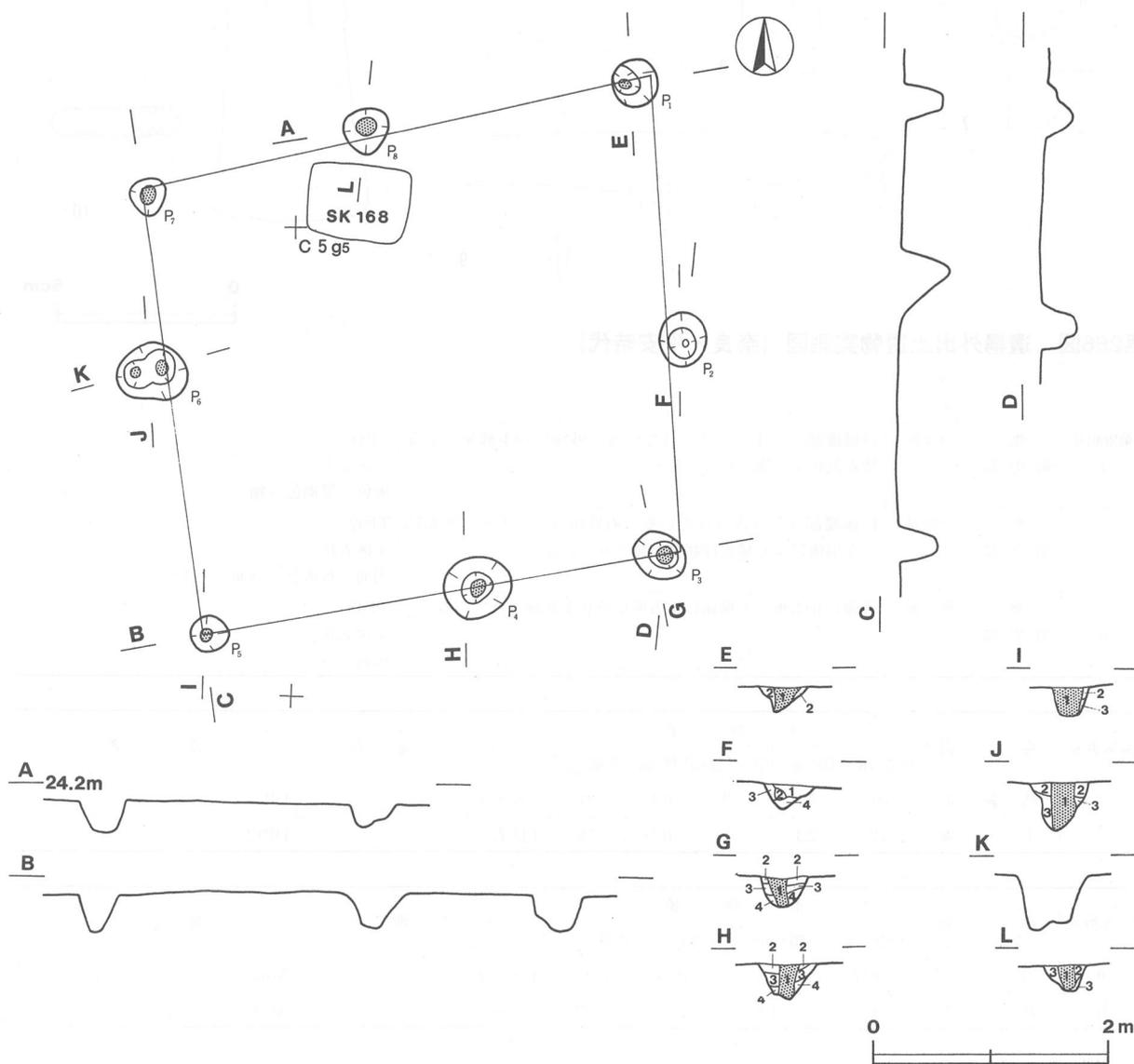
調査I区では、時期不明の掘立柱建物跡3棟を検出した。3棟はともに調査区の北側部分に位置している。時代を確定する遺物は出土しなかったが、構造並びにその配置から中世以降に構築されたものと考えられる。以下に、それぞれの特徴や出土遺物について記載する。

第10号掘立柱建物跡 (第267図)

位置 調査I区西部, C 5 g5区。

重複関係 本跡は、第168号土坑と重複している。第168号土坑との切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

規模 桁行2間(平均3.95m), 梁行2間(平均4.09m), 柱間寸法は桁行1.50~2.33m, 梁行1.62~2.35mで、面積は約16.16 m^2 である。柱穴は8か所(P1~P8)で、側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.33~0.61m, 短径0.31~0.52mの楕円形または円形である。また、断面形はU字状を呈している。深さは



第267図 第10号掘立柱建物跡実測図

0.21~0.49mである。柱痕はP2以外の柱穴で確認することができた。柱の寸法は径11~14cmである。

桁行方向 N-10°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

土層解説 (P1~P6, P8)

P1	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子・黒色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	灰褐色土を少量、ローム粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	灰褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	灰褐色	ローム粒子・灰褐色土を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	褐色土を少量、ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P6	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P8	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器1点が出土しているが、混入と考えられる。

所見 I区西部の平坦部に構築されている。柱穴の規模は、柱間寸法と深さが不ぞろいであるが、断面形はほぼ規則性が認められる。他の側柱構造の掘立柱建物跡と比べて、掘り方は小さく、規模も小さい。よって、同時期に構築された関連施設とは言い難く、その関連は不明である。時期は中世以降と考えられる。

第20号掘立柱建物跡 (第268図)

位置 調査I区北西部, B5j1区。

重複関係 本跡は、第5号住居跡、第21号掘立柱建物跡、第67・72・73・75号土坑と重複している。本跡が第5号住居跡の南東コーナー部よりの覆土を掘り込んでいることから、本跡が新しい。また、その他については、柱穴同士の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

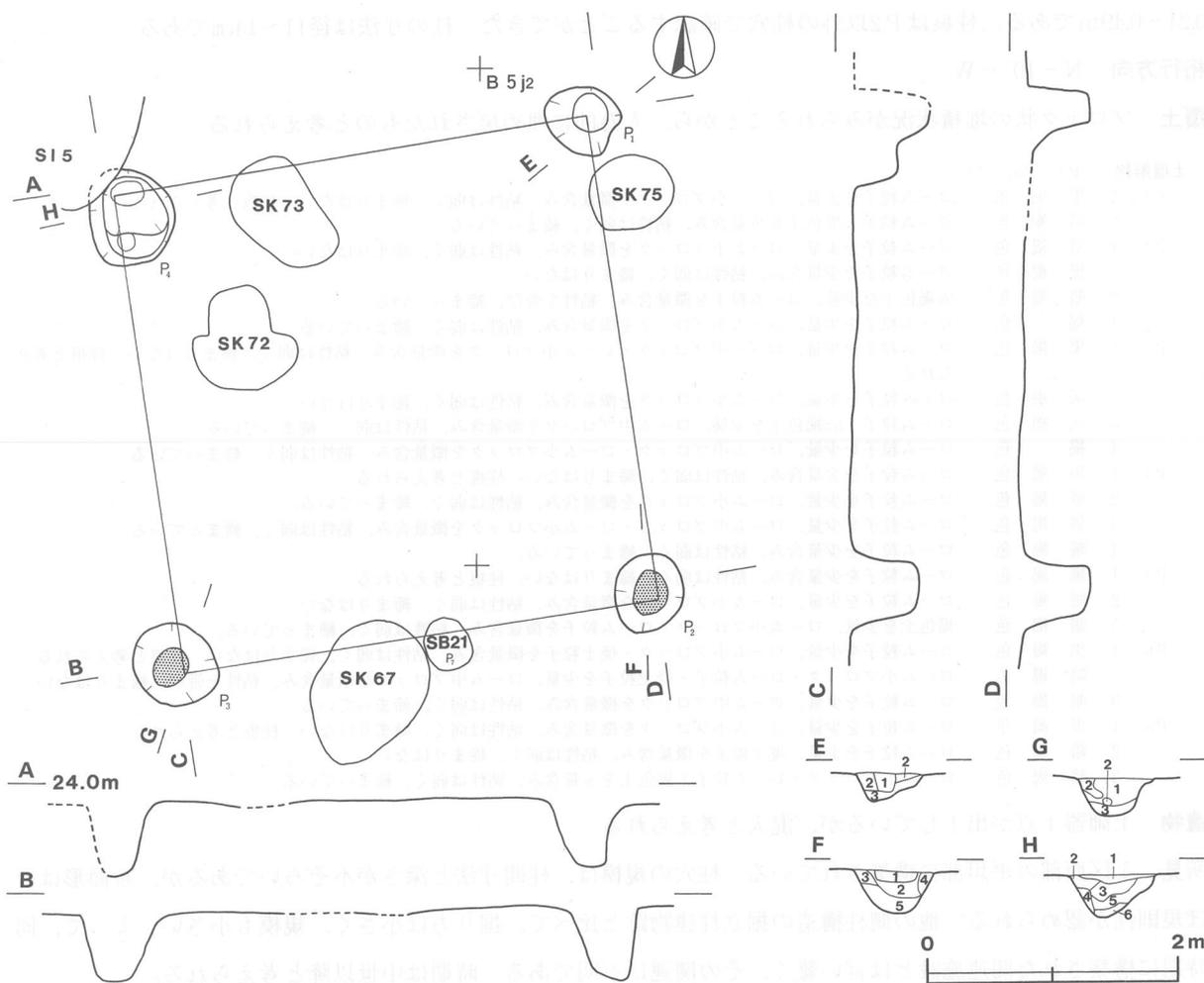
規模 桁行1間(平均3.70m)、梁行1間(平均3.75m)、柱間寸法は桁行3.60~3.80m、梁行3.70~3.80mで、面積は約13.88㎡である。柱穴は4か所(P1~P4)で、側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は、平面形が長径0.55~0.75m、短径0.50~0.70mの楕円形または円形である。また、断面形は逆台形状またはU字状を呈している。深さは0.50~0.65mである。柱痕は確認することができなかった。柱の寸法は不明である。

桁行方向 N-6°-W

覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

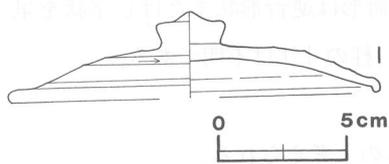
土層解説

P1	1	極暗褐色	ローム粒子・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P2	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	黒褐色	ローム小ブロックを少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	極暗褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。



第268図 第20号掘立柱建物跡実測図

5	黒褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P3	1 黒褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	2 褐色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	3 黒褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
P4	1 黒褐色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
	2 極暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	3 暗褐色	ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
	4 褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	5 褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
	6 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。



第269図
第20号掘立柱建物跡
出土遺物実測図

遺物 第269図1の須恵器蓋を含み，土師器6点，須恵器2点が出土しているが，混入と考えられる。

所見 I区北西部の平坦部に構築されている。柱穴の規模は，P1を除いて深さはほぼ統一されている。柱間寸法と断面形にはほぼ規則性が認められる。他の側柱構造の掘立柱建物跡と比べると，柱間寸法が長く，規模が異なる。よって，奈良・平安時代に構築された関連施設と
は言い難い。時期は中世以降と考えられる。

第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 1	蓋 須恵器	A [14.0] B 3.4 F 2.7 G 0.9	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰色 普通	50% P531 P1覆土中

第21号掘立柱建物跡 (第270図)

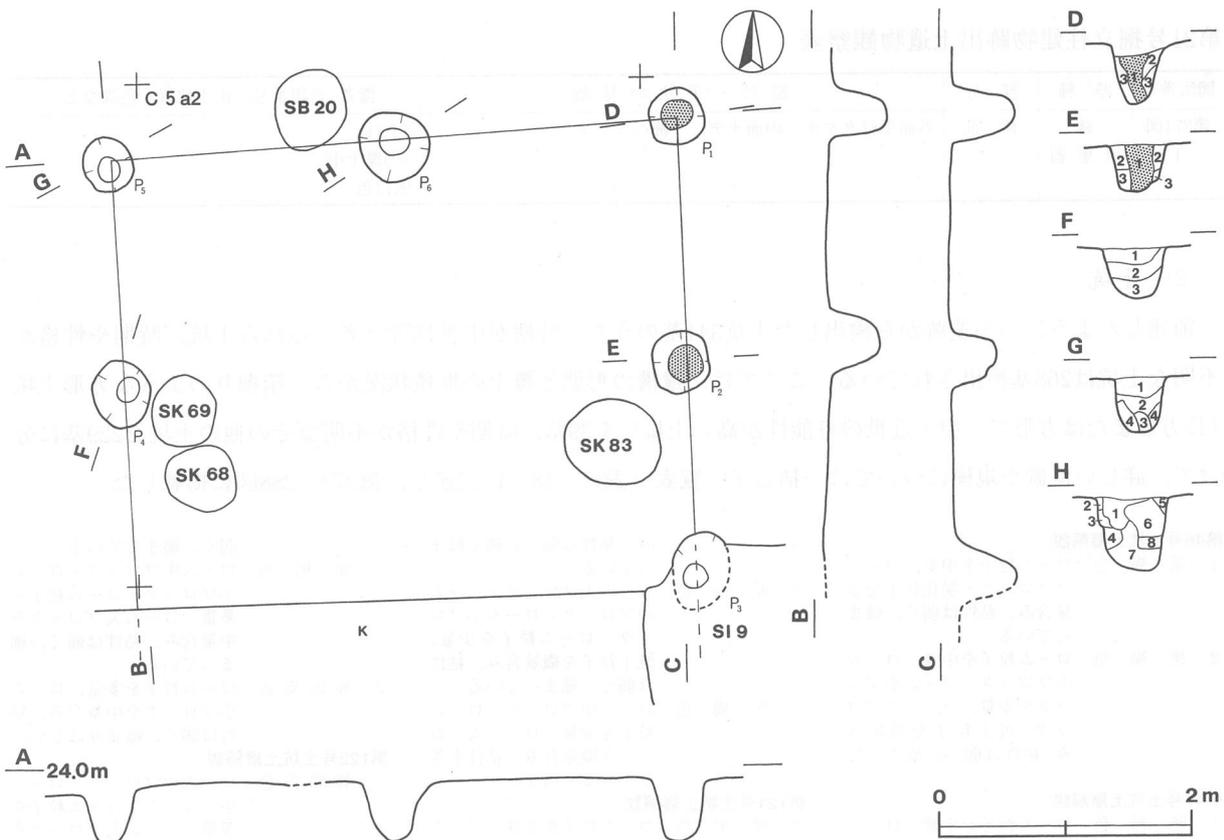
位置 調査I区北西部, C 5 a2区。

重複関係 本跡は, 第9号住居跡, 第20号掘立柱建物跡, 第68・69・83号土坑と重複している。本跡が第9号住居跡の北壁の覆土上層を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。また, 第20号掘立柱建物跡, 第68・69・83号土坑については切り合いがないことから, 新旧関係は不明である。

規模 桁行2間(平均3.51m), 梁行2間(平均4.50m), 柱間寸法は桁行1.60~1.95m, 梁行2.25mで, 面積は(15.80) m²以上である。遺構の南部に攪乱を受けているため, 全体の規模は不明である。柱穴は6か所(P1~P6)で, 側柱構造の建物跡である。柱穴の掘り方は, 平面形が長径0.44~0.55m, 短径0.37~0.54mの楕円形または円形である。また, 断面形は逆台形状またはU字状を呈している。深さは0.38~0.50mである。柱痕はP1・P2で確認することができた。柱の寸法は径17~27cmである。

桁行方向 N-3°-W

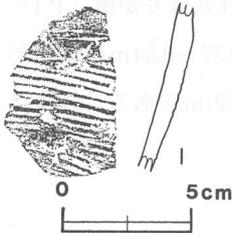
覆土 ブロック状の堆積状況がみられることから, 人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第270図 第21号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (P3を除く)

P1	1	黒褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	暗褐色	ローム粒子・黒色土を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱痕と考えられる。
	2	褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P4	1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、黒色土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	暗褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P6	4	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	1	黒褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	暗褐色	ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	4	褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	5	褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	6	明褐色	ローム粒子を中量、黒色土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	7	極暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
8	灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。	



遺物 第271図1の須恵器鉢1点が、P3覆土中から出土しているが、混入と考えられる。
所見 I区北西部の平坦部に構築されている。柱穴の規模は、深さが不揃いであるが、柱間寸法と断面形にはほぼ規則性が認められる。他の側柱構造の掘立柱建物跡と比べて規模が異なる。よって、奈良・平安時代に構築された関連施設とは言い難い。時期は中世以降と考えられる。

第271図 第21号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
第271図 1	鉢 須恵器	体部	外面平行タタキ。内面ナデ、一部ヘラナデ。	TP34 P3覆土中 灰白色

(2) 土坑

前述したように、当遺跡から検出した土坑341基のうち、時期が中世以降と考えられる土坑、時期や性格が不明な土坑は268基検出されている。ここでは、遺構の形態と覆土の堆積状況から、箱掘りのような方形土坑(長方形または方形で、中・近世の可能性が高い土坑)を39基、時期や性格が不明なその他の土坑を229基に分けて、詳しい位置や規模については一括して一覧表(表17・18)に記述し、第272~288図に掲載した。

第46号土坑土層解説

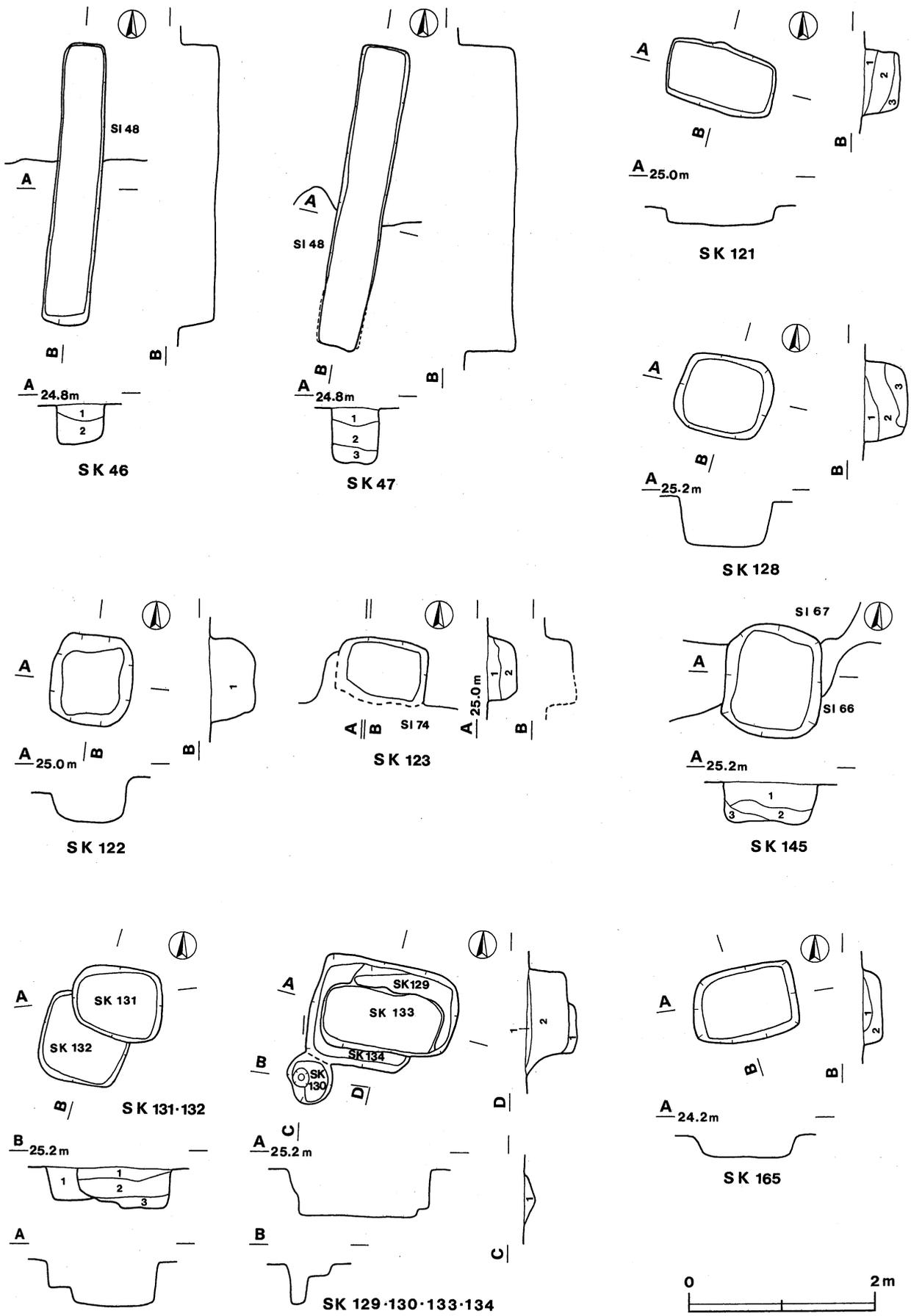
第46号土坑土層解説	1	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。	2	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、ローム大ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。	3	極暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	3	黒褐色	ローム中ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まりはない。	第122号土坑土層解説		

第47号土坑土層解説

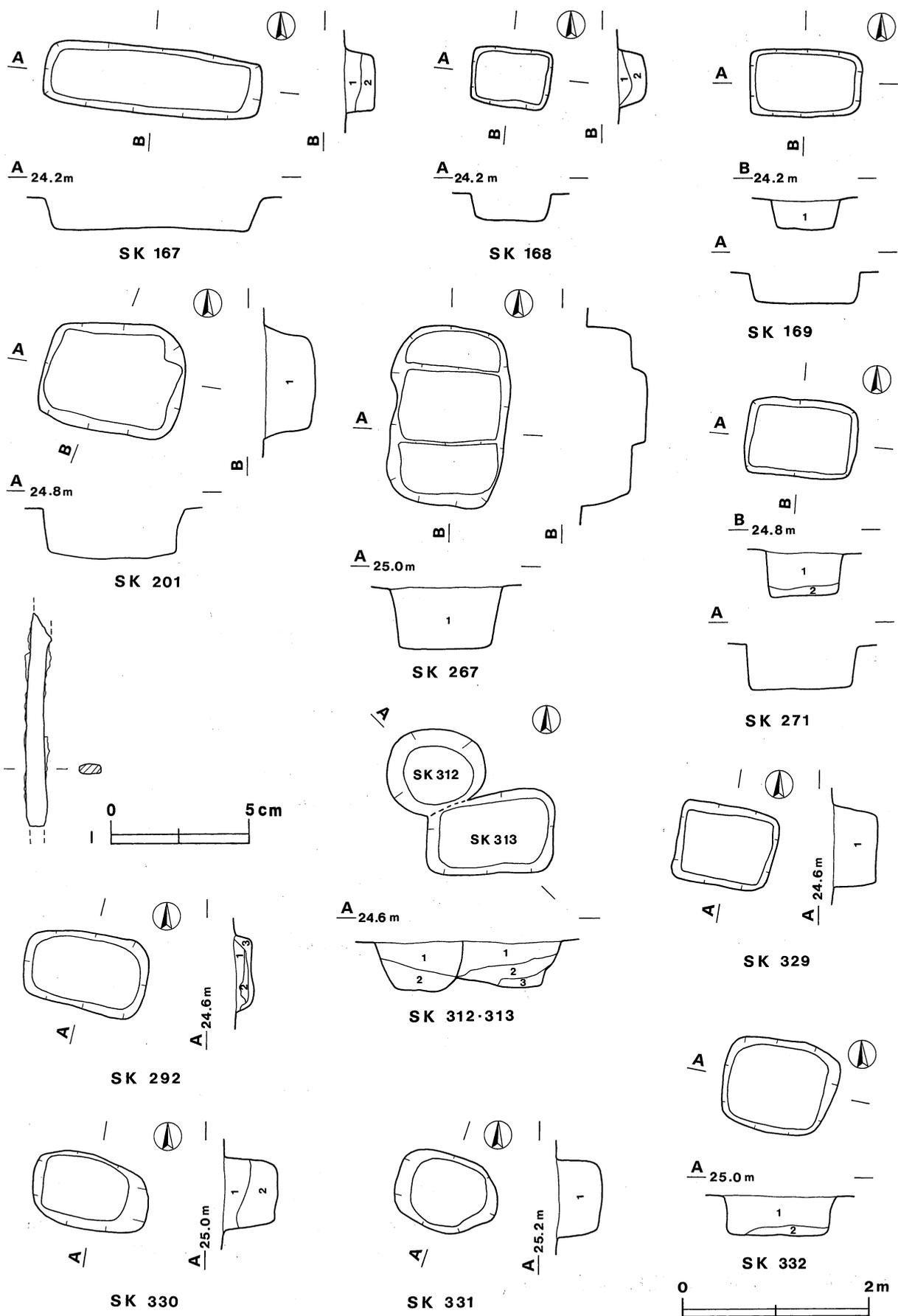
第47号土坑土層解説	1	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、ローム大ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
------------	---	-----	--

第121号土坑土層解説

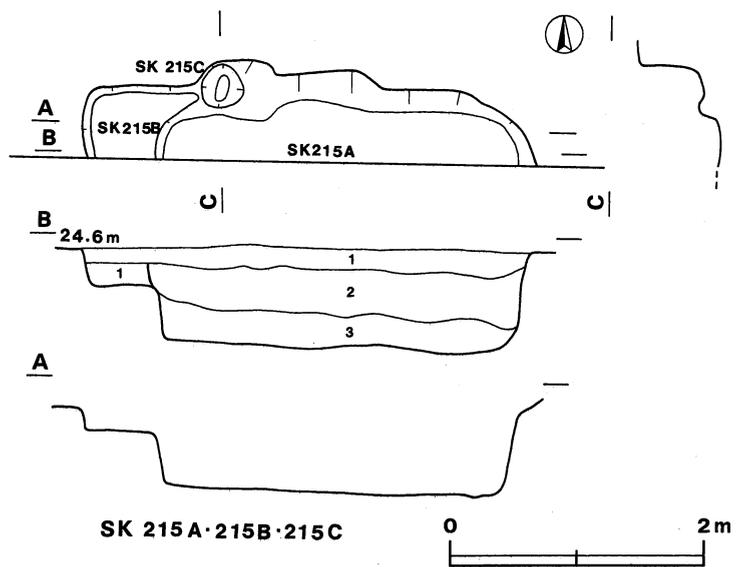
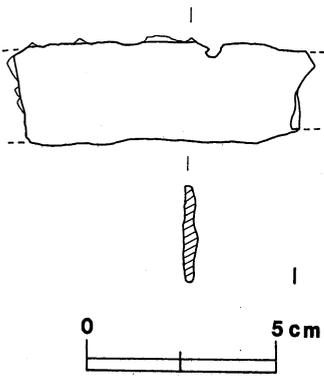
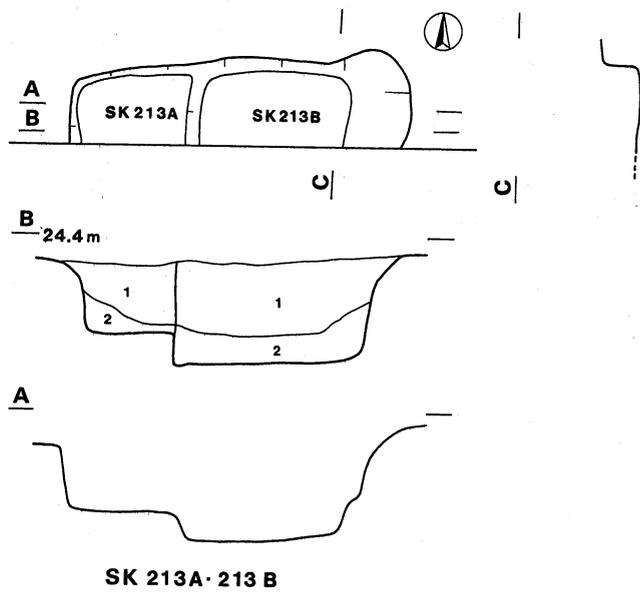
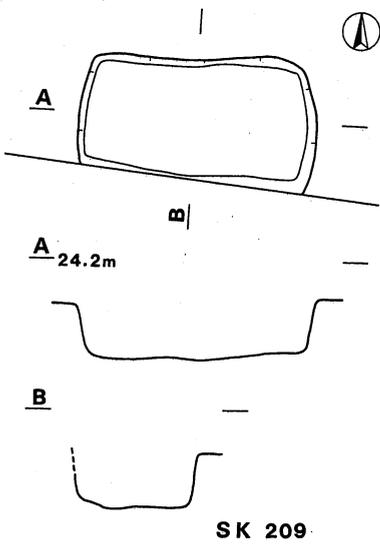
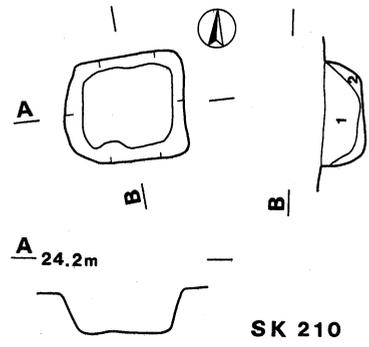
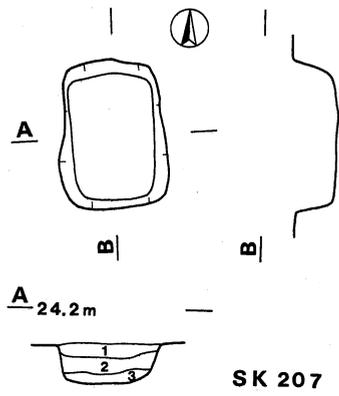
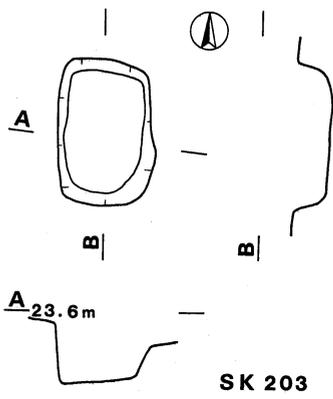
第121号土坑土層解説	1	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
-------------	---	-----	--



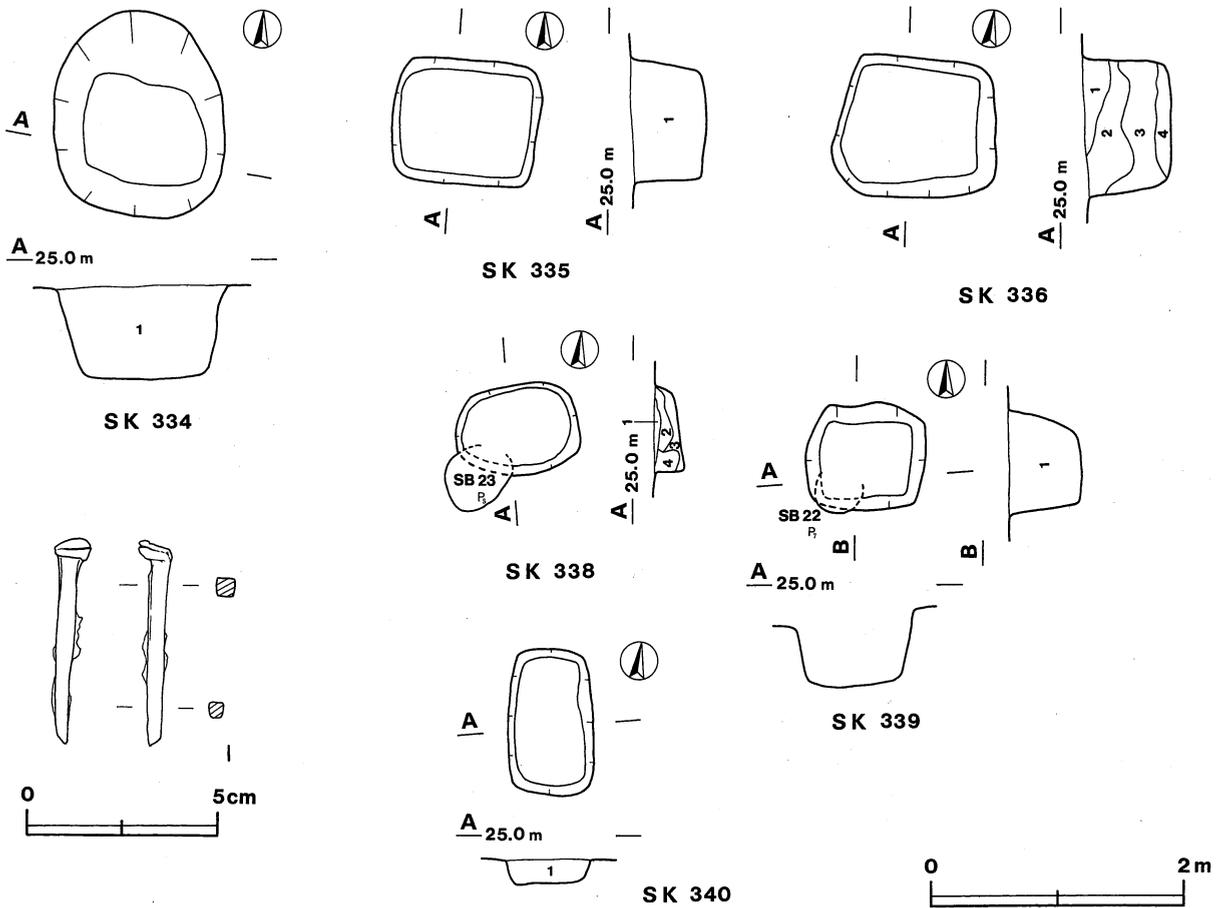
第272图 方形土坑实测图 (1)



第273図 方形土坑・出土遺物実測図(2)



第274图 方形土坑·出土遺物実測図(3)



第275図 方形土坑・出土遺物実測図(4)

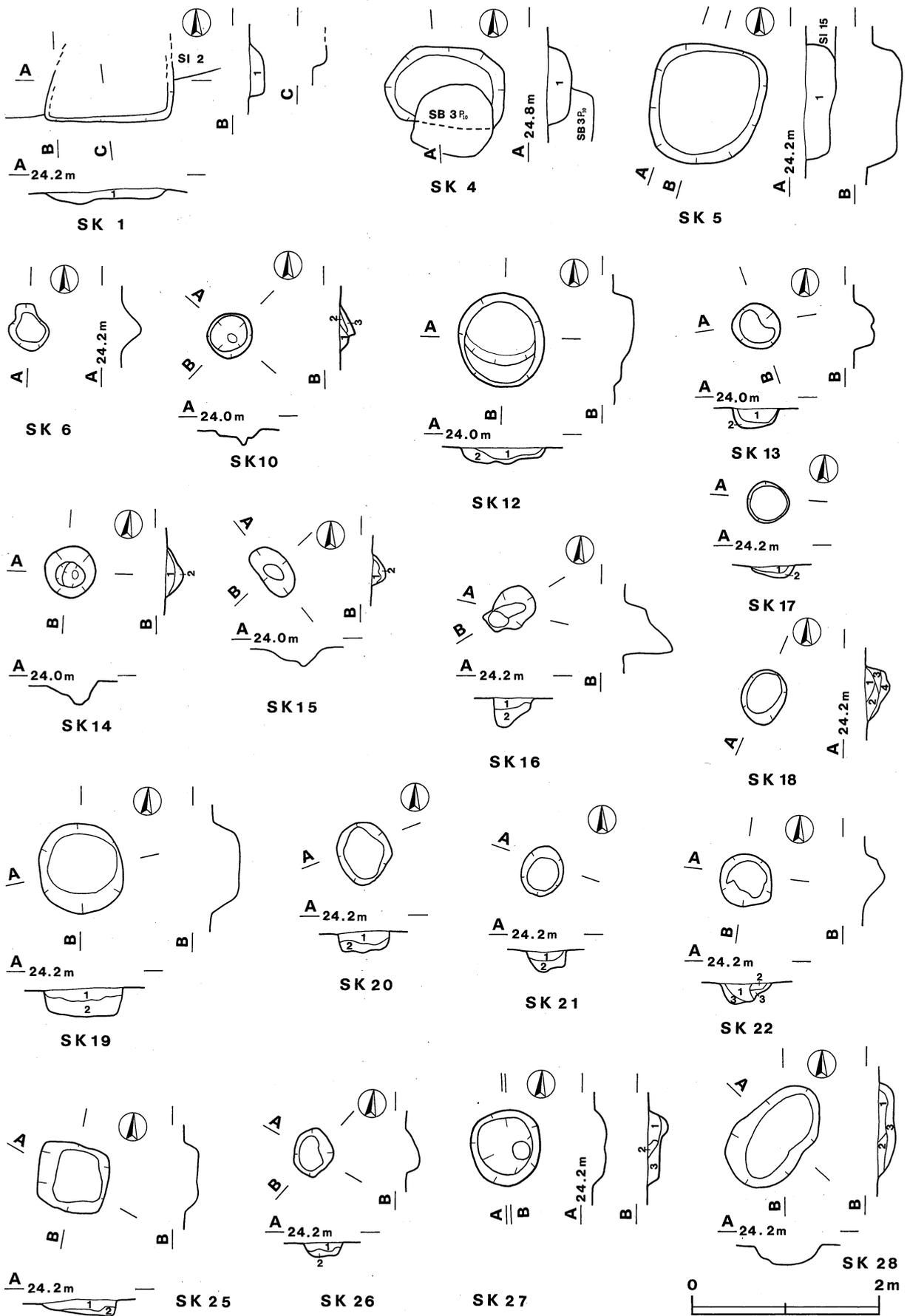
- 弱く、締まっている。
- 第332号土坑土層解説**
- 1 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 第334号土坑土層解説**
- 1 極暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 第335号土坑土層解説**
- 1 極暗褐色 ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

- 第336号土坑土層解説**
- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 第338号土坑土層解説**
- 1 黒褐色 ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘

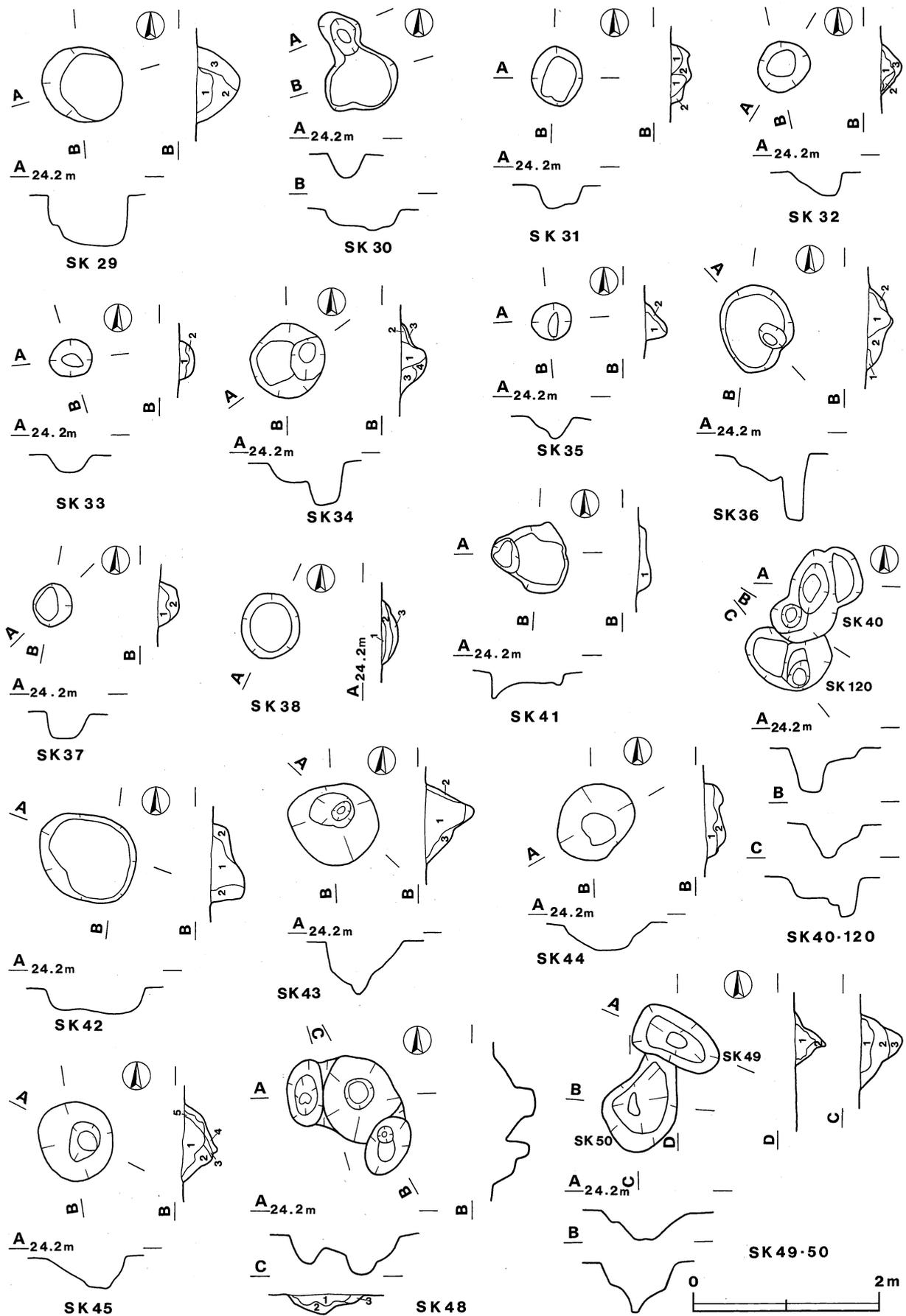
- 性を帯び、締まっている。
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 4 極暗褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 第339号土坑土層解説**
- 1 極暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 第340号土坑土層解説**
- 1 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

第201・209・334号土坑出土遺物観察表

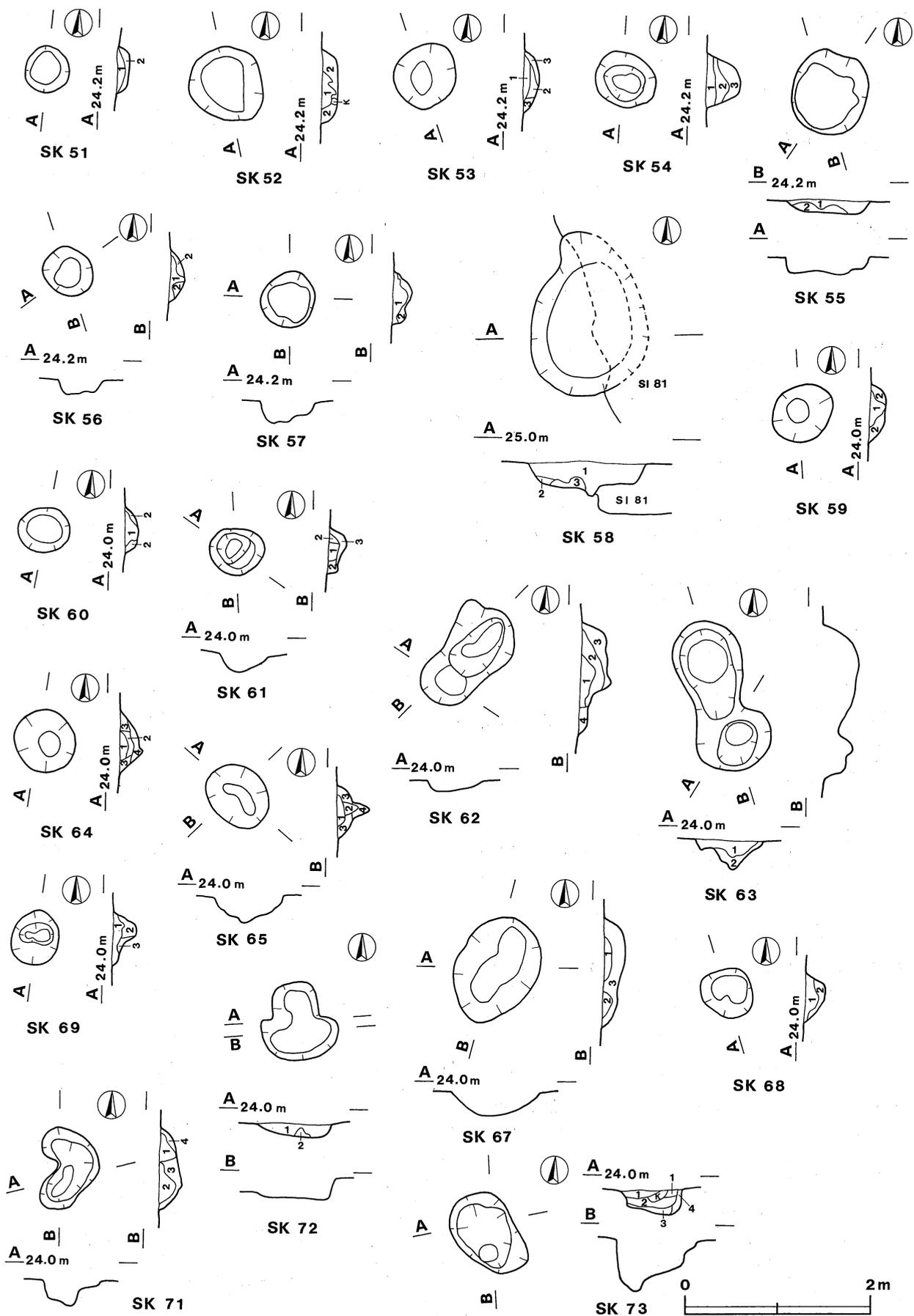
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第273図1	不明鉄製品	(7.6)	0.8	0.4	7.25	覆土中	M62
第274図1	手鎌	(8.0)	3.0	0.5	15.0	覆土中	M63
第275図1	釘	5.4	0.9	0.5	5.4	覆土中	M64



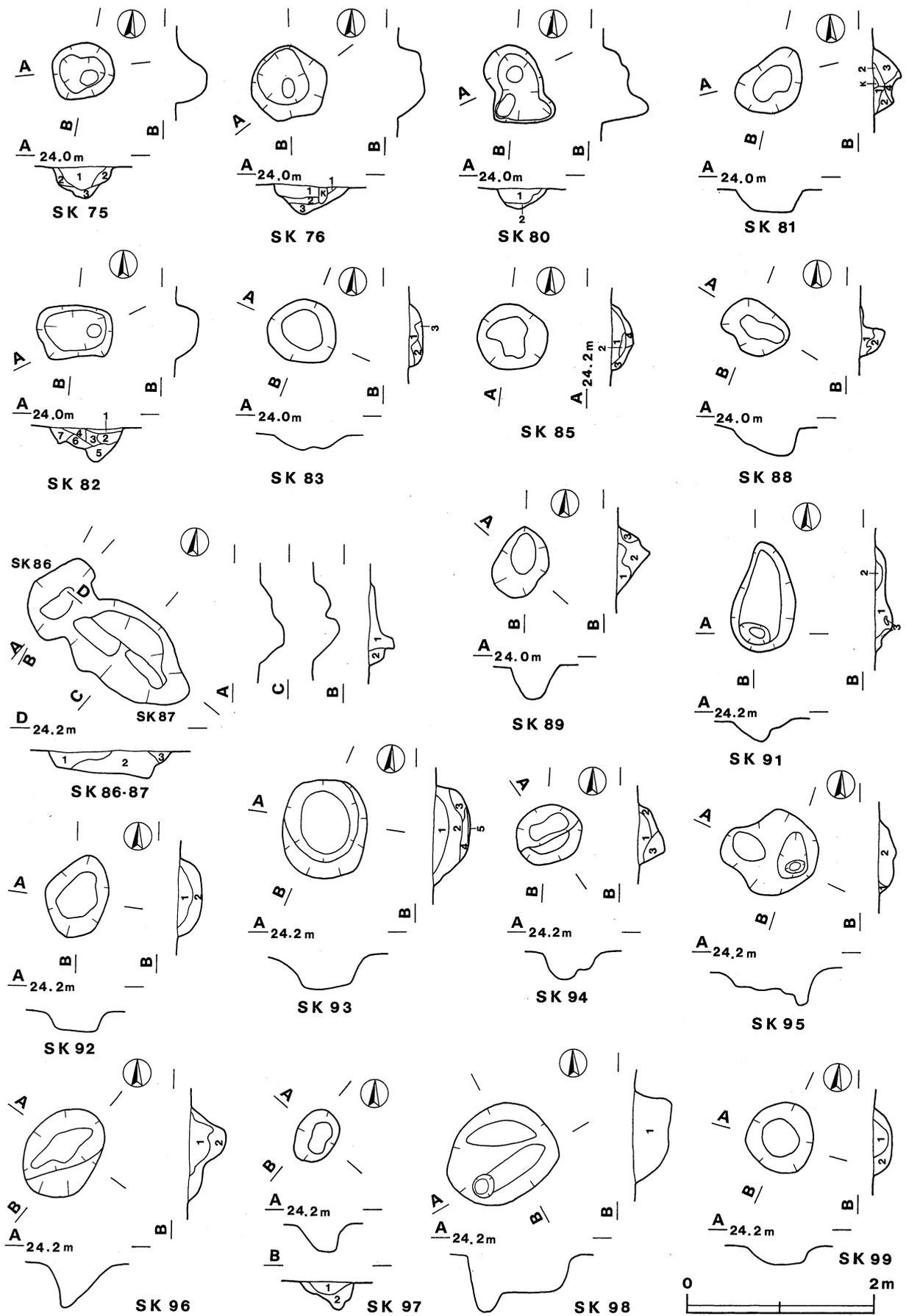
第276図 その他の土坑実測図 (1)



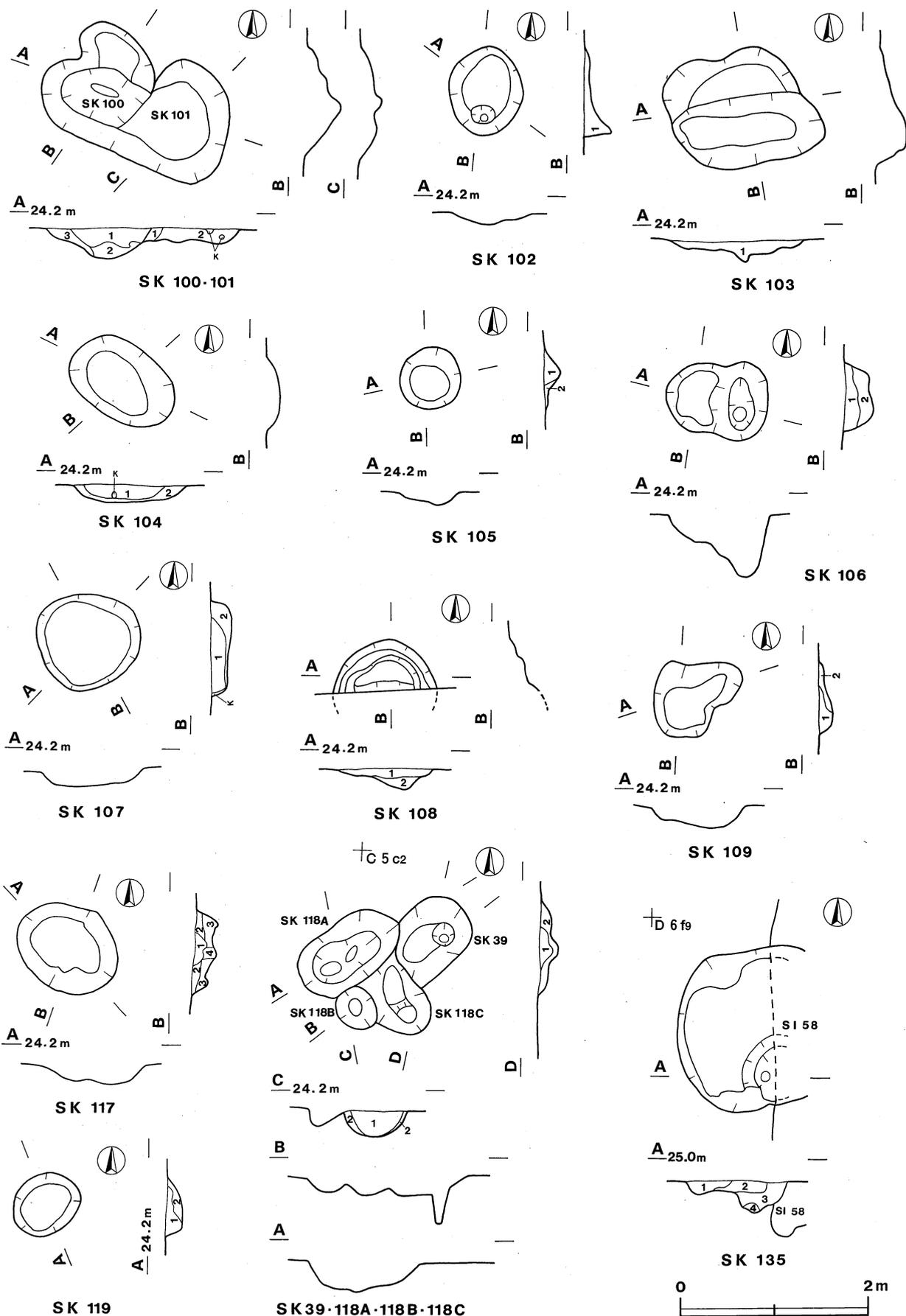
第277図 その他の土坑実測図(2)



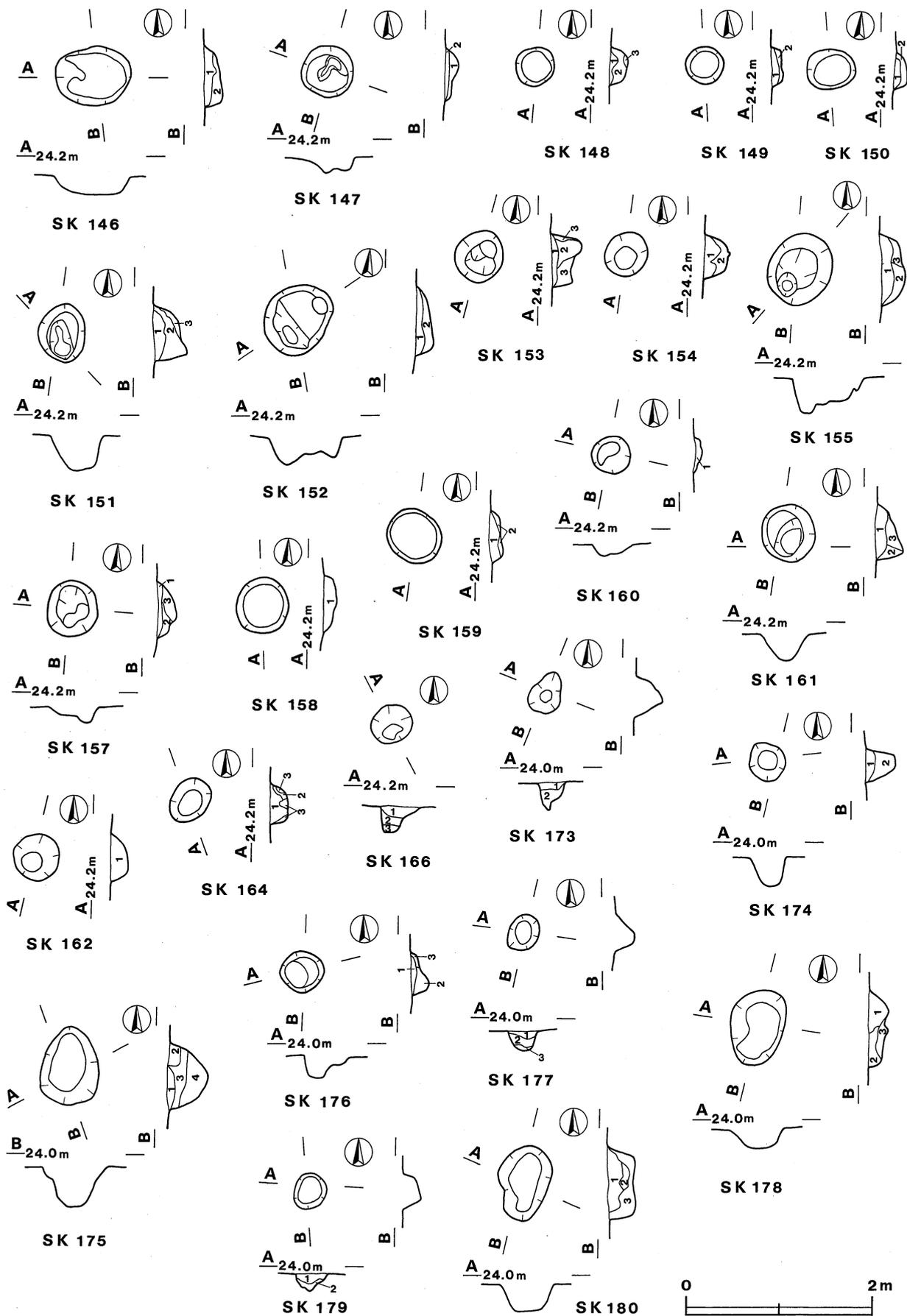
第278図 その他の土坑実測図 (3)



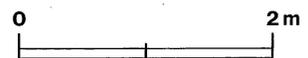
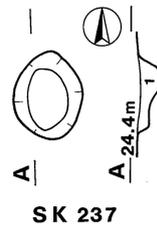
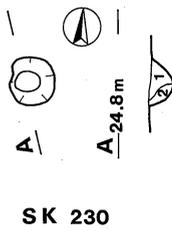
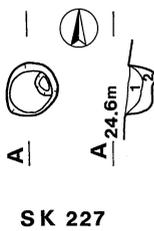
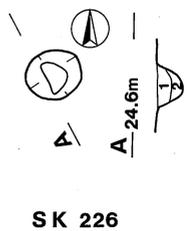
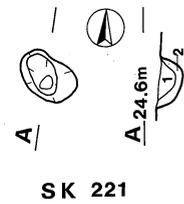
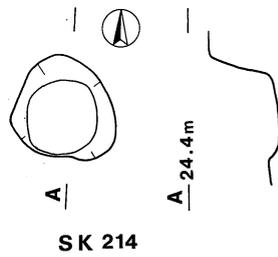
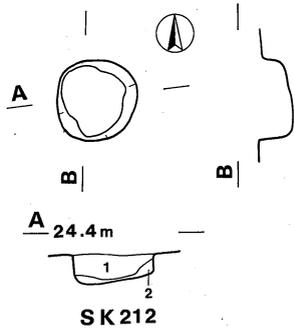
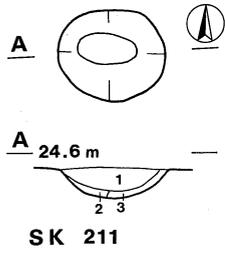
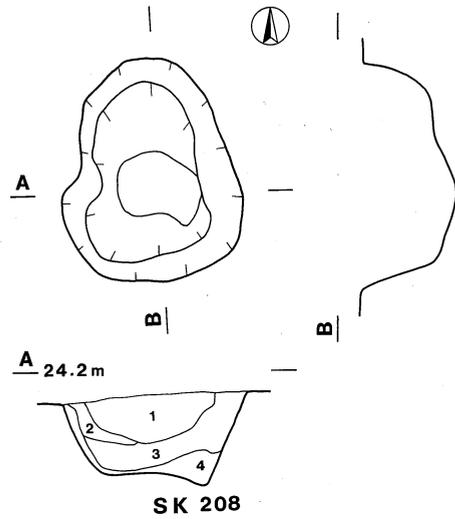
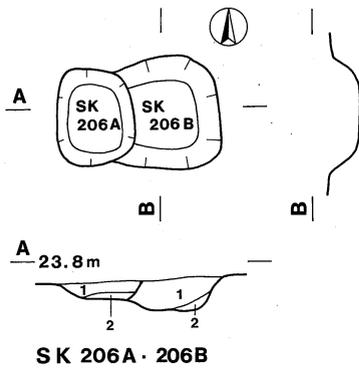
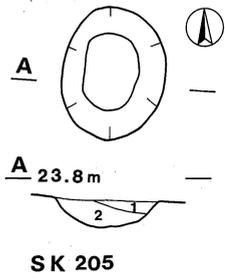
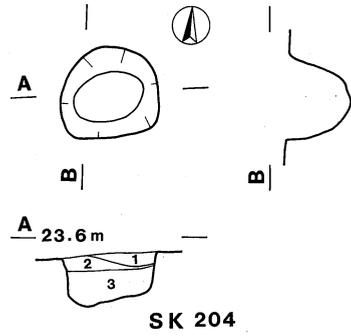
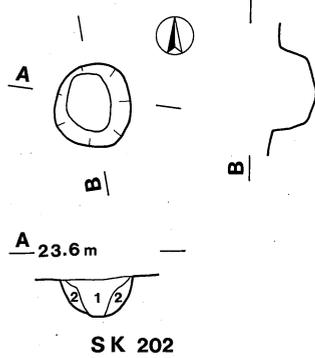
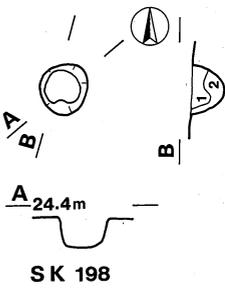
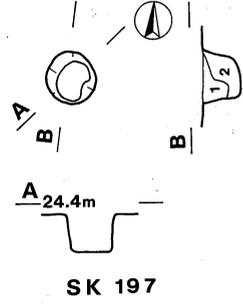
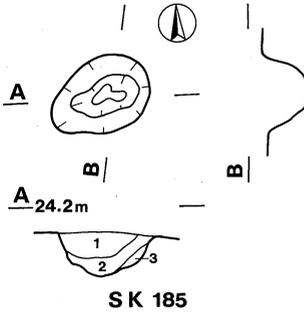
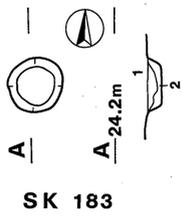
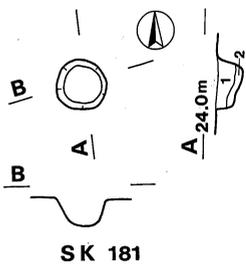
第279図 その他土坑実測図 (4)



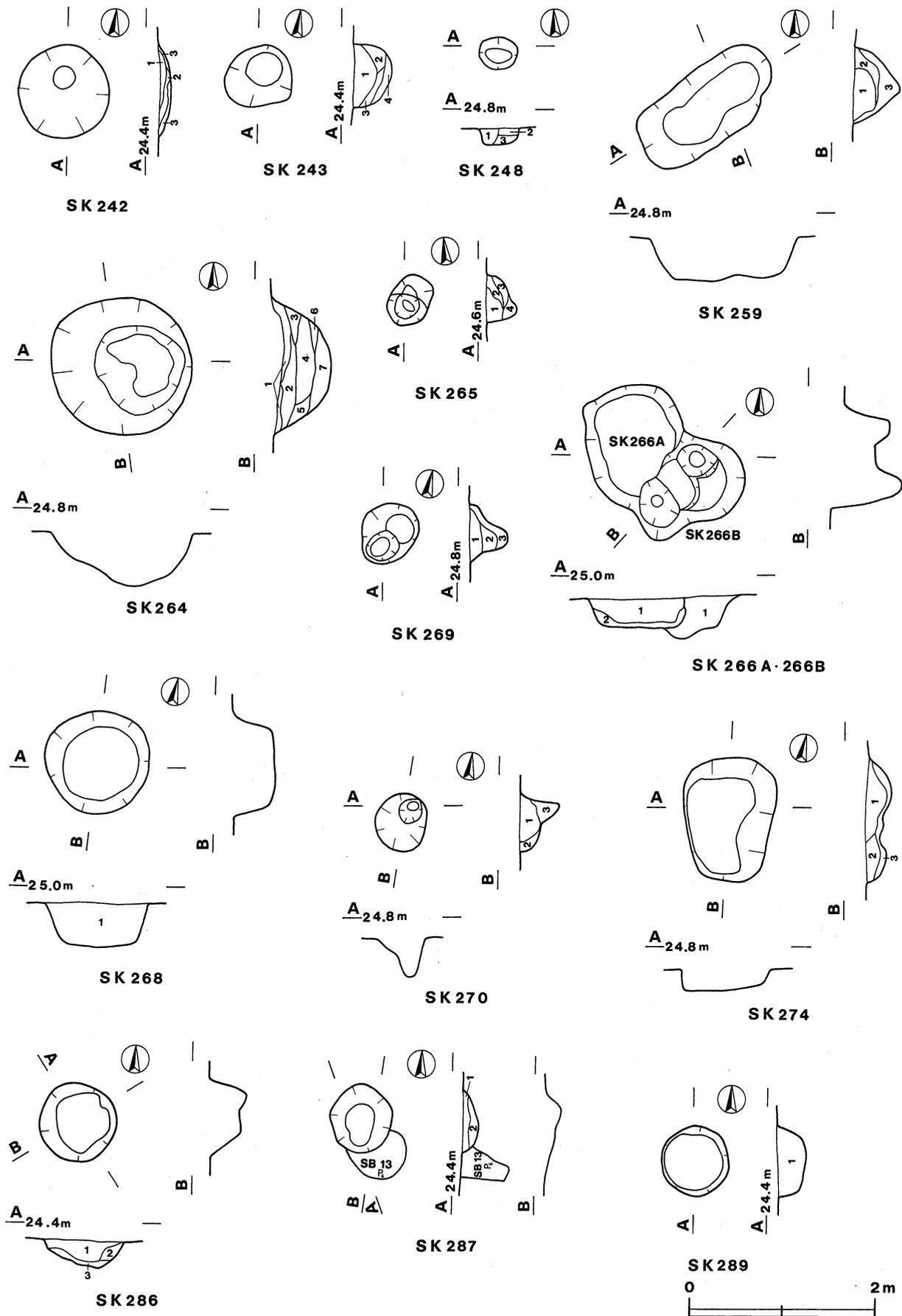
第280図 その他の土坑実測図 (5)



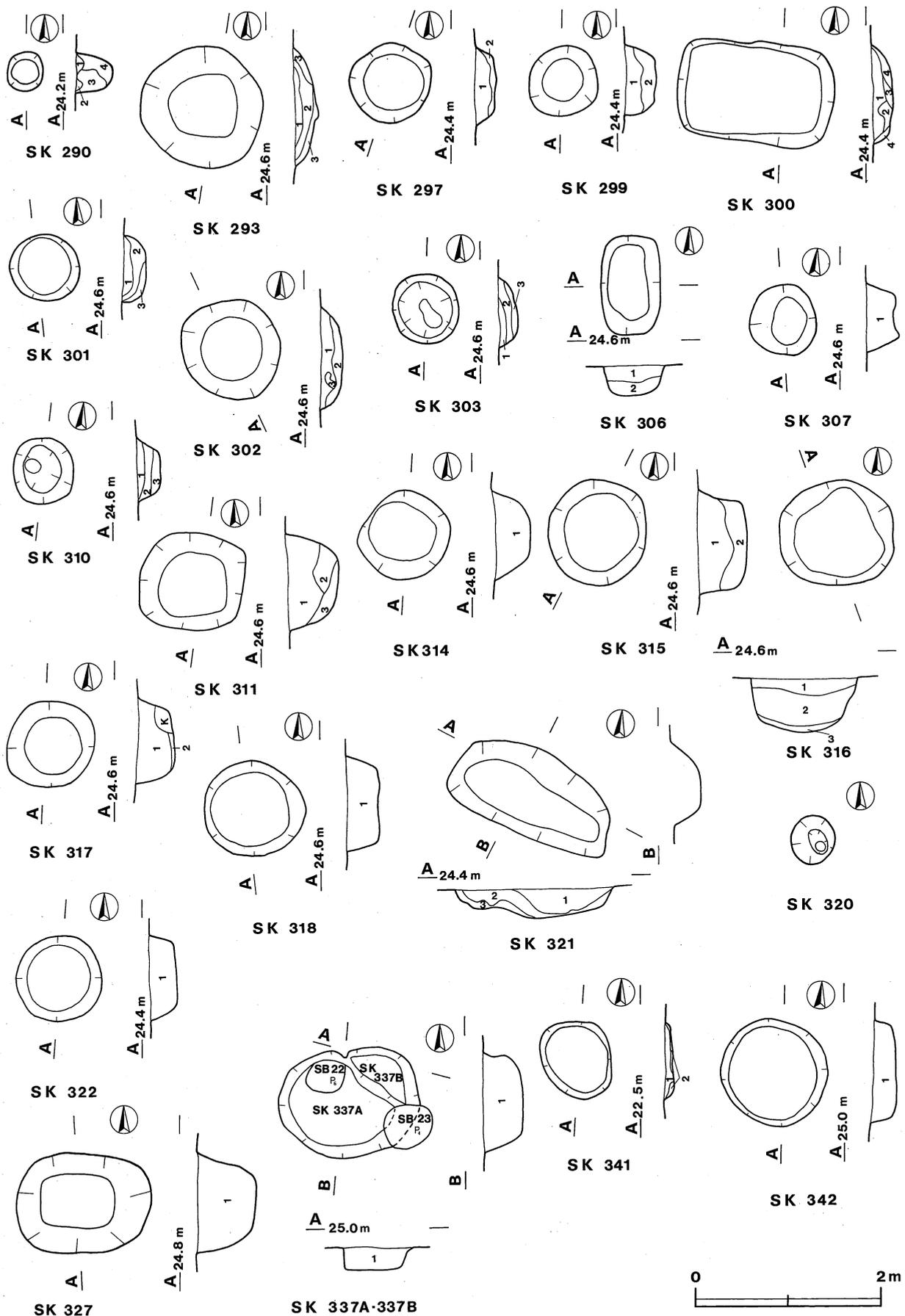
第281図 その他の土坑実測図 (6)



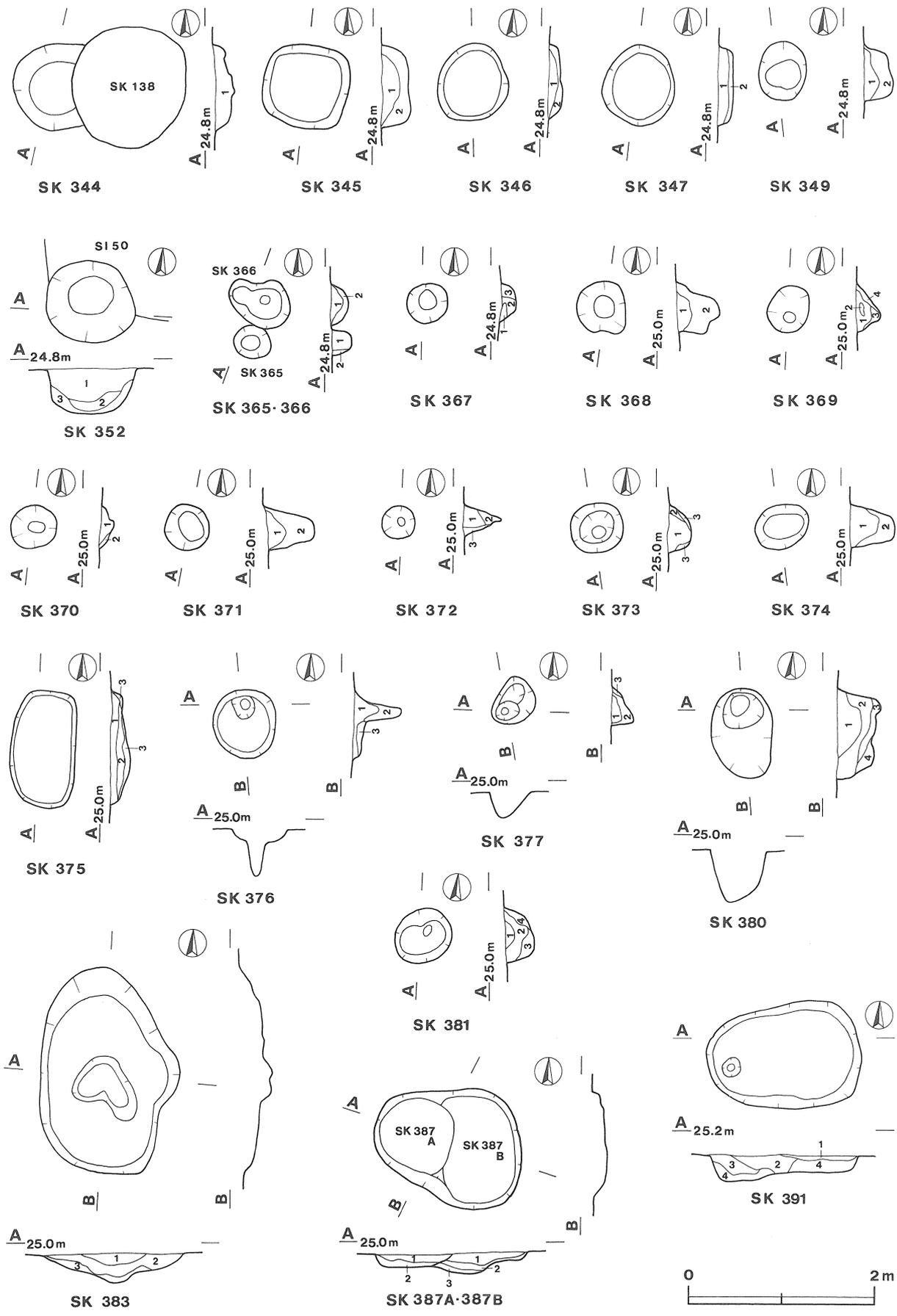
第282図 その他の土坑実測図 (7)



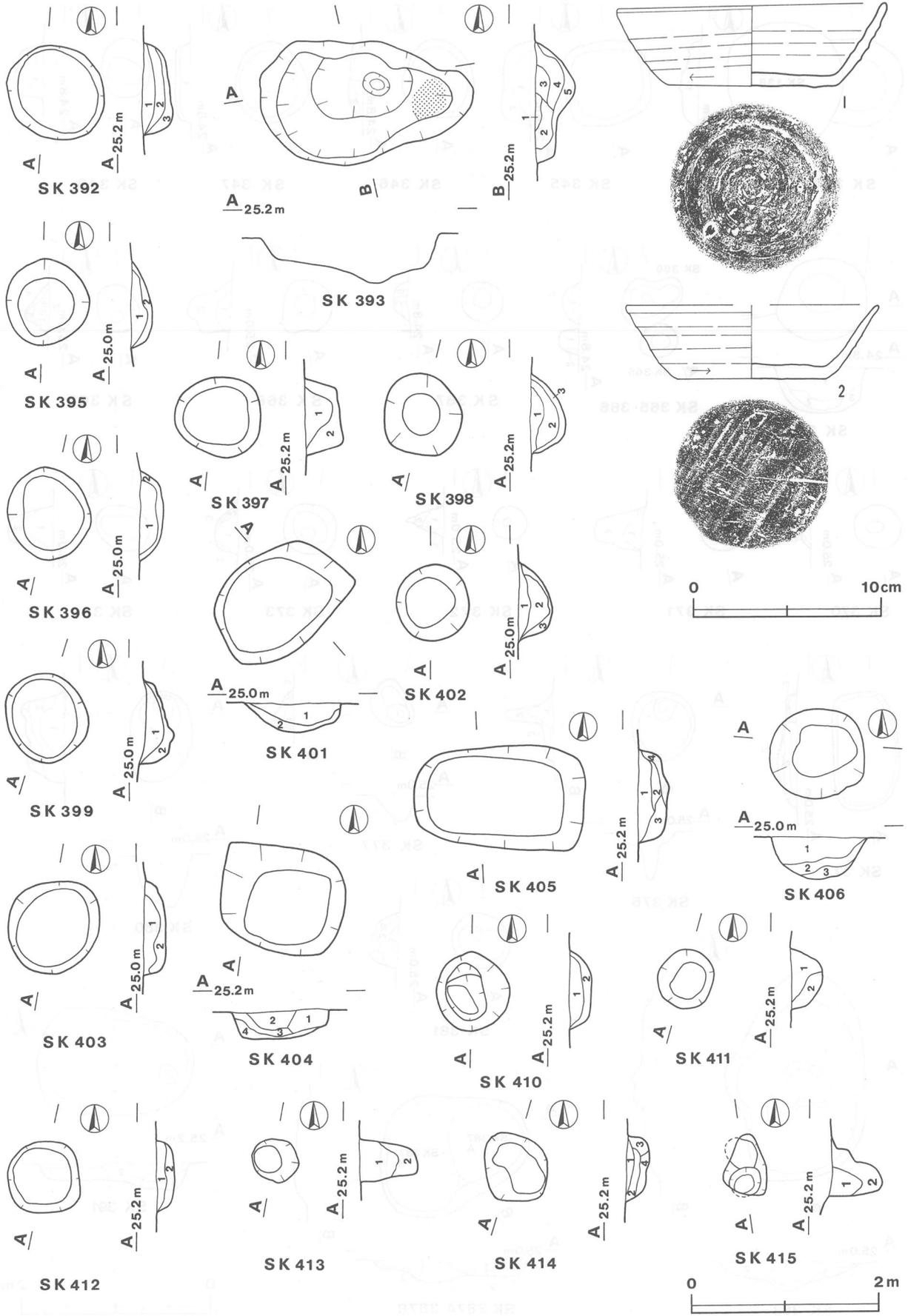
第283図 その他の土坑実測図 (8)



第284図 その他の土坑実測図 (9)



第285図 その他の土坑実測図 (10)



第286図 その他の土坑・出土遺物実測図 (11)

ックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

第397号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

第398号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。

第399号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。

第401号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性を帯び、締まっている。

第402号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。

第403号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。

第404号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。

第405号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。

第406号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。

第410号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。

第411号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

第412号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

第413号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

第414号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。

第415号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

第393号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第286図 1	坏 須恵器	A 14.3	口縁部の一部欠損。平底。体部から	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 灰黄色 普通	90% P607 第1~2層覆土中
		B 4.5	口縁部に向け、内彎気味に立ち上がる。			
		C 9.0				
2	坏 須恵器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部に向け、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	長石 砂粒 灰白色 普通	20% P608 第1~2層覆土中
		B 4.0				
		C 8.0				

(3) 溝

調査Ⅰ区の北部と北西部に溝3条，調査ⅡA区の中央部に溝1条を検出した。ここでは，その特徴について簡単に記載する。

第1号溝（付図1，第287図）

位置 調査Ⅰ区北西部，B4i9～B4j9，C4b9～C4e9区。

重複関係 本跡は，第2・3号竪穴住居跡，第1号土坑と重複している。本跡が第2・3号竪穴住居跡の覆土上層を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が新しい。また，第1号土坑が本跡の覆土を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形 本跡は，北西部を南に向かって直線的に延びている。一部攪乱を受けていること，北端と南端はともに区域外に至ることから，全体の規模は不明である。確認された長さは22.20mで，上幅0.26～0.60m，下幅0.17～0.34m，深さ0.04～0.12mである。壁面は緩やかに立ち上がり，断面形はU字状を呈している。

方向 N-2°-E

覆土 A・B断面ともに1層で，いずれも自然堆積である。

土層解説

A・B断面 1 黒褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片10点，須恵器片11点が出土しているが，混入と考えられる。

所見 浅い粗末な掘り方であることから，中世または近世の区画を目的とした溝と考えられる。

第2号溝（付図1）

位置 調査Ⅰ区北西部，B4i0～B5i1区。

重複関係 本跡は，第5号竪穴住居跡と重複している。本跡が第5号竪穴住居跡の覆土上層を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形 本跡は，調査区北西部を東に向かって直線的に延びている。長さは[6.53]mで，上幅0.35～0.54m，下幅0.14～0.29m，深さ0.20mである。壁面は緩やかに立ち上がり，断面形はU字状を呈している。

方向 N-84°-W

覆土 自然堆積である。黒褐色で，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 出土していない。

所見 浅い粗末な掘り方であることから，中世または近世の区画を目的とした溝と考えられる。

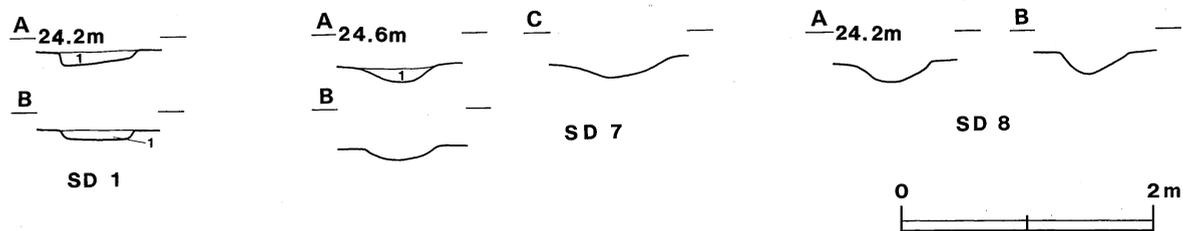
第7号溝（付図1，第287図）

位置 調査Ⅰ区北部，C6a3～C6d4区。

重複関係 本跡は，第24号竪穴住居跡と重複している。本跡が第24号竪穴住居跡の覆土上層を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形 本跡は，調査区北部を初め東に向かい，次第に曲がりながら南に向かって延びている。確認された長さは14.90mで，上幅0.56～0.82m，下幅0.21～0.61m，深さ0.10～0.12mである。壁面は緩やかに立ち上がり，断面形はU字状を呈している。

方向 N-55°-W，N-10°-W，N-0°



第287図 第1・7・8号溝土層断面図

覆土 自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 出土していない。

所見 浅い粗末な掘り方であることから、中世または近世の区画を目的とした溝と考えられる。

第8号溝 (付図1, 第287図)

位置 調査ⅡA区中央部, D 4 h1~D 4 h3区。

規模と平面形 本跡は、調査ⅡA区中央部を東に向かって直線的に延びている。長さは7.68mで、上幅0.36~0.60m, 下幅0.13~0.21m, 深さ0.15~0.20mである。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はU字状を呈している。

方向 N-90°

遺物 出土していない。

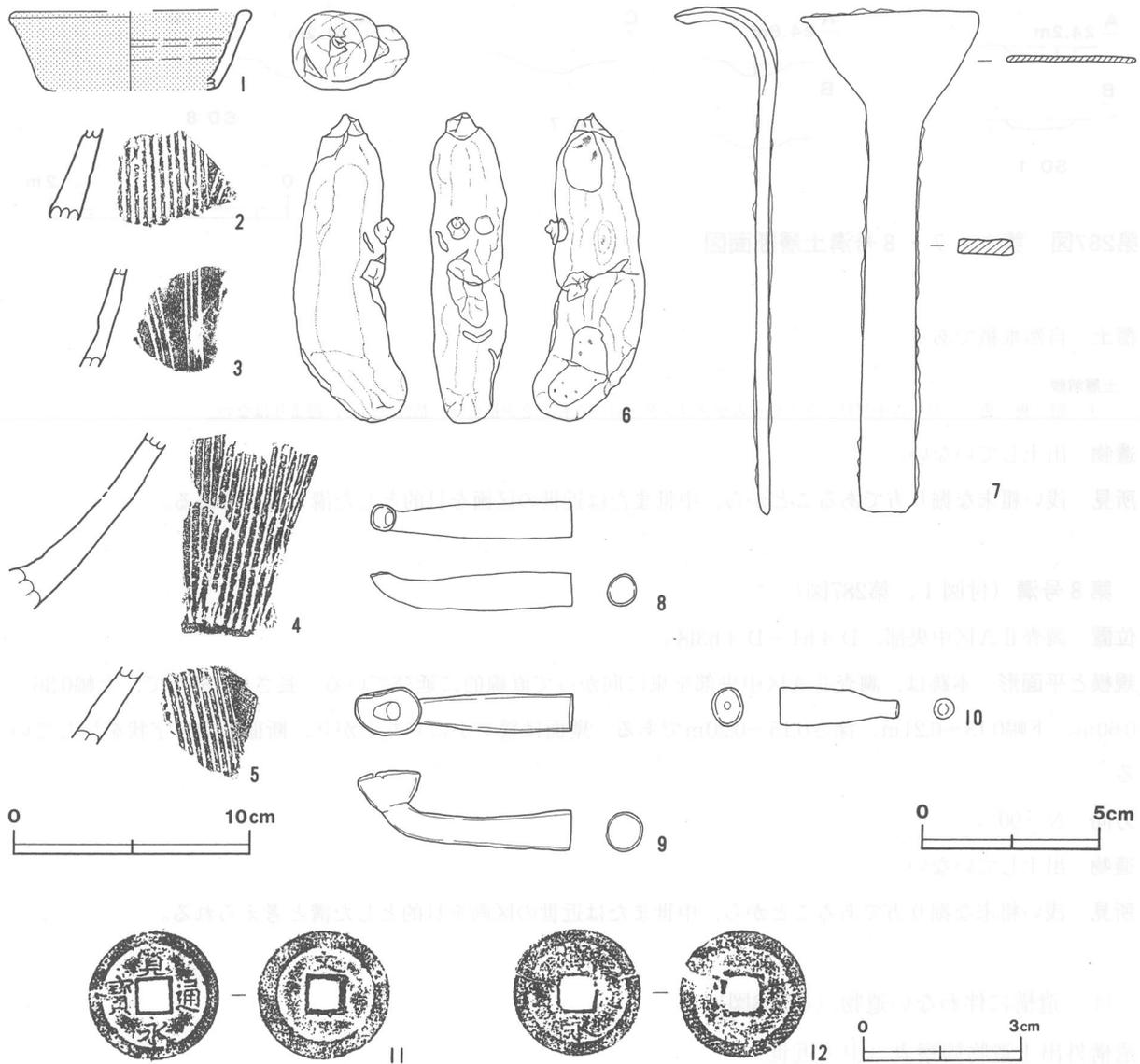
所見 浅い粗末な掘り方であることから、中世または近世の区画を目的とした溝と考えられる。

(4) 遺構に伴わない遺物 (第288図)

遺構外出土遺物観察表 (中・近世)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第288図 1	香炉 陶器	A [10.2]	底部から口縁部の破片。体部から口	口縁部内外面・体部内外面ロクロナ デ。水挽き成形。釉刷毛塗り。	砂粒 明黄褐色 普通	10% P586 I区表土
		B 3.3	縁部に向け、直線的に立ち上がる。			
		C [7.4]	口縁端部はわずかに外反する。			

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
2	播鉢 陶器	体部	内面に14本の櫛目が施されている。水挽きロクロ成形。	TP38 瀬戸・美濃系 I区表土 灰褐色, 釉 黒褐色
3	播鉢 土師器	体部	内面に3本単位の櫛目が施されている。	TP44 I区表採 浅黄橙色
4	播鉢 土師質土器	体部	内面に9本単位の櫛目が施されている。	TP46 SI73覆土中 暗赤褐色
5	播鉢 陶器	体部	内面に9本単位の櫛目が施されている。水挽きロクロ成形。	TP47 SI70覆土中 黒褐色



第288図 遺構外出土遺物実測図（中・近世）

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第288図6	不明土製品	8.8	3.3	2.0	45	I区表土	DP13

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	不明鉄製品	14.2	5.0	0.4	59.00	I区表土	M66
8	煙 管	5.7	1.1	0.9	12.00	I区表土	M67
9	煙 管	6.1	1.1	1.0	9.15	I区表土	M68
10	煙 管	3.3	1.1	0.9	5.45	I区表土	M69

図版番号	鑄 名	初 鑄 年 年号(西曆)	鑄 造 地 名	径 cm	出 土 地 点	備 考
11	寛永通寶	寛文8年(1668)	日 本	2.5	I区表土	M70新寛永「文」銭
12	寛永通寶	不 明	日 本	2.4	I区表土	M71新寛永?

第4節 まとめ

1 はじめに

当遺跡からは、旧石器時代、縄文時代、奈良時代、平安時代、そして中・近世までの遺構が検出され、多くの遺物が出土した。これらは、先人達の生活の一端について、少なからず解明する手がかりになるであろう。ここでは、調査の成果を概観し、旧石器時代の遺物について、また、奈良・平安時代の集落について若干の考察を加えて、まとめとしたい。

2 平成9年度調査成果の概観

平成9年度に調査された各時代の遺構や遺物は、以下の通りである。

旧石器時代では、4か所の石器集中地点が確認され、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、抉入石器、剥片など88点が出土した。集中地点以外でも、表面採集や他の時代の遺構へ混入していた石器が多く確認されており、総数114点を確認した。約2万8千年前から、当地で人々の生活が営まれていた一端を示している。

縄文時代では、陥し穴3基が検出された。遺構からは遺物が出土していないため、その時期は不明である。表面採集や他の時代の遺構へ混入していた縄文土器片は、縄文時代前期から後期の土器（浮島Ⅱ式、阿玉台式、加曽利E式、加曽利B式）で、中でも中期から後期の土器が中心になっている。その他、石鏃7点、石鏃の未製品1点、剥片1点が出土している。縄文時代の長い時間にわたり、付近に集落が形成されていた可能性がある。

弥生時代、古墳時代の遺構と遺物は確認されていない。

当遺跡の中心的な時代は、奈良時代と平安時代である。奈良時代の住居跡34軒、平安時代の住居跡40軒、掘立柱建物跡27棟、堀1条、土坑73基が検出され、遺物では土師器（墨書土器）、須恵器（墨書土器、刻書土器、円面硯）、灰釉・緑釉陶器、瓦、土製品（紡錘車、支脚）、石製品（紡錘車、支脚）、石器（砥石）、鉄製品（鉄鏃、刀子、鉄斧、釘、火打金、金鎚、金床、手鎌、門）、鍛冶関連遺物（羽口、鉄滓）、漆膜と漆紙（曲げ物に詰められていた漆の皮膜と、蓋として使われていた紙）などが出土している。当時の中心的集落として、住居跡や掘立柱建物跡、堀が意図的に配置されている。

中・近世では、掘立柱建物跡3棟、土坑39基、溝4条が検出しされ、土師質土器、陶器片、鉄製品（鎌、釘）、銅製品（煙管、古銭）などが出土している。また、時期不明の土坑229基が検出されている。遺構の関連は不明であるが、掘り方のしっかりした方形土坑、直径1m位の円形土坑、区画を目的とした溝なども検出されていることから、墓域として機能していたことも考えられる。

3 旧石器時代の遺物について

今回の調査では、旧石器時代の遺物114点を確認し（表8）、4か所の石器集中地点を検出することができた。しかし、具体的な生活跡としての遺構を確認することはできなかった。そこで、ここでは出土した遺物の中でも特徴的なナイフ形石器と出土した石器の石材、各石器集中地点との関連について簡単に述べることにする。

まず、出土したナイフ形石器は14点で、旧石器時代の遺物全体の約12%を占める。石材は、14点中、黒曜石が11点、硬質頁岩、瑪瑙、チャートがそれぞれ1点ずつである。A T層より古い時期の製作技法をもつものや、瀬戸内型の特徴をもつもの、典型的な基部加工のものなどが確認されている。石器集中地点から出土したナイフ形石器のいくつかはA T層下部より上層から出土するタイプで、時期的に幅を持つものであることから、石

表8 旧石器時代の出土遺物

石 材	器 種	石	石	搔	石	石	剥	碎	礫	合
		ナイフ 器形	彫刻 刀形	器	抉 器入	核	片	片		
珪 質 頁 岩							19	1		20
硬 質 頁 岩		1					2			3
瑪 瑙		1	1			1	14	2		19
チャート		1				1	4		1	7
黒 曜 石		11		1	1		28	11		52
安山岩 (ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む)						2	2	2	1	7
雲 母 片 岩							1			1
粘 板 岩								2		2
花 崗 岩									1	1
砂 岩									1	1
片 岩									1	1
合 計		14	1	1	1	4	70	18	5	114

器集中地点の時期を特定することは難しかった。また、他の時代の遺構から出土したナイフ形石器2点は南関東では第Ⅸ層下部からの出土例が多いものであり、長野県和田峠産の黒曜石を用いていることが興味深い。

これらの年代は、第Ⅸ層下部からの出土例が多いことから、約25,000年から28,000年前に比定できる。

次に、石材は、黒曜石が約46%、珪質頁岩が約18%、瑪瑙が約17%を占めている。産地が不明なものを除き、黒曜石や硬質頁岩などの遠くから搬入された石材が全体の51%あることがわかる。特に、その中心である黒曜石は、その石質の違いから栃木県高原山産や長野県和田峠産のものなど、数か所から産出されたものが確認されている。また、利根川や久慈川の上流など比較的近くで産出される瑪瑙、珪質頁岩、ガラス質黒色安山岩やチャートなどは、全体の49%を占めている。

次に、石器集中地点の性格については、製品が少なく、接合できる資料もなかったことから、詳細は不明である。点数も第4号石器集中地点を除いてそれほど多くはない。しかし、剥片が主体で、石核も含まれていることから、石器製作跡の可能性が考えられる。

年代については、当遺跡の文化層は1層で、ローム層第Ⅸ層上部から中部で多く出土していることから、約25,000年前と考えられる。

4 奈良・平安時代の集落変遷について

今回の調査から、当遺跡は、隣接している旧常陸国河内郡衙推定地や旧河内郡の郡寺とみられる九重廃寺跡(東岡遺跡)との関連が非常に強い遺跡であることが推測できる。まず、遺構についてみると、当遺跡の住居跡の時期は、その出土遺物や遺構の形態から、奈良・平安時代(8世紀~10世紀初)に限定されていると考えられる。このことは、つくば市中根地区近隣に位置している他の遺跡(柴崎遺跡、大山遺跡、天神遺跡など)の多くが、古墳時代から続いていることと異なっている。よって、奈良時代の律令成立時期に、計画的な集落として成立したと思われ、郡衙の役人階級との結びつきが予想される。また、奈良時代前期から奈良時代後期(8世紀前葉から後葉)と考えられる掘立柱建物跡の配置は、調査Ⅰ区の中央部に東西に広がる群、中央部から南に広がる群、南西部から調査ⅡA区東部にかけて広がる群の、おおよそ3群に分けることができる。特に、一番北に近く、西から郡衙推定地や郡寺跡のある東に向かって一直線に並んでいる掘立柱建物跡群の北

端は、調査Ⅰ区東部に位置する奈良時代（8世紀）の堀の北端とほぼ同緯度であり、その北側には掘立柱建物跡は配置されていない。よって、堀は集落を区画する性格があると思われる、この堀の内側に配置された掘立柱建物跡群は、集落の中で計画的・機能的に配置されたと考えられる。このように、規則的、機能的な集落構造を持っていることが理由のひとつである。

次に、特徴的な遺物をあげてみると、愛知県猿投窯産（黒笹90号窯式）の緑釉陶器（椀）が3点、猿投窯産（黒笹14・黒笹90・折戸10・井ヶ谷78号窯式）の長頸瓶・椀・平瓶、二川窯産の長頸瓶などの灰釉陶器が48点、墨書・刻書土器19点、須恵器円面硯2点、漆膜と漆紙、鉄鉢形須恵器鉢、郡寺のものと考えられる瓦3点などがあげられる。また、鉄製品は総数75点を数えるが、その中で一番多いのが刀子33点で、約44%を占め、鉄鏃は少ない。これらは、この集落が、郡衙や郡寺などと強く結びついた集落で、高い文化程度を誇り、仏教信仰が集落内で普及していたことを示している。そして、郡衙で働く役人や仏教信仰に係わる人々の生活をうかがわせる貴重な資料である。

当遺跡は平成9年度からの、3年計画の調査が継続中である。そこで、集落跡としての、全体の性格を把握するにはまだ資料が十分とは言えないが、出土遺物と住居跡の重複関係をもとに、時期が明確なもの71軒を6期に区分し、住居跡と掘立柱建物跡、堀の係わりについて、各期ごとに若干の検討を行い、まとめとしたい。

○Ⅰ期 奈良時代前期（8世紀前葉）…3軒（第289図）

古墳時代の住居跡が確認されていないことから、この時期が集落の形成期と思われる。第44・80・81号住居跡が該当し、第44号住居跡は調査Ⅰ区南西部に、第80・81号住居跡は東部に位置している。第80号住居跡は竈の位置は不明であるが、他は竈を北側に持っている。主軸方向は $N-7^{\circ}\sim 21^{\circ}-W$ の範囲で、若干の規則性が認められる。平面形は方形または長方形で、規模は第44号住居跡の 27.3m^2 を最大として、中形と小形の住居跡である⁽¹⁾。規模による住居跡の組み合わせは不明である。第44号住居跡には、竈の左脇に棚部が付設されている。

遺物は、土師器（坏・小形甕・甕など）、須恵器（坏・盤・鉢・円面硯など）、土製品（支脚）、石器（砥石）、鉄製品（刀子）が出土している。特に、第44号住居跡の床面から出土した須恵器円面硯は、焼成が良好で他地域からの搬入品と考えられる。

○Ⅱ期 奈良時代中期（8世紀中葉）…6軒（第289図）

第2・3・14・41・85・87号住居跡が該当し、調査Ⅰ区の西部と調査ⅡA区で、掘立柱建物跡群を囲むかのように位置している。住居跡はすべて北壁に竈を持っている。主軸方向は $N-25^{\circ}-W\sim N-4^{\circ}-E$ の範囲で、第41号住居跡を除いて、北から西寄りの主軸を持っており、若干の規則性が認められる。平面形は方形または長方形がほとんどで、規模は第41号住居跡の 16.8m^2 を最大として、すべて小形の住居跡である。前期よりも小形化が進んでいることがわかる。

遺物は、土師器（坏・小形甕・甕など）、須恵器（坏・高台付坏・盤・蓋・鉢・甕・長頸壺・コップ形土器など）、土製品（支脚）、石器（砥石）、鉄製品（金槌・金床・釘）が出土している。特に、第41号住居跡から出土した須恵器コップ形土器は、奈良時代に国によって規定されていた量（容積、1升=約 0.8L ）を計測する杓として平城京などで利用されたものと同形である。国家運営のための単位の標準化が地方まで行き渡っていた可能性を示している。

○Ⅲ期 奈良時代後期（8世紀後葉）…24軒（第290図）

第4・6・7・9・13・17・20・24・31・35・39B・47・48・54・56・58・65・69・70・73・75・76・79・90号住居跡が該当し、第90号住居跡を除いて、調査Ⅰ区から検出されている。調査Ⅰ区の北部、東部、南部に住居跡が集中していることがわかる。また、掘立柱建物跡群や堀の中まで住居跡が造られるようになっていくことから、この時代になって次第に掘立柱建物跡が廃絶され、住居跡が多く作られるようになっていったものと考えられる。第1号堀がこの時期に埋められたことを考えると、集落の範囲がこれまでよりも大きく広がり、調査Ⅰ区の北部に伸びているのがわかる。住居跡はすべて北壁に竈を持っている（第70号住居跡は攪乱のため竈が付設されていたかどうか不明である）。主軸方向は $N-10^{\circ}-W \sim N-12^{\circ}-E$ の範囲で、6軒を除いて西寄りの主軸を持っている。特に、 $N-10^{\circ}-W \sim N-0^{\circ}$ の範囲に17軒の住居跡が主軸を持っている。平面形は方形または長方形で、規模は第56号住居跡の 41.6m^2 を最大とするが、他に大形の住居跡が1軒、中形が3軒、小形が19軒で、78%が小形の住居跡である。そのうち、特に規模が小さい 10m^2 以下の住居跡が2軒あることから、前期よりも一層住居の規模の分化が進んでいることがわかる。また、第47号住居跡は竈の両脇に棚部が付設されている。第56号住居跡では竈の上方2か所と袖部脇の2か所に、第54・58号住居跡では竈の袖部脇の2か所にピットが確認されており、共に大形住居跡の共通した形態として注目される。

遺物は、土師器（坏・椀・高台付皿・鉢・小形甕・甕・手捏土器など）、須恵器（坏・高台付坏・盤・高盤・蓋・鉢・壺・甕・甑・捏ね鉢・短頸壺・円面硯など）、灰釉陶器（長頸瓶・平瓶）、土製品（支脚）、石製品（紡錘車）、石器（砥石）、鉄製品（短刀・刀子・鉄鏃・手鎌・釘・火打金・門）、漆膜と漆紙、炭化種子（モモ）、鉄滓が出土している。特に、第6号住居跡の竈西側袖の上から出土した須恵器鉢は、托鉢時に僧侶が使用する仏具である鉄鉢を模倣して作られたもので、集落内で仏教がどのように信仰されていたかを知る手がかりになるだけでなく、隣接している郡寺との強い関連や、国家をあげて仏教を普及させようとした当時の中央政権の力を示すものである。また、第41号住居跡の床面直上から出土している漆膜と漆紙、第58号住居跡の覆土中層から出土している須恵器円面硯は、郡衙の役人との関係を強く感じさせる。この他に、墨書・刻書土器が出土していることも特徴である。⁽²⁾第31号住居跡から墨書「度？」（須恵器坏）が、第47号住居跡から墨書「前」（須恵器坏）が、第48号住居跡から墨書「□山□」（須恵器高台付坏）が、第56号住居跡から刻書「山川」（須恵器坏、第1号堀からも同様の刻書が出土している。）などが出土している。

○Ⅳ期 平安時代前期（9世紀前葉）…13軒（第290図）

第11・28・32・36・38・39A・46・49・50・53・66・68・72・84A・84B号住居跡が該当し、第84A・84B号住居跡を除き、調査Ⅰ区から検出されている。特に、調査Ⅰ区の中央部から南側に構築されるようになり、軒数は少ないが、前期よりも掘立柱建物跡群の中に広がりを見せている。掘立柱建物跡がその機能を失っていったのがこの時期であろう。第84A号住居跡は東竈、他はすべて北壁に竈を持っている（第84B・72号住居跡は竈が付設されていたかどうか不明である）。主軸方向は $N-18^{\circ}-W \sim N-89^{\circ}-E$ の範囲で、第84A号住居跡を除くと、 $N-18^{\circ}-W \sim N-10^{\circ}-E$ の範囲である。特に、 $N-18^{\circ}-E \sim N-0^{\circ}$ の範囲に6軒の住居跡が主軸を持っていることから、若干の規則性が認められる。平面形は方形または長方形で、規模は第39A号住居跡の 23.7m^2 を最大とするが、92%が小形の住居跡である。そのうち、特に規模が小さい 10m^2 以下の住居跡が5軒あることから、規模の小形化が進んでいることがわかる。また、第53号住居跡は竈の両脇に棚部が付設されている。

遺物は、土師器（坏・高台付坏・鉢・小形甕・甕など）、須恵器（坏・高台付坏・盤・高盤・蓋・鉢・壺・甕・甑など）、灰釉陶器（椀・長頸瓶）、土製品（支脚）、石器（砥石）、鉄製品（刀子・鉄鏃・鎖）、炭化

米、鉄滓が出土している。土師器が須恵器よりも多く出土する傾向になる。特徴的な遺物としては、第39A号住居跡から出土した灰釉陶器椀で、底部外面に墨書「壬（みぶ）」が施されている。これは猿投窯産黒笹14号窯式のものと思われる。「壬」については、古くは皇室御子の養育係の役職である「壬生部（みぶべ）」に由来し、平安時代に朝廷の官僚の名字として用いられていた（「壬生氏」など）ことから、郡衙に関係した高級官僚の存在をうかがわせるものである。また、そのほとんどが細片であるが、この時期から灰釉陶器（折戸10号窯式、黒笹14号窯式）の出土量が少しずつ増加していることにも注目したい。この時期に出土した墨書土器としては、他に第38号住居跡から墨書「宗（家？）門（仏教に関連した言葉か？）」（須恵器高台付坏）が、第39A号住居跡から墨書「本戸」（土師器坏）が、第72号住居跡から「万」（土師器高台付坏）が出土している。

○V期 平安時代前期（9世紀中葉）…14軒（第291図）

第1・5・8・16・21・23・25・27・29・30・51・64・74・82・86号住居跡が該当し、第86号住居跡を除き、調査I区から検出されている。また、第51・64号住居跡を除くと、すべて調査I区の中央部の掘立柱建物跡群から北側に広がっている。前期、前々期と南側に広がっていた住居跡が、この時期になりほとんど北側に移動している傾向にある。第29号住居跡は東壁に、他はすべて北壁に竈を持っている（第51号住居跡は攪乱のため竈が付設されていたかどうか不明である）。主軸方向はN-15°-W~N-96°-Eの範囲で、第29号住居跡を除くと、N-15°-W~N-20°-Eの範囲である。特に、N-10°-W~N-10°-Eの範囲に11軒の住居跡が主軸を持ち、N-0°にいたっては6軒の住居跡が主軸を持っていることから、若干の規則性が認められる。平面形は方形または長方形で、規模は第16号住居跡の17.6㎡を最大とし、すべてが小形の住居跡である。そのうち、特に規模が小さい10㎡以下の住居跡が7軒あることから、前期よりも規模の小形化はさらに進んでいる。また、第5・8・16号住居跡は竈の両脇に棚部が付設されている。

遺物は、土師器（坏・高台付坏・高台付皿・鉢・小形甕・甕など）、須恵器（坏・高台付坏・高台付皿・盤・蓋・鉢・甕・甌・短頸壺・長頸瓶など）、緑釉陶器（椀）、灰釉陶器（長頸瓶）、土製品（支脚・紡錘車・羽口）、鉄製品（刀子・釘）が出土している。この時期になると、前期よりも土師器の出土量が増え、緑釉陶器や灰釉陶器といった特別な遺物も出土している。緑釉陶器や灰釉陶器は多くが猿投窯産の物（黒笹14・90号窯式、井ヶ谷78号窯式）であるが、中には二川窯産の長頸瓶など三河地方から搬入されたものもある。この時期の住居跡6軒から出土した緑釉・灰釉陶器は、当遺跡から出土した緑釉・灰釉陶器の46%を占める。また、この時期に出土した墨書土器としては、第16号住居跡から墨書「本井」（土師器坏）が、第27号住居跡から墨書「工？」（須恵器高台付皿）が、第30号住居跡から墨書「永成」（土師器坏）2点が、第74号住居跡から墨書「万坏」（土師器坏）と「□不」（土師器坏）2点があげられる。第82号住居跡から出土した羽口に関しては、鍛冶炉の確認もなく、鍛冶関連遺物が少量しか出土していない（第1号堀から出土した椀状滓2点といくつかの住居跡から出土した鉄滓など）ことから、使用に関する詳細は不明である。

○VI期 平安時代前期（9世紀後葉）…8軒（第291図）

第15・19・22・26・45・63・67・71号住居跡が該当し、すべて調査I区から検出されている。特に、第45号住居跡を除き、第15・19・22・26号住居跡は調査I区の北部に、第63・67・71号住居跡は南東部に分散しており、調査区域外へ広がっていることも考えられる。住居跡はすべて北壁に竈を持っている（第26号住居跡は調査区域外のため竈が付設されていたかどうか不明である）。主軸方向はN-9°-W~N-17°-Eの範囲で、4軒が東寄りの主軸を、3軒が西寄りの主軸を持っていることから、規則性は認められない。平面形は方形ま

たは長方形で、規模は第19号住居跡の15.8㎡を最大とし、すべてが小形の住居跡である。そのうち、特に規模が小さい10㎡以下の住居跡は4軒あり、前期まで続いていた小形化の傾向はここにきて終りを迎えている。また、第19号住居跡は竈の両脇に棚部が付設されており、第22号住居跡は焼失家屋であった。

遺物は、土師器（坏・高台付坏・高台付皿・鉢・小形甕・甕など）、須恵器（坏・高台付坏・高台付皿・鉢・甕など）、緑釉陶器（椀）、灰釉陶器（平瓶）、平瓦、土製品（支脚・紡錘車）、石製品（紡錘車）、鉄製品（釘・門）、鉄滓が出土している。ほとんどを土師器が占め、緑釉・灰釉陶器・墨書土器の量も減少している。陶器の産地については、緑釉陶器が猿投窯産黒笹90号窯式、灰釉陶器が黒笹14号窯式である。また、この時期に出土した墨書土器は、第19号住居跡から墨書「大山」（土師器坏）が、第67号住居跡から墨書「富？」（土師器坏）が、第71号住居跡から墨書「千」（土師器高台付坏）が出土している。

5 結び

以上のように、当遺跡の集落は、8世紀初めに形成され、8世紀中葉から9世紀中葉の間に、集落規模はピークを迎え、後に減少していく傾向がうかがえる。また、掘立柱建物跡群は8世紀前葉に既に構築され、8世紀後葉になるとその役割を終え、次第に廃絶されていく傾向にある。第1号堀の廃絶が8世紀後葉ということを見ると、当遺跡の集落は8世紀後葉までが掘立柱建物跡を伴う計画的、機能的な集落構造を示している。そして、その後、新しい集落の形成がなされ、次第に範囲が拡大していったものと考えられる。このような流れの中での郡衙や郡寺との関係は不明であるが、一番強い結びつきがあった時期は、8世紀前葉から中葉であることが推測されるのではなかろうか。また、周辺部へどのように集落が拡大していったのか、10世紀前葉以降の集落の移り変わりはどうなっていたのかという問題については、資料が乏しいことから、今後の調査に期待したい。

今回の調査で、具体的な資料の収集と検討がなされることとなったが、中原遺跡の全容については、未だ不明な点が多く、資料の裏付けについても不十分な点が多い。今後の調査の結果や研究資料の増加に期待し、改めて考えていかなければならないと思われる。

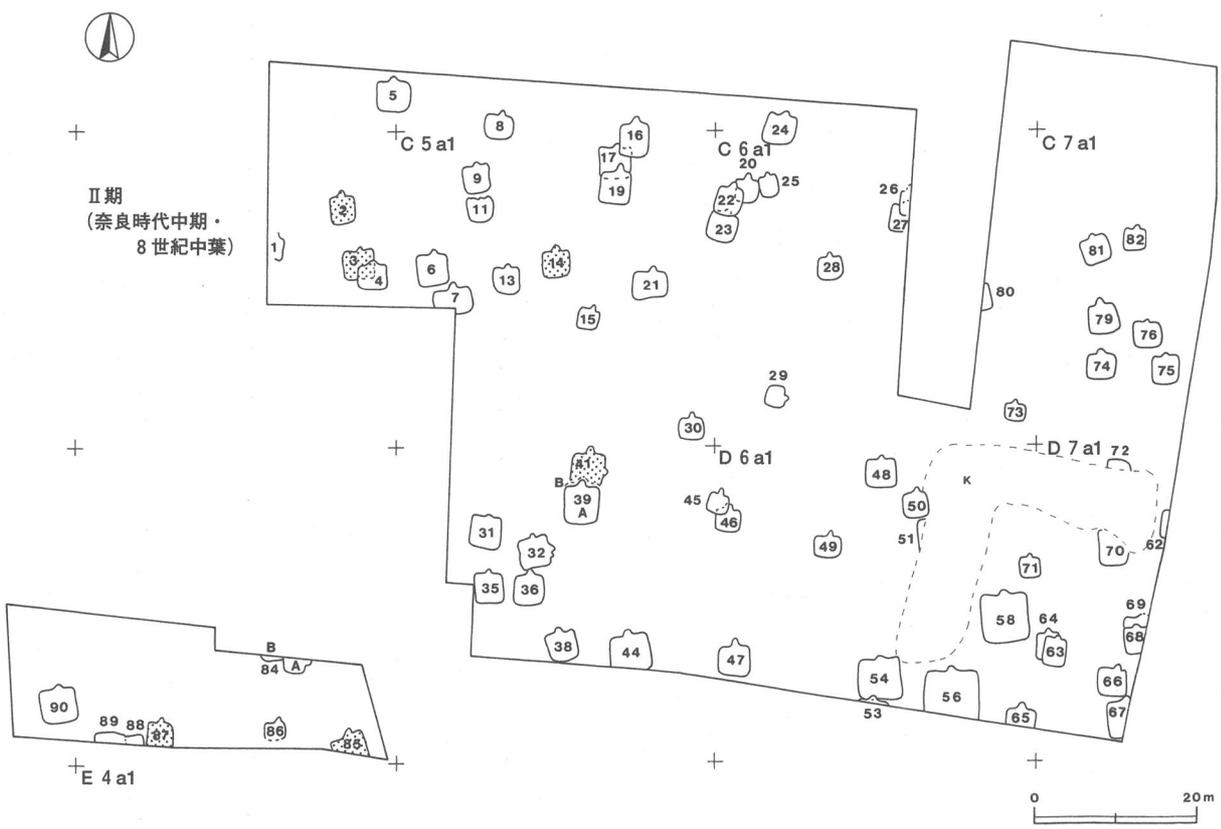
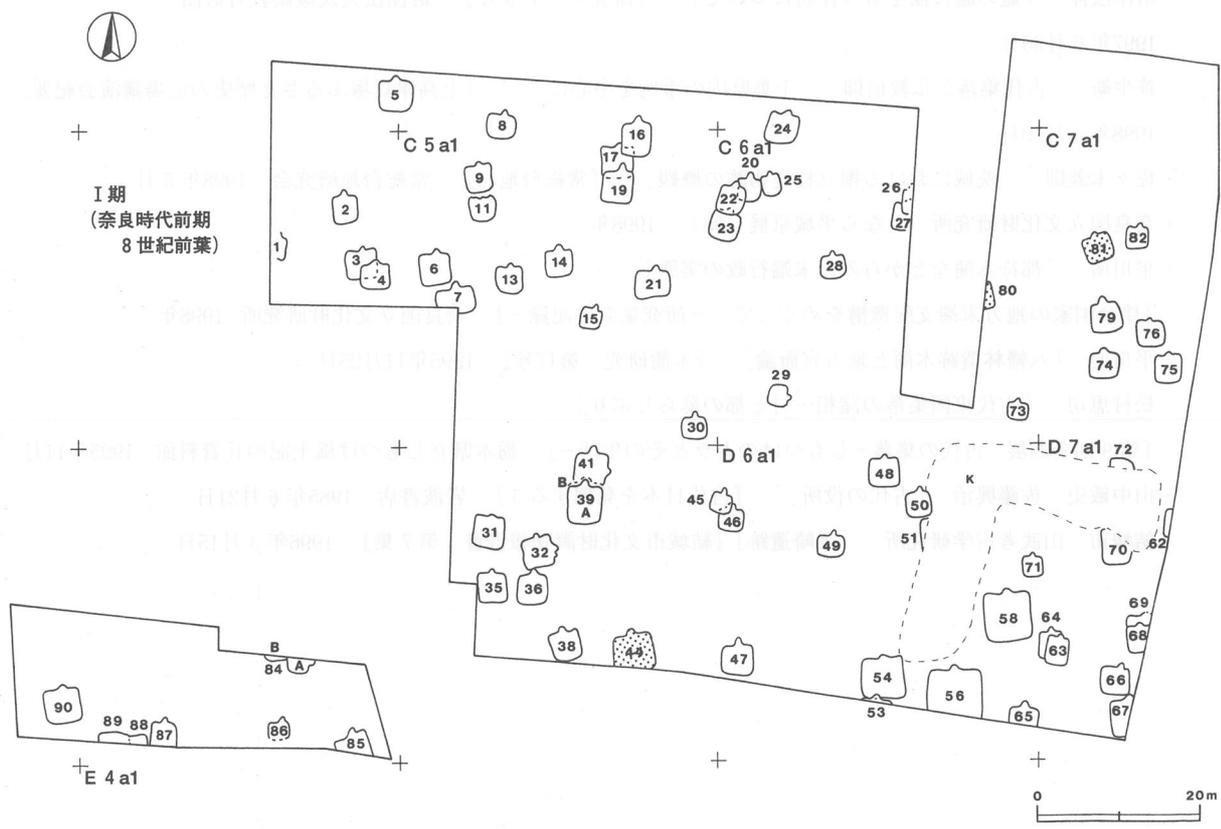
註

- (1) 竪穴住居跡の大きさを、30㎡以上を大形、30㎡未満20㎡以上を中形、20㎡未満を小形とした。
- (2) 墨書・刻書土器の解説に関しては、国立歴史民俗博物館教授の平川南氏から御教示を戴いた。

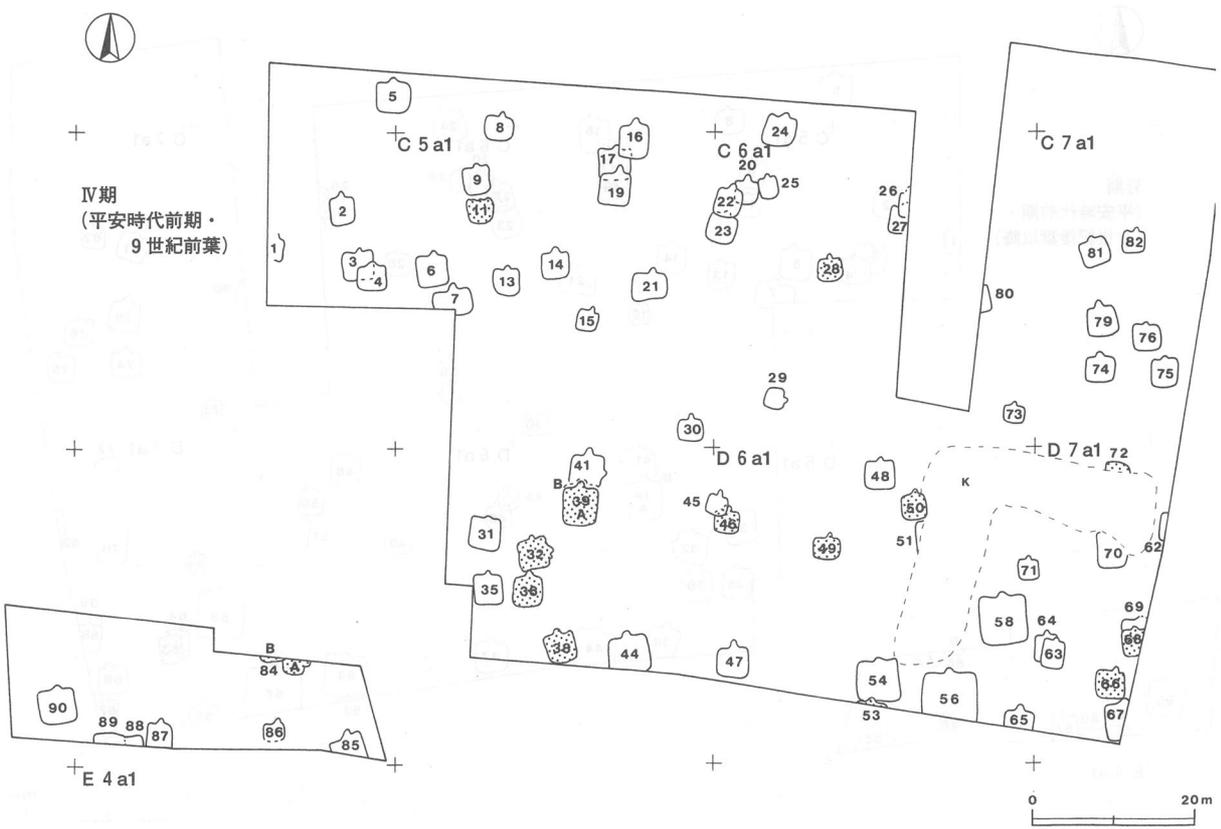
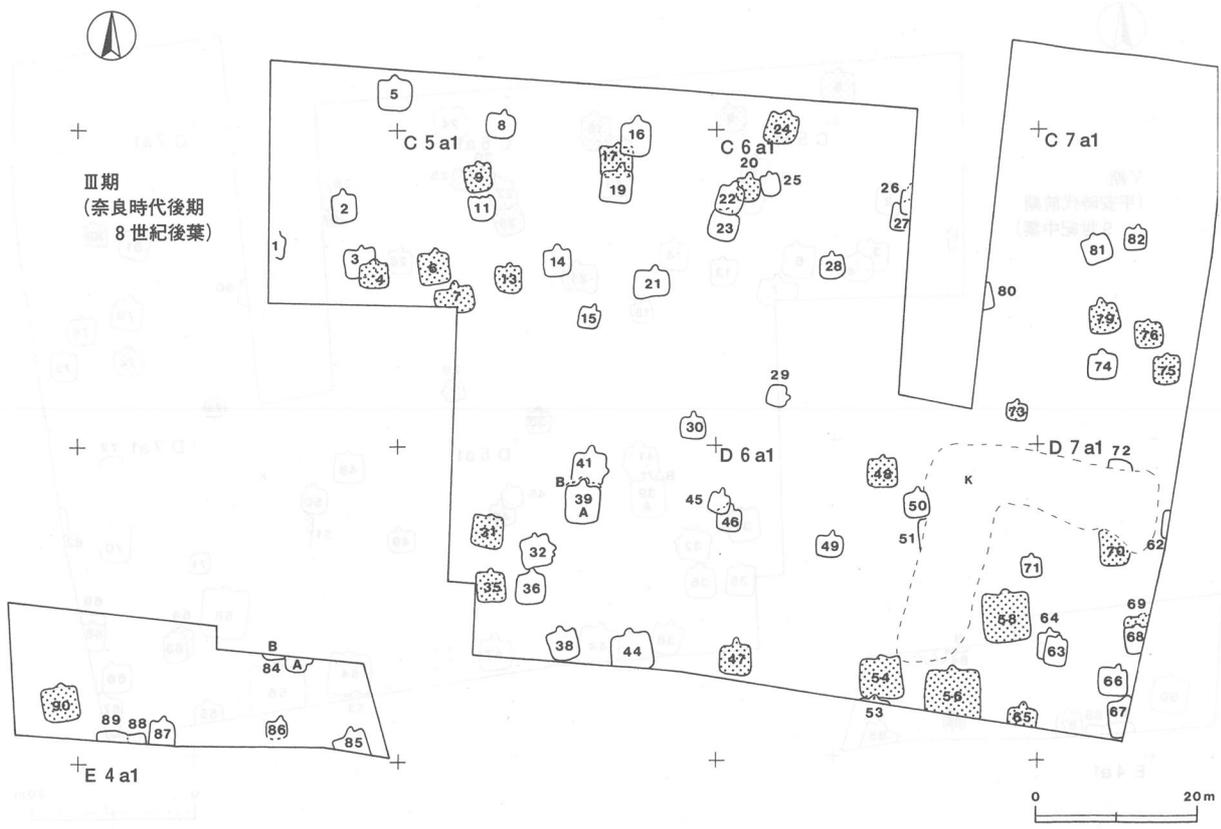
参考文献

- ・都内第二遺跡調査会 西台遺跡調査団 「西台後藤田遺跡第1地点発掘調査報告書」 1999年2月26日
- ・栃木県教育委員会 財団法人栃木県文化振興事業団 「八幡根東遺跡 一般国道4号（新4号国道）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告第181集』 1996年3月31日
- ・群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 「後田遺跡（旧石器編）」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第15集』 1987年3月31日
- ・赤井博之 「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究(1)～奈良・平安時代の須恵器編年を中心に～」『婆良岐考古 第20号』 1998年5月
- ・茨城県教育財団 「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）柴崎遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第93集』 1994年9月

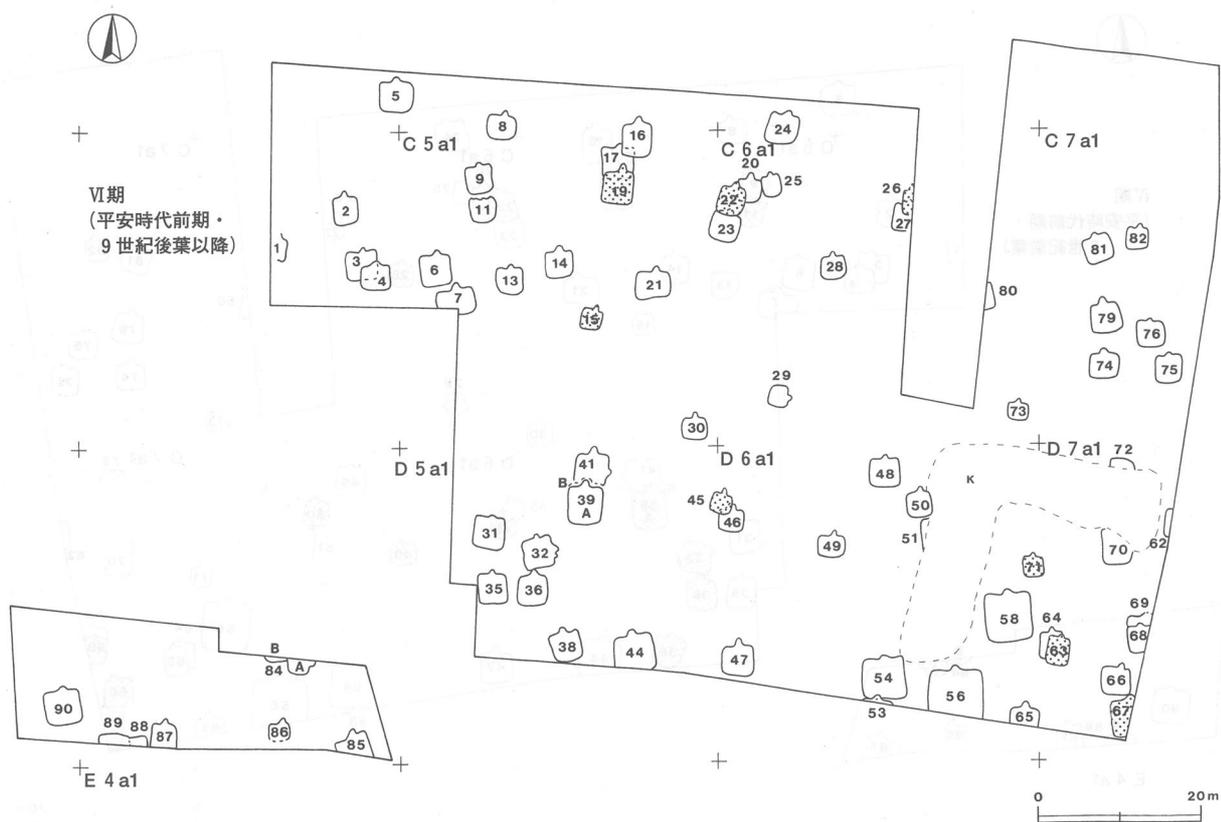
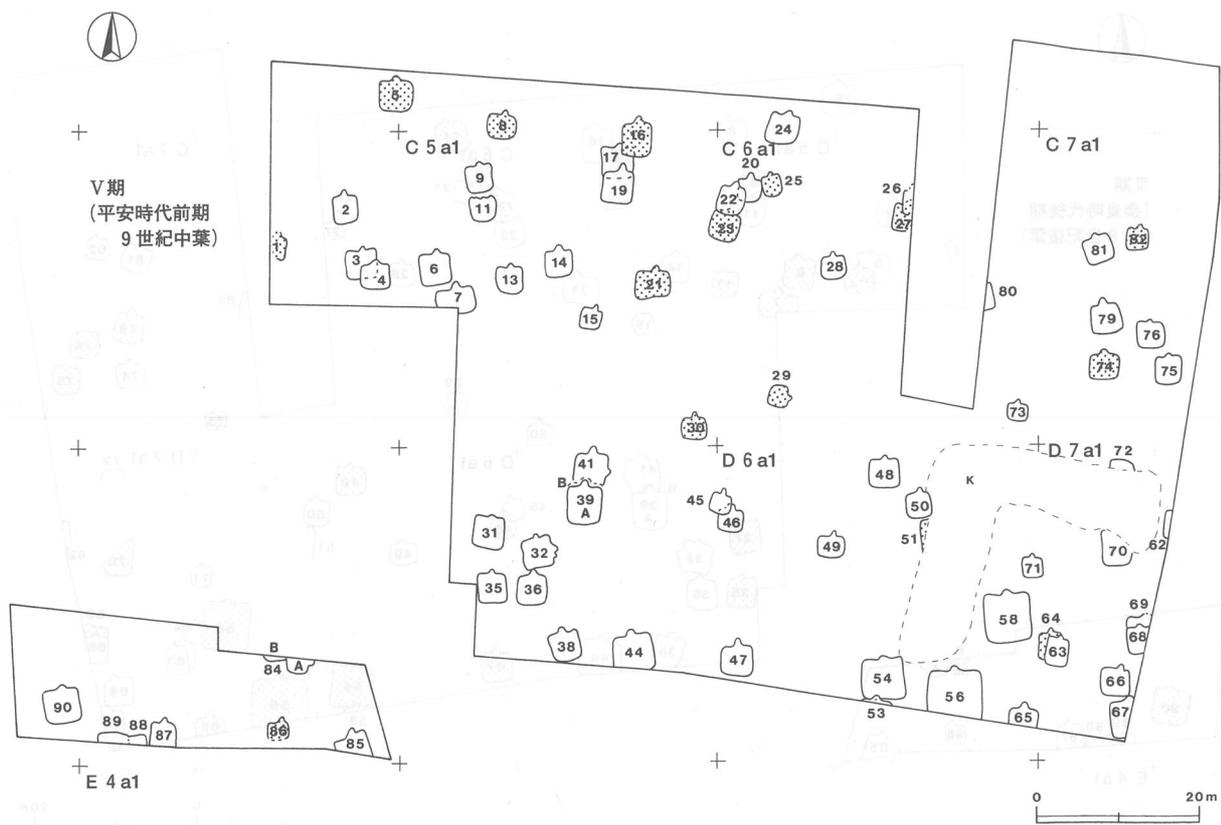
- ・川津法伸 「竈の脇に棚をもつ住居について」 『研究ノート6号』 財団法人茨城県教育財団
1997年6月30日
- ・笹生衛 「古代集落と仏教信仰 -千葉県内の事例を中心に-」 『上高津貝塚ふるさと歴史の広場講演会紀要』
1998年4月19日
- ・佐々木義則 「茨城における掘立柱建物跡の概観」 『常総台地14』 常総台地研究会 1998年5月
- ・奈良国立文化財研究所 「なら平城京展'98」 1998年
- ・平川南 「郡符木簡などからみた末端行政の実態」
『律令国家の地方末端支配機構をめぐって -研究集会の記録-』 奈良国立文化財研究所 1998年
- ・平川南 「八幡林遺跡木簡と地方官衙論」 『木簡研究 第17号』 1995年11月25日
- ・松村恵司 「古代東国集落の諸相…村と都の暮らしぶり」
『第9回企画展 古代の集落-しもつけのムラとその生活-』 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1995年11月
- ・山中敏史 佐藤興治 「古代の役所」 『古代日本を発掘する5』 岩波書店 1985年6月21日
- ・結城市 山武考古学研究所 「峯崎遺跡」『結城市文化財調査報告書 第7集』 1996年3月15日



第289図 中原遺跡 (I・II A区) の集落変遷 (1)



第290図 中原遺跡 (I・II A区) の集落変遷 (2)



第291図 中原遺跡 (I・II A区) の集落変遷 (3)

中原遺跡遺構一覽表

表9 住居跡一覽表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸) (規模不明は東西軸×南北軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設						覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新), 時代, その他	
							壁溝	支柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	棚				炉・竈
1	C4e7	N-8°-E	[長方形または方形]	(1.17×3.30)	8~20	平坦	-	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器189, 須恵器138, 鉄製品1 (不明鉄製品), 石1 (雲母片岩を支脚に利用)	9世紀中葉
2	C4c9	N-12°-W	方形	3.50×3.25	60~70	平坦	壁溝	-	-	1	-	-	竈	自然	土師器69, 須恵器27, 土製品1 (支脚), 石器1 (砥石), 鉄製品2 (金釧, 金床)	SI2→SD1, SK1 8世紀中葉
3	C4e9	N-16°-W	長方形	4.14×3.60	56~60	平坦	全周	-	-	2	-	-	竈	人為	土師器66, 須恵器31	SI3→SI4, SD1 8世紀中葉
4	C4e0	N-5°-W	長方形	3.75×3.20	52~55	平坦	壁溝	2	-	2	-	-	竈	人為	土師器81, 須恵器57, 石製品1 (紡錘車)	SI3→SI4 8世紀後葉
5	B410	N-0°	方形	4.10×4.05	49~59	平坦	全周	4	-	-	1	両棚	竈	人為	土師器528, 須恵器535, 鉄製品1 (刀子), 礫2	SK2, I70→SI5→SB20, SD2 9世紀中葉
6	C5e2	N-4°-W	方形	3.92×3.88	48~50	平坦	壁溝	4	-	1	1	-	竈	自然	土師器128, 須恵器124, 鉄製品4 (刀子3, 不明鉄製品1), 礫4	8世紀後葉
7	C5f2	N-3°-W	[長方形]	(4.90×2.11)	47~53	平坦	一部	-	-	-	-	-	竈	人為	土師器136, 須恵器209, 炭化種子1 (山豆)	8世紀後葉
8	B5j4	N-5°-E	方形	3.56×3.40	32~43	平坦	全周	-	-	-	1	両棚	竈	人為	土師器501, 須恵器165, 灰釉陶器1 (長頸瓶・二川壺), 緑釉陶器1 (碗・黒笹90号), 土製品2 (紡錘車, 支脚), 鉄製品2 (刀子, 釘)	9世紀中葉
9	C5b3	N-10°-W	長方形	3.66×3.33	21~62	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器68, 須恵器32, 灰釉陶器1 (長頸瓶), 石器1 (砥石), 礫1	8世紀後葉
11	C5c3	N-8°-W	方形	3.07×2.91	41~51	ほぼ平坦	一部	-	-	1	-	-	竈	自然	土師器105, 須恵器157, 鉄製品1 (刀子)	9世紀前葉
13	C5e4	N-6°-W	方形	3.36×3.30	40~45	平坦	全周	4	-	-	1	-	竈	自然	土師器56, 須恵器76, 灰釉陶器1 (平瓶・黒笹14号), 石製品1 (紡錘車), 鉄製品2 (刀子)	8世紀後葉
14	C5e5	N-0°	方形	3.63×3.40	35~68	ほぼ平坦	壁溝	-	-	1	1	-	竈	自然	土師器225, 須恵器268	8世紀中葉
15	C5f6	N-17°-E	方形	2.58×2.46	38~40	平坦	全周	-	-	-	-	-	竈	人為	土師器137, 須恵器67, 土製品1 (支脚)	SI15→SK5 9世紀後葉
16	C5a8	N-0°	長方形	4.35×4.05	34~40	平坦	全周	-	-	-	1	両棚	竈	自然	土師器502 (坏・墨書「本井」), 須恵器92, 灰釉陶器3 (長頸瓶), 石2 (支脚として利用された雲母片岩)	SI17→SI16 9世紀中葉
17	C5a7	N-6°-W	方形	3.72×3.56	64~70	平坦	壁溝	4	-	-	1	-	竈	自然	土師器95, 須恵器37, 鉄滓1, 礫1	SI17→SI16, 19 8世紀後葉
19	C5b7	N-4°-E	[方形]	[4.17×4.01]	54~63	平坦	半周	-	-	-	1	両棚	竈	自然	土師器249 (坏・墨書「大山」), 須恵器94, 土製品1 (紡錘車), 石製品1 (支脚), 炭化米5	SI17→SI19 9世紀後葉
20	C6b1	N-0°	方形	2.98×2.82	57~60	平坦	半周	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器36, 須恵器12	SI20→SI22 8世紀後葉
21	C5e8	N-0°	長方形	4.05×3.49	49~55	平坦	壁溝	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器219, 須恵器215, 灰釉陶器12 (碗・黒笹14号, 長頸瓶・二川壺), 礫7	9世紀中葉
22	C6b1	N-14°-E	方形	3.55×3.25	22~36	平坦	壁溝	-	-	2	1	-	竈	自然	土師器305, 須恵器122, 緑釉陶器2 (碗・黒笹90号), 鉄製品2 (刀子), 礫1, 多量の炭化材	SI20, 23→SI22 9世紀後葉 焼失家屋
23	C6c1	N-20°-E	方形	3.70×3.58	48~60	平坦	壁溝	2	-	-	1	-	竈	自然	土師器316, 須恵器101, 灰釉陶器1 (長頸瓶・黒笹14号), 鉄製品1 (刀子)	SI23→SI22 9世紀中葉
24	B6j2	N-10°-E	方形	3.84×3.44	24~28	平坦	壁溝	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器28, 須恵器30, 灰釉陶器1 (長頸瓶・黒笹14号または90号)	SI24→SD7 8世紀後葉
25	C6b2	N-15°-W	方形	2.49×2.33	2~8	凸凹	-	-	-	-	-	-	竈	不明	土師器49, 須恵器6, 鉄製品1 (釘), 石1 (雲母片岩)	9世紀中葉
26	C6c6	不明	[長方形または方形]	(0.47×2.93)	20~27	平坦	-	-	-	-	-	-	[竈]	自然	土師器3, 須恵器2	SI27→SI26 9世紀後葉
27	C6c6	N-3°-E	[長方形または方形]	(1.87×3.40)	17~37	平坦	半周	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器35, 須恵器13 (高台付皿・墨書「工」), 石1 (雲母片岩)	SI27→SI26 9世紀中葉
28	C6e4	N-4°-W	長方形	3.32×2.70	35~42	平坦	壁溝	-	-	-	1	-	竈	人為	土師器86, 須恵器54, 土製品1 (支脚)	9世紀前葉
29	C6i2	N-96°-E	方形	2.40×2.20	22~24	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	人為	土師器83, 須恵器76	9世紀中葉
30	C5j0	N-7°-W	方形	2.99×2.75	40~46	平坦	壁溝	-	-	-	1	-	竈	人為	土師器126 (坏・墨書「永成」), 須恵器64	SB1→SI30 9世紀中葉
31	D5c3	N-12°-E	長方形	4.03×3.76	45~56	平坦	全周	4	-	-	1	-	竈	自然	土師器121, 須恵器132 (坏・墨書「度」), 石器1 (砥石), 鉄製品2 (手鎌, 釘)	SB16, 30, SK225, 294, 295 →SI31→SK288 8世紀後葉
32	D5d5	N-10°-W	方形	3.93×3.72	52~64	平坦	全周	3	-	-	1	-	竈2	自然	土師器676, 須恵器409, 石器1 (砥石), 鉄製品4 (刀子), 鉄滓1, 礫1, 炭化材2, 炭化米1	9世紀前葉
35	D5e3	N-2°-W	方形	3.88×3.65	35~41	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	人為	土師器79, 須恵器98, 鉄製品1 (火打金), 鉄滓2	SB16, 27, 30→SI35→ SK242, 243 8世紀後葉
36	D5e5	N-2°-E	方形	3.87×3.67	44~50	平坦	全周	4	-	-	1	-	竈	自然	土師器299, 須恵器271	SB27, 29→SI36 8世紀後葉
38	D5g6	N-18°-W	方形	3.52×3.50	25~31	ほぼ全周	-	-	-	-	1	-	竈	人為	土師器169, 須恵器185 (高台付坏・墨書「宗門」), 灰釉陶器1 (長頸瓶・折戸10号), 石製品1 (砥石), 鉄製品2 (刀子, 不明鉄製品)	9世紀前葉
39A	D5b6	N-7°-W	長方形	5.46×4.34	43~54	平坦	全周	4	-	2	1	-	竈	自然	土師器1064 (坏・墨書「本戸」), 須恵器776, 灰釉陶器1 (碗・黒笹14号・墨書「工」), 石製品1 (砥石), 鉄製品7 (刀子5, 鉄鏝2)	SI41→SI39B→ SI39 A9世紀前葉 SI39Bの建て替え
39B	D5b6	N-0°	[長方形]	[5.46×4.34]	43~54	平坦	全周	(4)	-	(2)	(1)	-	竈	不明	土師器604, 須恵器452, 鉄製品1 (不明鉄製品), 礫1	SI41→SI39B→SI39A 8世紀後葉
41	D5a6	N-4°-E	方形	4.26×3.94	56~59	平坦	全周	4	-	-	1	-	竈2	自然	土師器604, 須恵器452, 鉄製品1 (不明鉄製品), 礫1	SI41→SI39B→SI39A 8世紀中葉

44	D5g9	N-7°-W	[方形]	(5.30×5.16)	54~64	平坦	全周	4	-	-	1	左棚	竈	人為	土師器373, 須惠器286, 土製品1(支脚), 石器1(砥石), 鉄製品1(刀子), 礫5, 石1(雲母片岩), 鉄滓2	8世紀前葉
45	D6b1	N-9°-W	方形	2.47×2.35	9~19	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	人為	土師器104, 須惠器13	SI46→SI45 9世紀後葉
46	D6c1	N-5°-E	長方形	3.16×2.88	30~35	平坦	[全周]	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器146, 須惠器47, 土製品1(支脚), 鉄製品2(鎖)	SB4A, 4B→SI46 →SI45 9世紀前葉
47	D6g1	N-3°-E	長方形	4.43×3.69	47~54	平坦	全周	-	-	5	2	両棚	竈	自然	土師器227, 須惠器235, 自然遺物1(漆痕と漆紙), 礫1, 鉄滓1	8世紀後葉
48	D6a6	N-2°-E	方形	3.73×3.48	42~52	平坦	全周	4	-	-	1	-	竈	自然	土師器373, 須惠器129(高台付坏・墨書1[「山口」]), 石製品1(紡錘車), 石器2(砥石)	SI48→SK46, 47 8世紀後葉
49	D6d4	N-0°	長方形	3.32×3.00	12~15	平坦	全周	-	-	-	-	-	竈	不明	土師器40, 須惠器8	SB6→SI49 9世紀前葉
50	D6b7	N-7°-W	長方形	3.09×2.80	32~42	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器172, 須惠器49, 鉄製品1(鉄鍬の基部)	SB26, SK352→SI50 →SK353 9世紀前葉
51	D6c7	不明	不明	(0.99×1.96)	20~25	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	自然	土師器21, 須惠器2	SI51→SK138, 139 SB26 との新旧不明 9世紀中葉
53	D6i5	N-10°-E	[長方形または方形]	(3.61×1.04)	46~52	平坦	-	-	-	1	-	両棚	竈	人為	土師器107, 須惠器60, 土製品1(支脚)	SI54→SI53 9世紀前葉
54	D6h6	N-5°-W	[長方形または方形]	(5.29×5.15)	34~42	平坦	[全周]	4	-	2	1	-	竈	自然	土師器374, 須惠器363, 鉄製品2(釘, 不明鉄製品)	SI54→SI53 8世紀後葉
56	D6h8	N-0°	[長方形]	(6.94×6.00)	41~51	平坦	[全周]	4	-	4	-	-	竈	人為	土師器1485, 須惠器1551(坏・刻書1[山川]), 灰釉陶器1(長頸瓶・黒笹14号または30号), 土製品1(支脚), 鉄製品7(短刀, 刀子6), 礫3	8世紀後葉
58	D6f9	N-7°-W	方形	5.96×5.84	44~56	平坦	全周	4	-	2	1	-	竈	自然	土師器1358, 須惠器438, 土製品3(支脚), 鉄製品1(刀子), 礫5, 炭化材	SB9→SI58→SK135 8世紀後葉
62	D7c5	不明	[長方形または方形]	(0.82×3.40)	18~34	平坦	一部	-	-	-	-	-	不明	自然	土師器19, 須惠器6, 鉄製品1(不明鉄製品)	8世紀
63	D7g1	N-10°-E	長方形	3.36×2.90	8~26	平坦	-	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器284, 須惠器100, 灰釉陶器2(平瓶・黒笹14号), 石製品1(紡錘車), 鉄製品1(釘), 礫5	SI64→SI63 9世紀後葉
64	D7g1	N-0°	長方形	3.44×2.77	10~20	平坦	一部	-	-	-	-	-	竈	人為	土師器40, 須惠器20, 土製品1(支脚)	SB9→SI64→SI63 9世紀中葉
65	D6i0	N-0°	[長方形または方形]	(3.79×2.58)	37	平坦	一部	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器301, 須惠器224, 鉄製品1(鉄鍬), 鉄滓2	SI65→SK128, 131, 132 8世紀後葉
66	D7i3	N-0°	[長方形または方形]	(2.47×4.66)	13~20	平坦	半周	2	-	-	-	-	竈	自然	土師器77, 須惠器39	SI66→SK145 9世紀前葉
67	D7h3	N-7°-W	方形	3.44×3.40	10~14	平坦	-	-	-	1	1	-	竈	自然	土師器210(坏・墨書1[富]), 須惠器105, 瓦瓦1, 鉄滓1	SD11→SI67→SK145 9世紀後葉
68	D7g4	N-10°-E	[長方形または方形]	(2.54×3.42)	26~51	平坦	半周	-	-	1	1	-	竈	自然	土師器175, 須惠器161	SI69→SI68 9世紀前 葉 SI69の建て替え
69	D7f4	N-7°-E	[長方形または方形]	(2.92×4.71)	28~34	平坦	半周(2)	-	-	1	-	-	竈	人為	土師器121, 須惠器128	SI69→SI68 8世紀後葉
70	D7d3	不明	[長方形または方形]	(3.80×4.50)	62~66	平坦	半周	4	-	-	1	-	不明	自然	土師器353, 須惠器300, 石器1(砥石), 礫2(雲母片岩, 軽石)	8世紀後葉
71	D6d0	N-2°-W	方形	2.60×2.60	29~31	平坦	全周	-	-	-	-	-	竈	人為	土師器95(高台付坏・墨書1[千]), 須惠器89, 鉄製品1(門)	SI71→SK121, 122 9世紀後葉
72	D7a3	不明	[長方形または方形]	(2.86×1.03)	33~36	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	自然	土師器78, 須惠器32(高台付坏・墨書1[万])	9世紀前葉
73	C6i0	N-4°-E	長方形	2.59×2.17	32~35	平坦	-	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器139, 須惠器141	8世紀後葉
74	C7h3	N-0°	方形	3.73×3.63	31~35	平坦	全周	4	-	-	3	-	竈	自然	土師器365(坏・墨書2[万坏][「口不」]), 須惠器231, 鉄製品5(刀子1, 不明鉄製品4)	SI74→SK123 9世紀中葉
75	C7h5	N-0°	長方形	3.80×3.17	33~44	平坦	全周	-	-	-	1	左棚	竈	自然	土師器70, 須惠器80	8世紀後葉
76	C7g4	N-2°-W	方形	3.34×3.23	27~35	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器176, 須惠器104, 鉄滓2, 礫2	8世紀後葉
79	C7f3	N-10°-W	方形	3.62×3.50	53~57	平坦	全周	2	-	3	1	-	竈	人為	土師器137, 須惠器44, 石器1(砥石), 鉄製品1(門)	8世紀後葉
80	C6f9	不明	[長方形または方形]	(1.66×3.48)	24~32	平坦	半周	-	-	-	-	-	不明	人為	土師器13, 須惠器28	8世紀前葉
81	C7d2	N-21°-W	方形	3.52×3.37	51~58	平坦	全周	-	-	3	1	-	竈	人為	土師器82, 須惠器10, 灰釉陶器1(長頸瓶・黒笹14号)	SI81→SK58 8世紀前葉
82	C7d4	N-2°-W	方形	2.86×2.74	35~47	平坦	全周	-	-	-	1	-	竈	自然	土師器131, 須惠器32, 灰釉陶器3(長頸瓶・黒笹90号), 土製品1(羽口), 鉄製品1(刀子)	9世紀中葉
84A	D4g7	N-89°-E	[長方形または方形]	(2.92×1.66)	30~34	平坦	一部	2	-	-	-	-	竈	人為	土師器87, 須惠器1	SI84B, SB14→SI84A 9世紀前葉
84B	D4g7	不明	[長方形または方形]	(2.60×0.64)	42~48	平坦	一部	-	-	-	-	-	不明	人為	土師器11, 須惠器4	SI84B→SI84A 9世紀前葉
85	D4j9	N-25°-W	[長方形]	(3.95×3.34)	36~42	平坦	-	2	-	-	-	-	竈	自然	土師器125, 須惠器35, 土製品1(支脚)	8世紀中葉
86	D4i7	N-0°	長方形	2.68×1.96	8~13	平坦	-	-	-	-	-	-	竈	自然	土師器69, 須惠器14, 灰釉陶器1(長頸瓶・井ヶ谷78号), 石1(支脚として利用された雲母片岩)	9世紀中葉
87	D4i3	N-0°	[長方形または方形]	(3.36×2.25)	17~22	平坦	[全周]	-	-	1	-	-	竈	自然	土師器94, 須惠器70, 土製品1(支脚)	8世紀中葉
88	D4i3	不明	[長方形または方形]	(5.50×0.88)	55~65	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	自然	土師器52, 須惠器19	SI89→SI88 9世紀
89	D4i2	不明	[長方形または方形]	(3.16×1.20)	55~65	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	自然	土師器42, 須惠器34, 石器1(砥石)	SI89→SI89 9世紀
90	D3i0	N-8°-W	方形	4.34×4.30	10~17	平坦	全周	4	-	-	1	-	竈	自然	土師器132, 須惠器118	9世紀後葉

表10 掘立柱建物跡一覧表

掘立柱 建物跡 番号	位置	桁行方向	規模(長さの単位はすべてm)					柱穴(長さの単位はすべてcm)						覆土	主な遺物	備考 新旧関係(古→新) 時代, その他			
			桁間平均距離	桁行柱間	梁間平均距離	梁行柱間	面積(m ²)	構造	柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ				柱寸法		
1	C5j0	N-6°-W	2間	3.93	1.63~2.15	2間	4.35	2.00~2.30	17.10	総柱	9	隅丸長方形・楕円形	49~80	36~70	54~77	10~21	人為	土師器10, 須恵器18, 鉄製品2(刀子, 門)	SB1→SI30 8世紀前葉から後葉
2	C6j2	N-87°-E	4間	8.29	1.75~4.12	2間	4.66	2.34~4.45	38.63	側柱	10	楕円形・円形	39~72	37~69	6~40	15~17	人為		8世紀前葉から後葉
3	C6j5	N-84°-E	4間	7.36	1.67~2.04	3間	4.78	1.49~1.64	35.18	側柱	14	隅丸長方形・楕円形	76~94	68~90	55~87	16~21	人為	土師器64, 須恵器38	SB3→SK4, 47 SB8, SK201との新旧不明 8世紀前葉から後葉
4A	D6c2	N-4°-W	2間	3.21	1.42~1.71	2間	2.83	1.31~1.54	9.08	総柱	9	楕円形・円形	50~79	46~58	19~46	15~18	人為	須恵器3	SB4B→SB4A→SI46 8世紀後葉4Bの建て替え
4B	D6c2	N-0°	2間	2.69	1.50~1.80	2間	3.24	1.26~1.40	8.59	総柱	9	楕円形・円形	50~66	46~60	23~35	12~21	人為		SB4B→SB4A→SI46 8世紀前葉
5	D5e0	N-7°-W	2間	3.58	1.74~1.87	2間	3.28	1.40~1.99	11.74	総柱	11	楕円形・円形	75~89	60~72	39~62	18	人為	土師器1, 須恵器2	8世紀前葉から後葉
6	D6c4	N-6°-W	3間	6.39	1.65~2.37	3間	6.56	1.76~2.59	41.92	総柱	18	楕円形・楕円形	56~88	51~84	40~82	10~23	人為	土師器10, 須恵器8	SB6→SI49, SK327 8世紀前葉から後葉
7	D6e4	N-78°-E	2間	4.64	2.22~2.39	1間	2.32	2.25~2.40	10.95	側柱	6	楕円形・円形	57~94	57~83	36~80	14~21	人為	土師器6	8世紀前葉から後葉
8	C6j5	N-9°-W	2間	1.98	0.76~1.14	2間	1.96	0.77~1.17	3.88	総柱	8	楕円形・円形	49~70	47~67	7~23	不明	人為		SB8→SK201, SB3との 新旧不明 8世紀
9	D7f1	N-4°-W	3間	6.76	2.12~2.33	2間	4.52	2.06~2.08	30.56	側柱	10	楕円形・楕円形	48~64	41~59	46~73	13~24	人為	土師器45, 須恵器10	SB9→SI58, 64 8世紀前葉から中葉
10	C5g5	N-10°-W	2間	3.95	1.50~2.33	2間	4.09	1.62~2.35	16.16	側柱	8	楕円形・円形	33~61	31~52	21~49	11~14	人為	土師器1	SK168との新旧不明 中世以降
12	D5a4	N-3°-W	2間	4.08	1.95~2.15	2間	4.10	1.77~2.30	16.73	側柱	8	楕円形・円形・不定形	34~109	30~89	18~44	14~21	人為	土師器1, 須恵器4	SB13→SB12, SK256B SK199, 200A, 200B, 323~325との 新旧不明 8世紀前葉から後葉
13	D5b3	N-0°	2間	3.30	1.25~2.06	2間	3.21	1.35~1.70	10.59	総柱	9	楕円形・円形・不定形	64~124	53~98	44~74	10~24	人為	土師器11, 須恵器10	SB13→SB12, SK287 SK237との新旧不明 8世紀前葉から後葉
14	D4h7	N-9°-W	2間	4.26	2.00~2.25	2間	4.77	2.35~2.42	(20.32)	側柱	7	隅丸長方形・楕円形	90~121	51~91	47~65	14~20	人為	土師器12, 須恵器7	SB14→SI84A SI84Bとの新旧不明 8世紀前葉から後葉
15	D4g5	N-7°-W	2間	4.26	2.11~2.15	2間	4.26	2.04~2.22	(18.15)	側柱	5	楕円形・楕円形	74~118	58~87	57~66	16~24	人為	土師器3, 須恵器2	8世紀前葉から後葉
16	D5a3	N-4°-E	2間	3.48	1.70~1.80	2間	3.03	1.45~1.55	10.54	総柱	8	楕円形・円形	42~53	36~52	12~37	20	人為	土師器1, 須恵器2	SB16→SI31, 35, SB30 8世紀前葉から中葉
17	D5d7	N-7°-W	3間	6.03	1.85~2.25	2間	3.43	1.70~1.90	20.68	側柱	11	楕円形・円形	51~85	42~84	34~75	10~25	人為	土師器33, 須恵器37	SB17→SB19 SB18との 新旧不明 8世紀後葉
18	D5d7	N-6°-W	3間	5.72	1.75~2.14	2間	4.12	1.90~2.24	23.57	側柱	11	楕円形・円形	50~83	45~71	24~73	12~22	人為	土師器30, 須恵器30	SB17, 19との 新旧不明 8世紀後葉
19	D5e7	N-11°-W	2間	3.99	1.94~2.05	2間	4.03	1.97~2.07	16.08	側柱	16	楕円形・円形	26~70	26~62	26~93	14~19	人為	土師器15, 須恵器23	SB17→SB19 SB18との 新旧不明 9世紀前葉
20	B5j1	N-6°-W	1間	3.70	3.60~3.80	1間	3.75	3.70~3.80	13.88	側柱	4	楕円形・円形	55~75	50~70	50~65	不明	人為	土師器6, 須恵器2	SI5→SB20 SB21, SK67, 72, 73, 75との 新旧不明 中世以降
21	C5a2	N-3°-W	2間	3.51	1.60~1.95	2間	4.50	2.25	(15.80)	側柱	6	楕円形・円形	44~55	37~54	38~50	17~27	人為	須恵器1	SI9→SB21 SB20, SK68, 69との新旧 不明 中世以降
22	D6e2	N-8°-W	4間	7.74	1.80~2.07	2間	4.73	2.27~2.50	36.61	側柱	12	楕円形・円形	47~106	37~65	43~70	13~18	人為	土師器2	SB22→SK337A, 337B, 339 SB23, SK320との新旧不明 8世紀前葉から中葉
23	D6g2	N-2°-W	3間	5.60	1.84~1.90	2間	4.60	2.10~2.50	25.76	側柱	9	楕円形・円形	52~68	46~62	21~60	9~15	人為	土師器2	SB23→SI47, SK337A, 337B, 338 SB22との新旧 不明 8世紀前葉から中葉
24	D6j7	N-87°-E	3間	5.46	1.74~1.91	2間	3.64	1.50~2.16	19.87	側柱	10	楕円形・楕円形	71~91	43~78	28~80	14	人為	土師器41, 須恵器42, 礫4	SB25→SB24 8世紀前葉から後葉
25	D6j7	N-87°-E	3間	5.39	1.43~2.15	2間	3.55	1.57~2.00	19.13	側柱	9	楕円形・楕円形	53~106	44~100	32~76	10~16	人為	土師器77, 須恵器43, 炭化物1	SB25→SB24 8世紀前葉から後葉
26	D6c6	N-4°-W	3間	6.35	1.75~2.50	2間	4.61	2.15~2.57	29.27	側柱	9	隅丸長方形・楕円形	37~88	34~80	33~88	11~18	人為	土師器2, 須恵器7	SB26→SI50, SK138, 353 SK344~347, 352との新旧不明 8世紀前葉から後葉
27	D5f4	N-4°-W	3間	6.53	2.03~2.35	2間	4.14	1.89~2.27	27.03	側柱	10	楕円形・円形	58~89	55~79	32~48	17	人為	土師器9, 須恵器5	SB27→SI35, 36 SB29, SK248, 252Bとの新旧不明 8世紀前葉から中葉
28	D6c0	不明	1間	2.20	-	1間	2.60	-	不明	側柱	3	楕円形・円形	70~82	55~64	60~94	21~24	人為	土師器29, 須恵器14	SK386, 387A, 387B との新旧不明 8世紀中葉
29	D5f4	N-3°-W	2間	3.75	1.50~2.50	2間	3.78	1.65~2.02	14.18	総柱	13	楕円形・円形・不定形	50~115	45~81	16~73	14~21	人為	土師器22, 須恵器26, 鉄製品1(刀子)	SB29→SI36 SB27, SK248との新旧不明 8世紀前葉から中葉
30	D5d3	N-3°-W	2間	4.18	1.80~2.50	2間	3.90	1.75~2.15	16.30	総柱	9	楕円形・円形	52~110	44~86	27~87	16~30	人為	土師器15, 須恵器9	SB16→SB30→SI31, 35 SK230, 234との新旧不明 8世紀前葉から中葉

表11 堀一覧表

堀番号	中心位置	主軸方向	規模				壁面	断面	覆土	出土遺物	備考 遺構番号・新旧関係(古→新)時代, その他
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
1	C7i2, C7j2, D7a2, D7b2, D7c2, D7e2, D7f2, D7g3, D7h3, D7i3, D7j3	N-5°-W	(44.80)	1.24	0.75	0.67	外傾	箱薬研	人為	土師器1538, 須恵器1561(高台付坏・刻書1[山川]), 土製品1(不明土製品), 石器1(砥石), 軒丸瓦1, 椀状洋2, 躰12, 自然遺物2(山モモの種子)	SD11→SI67 8世紀前葉~後葉(廃絶) 門柱のような土坑3基を伴う
			土橋部分	3.30	1.80	1.25					

表12 堀に伴う土坑一覧表

堀に伴う土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)時代, その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
407	D7e3	-	円形	0.27 × 0.27	26	外傾	皿状	人為		堀の門柱として機能か? 8世紀前葉~後葉
408	D7f3	-	円形	0.26 × 0.26	21	外傾	凹凸	人為		堀の門柱として機能か? 8世紀前葉~後葉
409	D7f3	N-0°	楕円形	0.48 × 0.43	26	外傾	皿状	人為		堀の門柱として機能か? 8世紀前葉~後葉

表13 溝一覧表

溝番号	中心位置	主軸方向	規模				壁面	断面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)時代, その他
			長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
1	B4i9, B4j9, C4b9, C4c9, C4d9, C4e9	N-2°-E	(22.20)	0.26~0.60	0.17~0.34	0.04~0.12	緩斜	U字状	自然	土師器10, 須恵器11	SI2, SI3→SD1→SK1 中・近世の区画溝
2	B4i0, B5i1	N-84°-W	[6.53]	0.35~0.54	0.14~0.29	0.20	緩斜	U字状	自然		SI5→SD2 中・近世の区画溝
7	C6a3, C6a4, C6b4, C6c4, C6d4	N-55°-W N-10°-W N-0°	(14.90)	0.56~0.82	0.21~0.61	0.10~0.12	緩斜	U字状	自然		SI24→SD7 中・近世の区画溝
8	D4h1, D4h2, D4h3	N-90°	7.68	0.36~0.60	0.13~0.21	0.15~0.20	緩斜	U字状	不明		中・近世の区画溝

表14 陥し穴一覧表(3基)(第16図~第18図) ◎は本文中に文章で記載してあります。

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新), 時代, その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
◎84	C5h3	N-64°-E	楕円形	2.26 × 1.38	92	垂直・緩斜	平坦	自然・人為		縄文時代の陥し穴
◎278	D5a9	N-10°-W	楕円形	2.10 × 1.40	95	垂直・緩斜	平坦	自然		縄文時代の陥し穴
◎400	C6a0	N-0°	楕円形	1.62 × 1.24	64	垂直	平坦	人為		縄文時代の陥し穴

表15 柱穴(柵列)のような土坑一覧表(51基)(第236図~第246図) ◎は本文中に文章で記載してあります。

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新), 時代, その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
◎186	C5j5	N-20°-E	円形	1.04 × 0.98	42	外傾	平坦	人為		8世紀前葉~後葉 A群
◎187	C5j4	N-0°	円形	0.72 × 0.70	41	緩斜	平坦	人為		8世紀前葉~後葉 A群
◎188	C5j4	N-10°-W	楕円形	1.14 × 0.84	57	外傾	皿状	人為	土師器1	8世紀前葉~後葉 A群
◎189	C5j4	N-22°-W	楕円形	0.66 × 0.54	52	外傾	平坦	人為	土師器1	8世紀前葉~後葉 A群
◎190	C5j5	-	円形	0.50 × 0.50	57	緩斜	皿状	人為		8世紀前葉~後葉 A群
◎191	C5j5	N-37°-W	楕円形	0.64 × 0.46	47	外傾	平坦	人為		8世紀前葉~後葉 B群
◎192	D5a5	N-0°	円形	0.44 × 0.40	30	外傾	皿状	人為		8世紀前葉~後葉 B群

◎193	D5a5	N-15°-W	楕円形	0.42 × 0.36	45	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 C群
◎194	D5a5	-	円形	0.38 × 0.38	40	外傾	皿状	人為	須恵器3	8世紀前葉～後葉 B群
◎195	D5a5	N-15°-W	楕円形	0.46 × 0.40	52	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 C群
◎196	D5a5	-	円形	0.46 × 0.46	47	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 C群
◎199	D5a4	N-0°	円形	0.52 × 0.48	64	外傾	皿状	人為		SB12, SK200Bとの新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 D群
◎200A	D5a4	N-50°-W	[不整楕円形]	0.85 × (0.54)	28	外傾	平坦	人為	土師器8, 須恵器10	SK200A→SK200B SB12との新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 D群
◎200B	D5a4	-	不定形	1.14 × 1.14	65	外傾	皿状	人為		SK200A→SK200B SB12, SK199との新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 E群
◎216	C5j4	N-27°-E	楕円形	0.42 × 0.38	28	緩斜	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 A群
◎217	D5b5	N-6°-W	楕円形	0.54 × 0.40	16	緩斜	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 F群
◎218	D5b5	N-4°-E	楕円形	0.38 × 0.30	27	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 F群
219	D5b5	N-0°	円形	0.50 × 0.48	46	外傾	平坦	人為		8世紀
◎220	D5c5	N-14°-E	楕円形	0.40 × 0.28	15	緩斜	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 F群
222	D5c3	N-41°-E	楕円形	0.56 × 0.50	41	外傾	皿状	人為	土師器3	8世紀
◎223	D5c3	N-0°	楕円形	0.56 × 0.50	33	外傾	平坦	人為		8世紀前葉～後葉 G群
224	D5c3	N-62°-W	楕円形	0.70 × 0.55	43	外傾	平坦	人為	土師器3	8世紀
◎225	D5c4	N-0°	楕円形	0.74 × 0.62	26	外傾	皿状	人為	土師器1, 須恵器1	SK225→SI31 8世紀前葉～後葉 H群
◎228	D5c4	-	円形	0.42 × 0.42	33	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 H群
◎229	D5d4	N-41°-W	楕円形	0.64 × 0.56	54	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 H群
◎231	D5d4	N-30°-E	楕円形	0.60 × 0.53	36	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 H群
◎232	D5d4	N-60°-W	楕円形	0.50 × 0.41	32	外傾	皿状	人為		8世紀前葉～後葉 H群
◎234	D5d4	-	円形	0.56 × 0.56	34	外傾	皿状	人為	須恵器2(椀P594)	SB30との新旧関係不明 8世紀前葉～中葉
◎238	D5b2	N-30°-E	楕円形	0.66 × 0.52	30	外傾	平坦	人為		8世紀前葉～後葉 G群
◎239	D5b2	N-15°-W	楕円形	0.55 × 0.41	20	外傾	平坦	人為		8世紀前葉～後葉 G群
◎252A	D5g3	N-57°-W	楕円形	0.57 × 0.48	27	緩斜	平坦	人為	土師器3, 須恵器3 (坏P595)	SK252Bとの新旧関係不明 8世紀後葉
◎252B	D5f3	N-55°-E	円形	0.65 × 0.63	62	外傾	皿状	不明	土師器3, 須恵器8	SB27, SK252Aとの新旧関係不明 8世紀
◎256A	D5b4	N-29°-E	不整形	0.85 × (0.32)	72	外傾	皿状	人為	土師器5, 須恵器14	SK256Bとの新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 D群
◎256B	D5b4	N-10°-E	不定形	(0.64) × 0.61	62	外傾	皿状	不明		SK256B→SB12, SK256Aとの新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 E群
272	D5a0	N-0°	円形	0.42 × 0.39	25	緩斜	皿状	人為		
273	D5c9	N-40°-E	楕円形	0.36 × 0.31	46	外傾	皿状	人為		
279	C5i7	N-11°-E	円形	0.52 × 0.47	61	垂直	皿状	人為		
280	C5i7	N-90°	楕円形	0.40 × 0.35	48	垂直	皿状	人為	土師器2	
281	C5h8	N-0°	楕円形	0.51 × 0.40	44	垂直	皿状	人為	土師器1, 須恵器1	
282	C5i8	N-0°	不整楕円形	0.73 × 0.48	67	垂直	凹凸	人為	土師器4, 須恵器4	
283	C5i8	N-48°-E	不整楕円形	0.93 × 0.70	82	外傾	皿状	人為	土師器1	
284	C5i8	N-42°-W	[円形]	0.45 × (0.41)	56	外傾	皿状	人為	土師器1, 須恵器3	
285	C5i8	N-35°-E	楕円形	0.67 × 0.60	65	垂直	凹凸	人為	須恵器1	
288	D5e3	N-50°-W	円形	0.61 × 0.58	49	外傾	平坦	人為		SI31→SK288
◎323	D5a4	N-70°-E	楕円形	0.48 × 0.35	20	外傾	皿状	不明	土師器2, 須恵器7	SB12との新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 E群
◎324	D5b4	N-17°-E	楕円形	0.52 × 0.40	40	外傾	皿状	不明		SB12との新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 E群
◎325	D5b4	N-25°-E	楕円形	0.43 × 0.33	20	外傾	皿状	不明	須恵器1	SB12との新旧関係不明 8世紀前葉～後葉 D群
333	D6g3	N-40°-W	楕円形	0.50 × 0.42	45	外傾	皿状	人為		
379	C6i0	N-78°-W	不整楕円形	0.98 × 0.60	67	外傾	皿状	人為	土師器2	
◎384	D7d1	-	円形	0.95 × 0.95	93	外傾	皿状	人為	土師器18, 須恵器14(坏 P604・墨書1, 鉢P605)	8世紀後葉
390	D6d0	N-48°-W	円形	0.77 × 0.71	40	緩斜	皿状	人為		

表16 奈良・平安時代の土坑一覧表 (19基) (第247図～第265図) ◎は本文中に文章で記載してあります。

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新), 時代,その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
◎ 2	B4j0	N-88°-W	[楕円形]	(1.20) × (0.26)	(26)	緩斜	平坦	自然		SK2→SI5 9世紀前葉以前
◎ 11	B4i7	N-45°-E	楕円形	1.02 × 0.90	10	緩斜	平坦	人為	須恵器 1 (蓋P585)	8世紀中葉
◎ 90	B5i4	N-10°-E	不整楕円形	1.34 × 0.90	15	外傾	平坦	自然	須恵器 2, 平瓦 1 (T13)	8世紀～9世紀
◎138	D6b7	N-50°-E	円形	1.36 × 1.25	79	外傾	平坦	人為	土師器25 (高台付坏P587), 須恵器 31 (鉢TP39), 石1 (雲母片岩)	SB26→SI51→SK138 9世紀後葉 SK34との新旧不明
◎139	D6c7	N-40°-W	楕円形	0.65 × 0.52	54	外傾	皿状	人為	土師器 9 (坏P589), 須恵器 6	SI51→SK139 9世紀中葉
◎156	C5c4	N-0°	円形	0.96 × 0.94	29	外傾	凹凸	人為	須恵器 4 (甌P592)	9世紀
◎163	C5d5	N-0°	楕円形	1.18 × 1.06	34	外傾	平坦	人為	土師器 4, 須恵器 6 (高台付坏P593)	9世紀前葉
◎170	B5j1	N-0°	楕円形	0.64 × 0.58	28	外傾	平坦	自然	土師器 8	SK170→SI5 9世紀前葉
◎275	D5c8	N-14°-W	楕円形	1.44 × 1.02	18	緩斜	平坦	人為	土師器44, 須恵器22 (坏P596, 蓋P598, 平瓶P597)	8世紀中葉
◎294	D5c3	-	円形	0.65 × 0.65	37	外傾	皿状	不明		SK294→SI31 8世紀中葉以前
◎295	D5c3	N-34°-W	楕円形	1.14 × 1.08	20	緩斜	凹凸	不明		SK295→SI31 8世紀中葉以前
◎298	C6b3	-	円形	0.70 × 0.70	38	外傾	平坦	人為	土師器8, 須恵器3, 灰釉陶器1 (皿・井ヶ谷78号窯式)	9世紀前葉～中葉
◎309	C6e5	N-55°-W	円形	0.93 × 0.91	23	緩斜	平坦	人為	土師器14, 須恵器36 (坏P600)	9世紀前葉
◎328	D6c5	N-0°	円形	1.28 × 1.22	75	外傾	平坦	人為	土師器68 (坏P601), 須恵器49	9世紀中葉～後葉
◎353	D6b7	N-0°	円形	1.25 × 1.21	53	緩斜	平坦	人為	土師器 8, 須恵器17	SB26→SK353→SI50 9世紀前葉
◎378	C7i1	N-40°-E	楕円形	0.49 × 0.40	48	外傾	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 8 (坏P602)	8世紀後葉
◎382	C6i0	-	円形	0.49 × 0.49	24	外傾	皿状	人為	土師器 4 (坏P603)	8世紀前葉
◎386	D7c1	N-51°-W	[不整楕円形]	1.30 × (0.77)	20	緩斜	平坦	人為	土師器16, 須恵器21 (蓋P606)	8世紀中葉
◎394	B7j3	N-90°	楕円形	1.14 × 1.03	13	緩斜	平坦	人為	灰釉陶器1 (長頸瓶P609・黒笹14号窯式)	9世紀中葉

表17 方形土坑一覧表 (39基) (第272図～第275図)

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新), 時代,その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
46	D6b6	N-5°-E	長方形	3.06 × 0.50	40	垂直	平坦	人為	土師器20, 須恵器19	SI48→SK46 中・近世の芋穴
47	D6a6	N-10°-E	長方形	3.29 × 0.51	58	垂直	平坦	人為	土師器32, 須恵器17	SI48, SB3→SK47 中・近世の芋穴
121	D6d0	N-77°-W	長方形	1.20 × 0.70	20	垂直	平坦	人為		SI71→SK121 中・近世
122	D7d1	N-5°-W	方形	0.95 × 0.86	40	垂直	平坦	人為	土師器 8, 須恵器12	SI71→SK122 中・近世
123	C7h3	N-77°-W	長方形	0.97 × 0.70	30	垂直	平坦	人為	土師器11	SI74→SK123 中・近世
128	D6i0	N-74°-W	長方形	1.01 × 0.88	50	垂直	平坦	人為	土師器 5, 須恵器 4	SI65→SK128 中・近世
129	D7i1	N-79°-W	長方形	1.14 × 0.91	41	垂直	平坦	人為		SK133→I34→ SK129 中・近世
131	D6i0	N-82°-W	長方形	0.98 × 0.75	48	垂直	平坦	人為	土師器 9	SI65→SK132→ SK131 中・近世
132	D6i0	N-80°-W	長方形	0.95 × (0.73)	36	垂直	平坦	人為		SI65→SK132→ SK131 中・近世
133	D7i1	N-79°-W	長方形	1.30 × 0.66	57	垂直	平坦	人為	土師器27	SK134→SK133→ SK129 中・近世
134	D7i1	N-17°-E	方形	1.19 × 1.15	27	垂直	平坦	人為	土師器 9	SK134→SK133→SK129 SK130 との新旧関係不明 中・近世
145	D7i3	N-5°-E	長方形	1.21 × 1.00	43	垂直	平坦	人為	土師器23, 須恵器20	SI66, 67→SK145 中・近世
165	C5f3	N-78°-E	長方形	1.12 × 0.80	24	外傾	平坦	人為		中・近世
167	C5f4	N-84°-W	長方形	2.34 × 0.70	34	垂直	平坦	人為	土師器 8, 須恵器 3	中・近世
168	C5f5	N-89°-W	長方形	0.86 × 0.64	30	垂直	平坦	人為	土師器 3	SB10との新旧関係不明 中・近世
169	C5f6	N-90°	長方形	1.20 × 0.86	30	垂直	平坦	人為	土師器 2	中・近世
201	C6j5	N-10°-E	長方形	1.53 × 1.20	50	垂直	平坦	人為	土師器23, 鉄製品1 (不明鉄製品)	SB3, 8→SK201 中・近世
203	D3f9	N-0°	長方形	1.15 × 0.75	50	垂直	平坦	人為		中・近世
207	D4f2	N-5°-W	長方形	1.20 × 0.86	32	垂直	平坦	人為		中・近世
209	D4j1	N-90°	[長方形]	1.90 × (1.00)	47	垂直	平坦	不明	土師器 4, 鉄製品 1 (手鎌)	中・近世
210	D4i2	N-82°-E	長方形	0.96 × 0.85	36	垂直	平坦	人為		中・近世

213A	D4j4	N-90°	[長方形]	(0.94) × (0.60)	55	垂直	平坦	人為	土師器 9, 須恵器 2	SK213A→SK213B 中・近世
213B	D4j4	N-90°	[長方形]	1.80 × (0.70)	83	垂直	平坦	人為		SK213A→SK213B 中・近世
215A	D4j5	N-90°	[長方形]	[2.31] × (0.60)	18	垂直	平坦	人為		SK215A→SK215B→ SK215C 中・近世
215B	D4j5	N-90°	[長方形]	3.00 × (0.60)	75	垂直	平坦	人為		SK215A→SK215B→ SK215C 中・近世
267	D5g0	N-0°	隅丸長方形	1.95 × 1.29	70	垂直	凹凸	人為	土師器13, 須恵器 8	中・近世
271	D5d9	N-84°-W	長方形	1.19 × 0.83	47	垂直	平坦	人為		中・近世
292	C6f2	N-82°-W	長方形	1.33 × 0.82	19	垂直	平坦	人為	土師器 5, 須恵器 3	中・近世
313	C6f3	N-85°-E	長方形	1.38 × 0.86	49	外傾	平坦	人為	土師器 7, 須恵器 3	SK313→SK312 中・近世
329	D6e3	N-78°-W	長方形	1.07 × 0.88	46	垂直	平坦	人為	土師器 3	中・近世
330	D6g4	N-75°-W	楕円形	1.28 × 0.80	60	垂直	平坦	人為	土師器14, 須恵器13	中・近世
331	D6g4	N-73°-W	不整楕円形	1.15 × 0.85	49	垂直	平坦	人為	土師器 9, 須恵器 6	中・近世
332	D6g3	N-81°-W	長方形	1.23 × 1.03	42	垂直	平坦	人為	土師器17, 須恵器 9	中・近世
334	D6g3	N-5°-E	楕円形	1.51 × 1.37	77	外傾	平坦	人為	土師器 9, 須恵器 5, 鉄製品 1 (釘)	中・近世
335	D6h4	N-85°-W	長方形	1.18 × 1.00	60	垂直	平坦	人為	土師器 4, 須恵器 2	中・近世
336	D6h5	N-90°	隅丸方形	1.30 × 1.11	65	垂直	平坦	人為	土師器 5	中・近世
338	D6h2	N-80°-E	隅丸長方形	0.99 × 0.73	20	外傾	平坦	人為		中・近世
339	D6h2	N-86°-W	長方形	0.96 × 0.86	56	外傾	平坦	人為	土師器 7, 須恵器 1	中・近世
340	D6g5	N-0°	長方形	1.15 × 0.67	20	垂直	平坦	人為	土師器 2, 須恵器 4	中・近世

表18 その他の土坑一覧表 (229基) (第276図～第286図)

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新), 時代,その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	C4c9	N-90°	[長方形]	(1.50) × (0.36)	23	緩斜	皿状	人為	土師器 2	SI2→SD1→SK1
4	C6j4	N-80°-W	楕円形	1.29 × 0.80	26	緩斜	皿状	人為		SB3→SK4
5	C5g6	N-14°-E	円形	1.30 × 1.20	30	外傾	平坦	人為	土師器 7, 須恵器 8	SI15→SK5
6	C4c8	N-58°-W	不定形	0.45 × 0.37	21	外傾	皿状	不明	土師器 2, 須恵器 2	
10	B4i7	N-15°-W	円形	0.50 × 0.46	15	外傾	凹凸	自然	土師器 1	
12	B4j7	N-0°	円形	0.99 × 0.94	22	外傾	平坦	自然		
13	B4j7	-	円形	0.51 × 0.51	20	外傾	平坦	自然		
14	B4j8	N-0°	円形	0.60 × 0.55	25	緩斜	凹凸	自然		
15	B4i9	N-40°-W	楕円形	0.60 × 0.35	20	緩斜	凹凸	自然		
16	C4a9	N-55°-E	不定形	0.58 × 0.42	52	外傾	凹凸	自然		
17	C4b8	N-22°-W	円形	0.46 × 0.47	20	外傾	皿状	自然		
18	C4c8	N-21°-E	楕円形	0.61 × 0.50	24	外傾	凹凸	自然		
19	C4c8	N-0°	円形	0.98 × 0.90	31	外傾	平坦	人為		
20	C4c8	N-10°-W	楕円形	0.58 × 0.68	30	外傾	凹凸	人為	須恵器 1	
21	C4d8	N-21°-E	円形	0.47 × 0.53	26	外傾	皿状	人為		
22	C4c7	-	円形	0.56 × 0.56	21	外傾	皿状	人為		
25	C4e7	N-8°-E	方形	0.77 × 0.74	14	外傾	平坦	自然		
26	C4f7	N-4°-E	楕円形	0.54 × 0.42	14	緩斜	皿状	自然		
27	C4d9	N-0°	楕円形	0.82 × 0.76	14	緩斜	平坦	人為	土師器 1	
28	C4d0	N-32°-E	楕円形	1.22 × 0.76	21	緩斜	皿状	自然		
29	C4d0	N-43°-W	円形	0.87 × 0.80	58	垂直・緩斜	皿状	人為		
30	C4d0	N-30°-W	不定形	1.15 × 0.82	17~28	緩斜・外傾	皿状	不明	土師器 2, 須恵器 4	
31	C5d1	N-0°	円形	0.63 × 0.55	23	外傾	凹凸	人為	土師器 2	
32	C4c9	N-31°-E	円形	0.57 × 0.52	24	緩斜	皿状	人為	土師器 2	
33	C4c0	N-83°-E	楕円形	0.47 × 0.41	19	外傾	皿状	人為		

34	C4c0	-	円形	0.81 × 0.81	46	外傾	平坦	人為	土師器 5, 須恵器 4	
35	C4c0	N-90°	円形	0.45 × 0.40	24	緩斜	皿状	人為	土師器 1	
36	C4c0	N-15°-W	楕円形	0.92 × 0.77	51	緩斜	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 5	
37	C5c1	N-27°-E	楕円形	0.47 × 0.44	30	外傾	平坦	自然		
38	C5c1	N-21°-E	円形	0.77 × 0.64	18	緩斜	皿状	自然	土師器 1, 須恵器 1	
39	C5c2	N-48°-E	楕円形	0.90 × 0.72	50	外傾	凹凸	人為	土師器 1	SK39→SK118A, 118C
40	C5c1	N-30°-E	不定形	1.15 × 0.73	47	緩斜	凹凸	不明		SK40→SK120
41	C4e0	N-69°-W	不定形	0.85 × 0.76	24	外傾	凹凸	自然	土師器 1, 須恵器 2	
42	C5e1	N-44°-W	円形	1.10 × 0.98	30	緩斜	平坦	人為	土師器 3, 須恵器 1	
43	C5f1	N-82°-W	円形	1.02 × 0.91	57	外傾	凹凸	人為	土師器 1, 須恵器 2	
44	C5f1	N-38°-E	楕円形	0.93 × 0.73	30	外傾	皿状	人為		
45	C5e1	N-10°-W	楕円形	0.87 × 0.78	33	緩斜	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 3	
48	C5e2	N-34°-W	不定形	1.48 × 0.85	26~48	外傾	皿状	自然	土師器 4, 須恵器 9	
49	C5d2	N-70°-W	楕円形	1.00 × 0.58	30	緩斜	皿状	人為	土師器 1	
50	C5d2	N-38°-W	不定形	1.06 × 0.77	55	外傾	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 6	
51	C5c2	N-0°	円形	0.51 × 0.48	12	緩斜	平坦	自然	土師器 1	
52	C5c2	N-40°-W	円形	0.88 × 0.80	17	緩斜	平坦	人為	土師器 2, 須恵器 2	
53	C5d3	N-0°	円形	0.71 × 0.69	17	緩斜	皿状	人為		
54	C5d2	N-58°-W	楕円形	0.69 × 0.58	37	外傾	皿状	自然		
55	C5e2	N-29°-E	円形	0.87 × 0.82	20	外傾	凹凸	人為	土師器 1, 須恵器 2	
56	C5e3	N-50°-W	円形	0.56 × 0.50	16	外傾	凹凸	人為	土師器 1, 須恵器 1	
57	C5e3	N-43°-E	楕円形	0.64 × 0.58	25	垂直	凹凸	人為		
58	C7e2	N-19°-E	[楕円形]	1.38 × (0.72)	37	外傾	凹凸	人為	須恵器 2	SI81→SK58
59	C4a0	N-58°-E	楕円形	0.72 × 0.60	21	緩斜	平坦	人為		
60	B4j0	N-0°	円形	0.56 × 0.50	18	外傾	平坦	人為		
61	C4a0	N-90°	楕円形	0.60 × 0.50	30	外傾	皿状	人為		
62	C5a1	N-40°-E	楕円形	1.20 × 0.70	30	外傾	凹凸	人為	土師器 2, 須恵器 5	
63	C5a1	N-23°-W	不定形	1.68 × 0.72	32~37	外傾	凹凸	不明	土師器 1, 須恵器 12	
64	C5a1	N-41°-W	円形	0.68 × 0.63	25	外傾	皿状	人為		
65	C5a1	N-47°-W	楕円形	0.74 × 0.60	26	外傾	凹凸	人為	土師器 2, 須恵器 4	
67	C5a1	N-21°-E	楕円形	1.20 × 0.86	28	緩斜	皿状	人為		SB20との新旧関係不明
68	C5a2	N-60°-W	不整円形	0.54 × 0.54	20	外傾	皿状	自然	土師器 1, 須恵器 1	SB21との新旧関係不明
69	C5a2	N-0°	楕円形	0.58 × 0.50	26	外傾	凹凸	人為	須恵器 5	SB21との新旧関係不明
71	B4j0	N-36°-E	不定形	0.86 × 0.56	28	外傾	凹凸	人為	土師器 2, 須恵器 3	
72	B5j1	N-0°	不定形	0.84 × 0.80	20	外傾	平坦	人為	須恵器 6	SK72→SB20
73	B5j1	N-45°-W	楕円形	1.00 × 0.67	58	外傾	凹凸	人為	須恵器 7	SK73→SB20
75	B5j2	N-86°-E	楕円形	0.70 × 0.60	33	外傾	凹凸	人為	土師器 2, 須恵器 4	SK75→SB20
76	B5i2	N-45°-W	円形	0.82 × 0.76	30	外傾	平坦	自然	須恵器 5	
80	B5i1	N-21°-W	不整楕円形	0.90 × 0.56	48	外傾	凹凸	人為		
81	B5i2	N-42°-E	不整楕円形	0.82 × 0.56	22	外傾	平坦	人為		
82	B5i2	N-90°	楕円形	0.82 × 0.76	18	外傾	凹凸	人為	土師器 1	
83	C5a2	N-60°-E	円形	0.75 × 0.72	16	緩斜	凹凸	人為	土師器 5, 須恵器 3	SK83→SB21
85	C5a3	-	円形	0.75 × 0.75	23	緩斜	皿状	人為		
86	C5a3	N-37°-E	[楕円形]	0.91 × [0.61]	27	緩斜	皿状	人為	土師器 4	
87	C5a3	N-52°-W	[楕円形]	[1.50] × 0.88	28	緩斜	凹凸	人為		
88	B5j3	N-23°-W	楕円形	0.64 × 0.54	37	外傾	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 4	
89	B5i3	N-38°-E	楕円形	0.72 × 0.54	36	外傾	皿状	人為		
91	B5j4	N-0°	不整楕円形	1.19 × 0.68	22	緩斜	凹凸	人為	土師器 7	

92	B5i4	N-15°-E	橢円形	0.90 × 0.70	20	外傾	平坦	自然	土師器 1	
93	B5i5	N-0°	橢円形	1.08 × 0.92	33	外傾	平坦	自然		
94	B5j5	N-56°-E	橢円形	0.72 × 0.62	33	外傾	凹凸	人為		
95	B5j5	N-67°-W	不定形	1.00 × 0.92	37	外傾	凹凸	人為		
96	B5j5	N-38°-E	橢円形	1.02 × 0.76	47	外傾	皿状	人為		
97	B5j5	N-36°-E	橢円形	0.60 × 0.45	27	外傾	皿状	人為		
98	B5j6	N-65°-E	橢円形	1.21 × 1.00	60	垂直	平坦	人為		
99	B5j5	N-20°-E	円形	0.75 × 0.70	19	緩斜	皿状	人為		
100	C5a5	N-3°-W	不定形	1.35 × 1.17	39	緩斜	凹凸	人為		SK101→SK100
101	C5a5	N-4°-W	不定形	1.35 × 1.03	24	緩斜	凹凸	人為		SK101→SK100
102	C5a5	N-5°-E	橢円形	0.97 × 0.80	13	緩斜	皿状	人為		
103	C5a5	N-72°-W	不定形	1.82 × 1.04	32	緩斜	皿状	自然	土師器 3, 須恵器 2	
104	C5a5	N-63°-W	橢円形	1.20 × 0.80	16	緩斜	皿状	自然	土師器 9	
105	C5b5	N-30°-E	円形	0.70 × 0.68	16	緩斜	凹凸	人為	土師器 5	
106	C5b6	N-73°-W	不定形	1.10 × 0.74	69	緩斜	凹凸	自然	土師器 4	
107	C5b6	N-71°-W	円形	1.15 × 1.06	17	緩斜	平坦	人為		
108	C5b6	N-88°-E	[円形]	1.09 × (0.55)	43	緩斜	凹凸	自然		
109	C5b6	N-60°-E	不定形	1.05 × 0.86	23	緩斜	皿状	人為		
117	C5a4	N-45°-W	橢円形	1.12 × 0.95	21	緩斜	凹凸	人為		
118	C5c1	N-53°-E	橢円形	1.22 × 0.70	35	緩斜	平坦	不明		
118B	C5c2	N-40°-W	橢円形	0.51 × 0.42	13	緩斜	皿状	不明		
118C	C5c2	N-46°-W	不定形	(0.82) × (0.58)	8	緩斜	皿状	不明		
119	C5c2	N-52°-E	橢円形	0.76 × 0.53	18	緩斜	平坦	人為		
120	C5c1	N-58°-W	不定形	0.91 × 0.70	42	緩斜	凹凸	不明		SK40→SK120
130	D7i1	N-0°	橢円形	0.58 × 0.50	14	外傾	凹凸	人為		SK134との新旧関係不明
135	D6f9	N-0°	[橢円形]	1.69 × (1.05)	23	外傾	凹凸	人為	土師器13	SI58→SK135
146	C5d1	N-90°	橢円形	0.82 × 0.65	20	緩斜	平坦	自然		
147	C5d1	-	円形	0.57 × 0.57	13	緩斜	凹凸	自然		
148	C5c1	-	円形	0.42 × 0.42	20	外傾	皿状	人為		
149	C5d1	-	円形	0.41 × 0.41	17	外傾	平坦	自然		
150	C5e1	N-90°	橢円形	0.53 × 0.44	15	外傾	皿状	自然		
151	C5d2	N-0°	橢円形	0.64 × 0.50	39	外傾	皿状	人為		
152	C5d4	N-33°-E	橢円形	0.80 × 0.68	19	緩斜	皿状	自然		
153	C5d4	N-33°-E	橢円形	0.59 × 0.53	34	外傾	凹凸	人為		
154	C5c4	N-0°	円形	0.49 × 0.48	26	外傾	皿状	人為	土師器 2	
155	C5d4	N-38°-E	橢円形	0.78 × 0.68	36	外傾	凹凸	人為	土師器 1	
157	C5c5	N-0°	橢円形	0.61 × 0.55	17	緩斜	凹凸	人為		
158	C5d5	N-0°	円形	0.61 × 0.58	12	外傾	平坦	自然	土師器 2	
159	C5d5	N-47°-W	橢円形	0.62 × 0.55	18	外傾	平坦	人為		
160	C5c6	N-0°	円形	0.42 × 0.40	14	緩斜	皿状	自然		
161	C5d7	N-15°-W	橢円形	0.64 × 0.56	17~31	外傾	皿状	人為		
162	C5c7	N-0°	円形	0.52 × 0.50	25	外傾	皿状	自然	土師器 2, 須恵器 1	
164	C5e3	N-35°-E	橢円形	0.48 × 0.40	18	外傾	皿状	人為		
166	C5f3	N-90°	円形	0.45 × 0.41	29	外傾	皿状	自然		
173	B5i2	N-18°-E	橢円形	0.46 × 0.36	30	外傾	皿状	自然		
174	B5i2	-	円形	0.44 × 0.44	33	外傾	皿状	自然	土師器 3	
175	B5i2	N-0°	橢円形	0.88 × 0.62	44	外傾	平坦	人為	土師器 5	
176	B5i3	-	円形	0.48 × 0.48	26	外傾	平坦	人為		

177	B5i3	N-21°-E	橢円形	0.40 × 0.30	25	外傾	皿状	自然		
178	B5i3	N-14°-E	橢円形	0.88 × 0.60	20	外傾	平坦	人為	土師器 5	
179	B5i3	N-26°-E	橢円形	0.40 × 0.34	20	外傾	平坦	自然	土師器 2	
180	B5j3	N-11°-E	橢円形	0.82 × 0.56	29	外傾	平坦	人為	土師器 4	
181	B5j3	N-0°	円形	0.39 × 0.38	22	外傾	平坦	自然		
183	C5c2	N-0°	円形	0.44 × 0.43	11	外傾	平坦	自然	土師器 1	
185	C5e3	N-61°-E	橢円形	0.82 × 0.60	36	外傾	皿状	自然	土師器 2, 須恵器 1	
197	D5a6	N-0°	円形	0.40 × 0.38	33	外傾	平坦	人為		
198	D5a6	N-21°-E	円形	0.41 × 0.38	25	外傾	平坦	人為		
202	D3f9	N-0°	円形	0.65 × 0.60	29	外傾	皿状	人為		
204	D3g9	N-90°	円形	0.77 × 0.74	50	外傾	平坦	人為		
205	D3h9	N-0°	橢円形	1.05 × 0.83	22	緩斜	皿状	人為	土師器 4	
206A	D3f0	N-0°	隅丸長方形	0.76 × 0.61	13	緩斜	平坦	人為		SK206B→SK206A
206B	D3f0	N-0°	[隅丸長方形]	0.90 × (0.80)	25	緩斜	平坦	人為		SK206B→SK206A
208	D4f2	N-5°-W	橢円形	1.80 × 1.40	76	外傾	凹凸	人為		
211	D4i6	N-90°	橢円形	0.84 × 0.74	28	緩斜	皿状	自然		
212	D4i4	-	円形	0.64 × 0.64	23	外傾	平坦	自然		
214	D4i4	N-31°-W	不整橢円形	0.88 × 0.78	55	垂直	平坦	不明	土師器 8, 須恵器 2	
215C	D4j5	-	円形	(0.38) × (0.38)	53	垂直	皿状	不明		SK215A→SK215B→SK215C
221	D5b4	N-65°-W	橢円形	0.50 × 0.34	24	緩斜	皿状	自然		
226	D5c5	N-56°-E	円形	0.46 × 0.40	27	緩斜	皿状	人為		
227	D5c4	N-43°-E	橢円形	0.48 × 0.40	34	外傾	凹凸	人為	土師器 1	
230	D5d4	N-0°	橢円形	0.40 × 0.36	24	外傾	皿状	人為		
237	D5b3	N-0°	橢円形	0.70 × 0.54	24	外傾	皿状	人為		SB13との新旧関係不明
242	D5e3	-	円形	1.00 × 1.00	16	緩斜	皿状	人為	土師器 3, 炭化材多量出土	SI35→SK242
243	D5e4	N-50°-E	橢円形	0.74 × 0.65	42	垂直	皿状	人為	土師器 4, 須恵器 2	SI35→SK243
248	D5f4	N-90°	橢円形	0.42 × 0.34	17	垂直	皿状	人為		
259	D5e6	N-54°-E	橢円形	1.64 × 0.82	54	外傾	平坦	自然		
264	D5g5	N-53°-W	円形	1.56 × 1.48	62	緩斜	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 3	
265	D5c7	N-39°-E	橢円形	0.56 × 0.44	32	外傾	凹凸	人為		
266	D5g9	N-64°-W	不定形	1.96 × 1.04	78	外傾	凹凸	人為	土師器27, 須恵器30	
268	D5g0	N-73°-W	円形	1.14 × 1.10	48	外傾	平坦	人為	土師器14, 須恵器 8	
269	D5f0	N-37°-E	橢円形	0.71 × 0.59	42	緩斜	皿状	自然		
270	D5e9	N-0°	橢円形	0.61 × 0.56	40	外傾	皿状	人為		
274	D5c9	N-9°-W	不整橢円形	1.32 × 0.92	27	緩斜	平坦	人為	土師器 3	
286	C5h8	N-36°-W	円形	0.86 × 0.85	43	外傾	凹凸	人為	土師器 5, 須恵器 3	
287	D5b3	N-0°	橢円形	0.75 × 0.68	18	緩斜	皿状	自然	土師器 8	SB13→SK287
289	C5g9	N-0°	円形	0.77 × 0.72	30	外傾	平坦	人為	土師器 3	
290	C5f0	N-0°	円形	0.44 × 0.38	39	外傾	皿状	人為		
293	C6c2	N-45°-W	橢円形	1.35 × 1.25	23	緩斜	皿状	人為	土師器 3, 須恵器 4	
297	C6a1	N-57°-E	円形	0.90 × 0.82	24	外傾	平坦	人為	土師器 1	
299	C6a4	N-0°	円形	0.75 × 0.73	42	外傾	平坦	人為		
300	C6a4	N-83°-W	長方形	1.70 × 1.10	22	緩斜	皿状	人為	土師器12, 須恵器 6	
301	C6a4	N-90°	円形	0.75 × 0.74	27	緩斜	皿状	人為	土師器 4, 須恵器 3	
302	C6b5	N-60°-W	円形	1.12 × 1.06	26	緩斜	皿状	人為	土師器 8, 須恵器 3	
303	C6b4	N-45°-W	円形	0.76 × 0.72	22	緩斜	皿状	人為		
306	C6e3	N-0°	長方形	1.06 × 0.55	33	外傾	平坦	人為	須恵器 2	
307	C6e3	N-0°	円形	0.76 × 0.73	28	外傾	平坦	人為	土師器 2, 須恵器 3	

310	C6e6	N - 0°	円形	0.70 × 0.67	47	外傾	平坦	人為	土師器 1	
311	C6f6	N - 82° - W	隅丸方形	1.17 × 1.07	59	外傾	平坦	人為	土師器 4, 須惠器 2	
312	C6f3	N - 71° - E	楕円形	1.07 × 0.92	51	外傾	平坦	人為	土師器 3	SK313→SK312 中・近世
314	C6f3	N - 80° - E	不整円形	1.03 × 0.95	38	緩斜	平坦	人為	土師器 2	
315	C6g3	N - 28° - E	円形	1.17 × 1.05	55	外傾	平坦	人為	土師器 4, 土師質土器 1 (内耳鍋)	中・近世?
316	C6g3	N - 27° - E	円形	1.18 × 1.17	58	外傾	皿状	人為	土師器 3, 須惠器 3	
317	C6g4	N - 54° - E	円形	1.00 × 0.95	43	外傾	平坦	人為	土師器 5, 須惠器 3	
318	C6h3	N - 88° - E	円形	1.12 × 1.02	38	外傾	平坦	人為	土師器 6	
320	D6f2	N - 0°	円形	0.50 × 0.47	69	緩斜	皿状	不明		
321	C6i2	N - 62° - W	楕円形	1.85 × 0.91	37	緩斜	平坦	自然		
322	C6i3	N - 20° - E	円形	0.97 × 0.94	30	外傾	平坦	人為		
327	D6c5	N - 90°	隅丸長方形	1.43 × 1.06	63	外傾	平坦	人為	土師器 3, 須惠器 3	SB6A→SK327
337A	D6h2	N - 90°	楕円形	(1.25) × 1.15	43	外傾	平坦	人為	土師器 4	SK337B→SK337A
337B	D6h3	N - 7° - W	[隅丸方形]	(0.60) × (0.55)	25	垂直	平坦	人為		SK337B→SK337A
341	D6e5	N - 46° - W	楕円形	0.90 × 0.78	10	緩斜	平坦	人為	土師器 2	
342	D6d6	N - 11° - W	円形	1.18 × 1.15	27	外傾	平坦	人為	土師器 8, 須惠器 4	
344	D6d7	N - 0°	[円形]	0.95 × (0.64)	17	外傾	平坦	人為	土師器 1	SK344との新旧関係不明
345	C6d6	N - 80° - W	隅丸方形	0.92 × 0.90	30	外傾	皿状	人為	土師器 6, 須惠器 2	SB26→SK345
346	C6c6	N - 0°	円形	0.85 × 0.80	17	外傾	皿状	人為	土師器 1	SB26→SK346
347	C6d6	N - 0°	楕円形	0.88 × 0.79	19	外傾	平坦	人為	土師器 5, 須惠器 2	SB26→SK347
349	D6d5	N - 0°	楕円形	0.64 × 0.51	31	外傾	平坦	人為		
352	D6d7	N - 75° - W	円形	1.00 × 0.91	49	外傾	平坦	人為	土師器13, 須惠器 7	SB26→SI50→SK352
365	C6j9	N - 60° - W	円形	0.37 × 0.35	24	外傾	皿状	人為		
366	C6j9	N - 65° - W	不整楕円形	0.71 × 0.53	26	緩斜	皿状	人為	土師器 6	
367	C6j9	-	円形	0.43 × 0.43	18	外傾	平坦	人為		
368	C6i9	N - 44° - W	不整円形	0.60 × 0.57	50	垂直	皿状	人為	土師器 5, 須惠器 6	
369	C6j0	N - 25° - E	楕円形	0.54 × 0.44	25	外傾	皿状	人為	土師器 3	
370	C6j0	N - 58° - E	楕円形	0.53 × 0.43	16	外傾	皿状	人為	土師器 2	
371	C6i0	N - 36° - W	円形	0.50 × 0.49	48	外傾	平坦	人為	土師器 2	
372	C7i1	-	円形	0.35 × 0.35	43	外傾	皿状	人為		
373	C7i1	N - 50° - E	円形	0.58 × 0.55	28	外傾	皿状	人為	土師器 3, 須惠器 2	
374	C7i1	N - 62° - E	楕円形	0.58 × 0.48	51	垂直	平坦	人為		
375	C7i1	N - 0°	長方形	1.25 × 0.70	21	垂直	平坦	人為		
376	C7i1	N - 32° - W	円形	0.75 × 0.70	52	外傾	皿状	人為		
377	C7i1	N - 29° - E	不整楕円形	0.54 × 0.38	29	外傾	皿状	人為		
380	C6i0	N - 12° - W	楕円形	0.96 × 0.68	56	外傾	皿状	人為		
381	C6i0	N - 53° - E	円形	0.65 × 0.55	41	外傾	皿状	人為		
383	D7d1	N - 0°	楕円形	2.23 × 1.51	34	緩斜	凹凸	自然		
387A	D6c0	N - 33° - E	円形	1.00 × (0.85)	13	外傾	平坦	人為	土師器 5, 須惠器 3	SK387B→SK387A
387B	D6c0	N - 3° - W	楕円形	1.30 × (0.84)	23	緩斜	平坦	人為		SK387B→SK387A
391	B7i2	N - 90°	楕円形	1.67 × 1.15	26	外傾	平坦	自然		
392	B7i2	N - 43° - W	楕円形	1.08 × 0.99	30	外傾	平坦	自然	土師器 4	
393	B7i2	N - 90°	不整楕円形	2.29 × 1.32	51	外傾	皿状	自然・人為	土師器 4, 1~2層から須惠器10(坏P607, P608)	1層と2層は8世紀中葉から後葉の土坑と考えられる
395	B7i5	N - 0°	円形	0.94 × 0.89	21	緩斜	皿状	自然	土師器 1	
396	B7i6	N - 39° - W	楕円形	0.95 × 0.88	25	緩斜	皿状	自然	土師器 4, 須惠器 3	
397	C7a5	N - 90°	円形	0.92 × 0.88	42	外傾	平坦	自然		
398	C7a4	N - 29° - W	円形	0.92 × 0.84	37	外傾	皿状	人為	土師器 2	
399	C7a3	N - 30° - W	楕円形	0.94 × 0.85	35	外傾	凹凸	自然	土師器 6, 須惠器 4	

401	C7b3	N-41°-E	橢圓形	1.50 × 1.04	30	緩斜	皿狀	自然		
402	C7c3	N-0°	円形	0.82 × 0.78	41	外傾	皿狀	自然	土師器 2, 須惠器 4	
403	C7c4	N-33°-E	橢圓形	1.08 × 0.94	28	外傾	平坦	自然	土師器 1	
404	C7c5	N-90°	橢圓形	1.34 × 1.16	32	外傾	平坦	人為	土師器 2	
405	C7d5	N-90°	長方形	1.84 × 1.14	34	外傾	平坦	人為	土師器 10, 須惠器 5	
406	D7a5	N-0°	円形	1.00 × 0.97	43	外傾	平坦	人為		
410	D7g3	N-0°	円形	0.85 × 0.80	54	外傾	平坦	自然		
411	D7i2	N-28°-E	橢圓形	0.63 × 0.51	34	緩斜	皿狀	人為	土師器 5, 須惠器 3	
412	D7i2	N-45°-E	円形	0.83 × 0.83	24	外傾	平坦	自然	土師器 1	
413	D7h1	N-78°-W	橢圓形	0.52 × 0.46	67	垂直	皿狀	人為		
414	D7i1	N-39°-W	橢圓形	0.82 × 0.72	26	緩斜	凹凸	人為	土師器 10, 須惠器 6	
415	D7j1	N-0°	不定形	0.68 × 0.48	58	外傾	皿狀	人為		

付 章

中原遺跡の自然科学分析パリノ・サーヴェイ株式会社

1 ローム層の層序確立のための火山ガラス比分析および重鉍物分析

2 中原遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定

茨城県中原遺跡出土の漆膜について(株)吉田生物研究所

中原遺跡の自然科学分析

1 ローム層の層序確立のための火山ガラス比分析および重鉍物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は、花室川左岸の舌状台地上に立地する。今回の発掘調査により、奈良・平安時代の集落に関わる遺構をはじめとして、中近世の遺構、旧石器時代のブロックなどが検出されている。遺物は、上述の奈良・平安時代の土師器、須恵器、陶器などのほか、旧石器時代の石器類、縄文式土器、中近世の陶磁器などが出土している。

今回の自然科学分析調査では、旧石器時代の石器ブロックの年代を検討するために、火山ガラス比分析および重鉍物分析により石器が検出された褐色火山灰土層（いわゆるローム層）の層序対比を行う。火山ガラス比分析では、本地域のローム層上部の指標テフラである立川ローム層最上部ガラス質火山灰（UG：山崎，1978）や始良T_n火山灰（AT：町田・新井，1976）に由来する細粒の火山ガラスの産状を調べることにより、降灰層準を推定する。重鉍物分析では、ローム層中の重鉍物組成を調べ、その層位的変化を指標として対比に用いる。本分析法は、武蔵野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いためとくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では分析例は少ないが、武蔵野台地や栃木県～茨城県北部のローム層との対比を行う。

1. 遺跡周辺の地形・地質

茨城県南部に広がる常陸台地は霞ヶ浦や北浦を含むいくつかの谷によって開析され、さらに東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの各台地にわかれている。常陸台地の地形・地質は坂本（1986）により以下のように記載されている。常陸台地は下総台地に対比される段丘で、その構成層は後期更新世の海成層の見和層である。見和層は最終間氷期の下末吉海進に伴って堆積したものである。その上位に堆積する茨城粘土層は、関東平野中南部の台地下部に広く分布する常総粘土層に対比されている。常総粘土層は常総層上部粘土層に相当し、常総層はおよそ10万年前から6万年前頃にかけて武蔵野台地北縁から大宮台地・下総台地・常陸台地にわたる氾濫原に広く堆積した地層であるといわれている（小玉ほか，1981）。さらに、茨城粘土層の上位には各台地が離水した後に形成した褐色火山灰土層（いわゆるローム層）が分布する。

本遺跡が立地する稲敷台地は、常陸台地の南部に位置し、北を桜川に、南および西を小貝川の低地に、東を霞ヶ浦により限られている。南部では、台地は花室川や小野川とその支流の乙戸川や桂川などにより開析が進んでいる。

2. 試料

試料採取地点では、上位よりⅢ～Ⅳ層からⅩⅦ層、常総粘土層-a、常総粘土層-bに分層されている。Ⅲ層～Ⅹ層が立川ローム層の標準層序、それ以下が武蔵野ローム層に対比されている。Ⅶ層・Ⅹ層は第二暗色帯（BBⅡ）にあたり、Ⅹ層は層相の違いによりさらにⅩ-a層とⅩ-c層に細分されている。また、ATはⅥ層を中心に拡散していると考えられており、Ⅴ層の第一暗色帯（BBⅠ）は確認されていない。ローム層の上位の黒色火山灰土層（いわゆる黒ボク土層）の状況は、Ⅰ層は表土攪乱層で、Ⅱ層は確認されていない。

試料は、上位のⅢ～Ⅳ層から下位に向かって、厚さ5cmで連続的に合計15点（試料番号1～15）が採取されている。この中から、前述のUGおよびATに由来する火山ガラスの検出が予想される試料番号1・3～7の6点を分析試料とする。以上のⅢ～Ⅳ層からⅩⅢ層までの柱状図と試料採取位置を図1に示す。

3. 分析方法

(1) 重鉍物分析

試料約40gに水を加えて超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

(2) 火山ガラス比分析

重鉍物分析の処理により得られた軽鉍物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉍物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

4. 結果

結果を表1・図1に示す。

(1) 重鉍物分析

カンラン石は、いずれの試料中にも微量認められるが、その量比の極大および極小層準は明瞭ではない。斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、試料番号1～5では比較的多く認められるが、試料番号6以下では下位に向かって減少する。また、角閃石は試料番号1・6・7で微量認められる。

(2) 火山ガラス比分析

試料番号1～5ではバブル型火山ガラスが比較的多く認められる。下位より見て、試料番号6から5で増加、試料番号5から4で漸増、それより上位では漸減する。この火山ガラスは、その形態と色調および産出層準から前述のATに由来すると考えられる。ATは、鹿児島県の始良カルデラを給源とし、降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている（町田・新井，1992）。一般に、土壤中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い（早津，1988）。これに従えば、本地点のATの降灰層準は試料番号5のⅦ層上限付近と考えられる。

5. 考察

本地域のローム層上部の指標テフラには前述のUGやATなどがある。UGは、浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、その降灰年代は約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるⅢ層上部が降灰層準と考えられており、南関東地方に広く分布する。さらに、当社によるこれまでの分析例により、UGによく類似するテフラが栃木県～茨城県北部に広く分布することが認められており、その降灰層準もローム層の最上部にある場合が多い。UGやUGに類似するテフラ

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	15	163	13	6	35	18	250	21	2	3	224	250
3	13	166	13	2	44	12	250	25	0	2	223	250
4	15	163	13	2	53	4	250	37	0	1	212	250
5	16	165	10	2	51	6	250	32	0	2	216	250
6	14	131	4	7	69	25	250	11	0	1	238	250
7	16	116	4	7	78	29	250	10	0	0	240	250

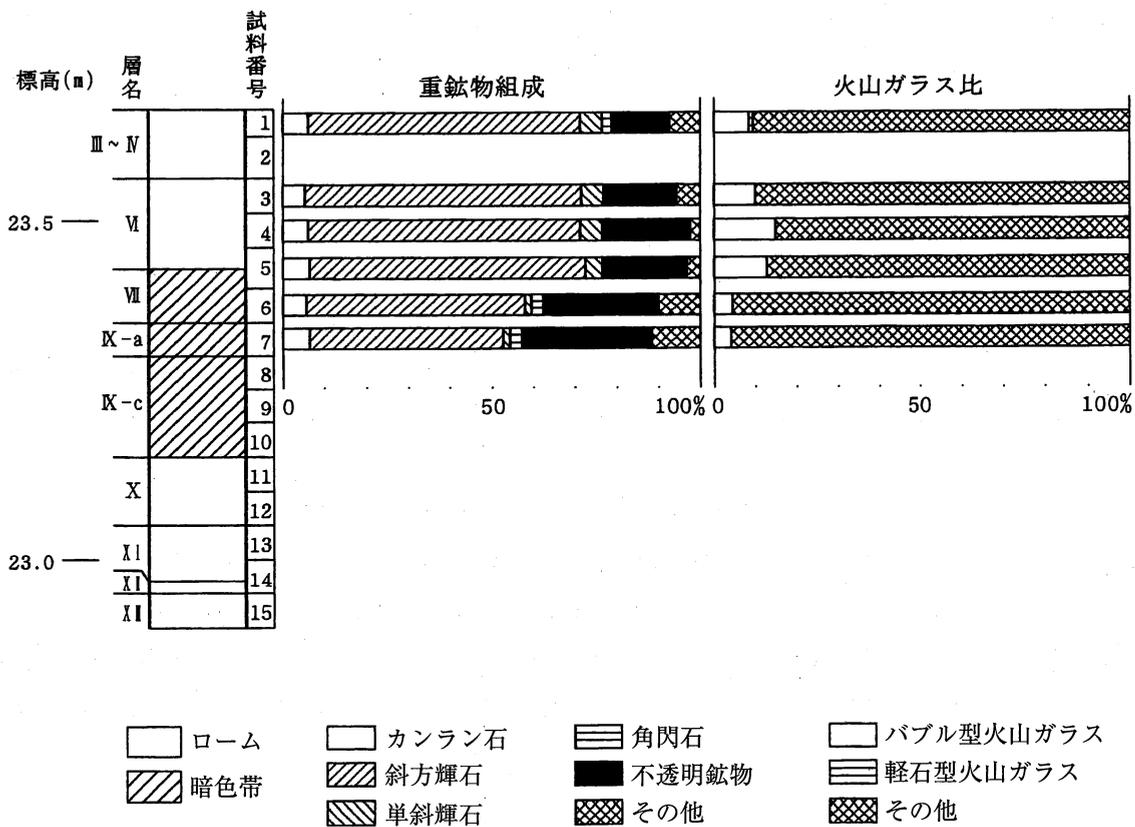


図1 重鉱物組成・火山ガラス比

の由来と考えられている浅間軽石流期のテフラには、浅間板鼻黄色テフラ (As-YP) やAs-YP と同一噴火輪廻のテフラと考えられている浅間草津テフラ (As-K) などがある (町田・新井, 1992)。As-YP は分布主軸は東南東で群馬県南部を中心に分布し、その降灰年代は約1.3~1.4万年前と考えられている (町田・新井, 1992)。また、As-K は分布主軸は北東で、主に群馬県北西部から新潟県南部に分布する (町田・新井, 1992)。さらに、As-K (引用文献中ではAs-YPk) に対比されるテフラは東北地方南部から中部でも認められている (小岩・早田, 1994)。UG またはUG に類似するテフラは、いずれにしてもこれらの浅間火山の軽石流期のテフラに由来すると考えられる。ただし、今回の分析ではUG に由来すると考えられる火山ガラスがほとんど認められなかったため、本地点におけるUG の降灰層準はⅢ~Ⅳ層よりさらに上位と考えられる。したがって、本地点ではローム層の最上部は削剥を受けていると考えられる。

A T の降灰層準は、武蔵野台地の立川ローム層の標準層序ではⅦ層上限付近にある場合が多い。また、栃木県~茨城県北部ではA T の降灰層準は田原ローム層と宝木ローム層の境界層の暗色帯の上部 (町田・新井, 1976) とされている。今回の分析結果から、本地点のⅦ層上限が武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるⅦ層上限、栃木県~茨城県北部の宝木ローム層の最上部に対比される。また、本地点では検出されたA T の量比が比較的少なかった。これは調査地点が台地の縁辺部に位置し傾斜しているため、降灰したA T が流されてしまい保存されにくかったことが考えられる。

重鉍物組成の層位的変化の指標には、小林ほか (1971) の羽鳥の分析例をはじめとして、当社による分析例でも確かめられている。これは武蔵野台地における立川ローム層の第一暗色帯 (BBI) であるⅤ層上限付近の輝石の極大である。今回の分析結果では、両輝石の極大は明瞭にはわからなかった。したがって、武蔵野台地の標準層序におけるⅤ層との対比はわからない。

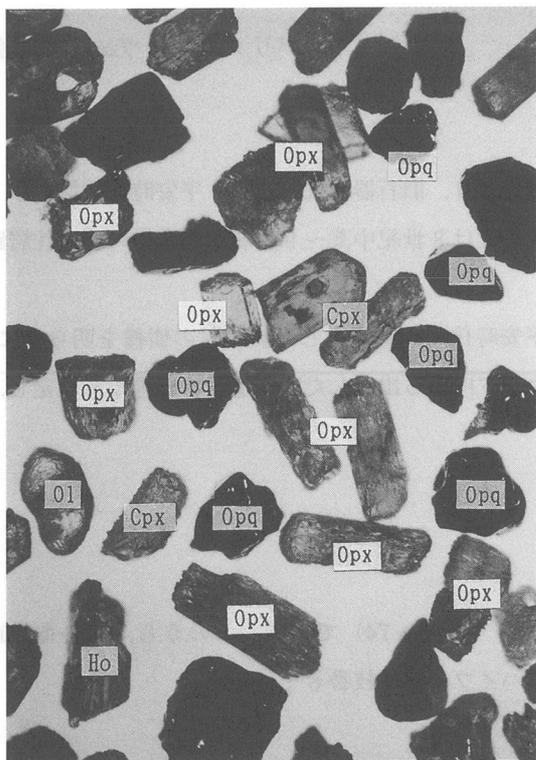
また、下位では当社の分析例によりA T の降灰層準であるⅦ層上限のやや下位にカンラン石の極大層準が指標として認められている。しかし、今回の分析結果ではカンラン石の極大層準は明瞭には認められなかったため、カンラン石の極大層準はさらに下位の可能性がある。

角閃石は栃木県~茨城県北部の分析例では、宝木ローム層の上部 (暗色帯上部) 付近すなわちA T の降灰層準付近から下位に向かって増加することが認められている。この角閃石は、宝木ローム層の中部に降灰層準がある赤城鹿沼軽石 (Ag-KP: 新井, 1962) に由来するものが拡散していると考えられる。Ag-KP は赤城火山を給源とし、降灰年代は約3.1~3.2万年前と考えられている (町田・新井, 1992)。一方、武蔵野台地の立川ローム層中には角閃石はほとんど認められない。したがって、本遺跡においてA T の降灰層準付近以下で角閃石が微量ではあるが認められたことは、栃木県~茨城県北部の宝木ローム層の特徴とやや類似する。ただし、さらに下位の層準の結果を含めて再検討しなければならない課題とされる。以上のように本遺跡のローム層の重鉍物組成には、栃木県~茨城県北部のローム層の重鉍物組成と、南関東のローム層の重鉍物組成の両方の特徴が認められている。これは、これまでの周辺における柴崎遺跡、宮前遺跡、西ノ原遺跡などの調査結果ともほぼ整合し、本地域の特徴となる可能性がある。

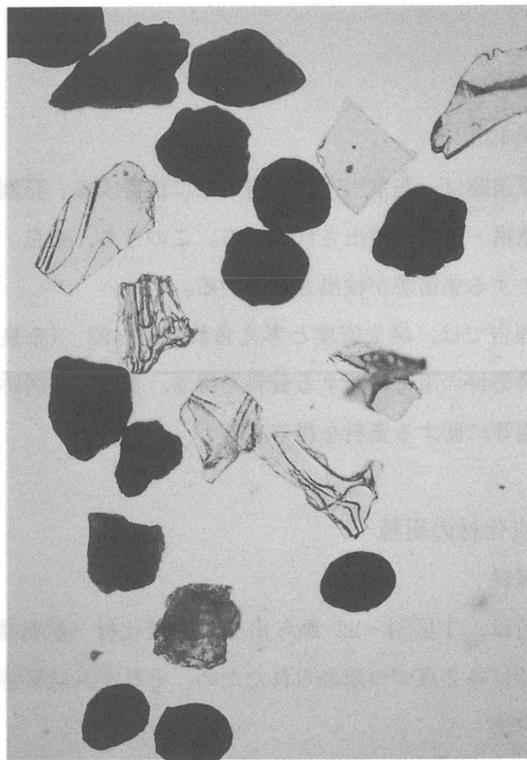
以上の結果をまとめると、本地点のⅥ層以上が武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるⅣ層付近~Ⅶ層に対比され、A T 降灰以降すなわち約2.1~2.5万年前以降に形成したと考えられる。また、Ⅶ層以下が立川ローム層の標準層序におけるⅦ層以下に対比され、A T 降灰以前すなわち約2.1~2.5万年前以前に形成したと考えられる。栃木県~茨城県北部のローム層との対比ではⅥ層以上が田原ローム層、Ⅶ層以下が宝木ローム層に対比される。

引用文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, 4, p.1-79.
- 早津賢治 (1988) テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー-A Tにまつわる議論に関係して-. 考古学研究, 34, p.18-32.
- 小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 (1971) 野川先土器時代遺跡の研究. 第四紀研究, 10, p.231-252.
- 小玉喜三郎・堀口万吉・鈴木尉元・三梨 昂 (1981) 更新世後期における関東平野の地塊状造盆地運動. 地質学論集, 20, p.113-128.
- 小岩直人・早田 勉 (1994) 東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ. 地学雑誌, 103, p.68-76.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276p., 東京大学出版会.
- 坂本 亨 (1986) 3.4 関東平野北部の更新統(9)常陸台地. 「日本の地質3 関東地方」. p.189-190, 共立出版.
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p.231-246.



1. 重鉱物 (試料番号1)



2. ATの火山ガラス (試料番号4)

0.5mm

Ol : カンラン石. Opx : 斜方輝石. Ho : 角閃石. Opq : 不透明鉱物.

2 中原遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡は、花室川左岸の台地上に位置する。発掘調査により、旧石器時代、奈良・平安時代前期、中・近世の遺構・遺物が検出されている。このうち、奈良・平安時代は8世紀中葉～9世紀中葉までの堅穴住居跡を中心とする集落跡が検出されている。

本報告では、焼失家屋と考えられるSI-22（奈良・平安時代）から出土した炭化材の樹種を明らかにし、住居構築材の用材に関する資料を得る。また、住居跡のカマド内から出土した種実遺体等の種類を同定し、植物利用等に関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、1区SI-22から出土した炭化材（試料番号1～4・6～74）である。このうち、試料番号16・17・73は各2点づつ認められたため、それぞれ試料番号にハイフオンで枝番号を付した。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。試料番号47には2種類が認められた。また、保存状態が悪いために樹種の同定に至らなかった試料については、観察できた範囲での結果を記した。その他の炭化材は、広葉樹7種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ・ケヤキ・ヤマグワ・モクレン属・サクラ属・キハダ）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～7細胞幅、1～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は1～4列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～30細胞高。しばしば結晶を含む。

表1 炭化材の樹種同定結果 (1)

遺構名	時代・時期	試料番号	用途など	樹種
SI-22	奈良・平安時代	1	住居構築材	ク リ
		2	住居構築材	ク リ
		3	住居構築材	ク リ
		4	住居構築材	ク リ
		6	住居構築材	ク リ
		7	住居構築材	ク リ
		8	住居構築材	ク リ
		9	住居構築材	ク リ
		10	住居構築材	サ ク ラ 属
		11	住居構築材	ク リ
		12	住居構築材	ク リ
		13	住居構築材	ク リ
		14	住居構築材	ク リ
		15	住居構築材	ク リ
		16-1	住居構築材	ク リ
		16-2	住居構築材	ク リ
		17-1	住居構築材	ク リ
		17-2	住居構築材	ク リ
		18	住居構築材	ク リ
		19	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		20	住居構築材	サ ク ラ 属
		21	住居構築材	ク リ
		22	住居構築材	ヤマグワ
		23	住居構築材	ヤマグワ
		24	住居構築材	キハダ
		25	住居構築材	キハダ
		26	住居構築材	ク リ
		27	住居構築材	ク リ
		28	住居構築材	ク リ
		29	住居構築材	ク リ
		30	住居構築材	ク リ
		31	住居構築材	ク リ
		32	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		33	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		34	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		35	住居構築材	ク リ
		36	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		37	住居構築材	広葉樹
		38	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		39	住居構築材	ク リ
		40	住居構築材	キハダ
		41	住居構築材	ク リ
		42	住居構築材	ク リ
		43	住居構築材	ヤマグワ
		44	住居構築材	ク リ
		45	住居構築材	モクレン属
		46	住居構築材	ク リ
		47	住居構築材	ク リ
		ケヤキ		
48	住居構築材	ク リ		

表1 炭化材の樹種同定結果 (2)

遺構名	時代・時期	試料番号	用途など	樹種
SI-22	奈良・平安時代	49	住居構築材	ク リ
		50	住居構築材	ク リ
		51	住居構築材	ク リ
		52	住居構築材	ク リ
		53	住居構築材	サ ク ラ 属
		54	住居構築材	ク リ
		55	住居構築材	ク リ
		56	住居構築材	ク リ
		57	住居構築材	ク リ
		58	住居構築材	ク リ
		59	住居構築材	ク リ
		60	住居構築材	ク リ
		61	住居構築材	ク リ
		62	住居構築材	ク リ
		63	住居構築材	ク リ
		64	住居構築材	ク リ
		65	住居構築材	イネ科タケ亜科
		66	住居構築材	ク リ
		67	住居構築材	ク リ
		68	住居構築材	サ ク ラ 属
		69	住居構築材	ク リ
		70	住居構築材	ク リ
		71	住居構築材	ク リ
		72	住居構築材	キ ハ ダ
73-1	住居構築材	ケ ヤ キ		
73-2	住居構築材	ケ ヤ キ		
74	住居構築材	ケ ヤ キ		

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ・ミカン科キハダ属

環孔材で孔圏部は2～5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～20細胞高。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

(4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、クリを中心に7種類の広葉樹材とタケ亜科が確認された。各試料の部位

などの詳細は不明であるが、今回の結果からクリを中心とした種類構成であったことが推定される。本地域では、これまでも古墳時代を中心とした住居構築材の樹種が明らかにされている（未公表資料）。その結果ではクスギ節・コナラ節が比較的多く、今回の結果とはやや異なる。

クリは、縄文時代の住居構築材や燃料材として大量に利用されていたが、古墳時代ではクスギ節・コナラ節の利用が多く、クリの利用は少なくなることが知られている（千野，1983，1991；高橋・植木，1994）。また、奈良・平安時代には、減少していたクリの利用が再び多くなる傾向がある（千野，1991）。これらの傾向は、本地域でこれまで得られてきた樹種同定結果とも調和的であり、時代によって用材選択が異なっていたことが推定される。また、本地域では常緑広葉樹の利用が多い遺跡と落葉広葉樹が多い遺跡とがあり、周辺植生の違いが用材選択に影響していた可能性も指摘されている（未公表資料）。

今後さらに周辺地域での類例を蓄積し、用材選択の時代や地域による違いを明らかにしたい。

2. 種実遺体同定

(1) 試料

試料は、8世紀～10世紀代の各住居跡のカマド灰層試料（試料番号1～11）と8世紀～10世紀代の住居跡（SI-7）および8世紀中頃の溝跡から検出された炭化種実遺体（試料番号1～3）が対象とされた。カマドの灰層試料の中で、試料番号8・10は水洗選別を当社にて実施した。

(2) 方法

水洗選別されていない試料は、水酸化ナトリウム水溶液を加えて放置し試料を泥化させたあと、0.5mmの篩を通して水洗選別し、残渣を集める。残渣を乾燥後、他の試料も含めて、双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出、同定する。

(3) 結果

結果を表2に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

表2 種実遺体同定結果

試料名	遺構名など	同定結果（個数）	備考
炭化種子	1 SI-7	モモ（破片）	No45
	2 SD11B	モモ（1）	1区X1
	3 SD11B	モモ（1）	X
カマド灰炭化物	1 SI-8 カマド灰	未検出	
	2 SI-11 カマド灰	未検出	
	3 SI-19 カマド灰	イネ（5）	
	4 SI-31 カマド灰	未検出	
	5 SI-32 カマド灰	イネ（1）	
	6 SI-38 カマド灰	イネ（1）	
	7 SI-39 カマドB灰	未検出	
	8 SI-41 カマドA灰	未検出	水洗選別
	9 SI-67 カマド灰	未検出	
	10 SI-68 カマド灰	未検出	水洗選別
	11 SI-79 カマド灰	未検出	

・モモ科 (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(肉果皮)が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2 cm程度。核の形はほぼ球形で、やや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・イネ科 (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。大きさは4 mm程度で、胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

(4) 考察

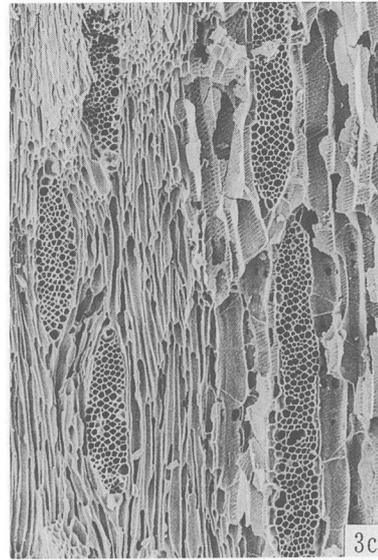
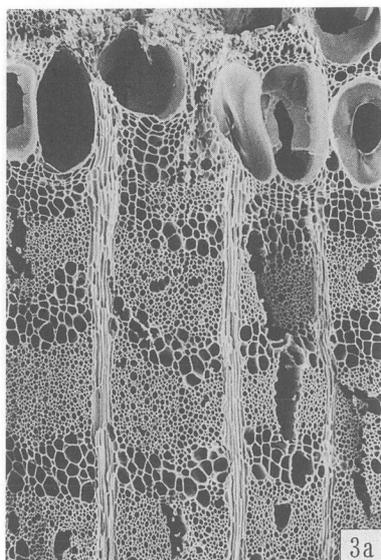
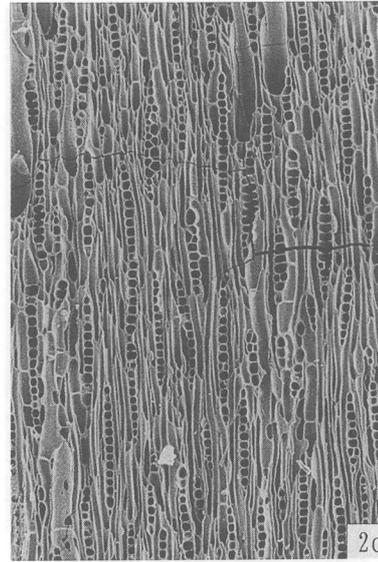
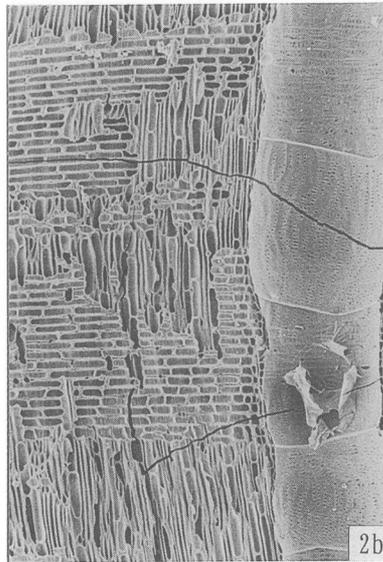
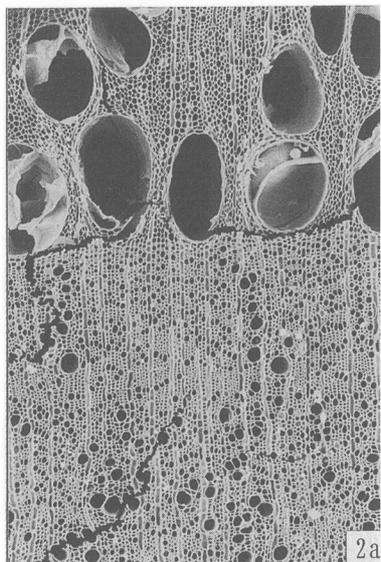
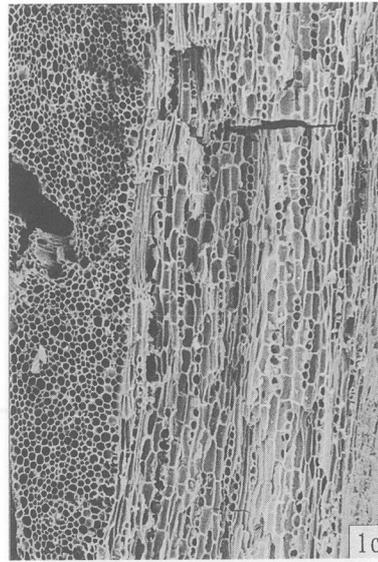
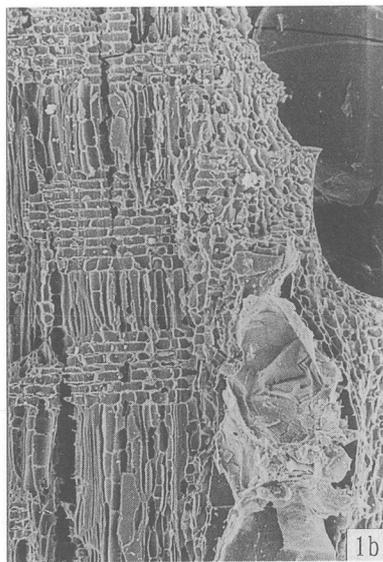
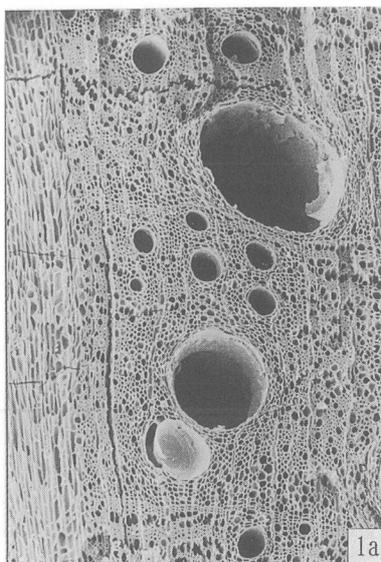
カマドの水洗選別試料(カマド灰8・10)をみると、炭化物がほとんどなく、少量の砂分が含まれるのみである。また、他の試料(カマド灰1～7・9・11)も、イネが若干含まれているだけで、ほとんどの試料では微細な炭化材片が少量みられる程度である。イネが含まれるのは、調理などに伴って混入したものと考えられる。また、炭化材片が少ないことを考えると、燃料材は草本類に由来する可能性がある。これについては、灰像分析を応用することにより、イネ科種の燃料材について情報が得られることが期待される。

また、カマドの灰中には、モモの核も混入しており、食用後の残渣を廃棄した可能性もある。今回検出されたものは、いわゆる「古代モモ」と呼ばれている小型で球形な形質をもった種類であり、幅広い時代から検出されることが知られている(南木, 1991)。モモの果実が傷みやすく、長距離の輸送に向かないことを考慮すれば、周辺で栽培されていたと考えられる。

引用文献

- 千野裕道(1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生 - 南関東地方を中心に - . 東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p.25-42.
- 千野裕道(1991) 縄文時代に二次林はあったか - 遺跡出土の植物性遺物からの検討 - . 東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.215-249.
- 南木陸彦(1991) 栽培植物. 「古墳時代の研究 4 生産と流通 I」, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎, P.165-174, 雄山閣.
- 高橋 敦・植木真吾(1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18.

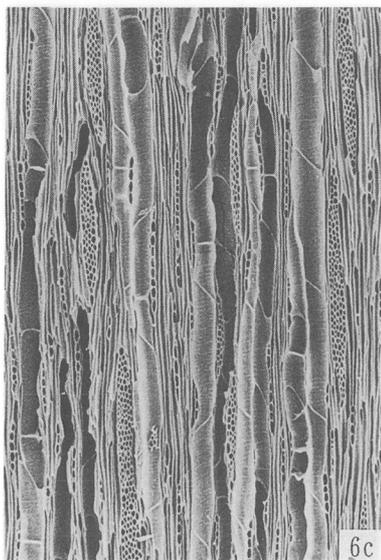
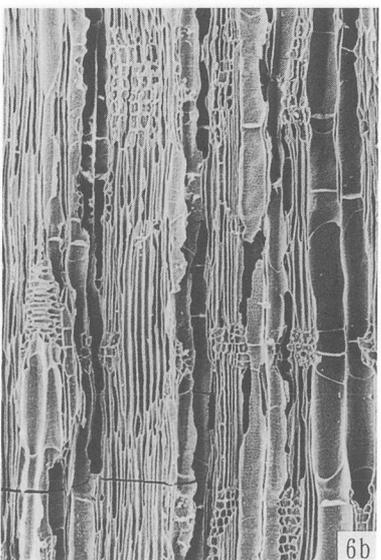
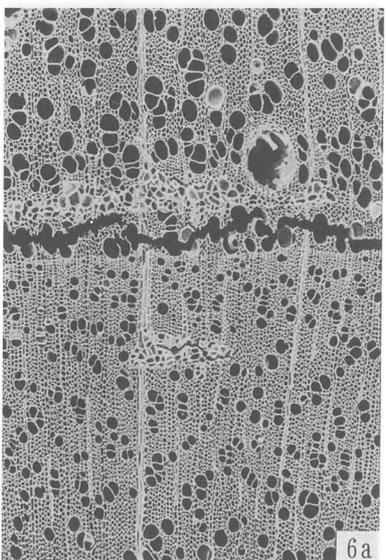
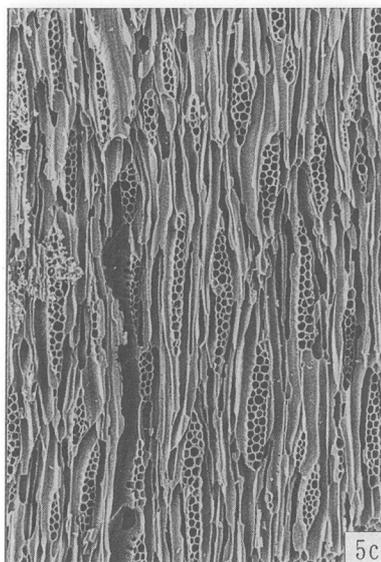
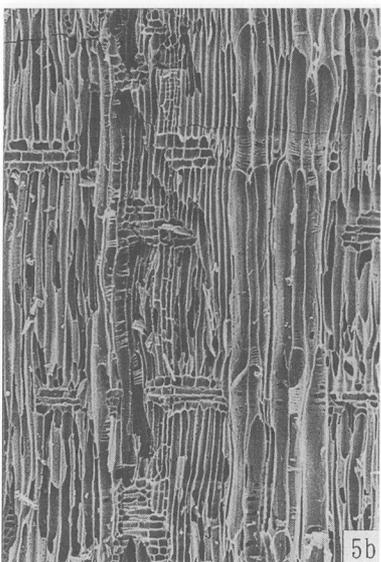
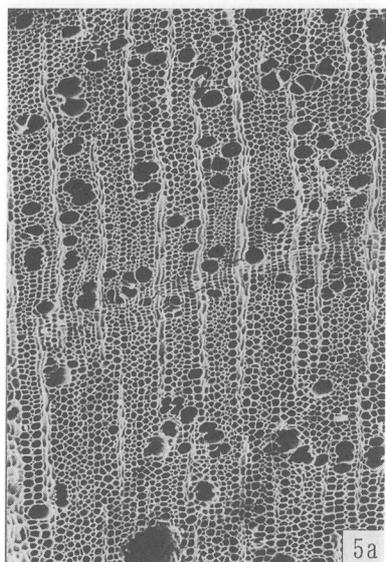
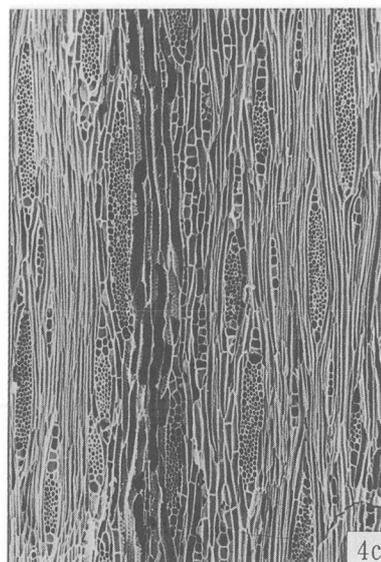
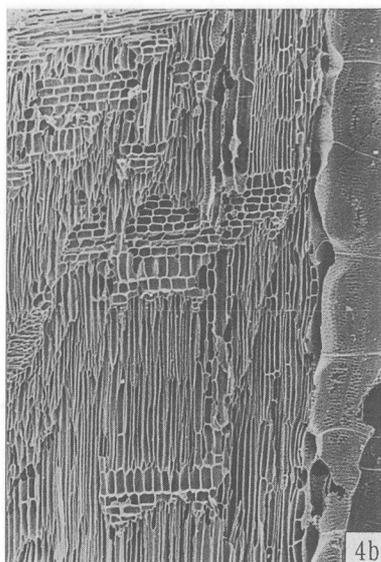
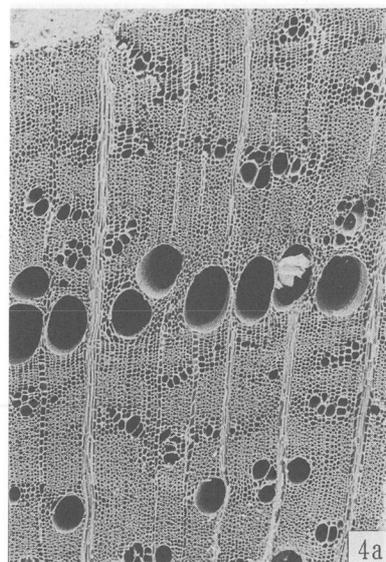
図版1 炭化材 (1)



1. コナラ属コナラ亜属クスギ節 (SI-22 No.38)
 2. クリ (SI-22 No.6)
 3. ケヤキ (SI-22 No.73-1)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

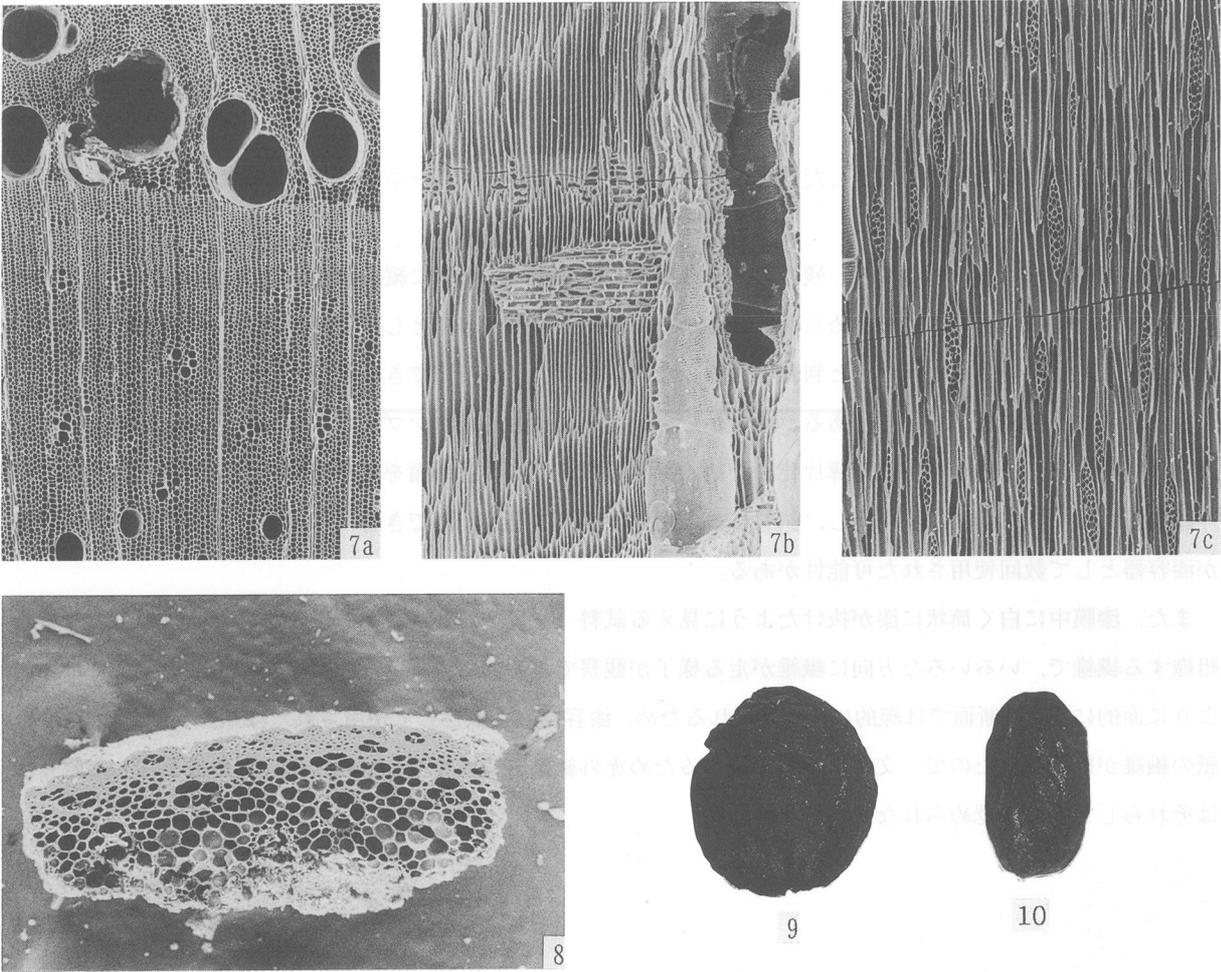
図版2 炭化材 (2)



4. ヤマグチ (SI-22 No.22)
 5. モクレン属 (SI-22 No.45)
 6. サクラ属 (SI-22 No.10)
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

図版3 炭化材(3)・種実遺体



7. キハダ (SI-22 No.25) a : 木口, b : 柁目, c : 板目
 8. イネ科タケ亜科 (SI-22 No.65) 横断面
 9. モモ (カマド灰炭化種子 No.2)
 10. イネ (カマド灰炭化物 No.6)

■ 200 μm : 7a, 8
 ■ 200 μm : 7b, 7c
 ■ 1 cm : 9
 ■ 2 mm : 10

茨城県中原遺跡出土の漆膜について

(株)吉田生物研究所

茨城県所在の中原遺跡から出土した、土が付着したままの漆膜をクリーニングし、その破片について断面観察を行ったので以下に報告する。

漆膜が円筒状の形態をとること、残存している漆膜の外側面の1ヶ所に縦方向の段差が認められること、そして底部の破片の外面に木目が認められることから、この漆膜は漆容器として使用されていた木胎の曲げ物の内面に残った漆が硬化したもの、と判断される。なお、木胎は全く確認できなかった。

漆膜分析の手順は以下の通りである。土中から小破片を試料としてサンプリングし、エポキシ樹脂に包埋し硬化させた。次にそれらを研磨し薄片化した後、光学顕微鏡下で漆膜断面を観察した。

漆膜断面は一様に淡茶褐色を呈し、試料によっては数層の漆層が確認できる(写真1)ので、同一の曲げ物が漆容器として数回使用された可能性がある。

また、漆膜中に白く筒状に漆が抜けたように見える試料(写真2, 3)がある。この白い筒状のものは紙を組織する繊維で、いろいろな方向に繊維が走る様子が観察できる。この紙は、漆膜の真ん中というよりは片側より面的に(漆膜断面では線的に)認められるため、漆容器の蓋紙として使用された漆紙と判断した。なお、紙の繊維が確認されたので、文字の有無を調べるため赤外線撮影装置で写してみたが、全体像を写した限りではそれらしきものは認められなかった。

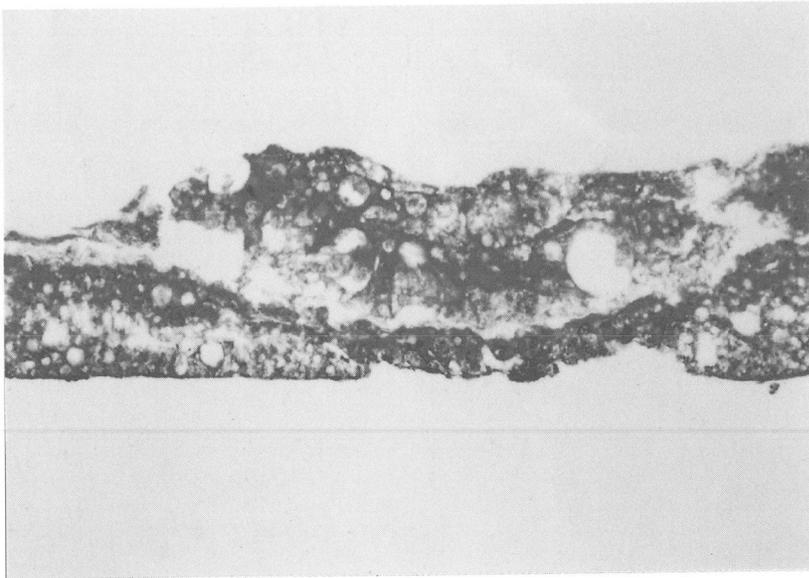


写真1 漆膜が数層確認できる部分 (×80)

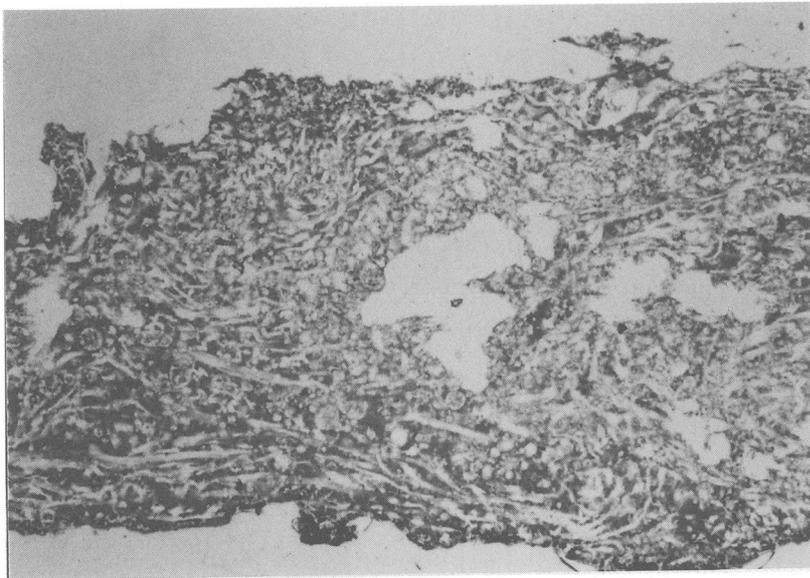


写真2 紙の繊維が確認できる部分 (×80)

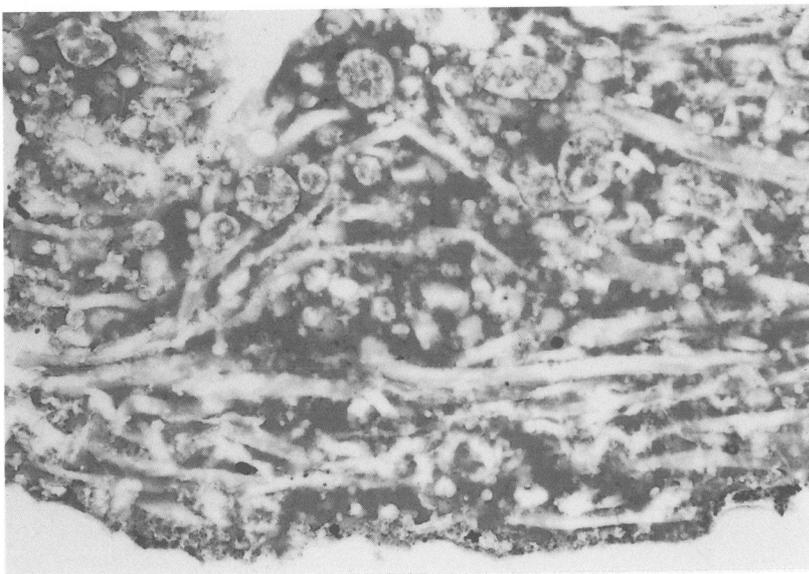


写真3 同上拡大 (×200)

写 真 図 版



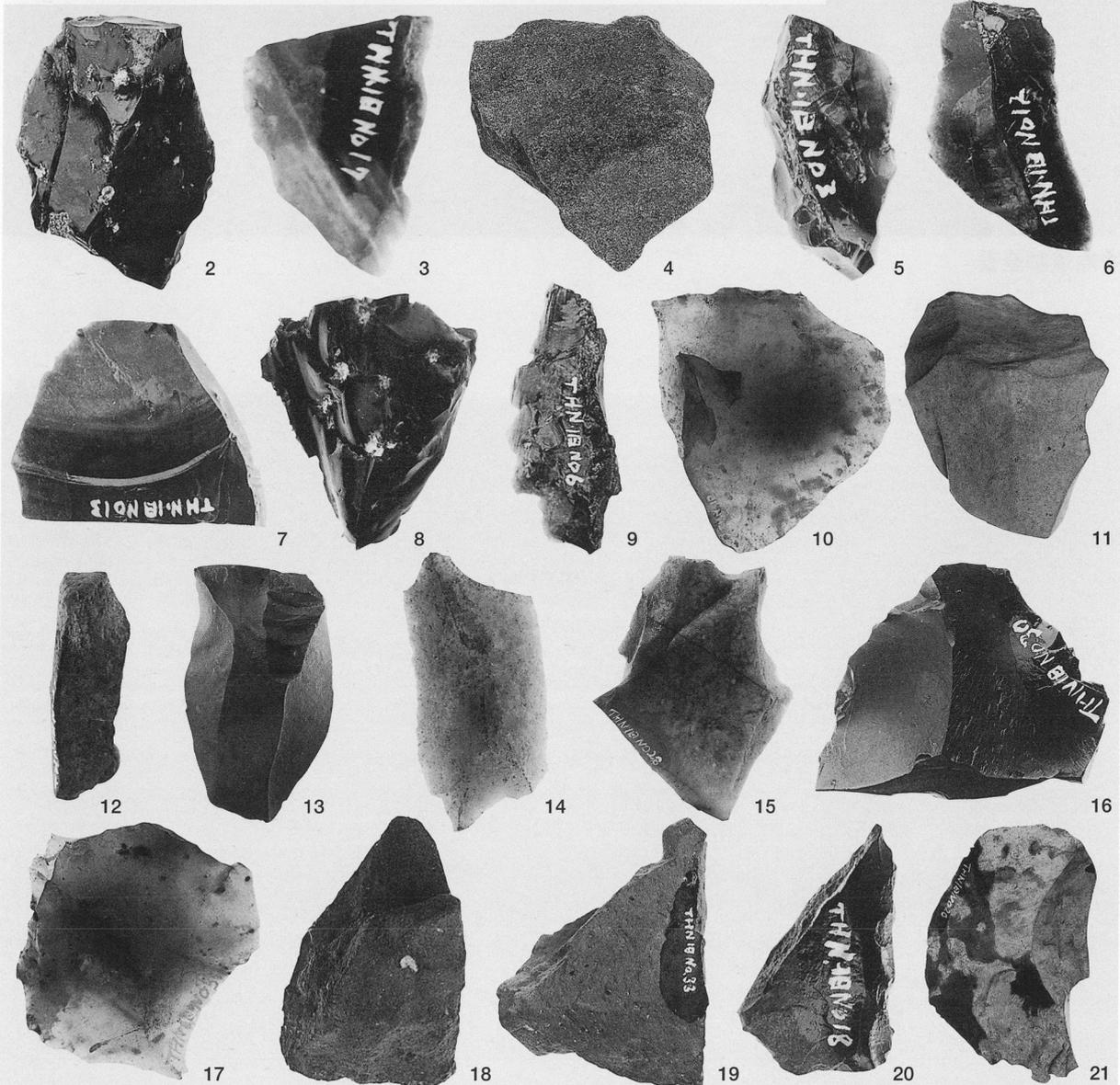
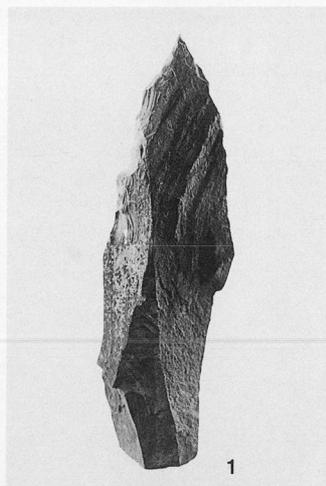


中原遺跡全景



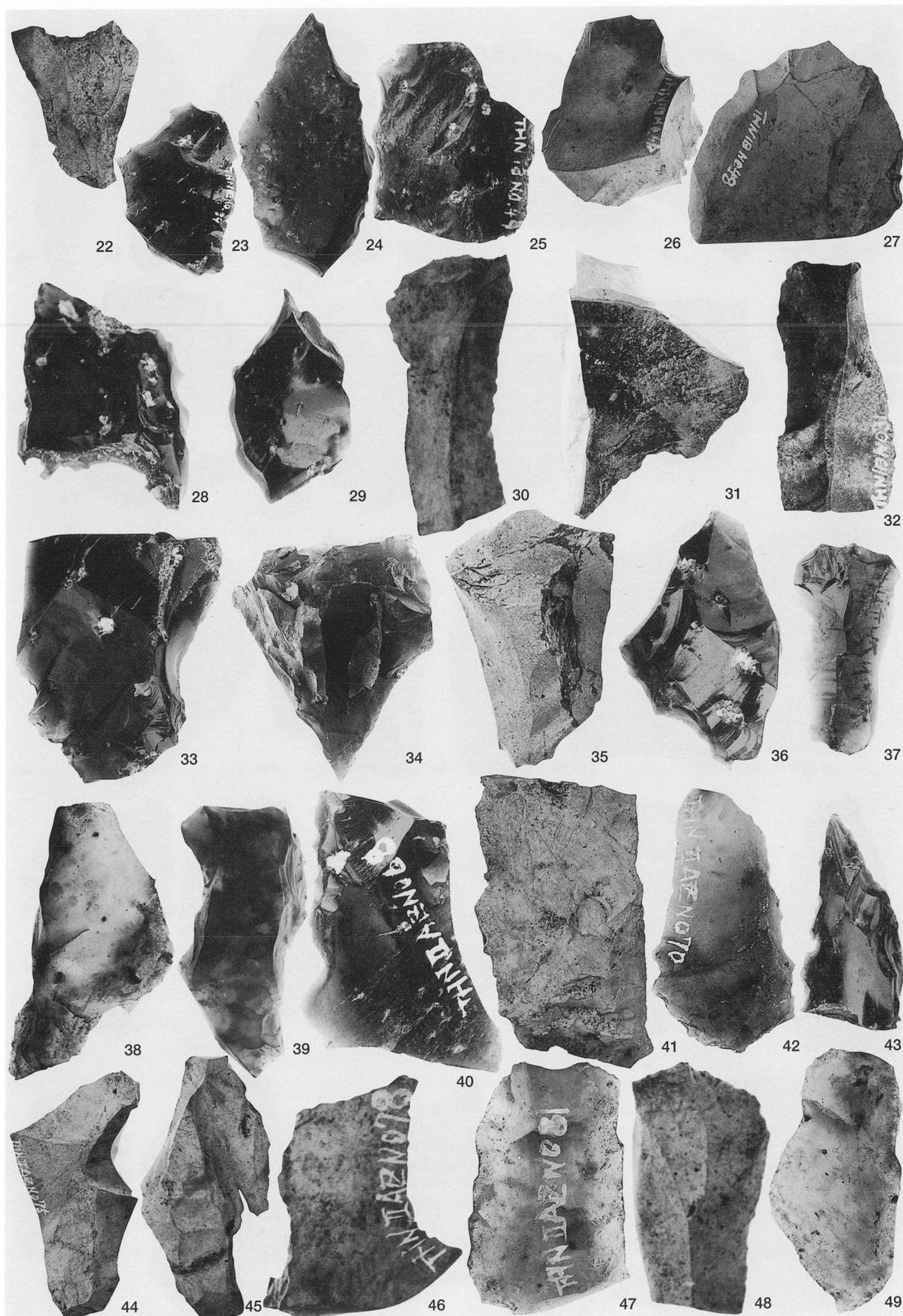
調査1区遺構確認状況

PL2

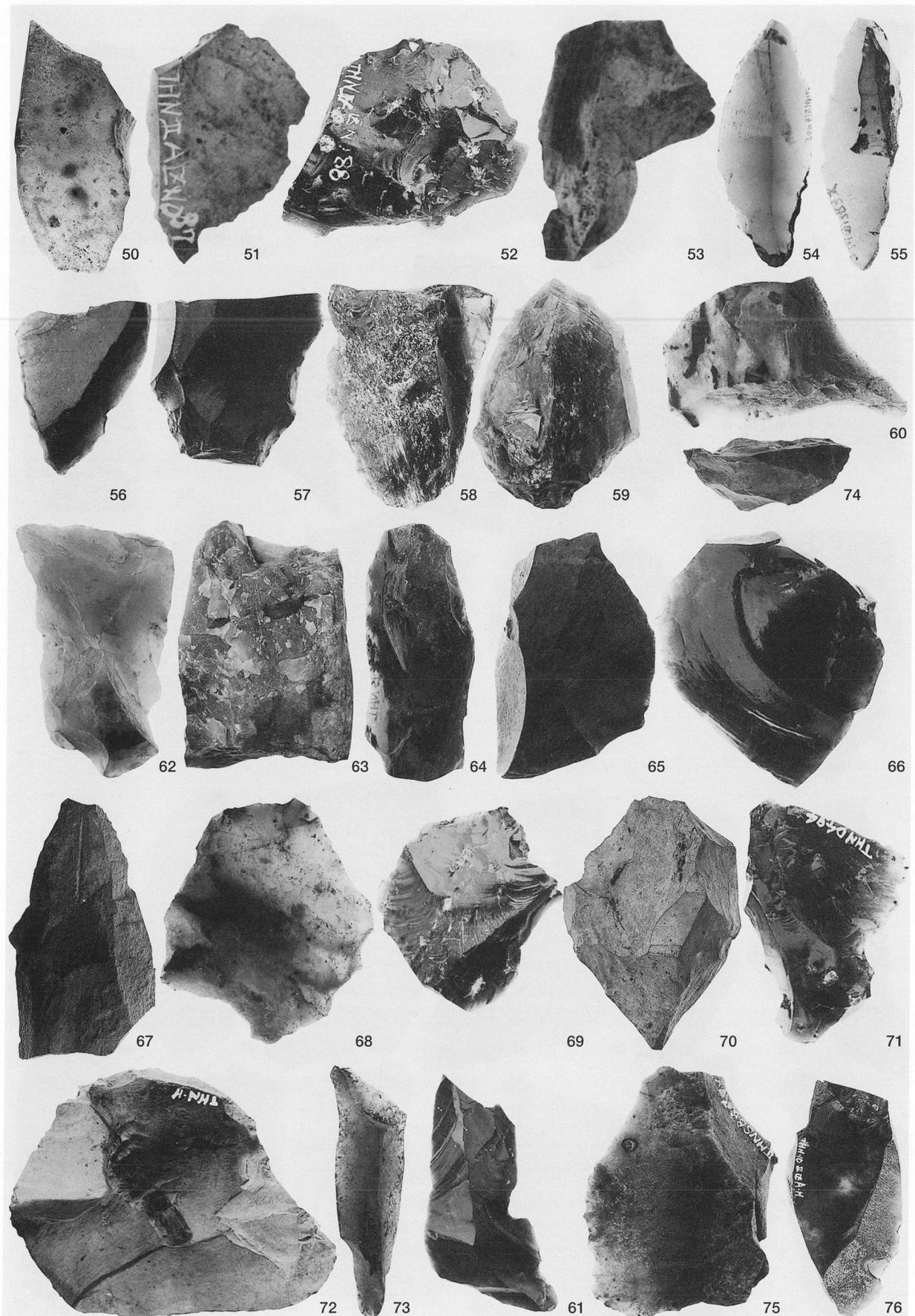


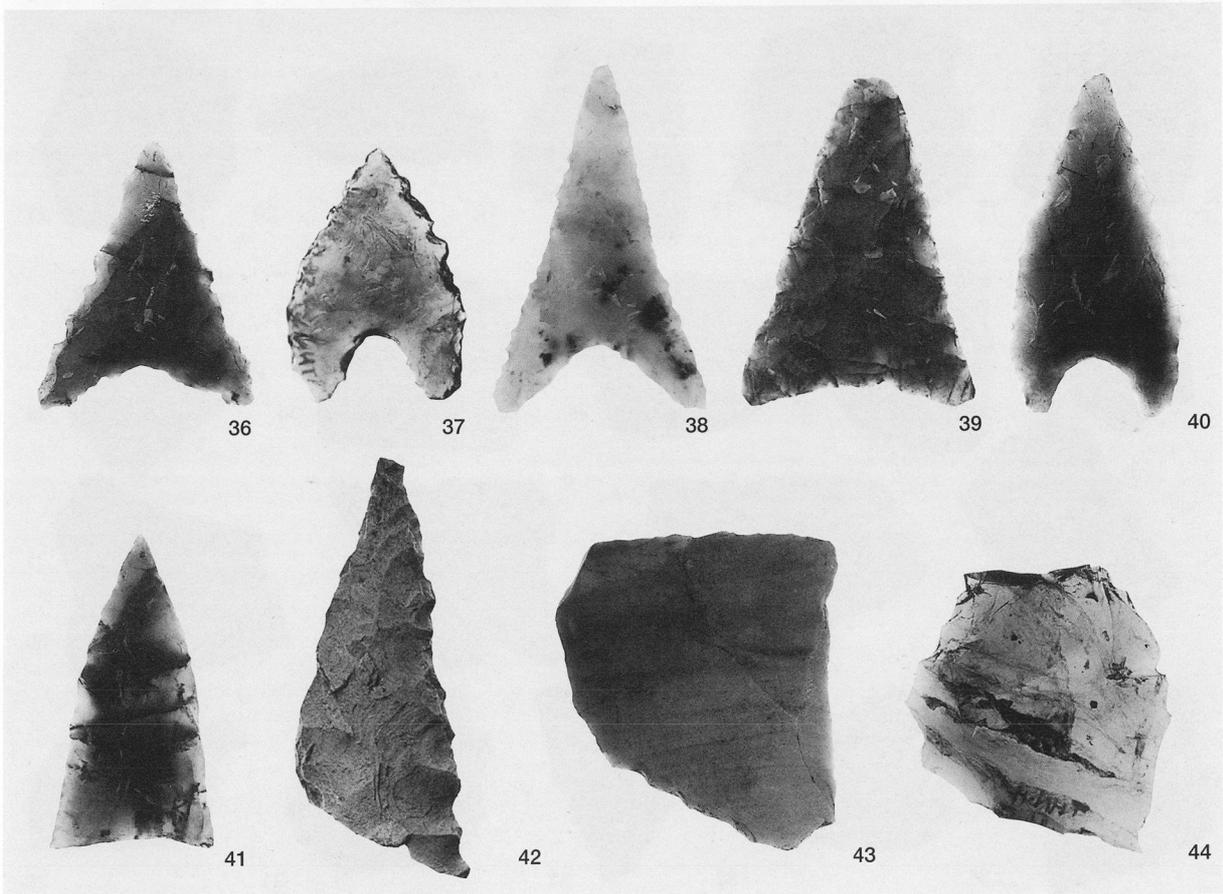
旧石器第2調査区，旧石器時代出土遺物（1）

資料提供：東京大学考古学研究所



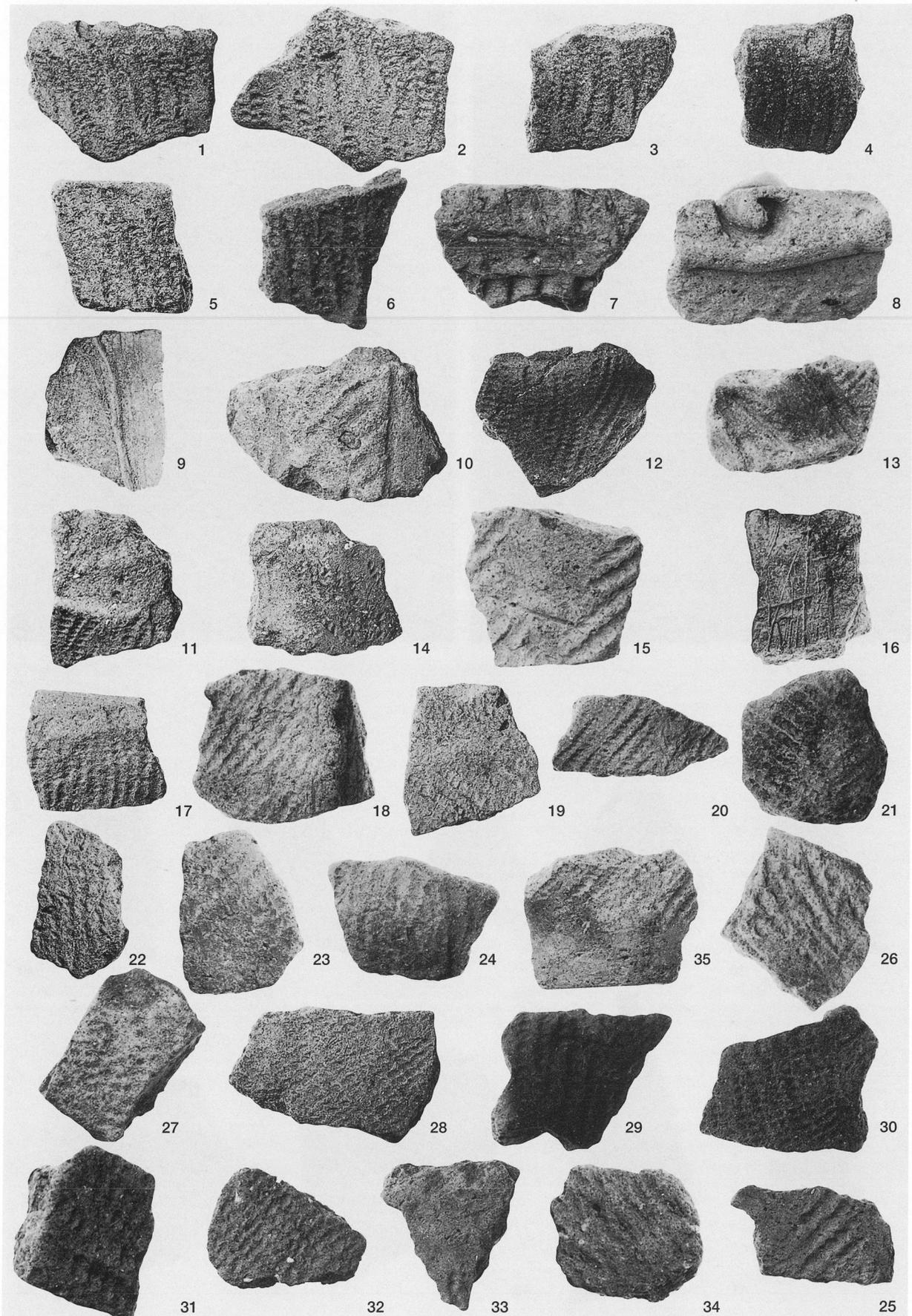
旧石器時代出土遺物（2）



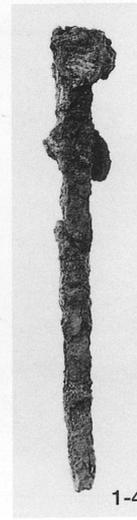
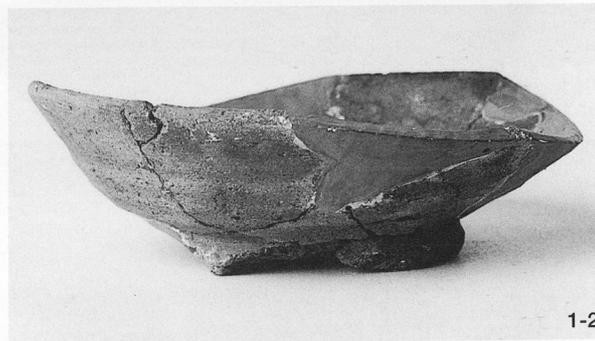


第2・3号陥し穴，縄文時代出土遺物(石器)

PL6

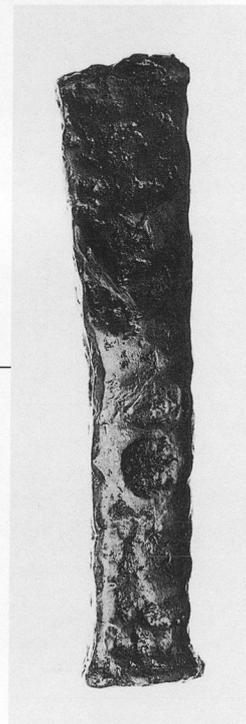
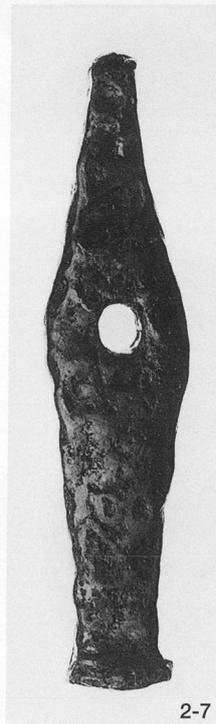
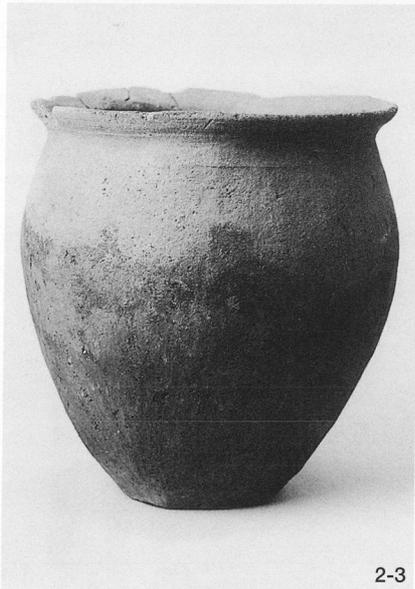


縄文時代出土遺物(縄文土器)

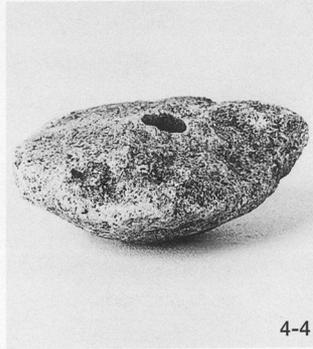
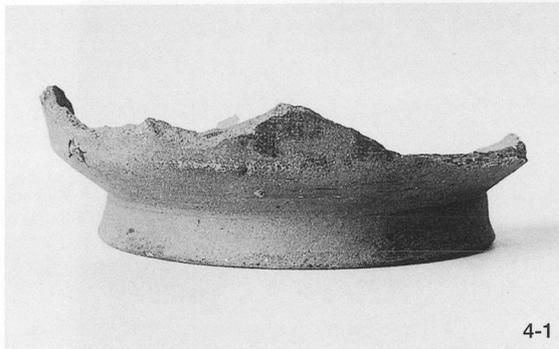


第1号住居跡・出土遺物

PL8



第2号住居跡・出土遺物



PL10

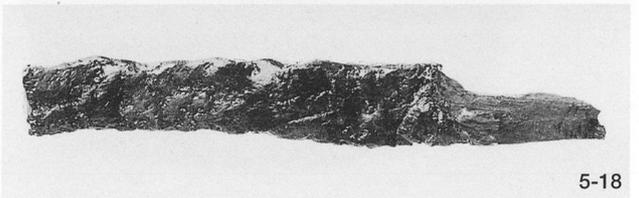
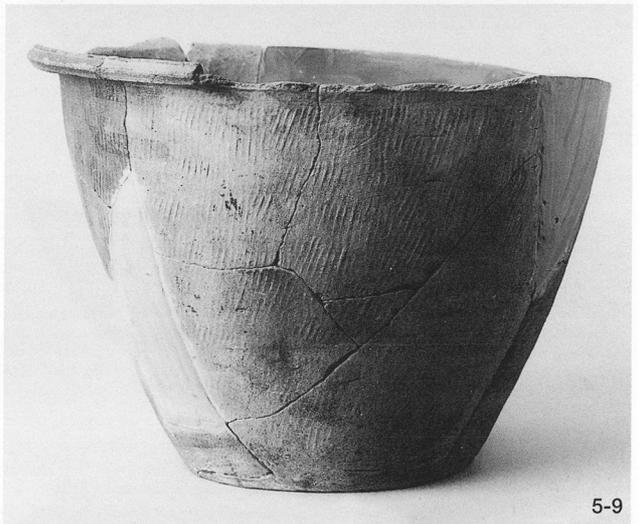


第5号住居跡・遺物出土状況

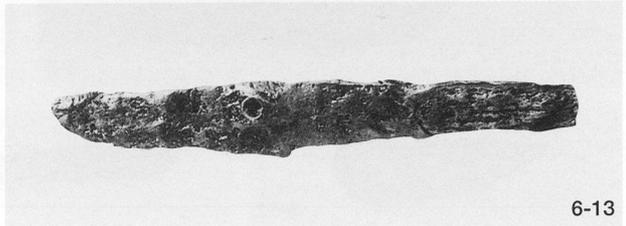
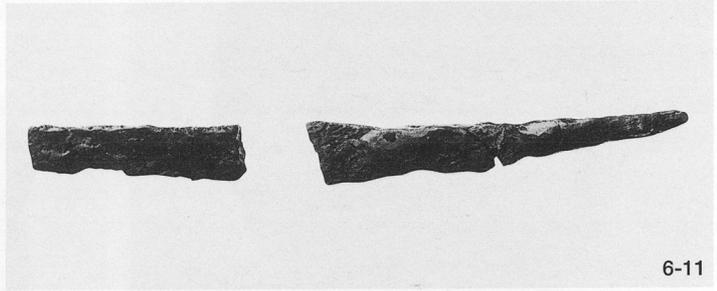
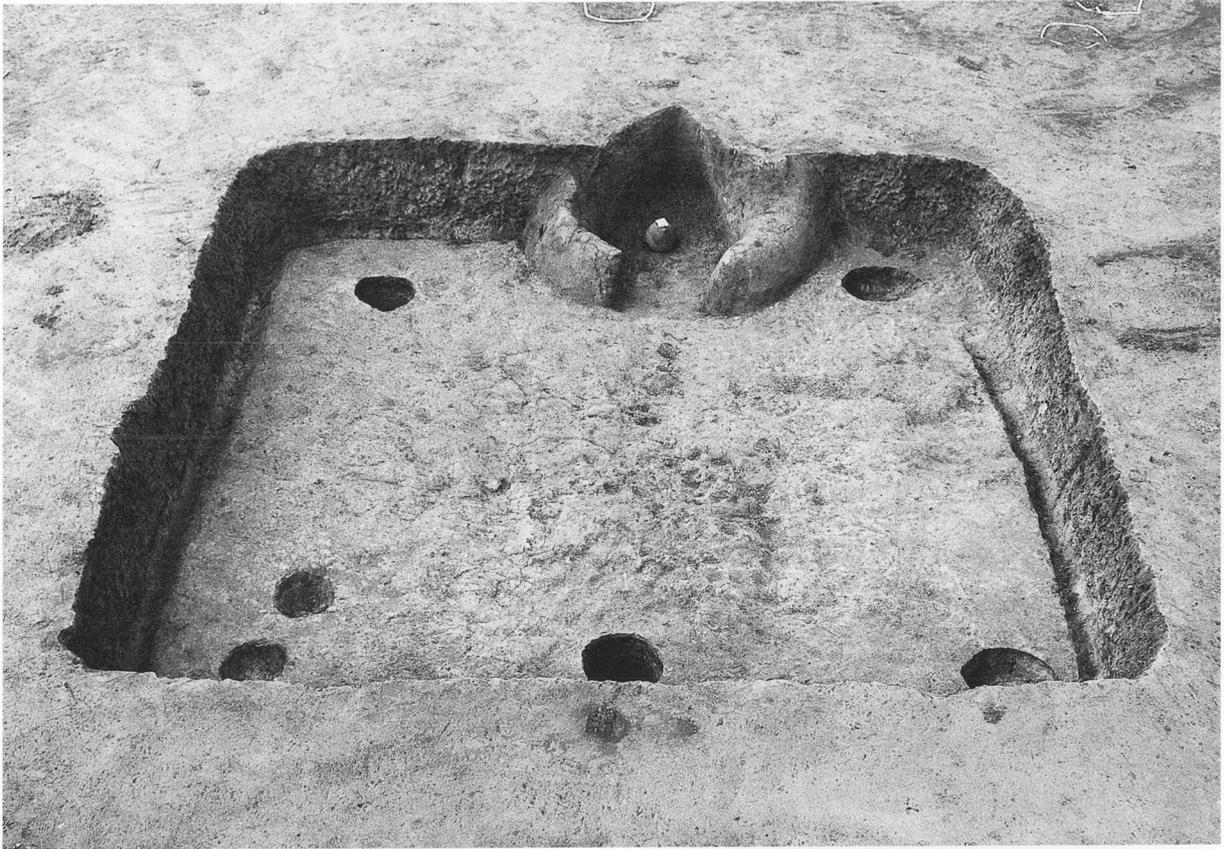


第5号住居跡掘り方・出土遺物

PL12



第5号住居跡出土遺物



第6号住居跡・出土遺物

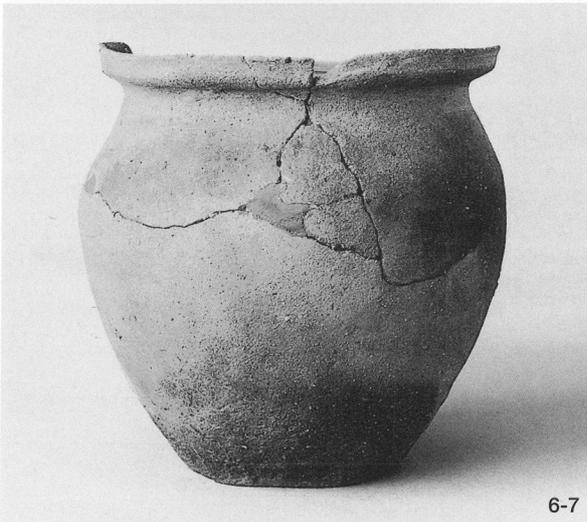
PL14



6-8



6-6



6-7



6-10



6-12

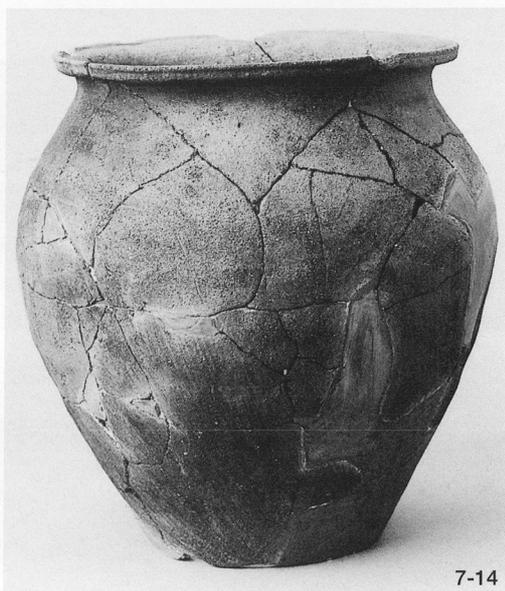
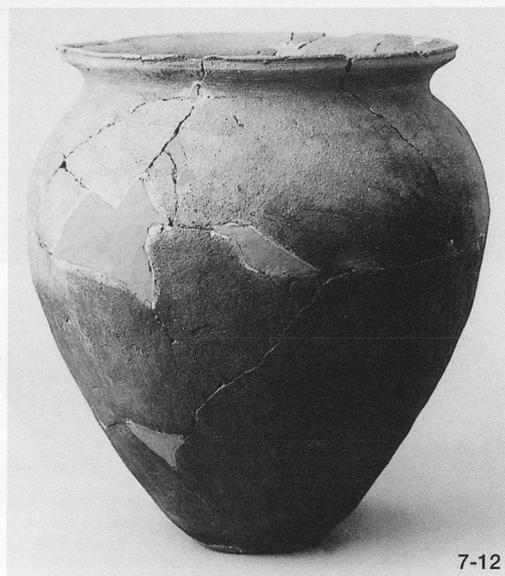
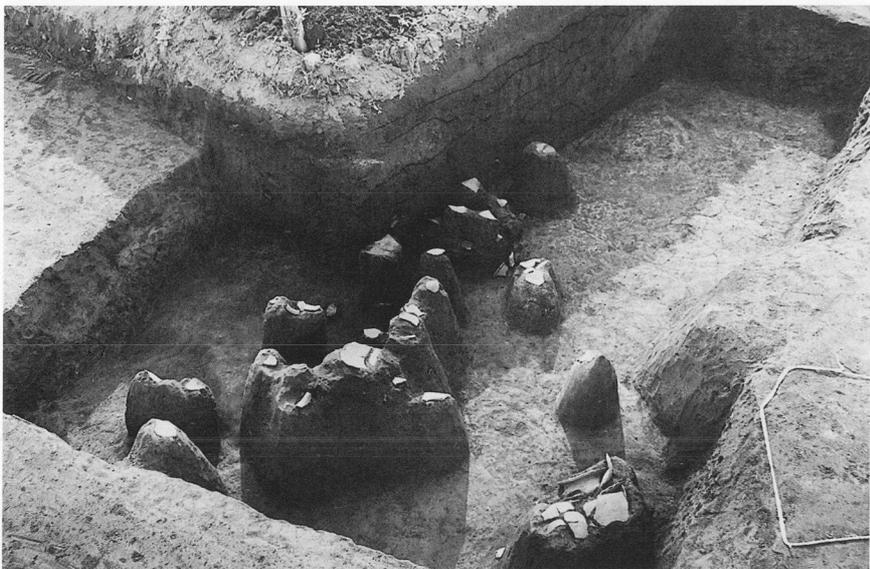


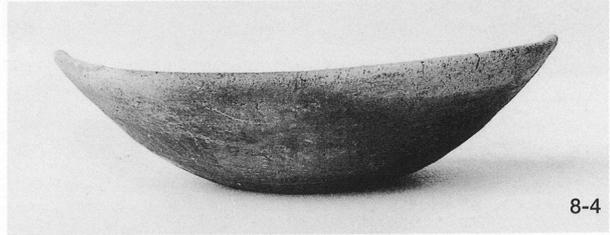
6-14



第7号住居跡・出土遺物

PL16





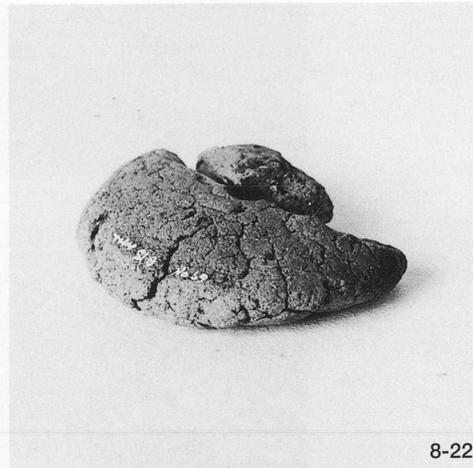
第 8 号住居跡・出土遺物



第8号住居跡遺物出土状況・出土遺物



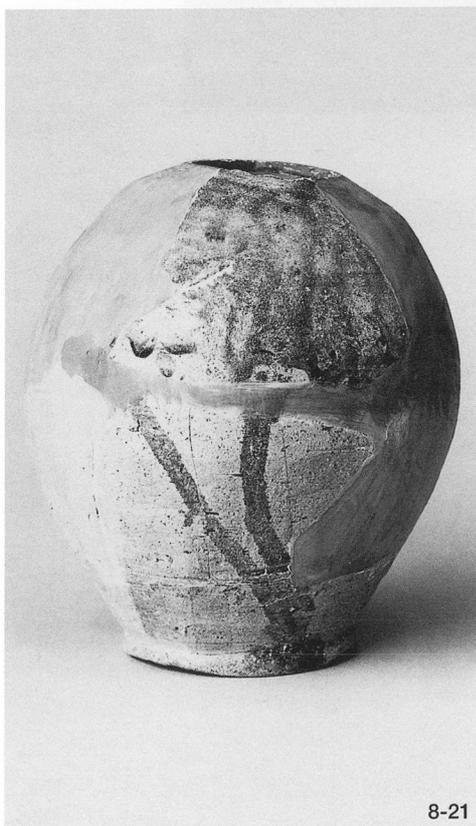
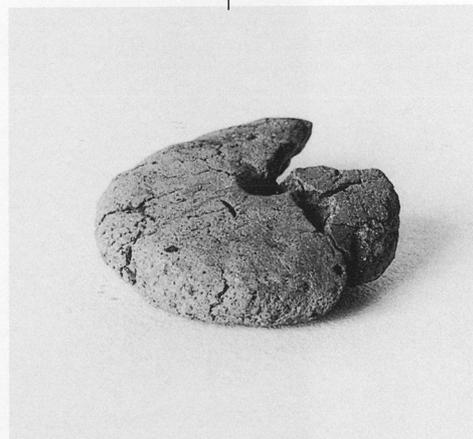
8-16



8-22



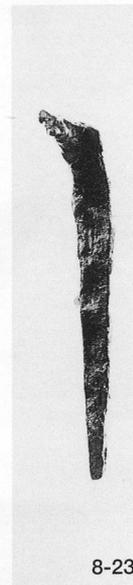
8-18



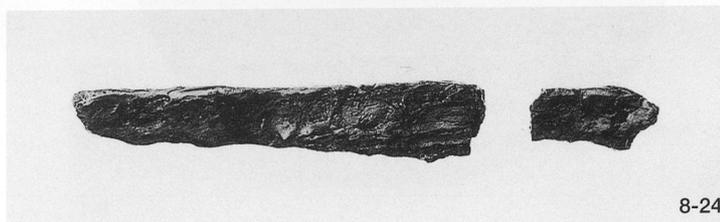
8-21



8-20

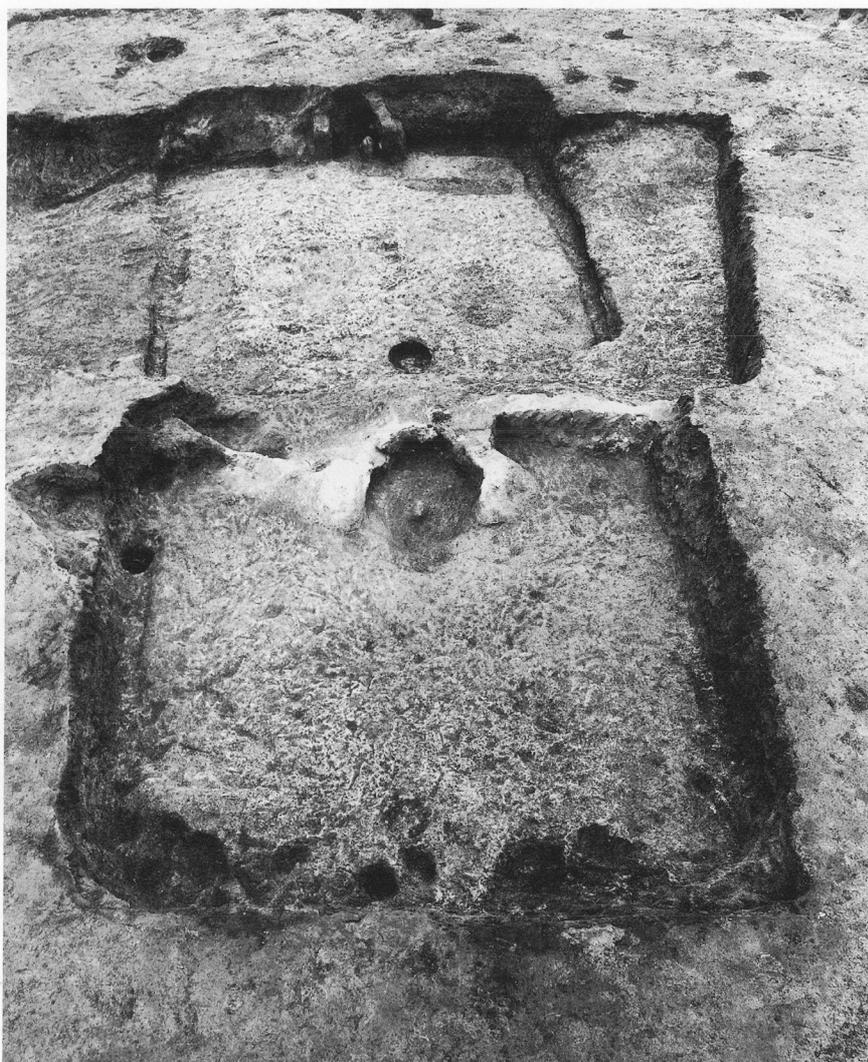


8-23



8-24

PL20



9-3



9-1



9-5

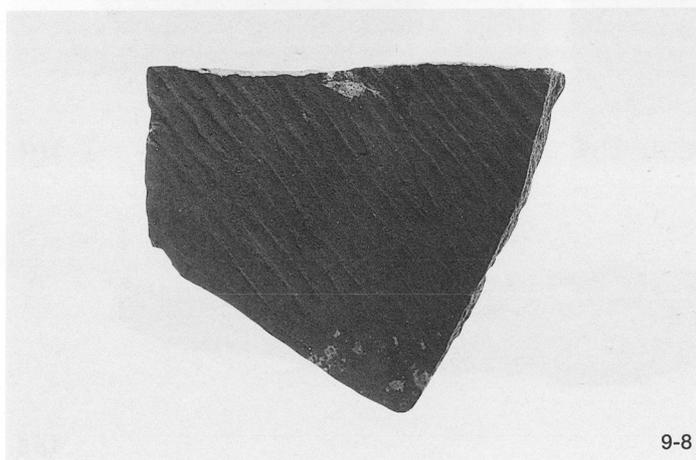
第9・11号住居跡，第9住居跡出土遺物



9-7

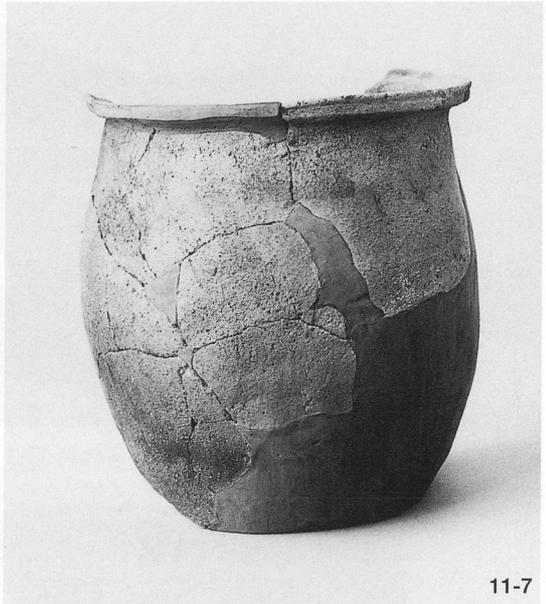


9-6



9-8

PL22

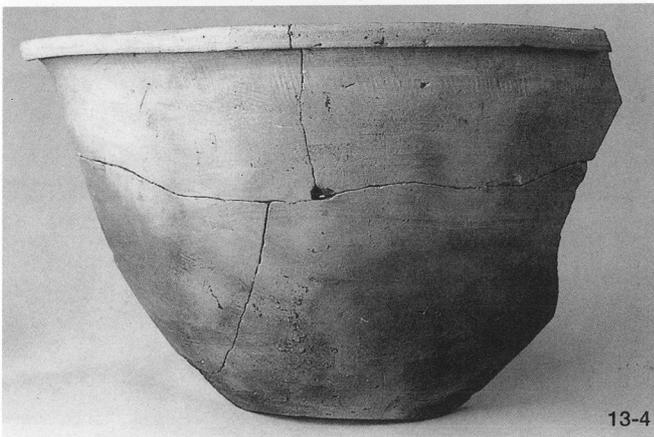




13-2



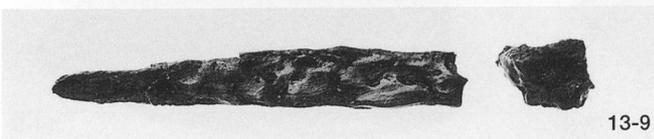
13-3



13-4



13-5



13-9



13-6

PL24



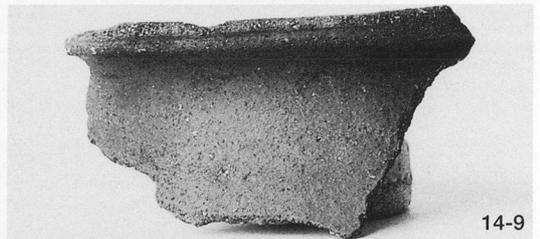
14-1



14-7



14-8



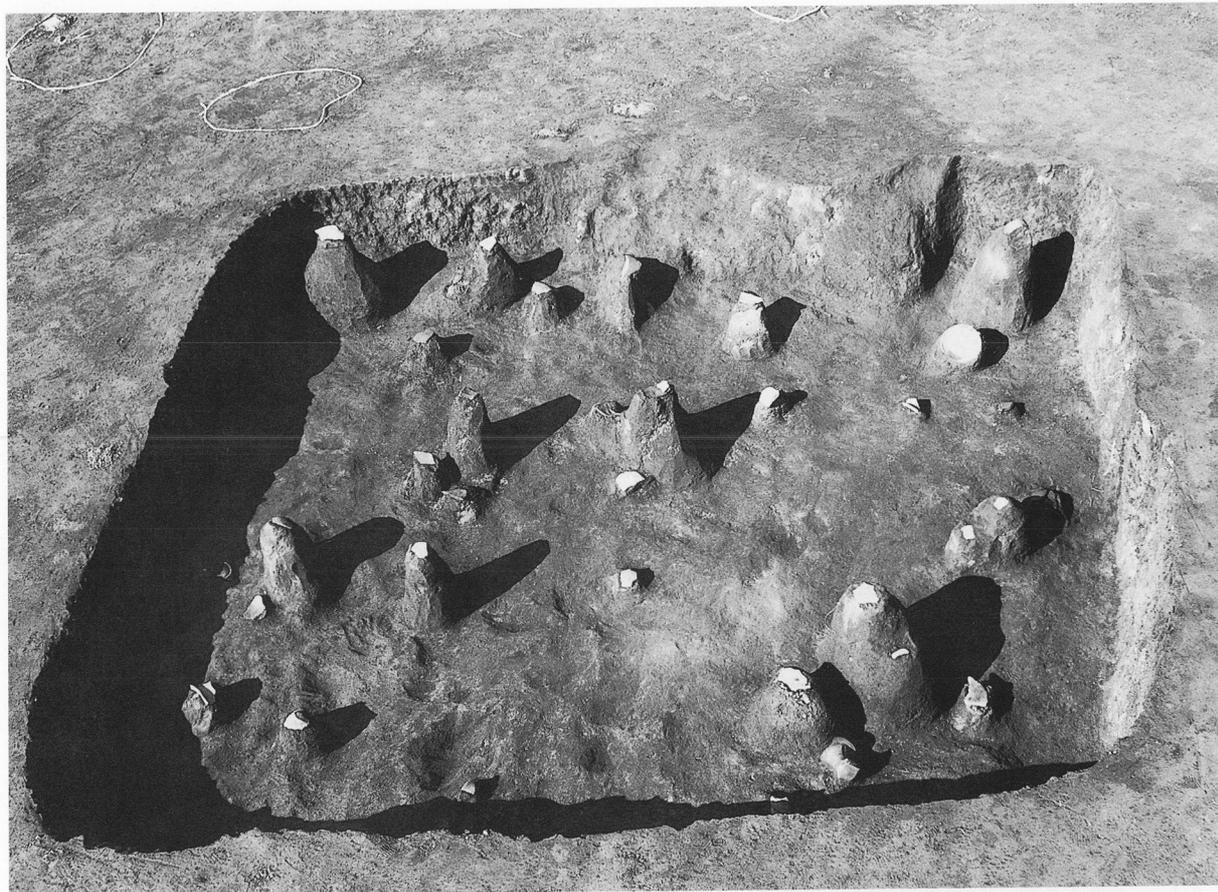
14-9



14-4



14-5

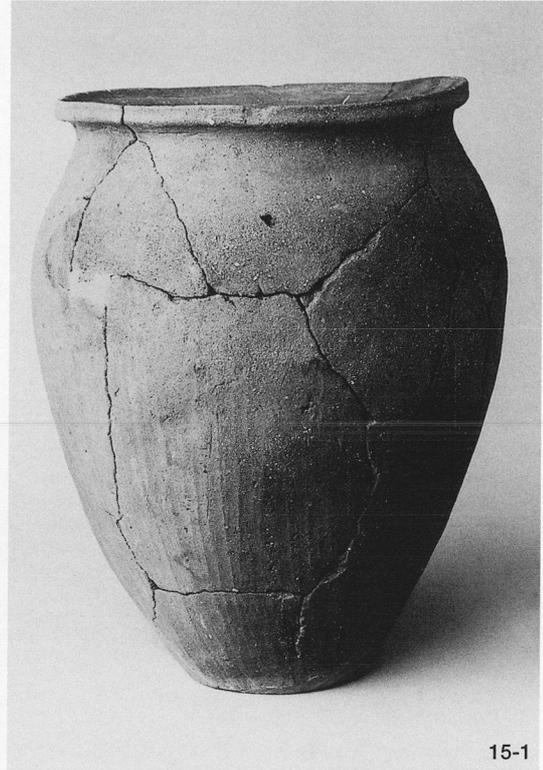


第14号住居跡遺物出土状況，第15号住居跡

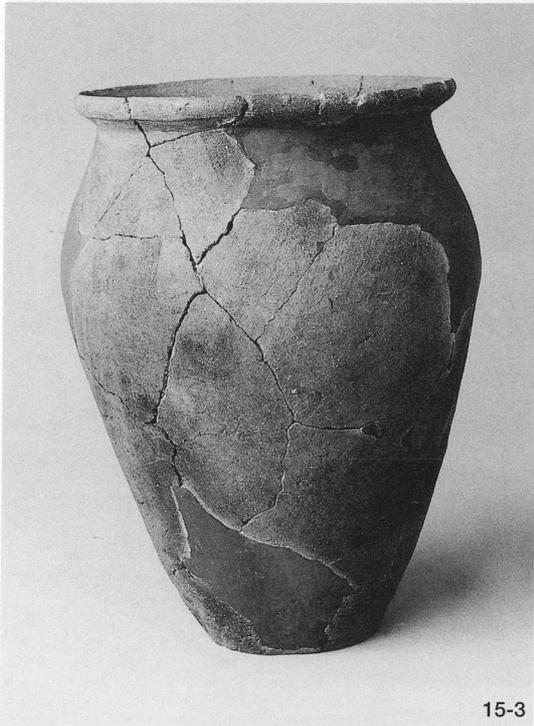
PL26



15-4



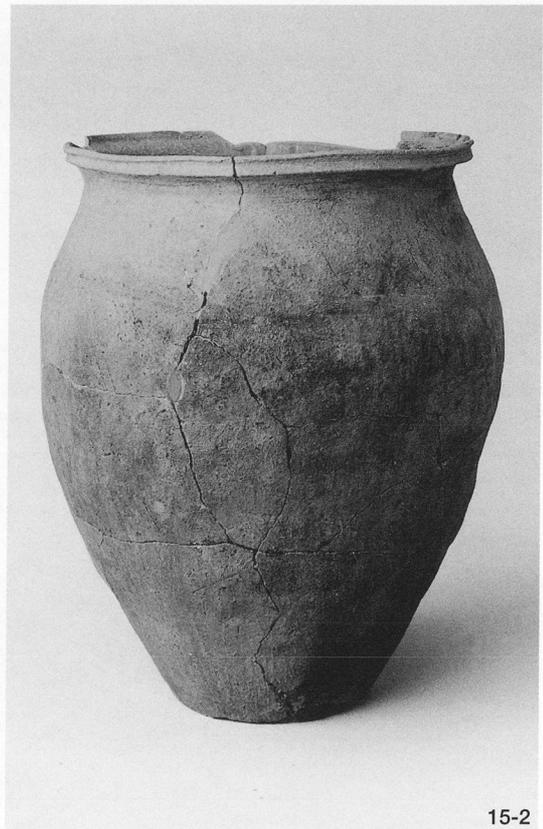
15-1



15-3



15-5



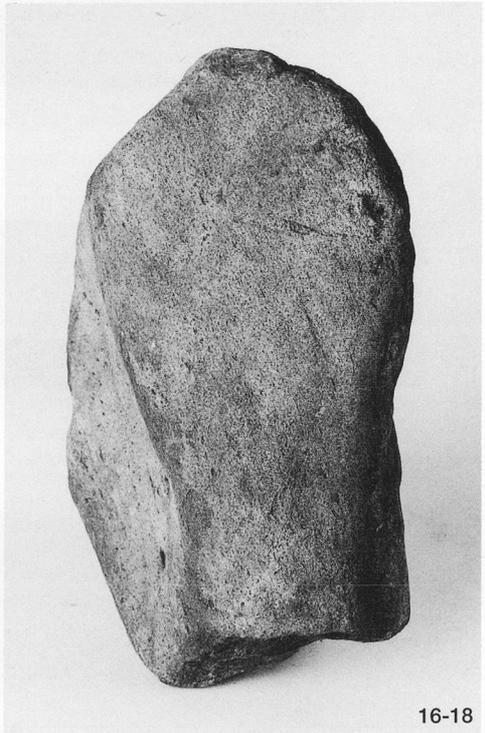
15-2



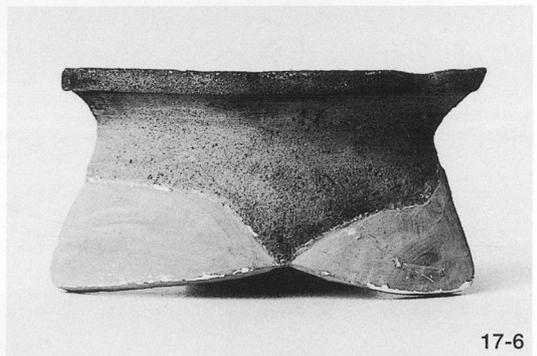
第16号住居跡・出土遺物

縄文土器、灰土器、弥生土器、古墳土器

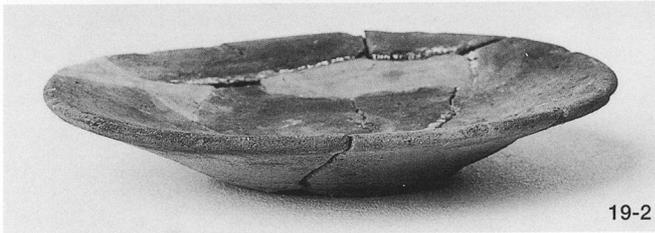


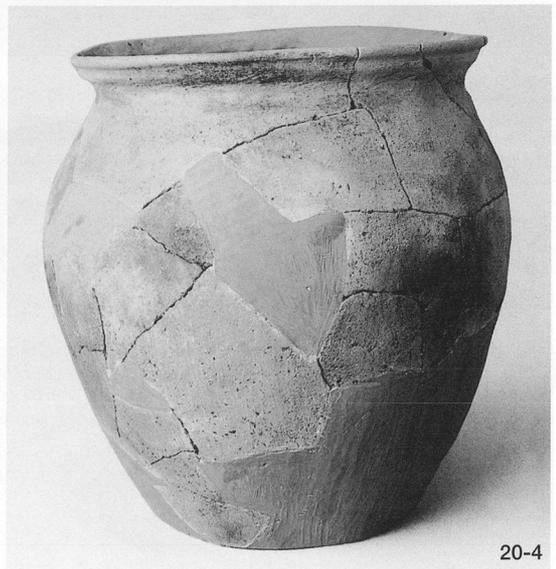
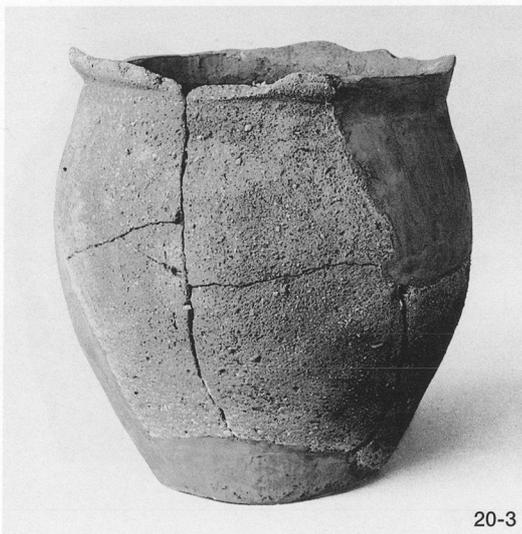


PL30



第17号住居跡・出土遺物



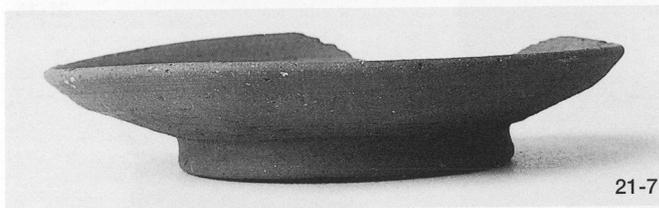




21-2



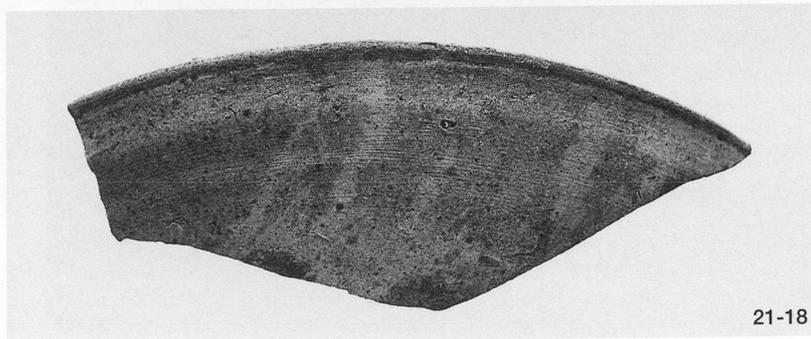
21-3



21-7

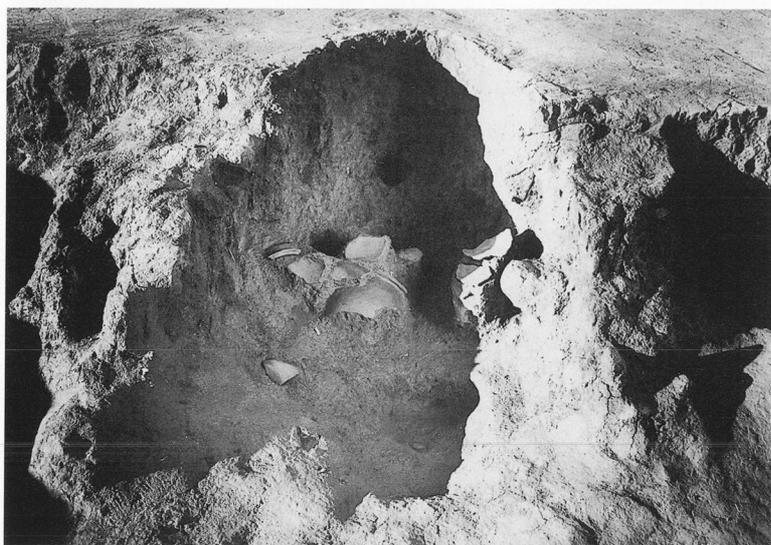


21-8



21-18

PL34



21-9



21-13



21-16



21-15



21-17



21-14